仙台市文化財調査報告書第229集

原　遺　跡

――第1・2次発掘調査報告書――

1998年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第229集

原　遺　跡

――第１・２次発掘調査報告書――

１９９８年3月

仙台市教育委員会

1．1号墳　2．2号墳　3．9号墳　4・5．11号墳
6・7．SK14（6は写真136－2の反対側）　8．SK3（すべて縮尺約1/5）

序　　文

仙台市の文化財保護行政に対しましては、日頃から多大なご協力を頂き、まことに感謝に絶えません。

西多賀地区は古くからの住宅地でありましたが、近年は仙台市南部の副都心である長町・富沢地区の発展とともに新しく生まれ変わりつつあります。

今回の原遺跡の調査も、こうした流れの中で実施され、数々の貴重な成果が得られました。なかでも多数の古墳と共に発見された埴輪棺墓は、最北の発見例として注目されました。

21世紀も近い現代社会において、先人の残した貴重な文化財を保護し、保存活用を図りつつも後世に継承していくことは私達に課せられた責務と考えております。ここに報告する調査成果が研究者のみならず市民の皆様に広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助となれば幸いです。

本書はこのような調査成果を収録したものであり、多くの方々に積極的に活用され、学術研究の場で役立てば幸いに思います。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行に際して、ご協力くださいました皆様に深く感謝申し上げる次第であります。

平成10年３月

仙台市教育委員会

教育長　**堀　籠　克　彦**

例　　言

1．本書は共同住宅及び店舗用地造成に先立って行った原遺跡の第１次・第２次発掘調査報告書であり、すでに公表された現地説明会資料等に優先するものである。

2．出土遺物の整理と報告書作成は平間亮輔が行ない、遺物の写真撮影については工藤信一郎が担当した。

3．本調査における出土遺物、実測図、写真等の資料は仙台市教育委員会で一括保管している。

4．発掘調査および報告書作成にあたって次の方から協力を受けた。
　山崎義夫、吉田壽明、多田建設株式会社東北支店、（敬称略）

凡　　例

1．本書中の土色及び遺物の色調については「新版標準土色帖」小山、竹原1995を使用した。

2．本書使用の地形図は国土地理院発行５万分の１「仙台」（平成８年）、同１万分の１「西多賀」（平成８年）である。

3．本書中の北は真北を示している。

4．遺構の略称は次のとおりで、それぞれに通し№を付けた。
　ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＤ：溝跡　ＳＫ：土坑

5．埴輪の製作技法の表現は「円筒埴輪総論」（川西：1978）によっている。

6．円筒埴輪、朝顔形埴輪の各部位の呼称は「大野田古墳群　春日社古墳・鳥居塚古墳　発掘調査報告書」（結城・藤沢1987）によっている。

7．実測図において、円筒埴輪の口縁部と凸帯のヨコナデはその範囲のみで表現した。

8．図上復元した遺物実測図は、中心線を一点鎖点（―・―）で示した。

9．遺物の法量のうち（　）は図上復元値である。

10．鉄製品・石製品等の長さのうち（　）は現在値を示す。

11．遺物観察表において胎土中の白色針状物質（海綿動物骨針）は白針と表示した。

12．引用・参考文献は巻末にまとめた。

目　　次

第１章　はじめに……1
第１節　調査要項……1
第２節　遺跡の概要……2
第３節　調査方法……4
第４節　基本層序……7

第２章　検出された遺講と遺物……11
第１節　古墳……11
１．１号墳……11
２．２号墳……16
３．３号墳……20
４．４号墳……20
５．５号墳……24
６．６号墳……29
７．７号墳……33
８．９号墳……34
９．10号墳……37
10．11号墳……41
第２節　竪穴住居跡……62
１．１号住居跡……62
２．２号住居跡……64
３．３号住居跡……66
４．４号住居跡……68
５．５号住居跡……70
６．６号住居跡……72
第３節　埴輪棺墓……74
第４節　土壙墓……78
第５節　その他の土坑……80
第６節　溝跡……85
第７節　その他の出土遺物……88

第３章　まとめ……89

引用・参考文献……97
報告書抄録……142

挿　図　目　次

第１図　周辺の遺跡……２
第２図　調査区位置図……３
第３図　調査区設定図……５・６
第４図　基本層序柱状図……７
第５図　遺構全体図……９・10
第６図　１号墳平面・断面図……12
第７図　１号墳主体部平面・断面図……13
第８図　１号墳出土遺物……15
第９図　２号墳平面・断面図……17
第10図　２号墳出土遺物……18
第11図　３号墳平面・断面図……19
第12図　４号墳平面・断面図……21・22
第13図　４号墳出土遺物(1)……23
第14図　４号墳出土遺物(2)……24
第15図　５号墳平面・断面図……26
第16図　５号墳主体部平面・断面図……27
第17図　５号墳出土遺物(1)……28
第18図　５号墳出土遺物(2)……29
第19図　６号墳平面・断面図……30
第20図　６号墳出土遺物(1)……31
第21図　６号墳出土遺物(2)……32
第22図　７号墳平面・断面図……33
第23図　７号墳出土遺物……34
第24図　９号墳平面・断面図……35
第25図　９号墳出土遺物……36
第26図　10号墳平面・断面図……37
第27図　10号墳出土遺物(1)……38
第28図　10号墳出土遺物(2)……39
第29図　10号墳出土遺物(3)……40
第30図　11号墳平面・断面図……43・44
第31図　11号墳断面図……45・46
第32図　11号墳平面図(2)……47・48
第33図　11号墳出土遺物(1)……49
第34図　11号墳出土遺物(2)……50
第35図　11号墳出土遺物(3)……51
第36図　11号墳出土遺物(4)……52
第37図　11号墳出土遺物(5)……53
第38図　11号墳出土遺物(6)……54
第39図　11号墳出土遺物(7)……55
第40図　11号墳出土遺物(8)……56
第41図　11号墳出土遺物(9)……57
第42図　11号墳出土遺物(10)……58
第43図　11号墳出土遺物(11)……59
第44図　11号墳出土遺物(12)……60
第45図　11号墳出土遺物(13)……61
第46図　SI １平面・断面図……62
第47図　SI １出土遺物……64
第48図　SI ２平面・断面図……65
第49図　SI ２出土遺物……66
第50図　SI ３出土遺物……66
第51図　SI ３平面・断面図……67
第52図　SI ４平面・断面図……69
第53図　SI ４出土遺物……70
第54図　SI ５平面・断面図……71
第55図　SI ５出土遺物……71
第56図　SI ６平面・断面図……72
第57図　SI ６出土遺物……73
第58図　SK ３埴輪棺墓平面・断面図……75
第59図　SK ３埴輪棺墓出土遺物(1)……76
第60図　SK ３埴輪棺墓出土遺物(2)……77
第61図　SK ２・７・11出土遺物……78
第62図　SK ２・７・８・11平面・断面図……79
第63図　SK14 平面・断面図……81
第64図　SK14 出土遺物(1)……82
第65図　SK14 出土遺物(2)……83
第66図　その他の土坑平面・断面図(1)……84
第67図　その他の土坑平面・断面図(2)……85
第68図　SD １平面・断面図……86
第69図　SD ４平面・断面図……87
第70図　その他の出土遺物……88
第71図　円筒埴輪分類(1)……90
第72図　円筒埴輪分類(2)……91

挿　表　目　次

表１　周辺の遺跡地名表……2
表２　SI １ピット一覧表 ……63
表３　SI ２ピット一覧表 ……64
表４　SI ３ピット一覧表 ……68
表５　SI ４ピット一覧表 ……69
表６　SI ５ピット一覧表 ……71
表７　SI ６ピット一覧表 ……73
表８　土坑一覧表……80
表９　遺物集計表……96

写真図版目次

〔遺構〕

写真１　１次調査区全景……99
写真２　１次調査区全景……99
写真３　２次調査区西部全景 ……100
写真４　２次調査区北部全景 ……100
写真５　２次調査区東部全景 ……100
写真６　１号墳完掘状況 ……101
写真７　１号墳完掘状況 ……101
写真８　１号墳周溝断面(西ベルト) ……102
写真９　１号墳周溝断面(東ベルト) ……102
写真10　１号墳主体部確認状況 ……102
写真11　１号墳主体部掘り方完掘状況 ……102
写真12　１号墳主体部完掘状況 ……102
写真13　２号墳完掘状況 ……103
写真14　２号墳完掘状況 ……103
写真15　２号墳確認状況 ……104
写真16　２号墳周溝断面(西ベルト) ……104
写真17　２号墳遺物出土状況(1) ……104
写真18　２号墳遺物出土状況(2) ……104
写真19　３号墳完掘状況 ……104
写真20　３号墳完掘状況 ……105
写真21　３号墳周溝断面(西ベルト) ……105
写真22　４号墳遺物出土状況 ……105
写真23　４号墳周溝断面(南ベルト) ……105
写真24　４号墳周溝断面(東ベルト) ……105
写真25　４号墳完掘状況 ……106
写真26　４号墳完掘状況 ……106
写真27　５号墳完掘状況 ……107
写真28　５号墳完掘状況 ……107
写真29　５号墳周溝断面(西ベルト) ……108
写真30　５号墳周溝断面(南ベルト) ……108
写真31　５号墳主体部完掘状況 ……108
写真32　５号墳主体部掘り方完掘状況 ……108
写真33　６号墳確認状況 ……109
写真34　６号墳完掘状況 ……109
写真35　６号墳周溝断面(北ベルト) ……109
写真36　６号墳周溝断面(南ベルト) ……109
写真37　７号墳確認状況 ……110
写真38　７号墳完掘状況 ……110
写真39　７号墳周溝断面(調査区東壁) ……110
写真40　９号墳確認状況 ……111
写真41　９号墳完掘状況 ……111
写真42　９号墳遺物出土状況 ……111
写真43　９号墳周溝断面(南ベルト) ……111
写真44　10号墳確認状況 ……112
写真45　10号墳調査状況 ……112
写真46　10号墳完掘状況 ……112
写真47　11号墳墳丘断面(東西ベルト①) ……113
写真48　11号墳墳丘断面(東西ベルト②) ……113
写真49　11号墳墳丘断面(東西ベルト③) ……113
写真50　11号墳墳丘断面(東西ベルト④) ……113
写真51　11号墳墳丘断面(南北ベルト①) ……113
写真52　11号墳墳丘断面(南北ベルト②) ……113
写真53　11号墳墳丘断面(南北ベルト③) ……113
写真54　11号墳攪乱坑断面 ……113
写真55　11号墳表土除去作業 ……114
写真56　11号墳周溝と墳丘盛土確認状況 ……114
　　(攪乱坑掘り込み以前)
写真57　11号墳周溝と墳丘盛土確認状況 ……114
　　(攪乱坑完掘後)
写真58　11号墳完掘状況 ……114
写真59　11号墳調査状況 ……115
写真60　11号墳周溝断面(西ベルト) ……115
写真61　11号墳周溝断面(東ベルト) ……115
写真62　11号墳墳丘盛土除去作業 ……116

写真63　11号墳墳丘盛土除去作業 ……116
写真64　11号墳墳丘下の溝確認状況 ……116
写真65　11号墳墳丘盛土断面(東西ベルト) ……117
写真66　11号墳墳丘盛土断面(東西ベルト拡大①) ……117
写真67　11号墳墳丘盛土断面(東西ベルト拡大②) ……117
写真68　11号墳墳丘下の溝完掘状況(1) ……118
写真69　11号墳墳丘下の溝完掘状況(2) ……118
写真70　11号墳墳丘下中心部(1) ……118
写真71　11号墳墳丘下中心部(2) ……118
写真72　SI 1 床面確認状況 ……119
写真73　SI 1 完掘状況 ……119
写真74　SI 2 完掘状況 ……119
写真75　SI 3 床面確認状況 ……120
写真76　SI 3 完掘状況 ……120
写真77　SI 4 床面確認状況 ……120
写真78　SI 4 完掘状況 ……121
写真79　SI 5 炭化材確認状況 ……121
写真80　SI 6 完掘状況 ……121
写真81　SK 3 埴輪棺墓確認状況 ……122
写真82　SK 3 埴輪棺墓完掘状況 ……122
写真83　SK 3 埴輪棺墓掘り方完掘状況 ……122
写真84　SK 2 遺物出土状況 ……123
写真85　SK 2 完掘状況 ……123
写真86　SK 7 完掘状況 ……123
写真87　SK 8 完掘状況 ……123
写真88　SK11 確認状況 ……123
写真89　SK11 完掘状況 ……123
写真90　SK14 遺物出土状況 ……123
写真91　SK14 完掘状況 ……123
写真92　SK 5 完掘状況 ……124
写真93　SK 6 完掘状況 ……124
写真94　SK 9 完掘状況 ……124
写真95　SK12 完掘状況 ……124
写真96　SK13 完掘状況 ……124
写真97　SK15 完掘状況 ……124
写真98　SK16 完掘状況 ……124
写真99　SK17 完掘状況 ……124
写真100　SK18 完掘状況 ……125
写真101　SK19 完掘状況 ……125
写真102　SK24 完掘状況 ……125
写真103　SK25 完掘状況 ……125
写真104　SK26 完掘状況 ……125
写真105　SK28 完掘状況 ……125
写真106　SK31 完掘状況 ……125
写真107　SK32 完掘状況 ……125
写真108　SD 4 調査状況 ……126
写真109　SD 4 完掘状況 ……126
写真110　SD 4 断面(東ベルト) ……126
写真111　SD 4 断面(北ベルト) ……126

(遺物)

写真112　1 号墳出土遺物……127
写真113　2 号墳出土遺物……127
写真114　4 号墳出土遺物……128
写真115　5 号墳出土遺物(1)……128
写真116　5 号墳出土遺物(2)……129
写真117　6 号墳出土遺物……129
写真118　7 号墳出土遺物……130
写真119　9 号墳出土遺物……130
写真120　10号墳出土遺物……131
写真121　11号墳出土遺物(1)……132
写真122　11号墳出土遺物(2)……133
写真123　11号墳出土遺物(3)……134
写真124　11号墳出土遺物(4)……135
写真125　11号墳出土遺物(5)……136
写真126　11号墳出土遺物(6)……137
写真127　11号墳出土遺物(7)……138
写真128　SI 1 出土遺物 ……139
写真129　SI 2 出土遺物 ……139
写真130　SI 3 出土遺物 ……139
写真131　SI 4 出土遺物 ……139
写真132　SI 5 出土遺物 ……139
写真133　SI 6 出土遺物 ……139
写真134　SK 3 埴輪棺墓出土遺物 ……140
写真135　SK 2・7・11土坑墓出土遺物 ……140
写真136　SK14 出土遺物 ……141
写真137　その他の出土遺物……141

第１章　はじめに

第１節　調査要項

遺 跡 名：原遺跡（仙台市文化財登録番号Ｃ－154、宮城県遺跡登録番号01083）

調 査 名：原遺跡第１次・第２次発掘調査

所 在 地：仙台市太白区西多賀三丁目１番地

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会文化財課調査第２係

担当職員

〔第１次調査〕篠原　信彦、五十嵐康洋、竹田　幸司
伊藤　孝行、三塚　靖

〔第２次調査〕主浜　光朗、平間　亮輔
伊藤　孝行

調査期間：〔第１次調査〕平成９年２月21日～３月28日　〔第２次調査〕平成９年４月14日～６月25日

調査面積：〔第１次調査〕2,380㎡　〔第２次調査〕3,030㎡

発掘調査参加者

〔第１次調査〕

赤間　　眸　浅見　禮子　阿部あき子　阿部　敬子　阿部みはる　板橋　　実
植野美登子　小沼ちえ子　小野　辰雄　加嶋みえ子　加藤けい子　菊地　恵子
菊地　紘二　小松千代子　小林　国子　菅井　君子　鈴木　邦彦　千田タイ子
土井　　清　蓮沼　英子　蓮沼　秀子　早川　裕子　原田由美子　松野　順子
三浦　市子　水野　信子　宮城　富子　村田　健三　森　みほ子　渡辺　節子

〔第２次調査〕

阿部あき子　阿部　敬子　阿部みはる　石井千代子　板橋　栄子　伊藤　幸子
伊藤　征子　大内　孝子　大友　泰子　小野紀美子　小野さよ子　加藤けい子
金沢沙知子　狩野　吉則　菊地　和江　菊地　恵子　菊地　紘二　小山つるよ
佐藤　静子　佐藤　清治　佐藤　優子　庄子かつえ　菅原　　弘　鈴木きぬ子
鈴木貴美子　関谷　栄子　富田　　是　冨永美輪子　蓮沼　英子　針生せつ子
平山　義夫　三浦　陽子　森　ミヨノ　山寺　文司　吉田　公治　依田　光子
渡辺　節子　渡辺　芳裕

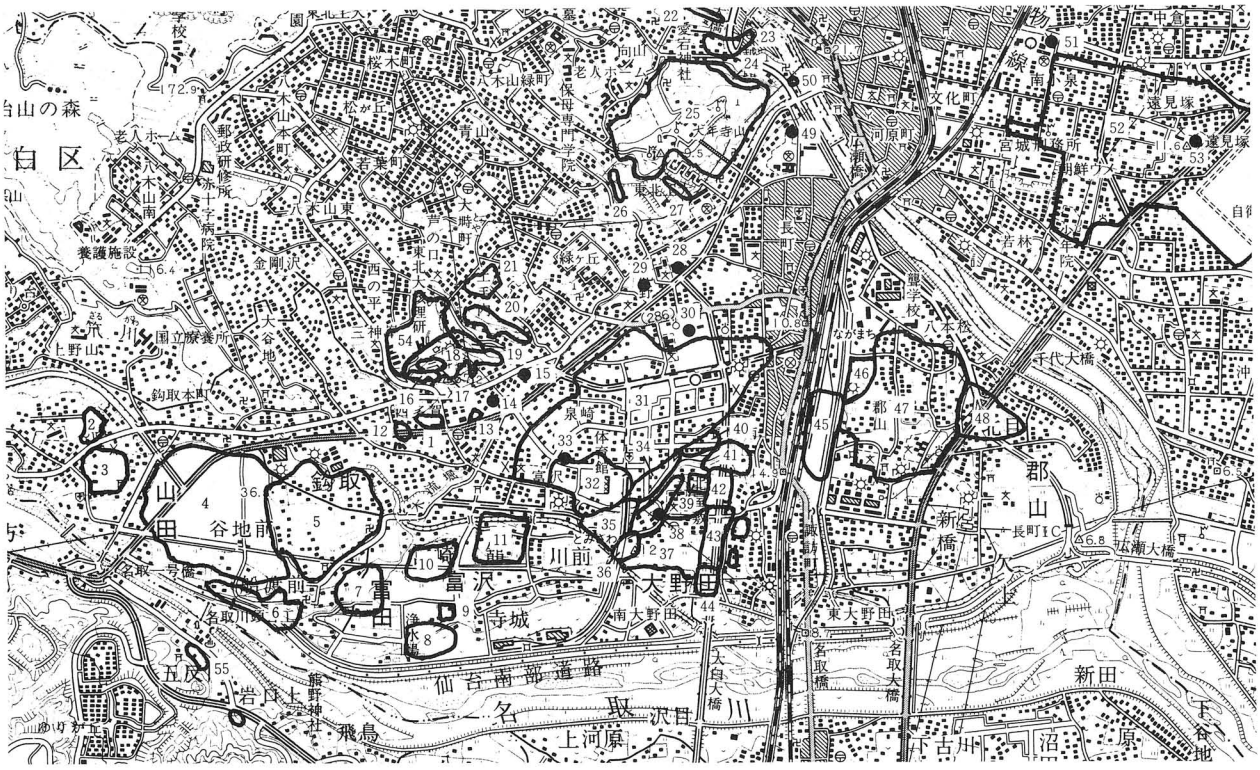
整理作業参加者

石川カツ子　小林　由美　小泉　幸子　本間　春美　佐藤　悦子　鈴木　広子
森谷　愛子　高橋　弘子　相沢美佐子　佐藤よし子　熊谷きぬ子　斎藤喜恵子
若生　洋子　渡辺まき子　雫石　良子　伊藤　桂子　鈴木裕美子　高橋みずほ
松岡　優子　吉岡久美子

第２節　遺跡の概要

１．地理的環境

原遺跡はＪＲ長町駅の西方約2.5kmの地点に位置する。この場所は青葉山丘陵の南側で、ゆるやかな傾斜を持つ段丘面上にあたり、標高はおよそ32～39m である。名取川と広瀬川に挟まれた後背湿地（郡山低地）にのぞんでおり、名取川までは約1.5km離れている。



第１図　周辺の遺跡（1/50,000）

No.	遺跡名	種別	立地	年代
1	原遺跡	古墳・集落跡	段丘	縄文～平安
2	北前遺跡	集落跡	段丘	旧石器・縄文・平安・近世
3	山田上ノ台遺跡	集落跡	段丘	旧石器・縄文・平安・近世
4	山田条里遺跡	条里遺構	沖積地	縄文・平安・近世
5	上野遺跡	包含地	段丘	縄文・奈良・平安
6	船渡前遺跡	包含地	自然堤防	縄文・弥生・奈良・平安
7	南ノ東遺跡	包含地	沖積地	弥生・奈良・平安
8	六本松遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
9	鍛冶屋敷Ｂ遺跡	包含地	自然堤防	縄文・奈良・平安
10	鍛冶屋敷Ａ遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・奈良・平安
11	富沢館跡	城館	自然堤防	中世
12	西台窯跡	窯跡	丘陵端部	奈良・平安
13	原東遺跡	包含地	段丘	古墳・奈良・平安
14	裏町古墳	前方後円墳	段丘	古墳（中期）
15	金洗沢古墳	円墳	段丘	古墳
16	富沢窯跡	窯跡	丘陵斜面	古墳
17	三神峯古墳群	円墳	丘陵	古墳
18	三神峯遺跡	集落跡	丘陵	縄文・平安
19	土手内横穴墓群Ａ地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳
20	土手内横穴墓群Ｂ地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳
21	土手内遺跡	集落跡	丘陵	縄文～平安
22	愛宕山横穴墓群Ａ地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳
23	愛宕山横穴墓群Ｂ・Ｃ地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳・奈良
24	大年寺山横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
25	茂ケ崎城跡	城館	丘陵面	中世
26	二ツ沢横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
27	茂ケ崎横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳・奈良
28	一塚古墳	円墳	沖積地	古墳
29	二塚古墳	前方後円墳	沖積地	古墳
30	金岡八幡古墳	円墳	沖積地	古墳
31	富沢遺跡	水田・集落跡	沖積地	旧石器～近世
32	山口遺跡	水田・集落跡	沖積地・自然堤防	縄文～近世
33	教塚古墳	円墳	沖積地	古墳
34	下ノ内浦遺跡	集落跡他	自然堤防	縄文～中世
35	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～中世
36	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・古墳・奈良・平安
37	大野田古墳群	古墳他	自然堤防	縄文・古墳～中世
38	五反田古墳	円墳	自然堤防	古墳
39	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～近世
40	袋東遺跡	包含地	自然堤防	古墳・平安
41	元袋遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・奈良～近世
42	大野田遺跡	包含地他	自然堤防	縄文～平安
43	王ノ壇遺跡	集落・城館他	自然堤防	縄文～中世
44	皿屋敷遺跡	包含地他	自然堤防	奈良～中世
45	長町駅東遺跡	包含地	自然堤防	弥生～平安
46	西台畑遺跡	包含地	自然堤防	縄文・弥生・古墳
47	郡山遺跡	官衛跡他	自然堤防	縄文～平安
48	北目城跡	城館他	自然堤防	縄文～近世
49	兜塚古墳	帆立貝形古墳	沖積地	古墳
50	宗禅寺横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
51	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳
52	南小泉遺跡	集落跡他	自然堤防	弥生～近世
53	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
54	熊野堂横穴古墳群	横穴墓	丘陵斜面	古墳

表１　周辺の遺跡地名表

２．歴史的環境

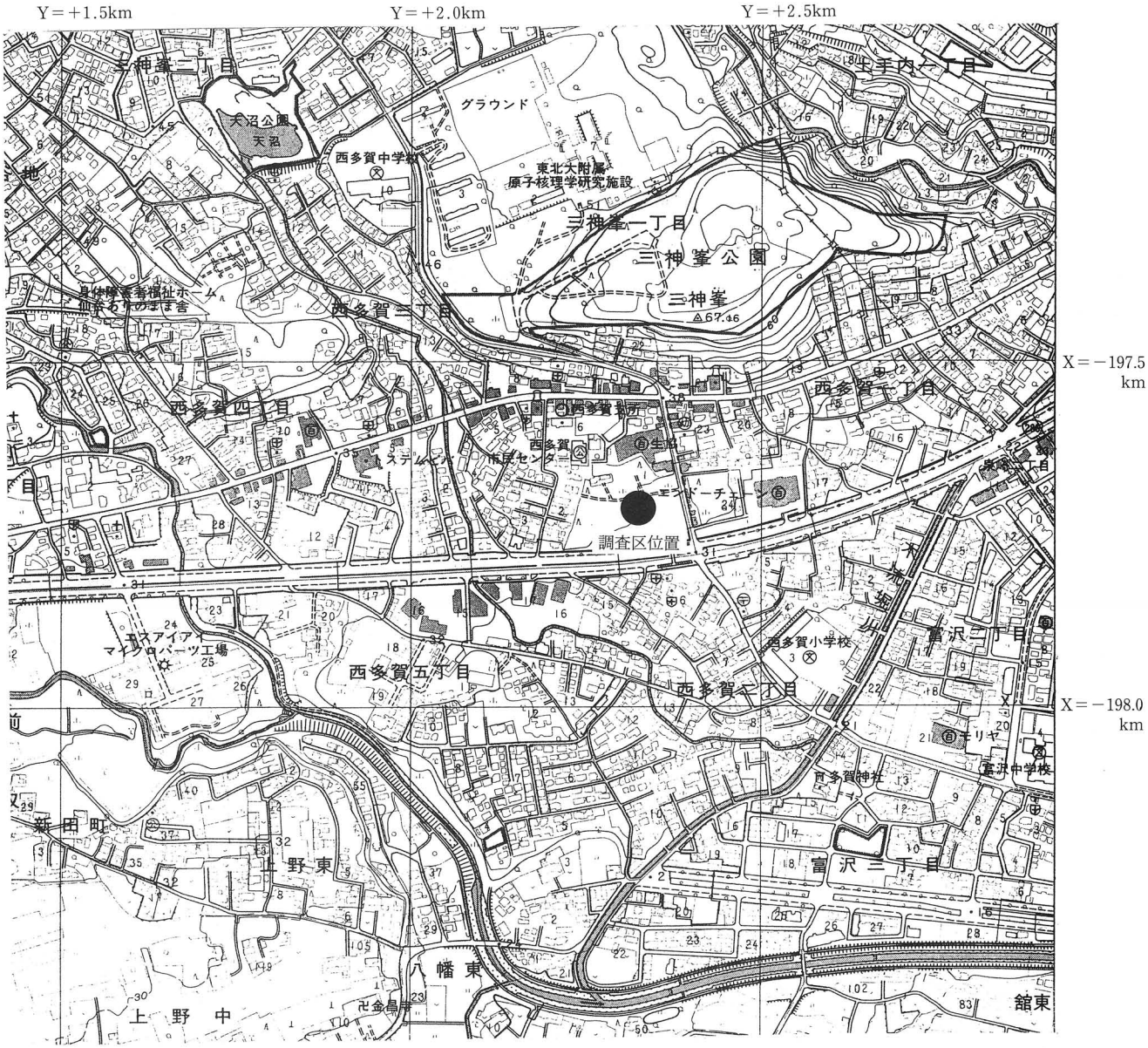
名取川流域は遺跡の数の多いことで知られている。紙数も限られるので、ここでは当遺跡の立地する名取川北岸、青葉山丘陵の南側から郡山低地にかけての地域に限定して概観しておきたい。

旧石器時代の遺跡としては西方約２㎞離れた段丘上に山田上ノ台遺跡と北前遺跡、東方の低地には富沢遺跡があり、当地域の人々が早い段階から低地に進出していたことが知られている。

縄文時代になると遺跡の数はさらに増加し、前述した山田上ノ台遺跡・北前遺跡・富沢遺跡の他に丘陵上では当遺跡のすぐ北に三神峯遺跡があり、低地には上野遺跡や六反田遺跡、伊古田遺跡、大野田遺跡など多数の遺跡が認められる。

弥生時代の集落の様相は明らかではないが、北東約１㎞に位置する土手内遺跡では後期の竪穴住居跡が１軒検出されている。なお、生産遺跡としては富沢・山口遺跡などで水田跡が確認されている他、西台畑遺跡の壺棺墓や下ノ内浦遺跡の土壙墓なども発見されている。

古墳時代の集落は、前述した土手内遺跡で前期から中期のものが確認されている。この土手内遺跡は丘陵上に立地するが、その他の大部分の集落遺跡は六反田遺跡、伊古田遺跡などのように低地に立地している。集落に隣接した低地には富沢遺跡などのように水田跡が広がっており、この時期の生活基盤は大部分が低地に移行していること



第２図　調査区位置図（1/10,000）

が推測される。当遺跡の立地する青葉山丘陵の南側斜面から裾部にかけては古墳時代中期後半から終末期には墓域として利用されてきたようであり、中期から後期にかけては当遺跡の東方に裏町古墳、一塚古墳、二塚古墳、兜塚古墳などの主要な高塚古墳が築かれ、終末期には土手内・二ツ沢・茂ケ崎などの横穴墓群が集中して営まれている。なお、高塚古墳は大野田古墳群のように丘陵部に限らず低地にも分布している。また、当遺跡の北方約0.3kmの極めて隣接した地点には、裏町古墳・大野田古墳群・三神峯古墳群に埴輪を供給したと考えられている富沢窯跡があり、当遺跡の古墳との関連も予想される。

郡山に官衙が造営された後および、奈良・平安時代も生活基盤は低地にその中心があり、伊古田遺跡・六反田遺跡・山口遺跡・元袋遺跡などのような集落跡や富沢・山口遺跡などの水田跡が発見されている。なお、これまではこの時期の墓制が不明確であったが、今回検出された墓壙は平安時代のものとしては数少ない調査例となった。

第３節　調査方法

１．調査区の設定

１次調査区は開発予定区域の南部に、２次調査区は１次調査区の北側に隣接して、基本的に開発によって破壊される箇所全体に設定した。ただし２次調査区の東部については遺構密度が希薄であることが予想されたため、本調査区設定以前に試掘トレンチを入れて遺構の有無を確認し、その結果によって調査区を設定することとした。試掘の結果、遺構は11号墳のみであることが判明したため、東部の調査区は11号墳を中心として設けている。

遺構測量のための基準線は、１次調査の際に開発区域のほぼ中央に位置する南北道路の方向を基にし、これに直交して東西の基準線を設けている。南北基準線は真北から西に5°22′振れている。

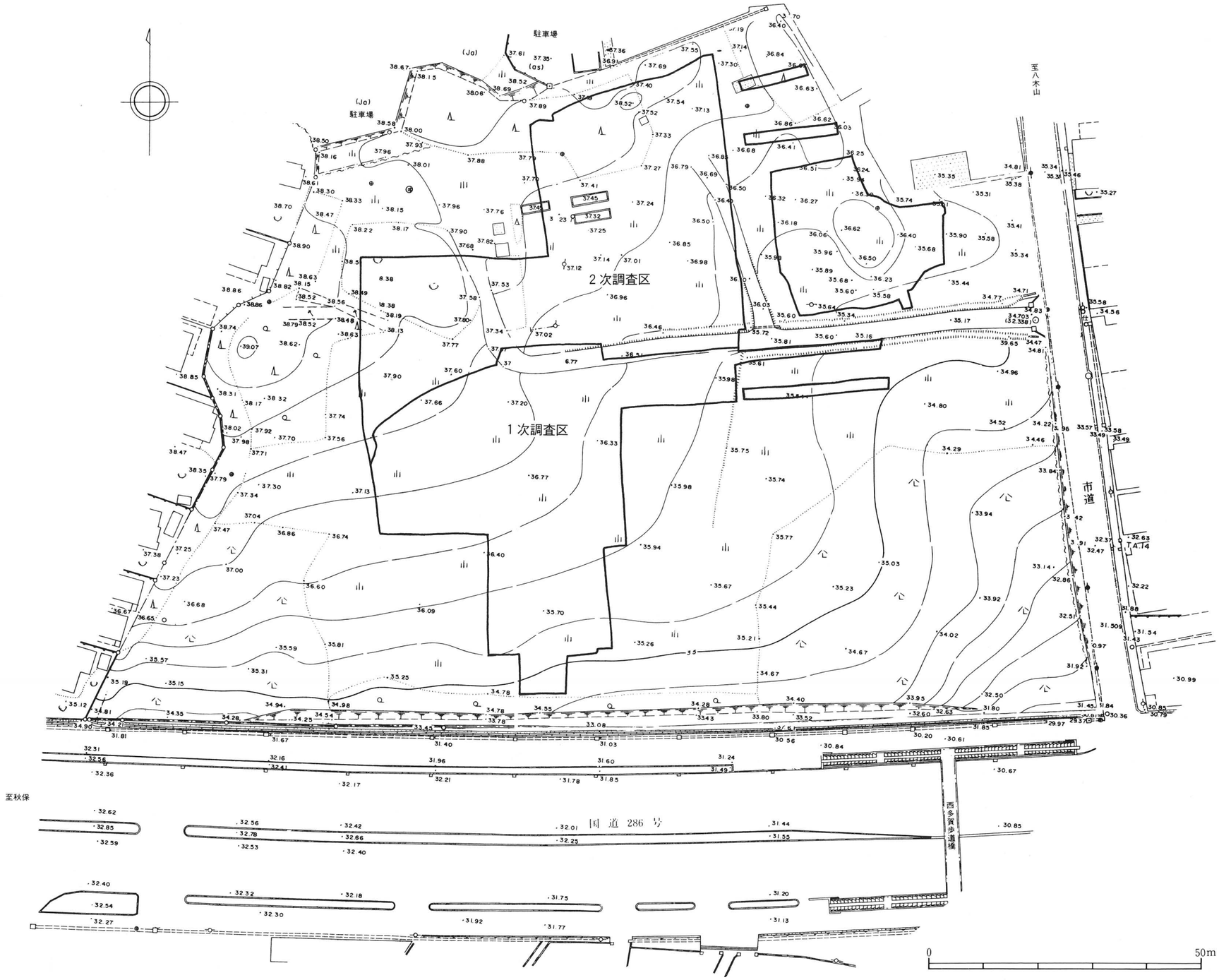
２次調査では１次調査区と同じ基準線を使用したが、１次調査区の東西・南北基準線の交点を全調査区の原点(NS-00，EW-00)とする座標系を設定し、これによって遺構の位置関係が判るようにした。本書中でもこの座表系を使用している。なお、原点の平面直角座標系Ｘにおける座標値はＸ＝－197709.855m、Ｙ＝＋2291.284m である。

２．調査方法

重機によってＩ・II層を除去した後、III層（ローム層）上面で精査を行った。III層以下は一部で下層の状況を探るための試掘を実施したが、文化層は確認できなかったことと全体的な地形観察から下層には遺構は無いと判断し、それ以上の掘り下げは行わなかった。

なお、古墳の周溝は北を基準にして90°ずつ時計回りにａ・ｂ・ｃ・ｄの４区に分割して掘り下げた。遺物の取り上げは一括遺物を除いては各区ごとに行っている。遺構の測量は平板および基準線を利用した簡易遣り方によっている。

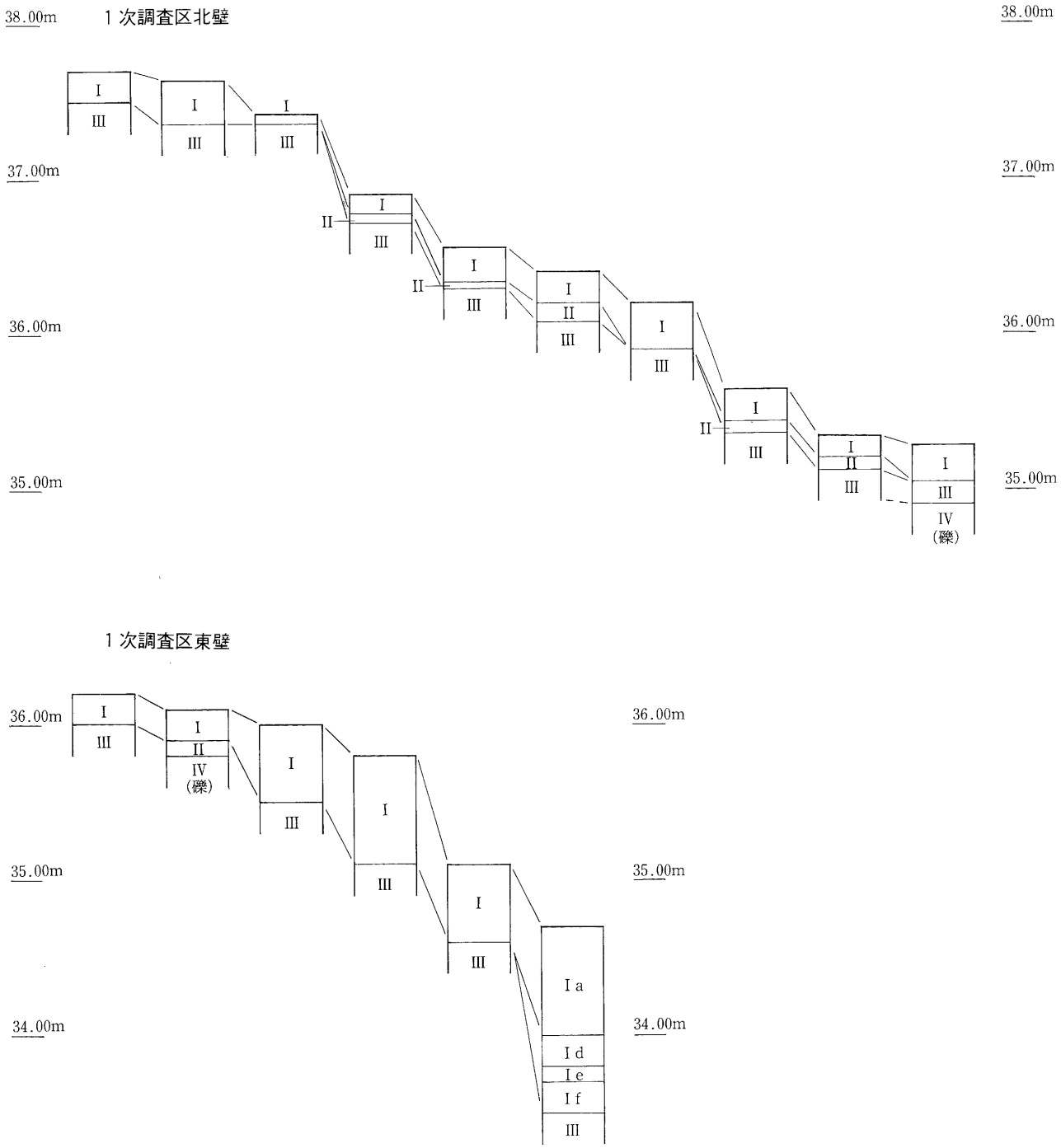
調査以前の状況（畑）



第３図　調査区設定図

第４節　基本層序

今回の調査では表土から礫層までの間に大別して３層を確認した。第４図に１次調査区の北壁と東壁における基本層の柱状図を示したが、全体的に南東方向に傾斜しており、特に南側には表土が流れ込んでいる（Ｉｂ～Ｉｆ層）状況がみてとれる。埴輪などの遺物はＩａ層およびＩｂ層中に認められる。今回の調査で確認された弥生～平安時代の遺構に関わる基本層（旧表土）は11号墳の墳丘下でわずかに認められたが、大部分は既に流出したか、あるいはＩ層の耕作によって攪拌されて失われたものと考えられる。以下に各層の特徴を示す。



第４図　基本層序柱状図

Ｉａ層　10YR3/4 暗褐色シルト　炭化物粒・焼土粒を少量含む。現代の畑の耕作土である。層厚は大体10～20cm程度であるが標高の高い地点ではもっと薄い場合もあり、また、前述したように低い場所には約70cmの厚さで堆積している。調査区のほぼ全面にわたって下層を攪拌しており、Ⅲ層上面ではこのＩ層の耕作による溝状の天地返しが多数認められる。

Ｉｂ～Ｉｆ層　調査区南側の低い場所に流れ込んだ層で、部分的な分布を示す。層厚は10～20cm程度である。

Ｉｂ層　10YR3/4 暗褐色シルト　多量の礫を含む。

Ｉｃ層　10YR2/3 黒褐色シルト

Ｉｄ層　10YR3/4 暗褐色シルト　褐色粘土質シルトブロックを少量含む。

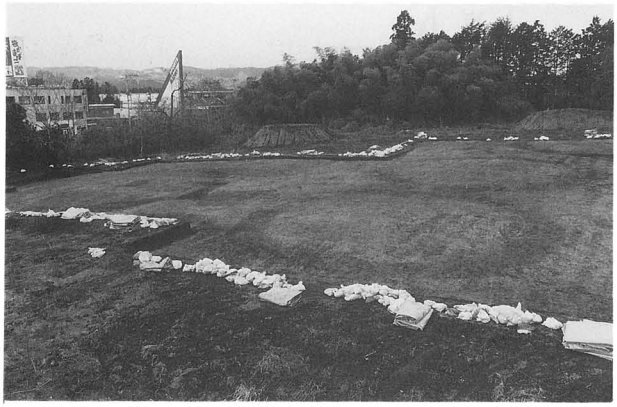
Ｉｅ層　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト　暗褐色シルトブロックを少量含む。

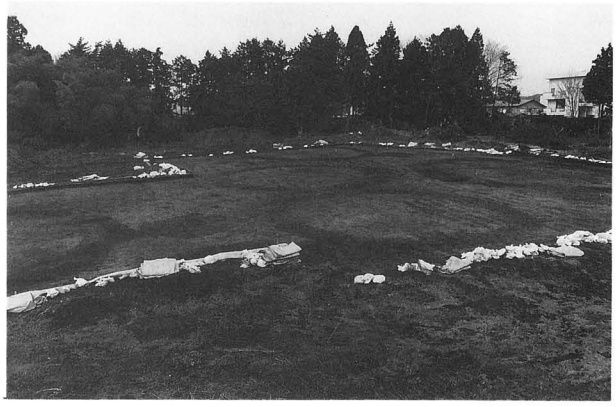
Ｉｆ層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト

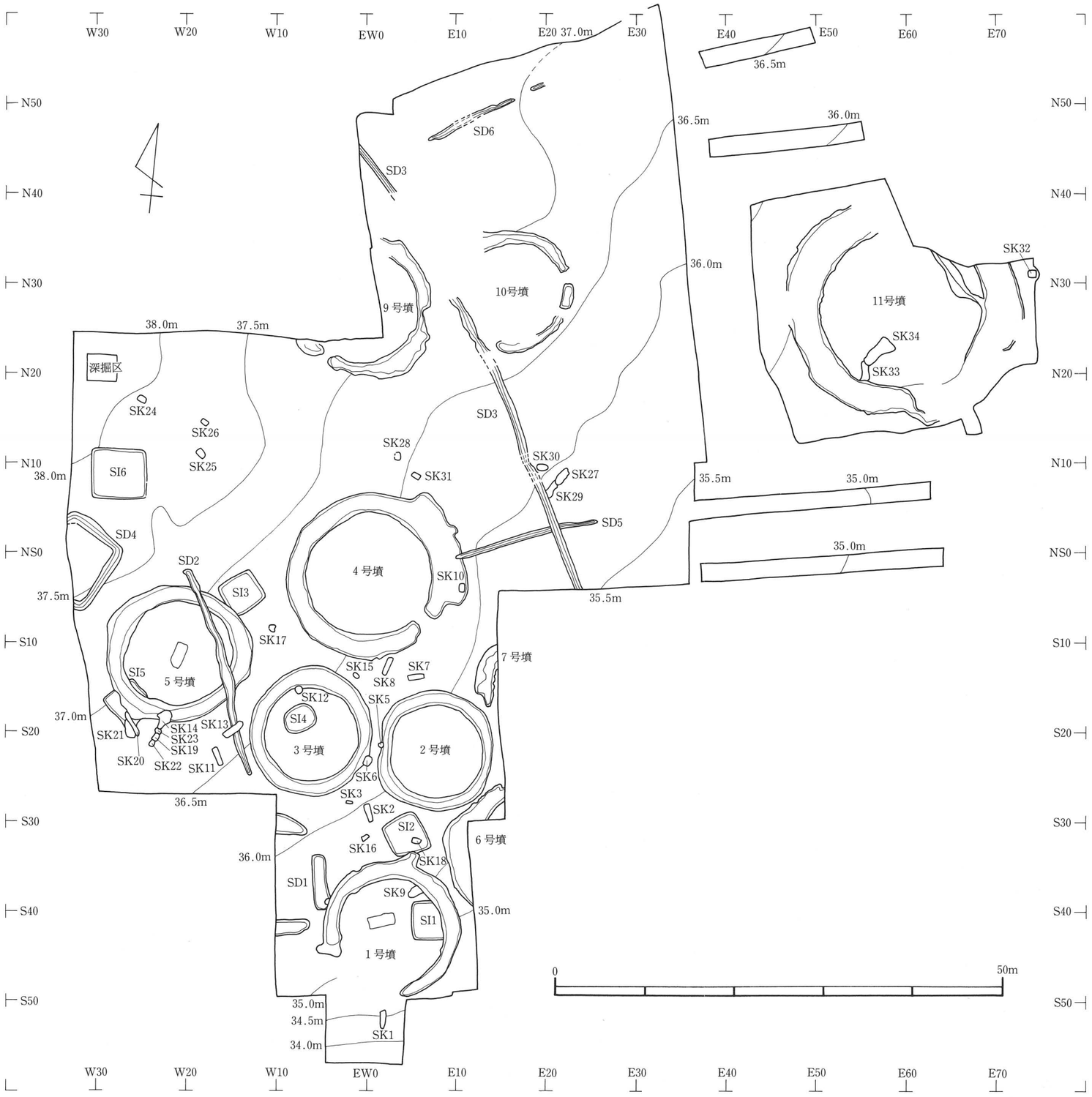
Ⅱ　層　10YR4/6 褐色　粘土質シルト　黒褐色シルトが少量混じる。Ⅲ層への漸移層であるが、大部分がＩ層によって攪拌されており、遺存状況は悪い。

Ⅲ　層　10YR6/6 明黄褐色　粘土質シルト　火山灰層である。部分的に砂粒や拳大の礫を含む箇所があり、厳密には細分可能であるが、今回は分層しなかった。ほとんどの遺構はこの上面でプランを確認している。

Ⅳ　層　砂礫層






W30
W20
W10
EW0
E10
E20
E30
E40
E50
E60
E70
N50
N40
N30
N20
N10
NS0
S10
S20
S30
S40
S50
37.0m
36.5m
36.0m
35.5m
35.0m
34.5m
34.0m
38.0m
37.5m
SD6
SD3
9 号墳
10号墳
11号墳
SK32
SK34
SK33
深掘区
SK24
SK26
SK25
SI6
SK28
SK31
SK30
SK27
SK29
SD5
SD4
SD2
SI3
4 号墳
SK10
SK17
SI5
5 号墳
SK15
SK7
SK8
SK12
SK5
SI4
3 号墳
2 号墳
7 号墳
SK21
SK14
SK23
SK19
SK13
SK20
SK22
SK11
SK6
SK3
SK2
SI2
SK16
SK18
6 号墳
SD1
SK9
SI1
1 号墳
SK1
0
50m

第５図　遺構全体図

第２章　検出された遺構と遺物

第１次･第２次調査区は隣接して位置し、また両調査にわたって精査を行った遺構もあるので、ここでは第１次･第２次調査を区別せずにまとめて記述することとする。

１次・２次調査を総合すると、古墳－円墳10基（１～７号墳、９～11号墳）、竪穴住居跡６軒（SI １～６）、土坑34基（SK １～34、埴輪棺墓を含む）、溝跡６条（SD １～６）を検出した。基本層序の項で述べたように遺構の確認面であるⅢ層上面にはⅠ層耕作土の溝状の天地返しが縦横に走っており、遺存状況はあまりよくない。遺物は円筒埴輪を中心として整理用コンテナで約50箱である。

第１節　古　　墳

１．１号墳（第６・７図、写真６～12）

⑴ 概　　要

調査区の最南部、古墳群のなかでは最も低い場所に位置する。確認面であるⅢ層上面は南東側に傾斜しており、古墳の北西側と南東側における比高差は約１ｍである。墳丘はすでに失われていたが、墓壙の基底部が残存しており、周囲には周溝が確認された。周溝はSI １・２、SD １、ＳＫ９を切っている。

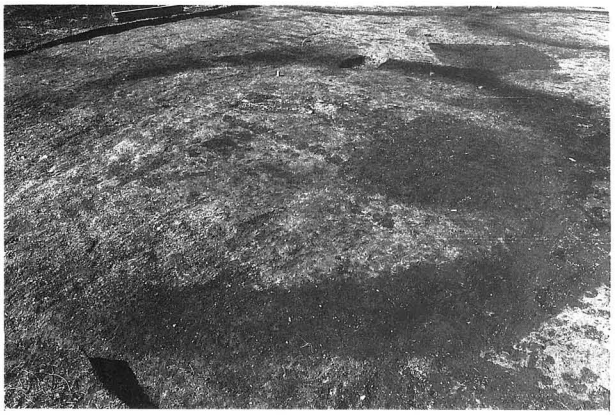
古墳の平面形は周溝の南西部を欠くために明確ではないがほぼ真円形で、規模は墳丘部で径11.8～12m、周溝を含む規模は15.3～15.5mである。

⑵ 周　　溝

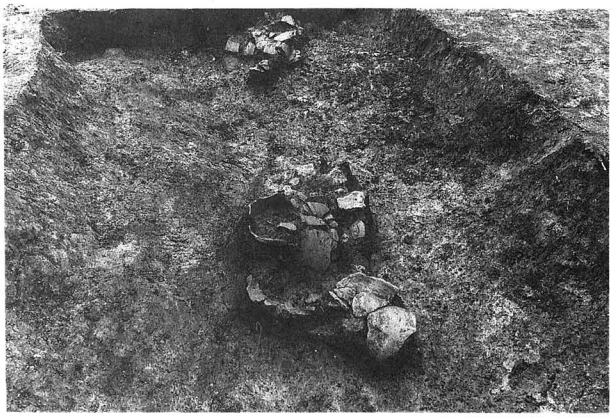
周溝は幅1.3～2.3m、平均幅は約2.0mである。北部で約1.5m程外側に突き出している他、南側は徐々に細くなり南西部で途切れている。深さは14～40cmと一定せず、底面は起伏がある。堆積土は自然堆積で、上層が黒褐色のシルト、下層が暗褐色の粘土質シルトに大別される。

なお、周溝の深さが一定せず途切れる場合もあることについては、周溝本来の掘り込み面（旧表土面）が不明なため断定はできないが、以下のような理由が考えられる。

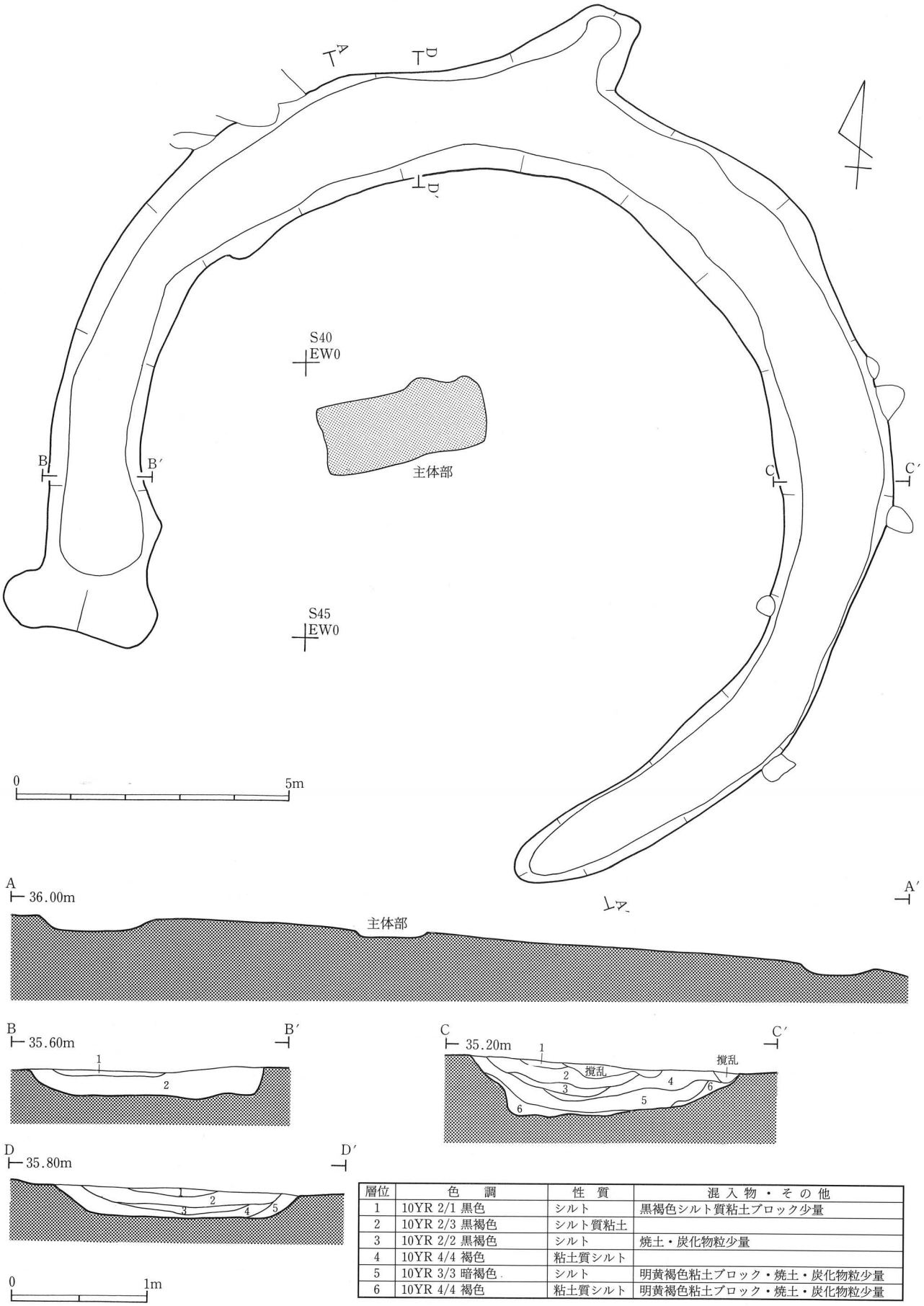
周溝は基本層第Ⅲ層を掘り込んでつくられているが、その下の礫層（Ⅳ層）上面に達した場合は礫層を掘り込んではいない。この結果、周溝底面の深さは礫層上面の標高に左右されることとなる。礫層の上面は平坦ではなく緩やかに波うっていて、Ⅲ層上面に露出する場合もある。従って、礫層が露出している場所に周溝が位置する場合などは調査時においてⅢ層上面では周溝を確認出来ないこととなる。これは他の古墳についても同様である。



１号墳確認状況

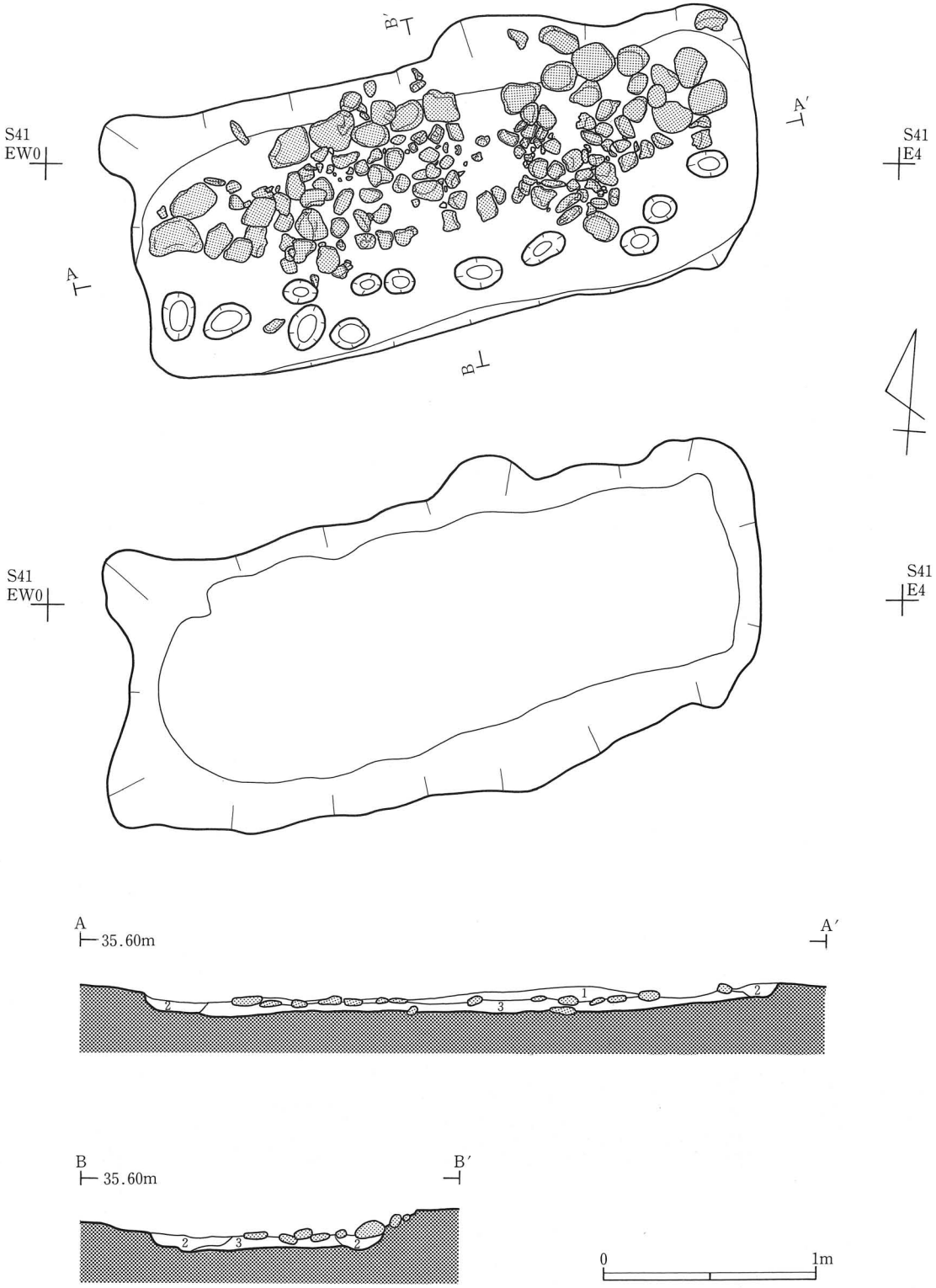


遺物出土状況



層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 2/1 黒色	シルト	黒褐色シルト質粘土ブロック少量
2	10YR 2/3 黒褐色	シルト質粘土	
3	10YR 2/2 黒褐色	シルト	焼土・炭化物粒少量
4	10YR 4/4 褐色	粘土質シルト	
5	10YR 3/3 暗褐色	シルト	明黄褐色粘土ブロック・焼土・炭化物粒少量
6	10YR 4/4 褐色	粘土質シルト	明黄褐色粘土ブロック・焼土・炭化物粒少量

第6図　1号墳平面・断面図



層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3/3 暗褐色	シルト	明黄褐色粘土ブロック少量、小礫少量
2	2.5Y 3/2 黒褐色 2.5Y 6/4 にぶい黄色	シルト シルト	混合、下面に酸化鉄集積
3	10YR 3/3 暗褐色 10YR 5/6 黄褐色	シルト シルト	混合、炭化物粒・小礫少量

第７図　１号墳主体部平面・断面図

⑶　内部主体

墓壙は古墳の中心からやや北西に寄った地点に位置する。主軸長3.0m、幅約1.3m の長方形で、主軸の方位は N -71°-E である。

Ⅲ層上面で暗褐色土のプランを確認し、この暗褐色土を除去したところ、５～20cm程度の大きさの礫（第７図中アミ点）を多数確認した。礫は中央部に小さなものが敷きつめられ、周辺部に比較的大きなものが並べられていた。攪乱あるいは盗掘を受けているため、墓壙の南半部の遺存状況が特に悪いが、小規模な竪穴式石室の棺床施設かあるいは礫床と考えられる。この棺床施設は、墓壙掘り方底面を約５cmの厚さでブロック土で埋め戻し、さらにもう一度壁近くを幅広の周溝状に掘り窪めたうえでその上に礫を敷いて構築しているようである。なお石室の規模は明確ではないが、墓壙の大きさと大きめの礫の配置からすると東西の長さが約２ m、南北の幅が0.6～0.7m 程度と推定される。

⑷　出土遺物（第８図、写真112）

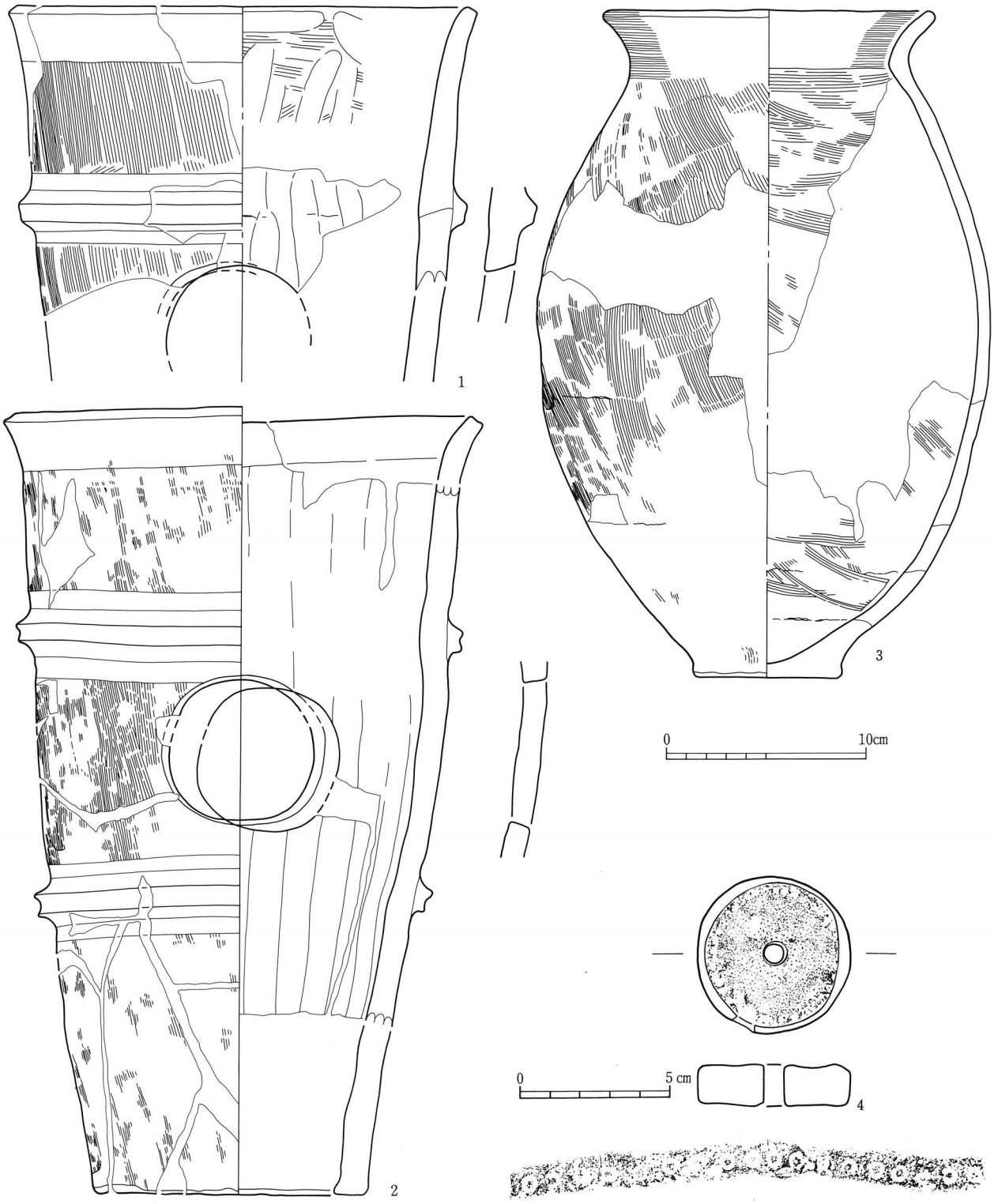
概要　周溝内から円筒埴輪片が約320点（約35kg）出土した他、土師器、縄文土器、弥生土器、土製品、剝片などが出土している。確実に遺構に伴うような出土状況を示す遺物はないが、埴輪の中にはその場所で潰れたように破片が集中するものもあることから、埴輪の多くは墳丘から転落したものである可能性が高い。その他の遺物については大部分が混入品と推定される。図化できたのは円筒埴輪２点（１・２）、土師器１点（３）、土製品（紡錘車）１点（４）である。

埴輪　円筒埴輪１と２はそれぞれｄ区とａ区（周溝北部）から出土している。両者共に外面調整が１次調整タテハケのみのものである。内面は縦方向のナデが施されており、１の３段目の内面にはナデ調整以前の斜め方向のハケメが認められる。直線的に外方に開き、口縁部がわずかに外反する器形である。スカシ孔はほぼ円形で、２段目の上側に偏ってあり、対称の位置に２ヶ所認められた。段の幅は 2については上が小さい。凸帯は 2条で、２が特に強いヨコナデが施されており、断面がM字形をしている。

土師器　３の甕は周溝が北側に突出する箇所の堆積土中から潰れた状態で出土した。長胴で、内外面ともハケメ調整が施されている。体部下半が赤色に変化していることから実際に煮炊きに使用されたもので、周溝の埋没途中に廃棄されたものと考えられる。

土製品　土製紡錘車はやや磨滅しているが完形で、片面の外周縁辺と側面に連続する竹管文が施されている。

１号墳完掘状況



No.	写真図版	遺構	種別	遺存度	法量 (cm) 口径	底径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎土	焼成	外面調整・備考 内面調整・備考
1	112 -1	１号墳 周溝ｄ区	円筒 埴輪	2，3段目 1/4	(23.5)	－	３段目10.5	円形	橙色 橙色	良好 白針微量	やや軟質	タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ **4a 類** 縦方向ナデ、３段目は横・斜め方向ハケメ→縦方向ナデ
2	112 -2	１号墳 周溝ａ区	円筒 埴輪	4/5	24.0	13.5	器高39.5 ３段目11.5 ２段目13.0 １段目15.0	円形	橙色 橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ **4a 類**

No.	写真図版	遺構	種別	遺存度	法量 (cm) 口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	調整
3	112-3	１号墳周溝ａ区	土師器・甕	3/4	16.7	7.4	33.5	(外) にぶい黄橙色 (内) にぶい橙色	やや不良・白針微量	良好	(内外) ハケメ

No.	写真図版	遺構	種別	遺存度	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴
4	112-4	１号墳周溝	土製品・紡錘車	完形	5.3	1.4	43.7	片面周縁と側面に連続する竹管文

第８図　１号墳出土遺物

2．2号墳（第9図、写真13～18）

(1) 概　　要

調査区の南部、1号・3号・4号・6号・7号の各古墳に囲まれて位置する。確認面であるIII層上面は南東側に緩やかに傾斜しており、古墳の北西側と南東側における比高差は約0.5mである。墳丘はすでに失われており、周溝が確認されたのみである。周溝はSK 5を切っている。

古墳の平面形は、墳丘部はほぼ円形であるが、周溝の外側をみると3号墳に接する西側と反対の東側が直線的である。平面形が歪む理由については西側は3号墳の影響が考えられ、東側については明らかでないがI層の耕作による攪乱が深く入ったために結果的にIII層上面におけるプランが乱された可能性もある。

規模は墳丘部で径10.2～10.8m、周溝を含む規模は12.5～14.1mである。

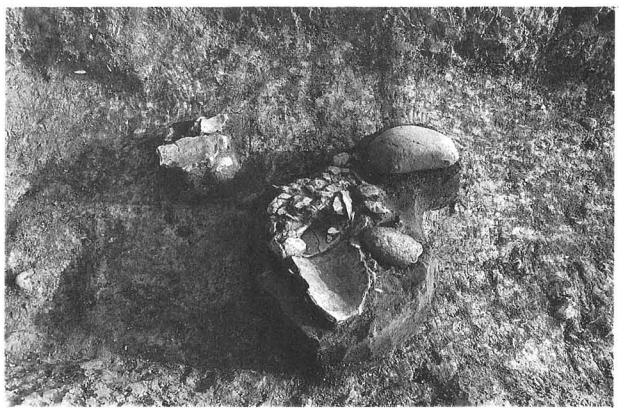
(2) 周　　溝

周溝は幅1.0～1.9m、平均幅は約1.5m程で、前述したように西側と東側がやや狭い。深さは17～48cmと一定せず、底面には起伏がある。堆積土は自然堆積である。

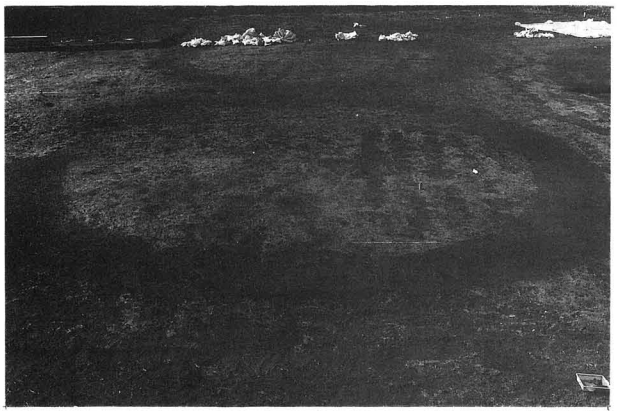
(3) 出土遺物（第10図、写真113）

概要　周溝内から円筒埴輪片が約1270点（約18kg）出土した他、土師器片、縄文土器片、剝片が約50点出土している。埴輪の中にはその場所で潰れたように破片が集中するものもあることから（写真17・18）、埴輪の多くは墳丘から転落したものである可能性が高い。その他の遺物については大部分が混入品と推定される。図化できたのは円筒埴輪2点（1・2）のみである。

埴輪　1と2はそれぞれa区とb区（周溝東部）から出土している。両者共に外面調整が1次調整タテハケのみで、内面調整は縦方向のナデである。ほぼ直線的に外方に開いて、口縁部がごくわずかに外反する器形である。スカシ孔は円形で2段目の上側に偏ってあり、1では対称の位置に2ヶ所認められた。段の幅は1の1段目が不明であるが、その他は15～16cmでほぼ同じである。2条ある凸帯は低く、断面形は側面がわずかに窪む台形をしている。

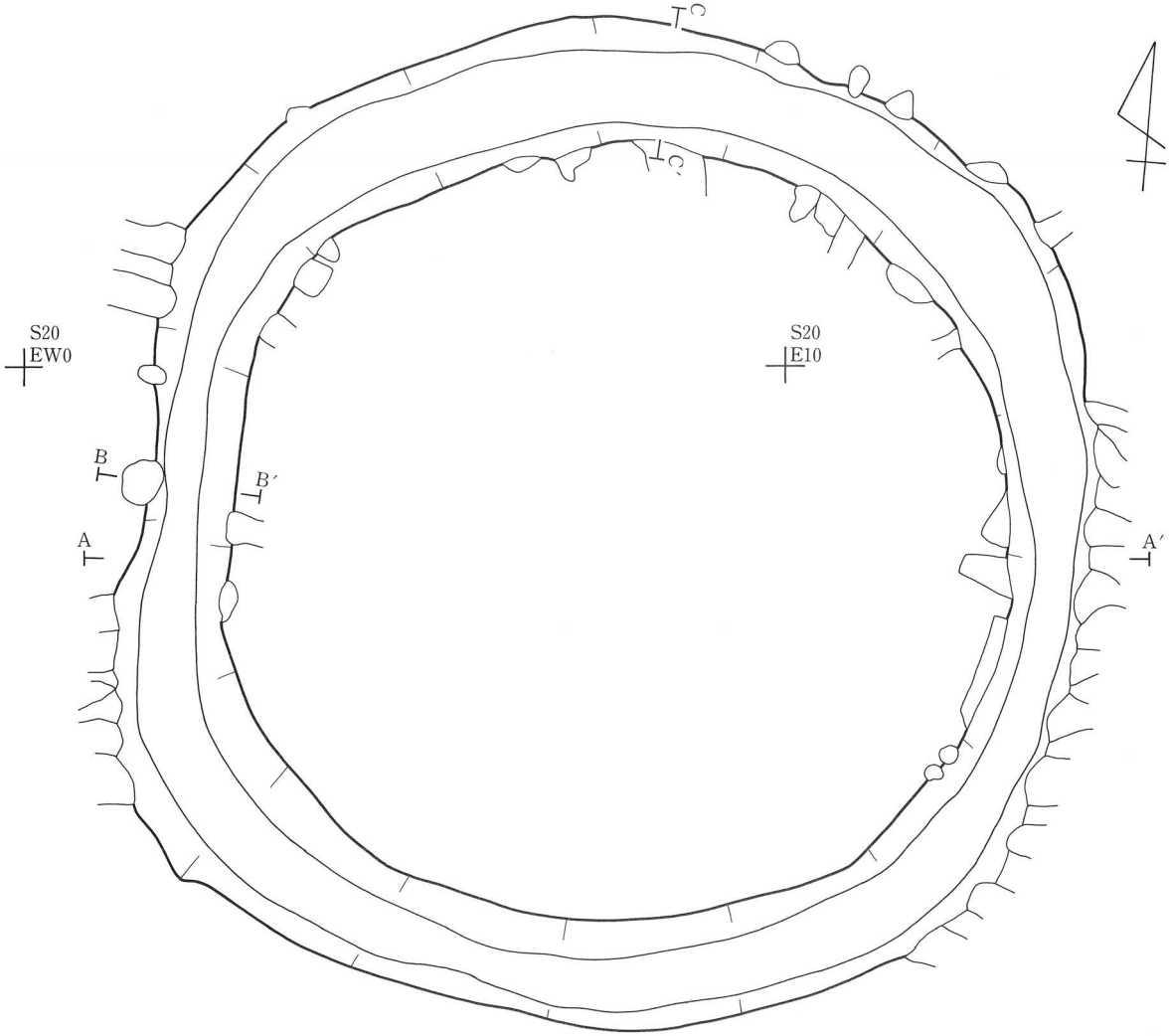


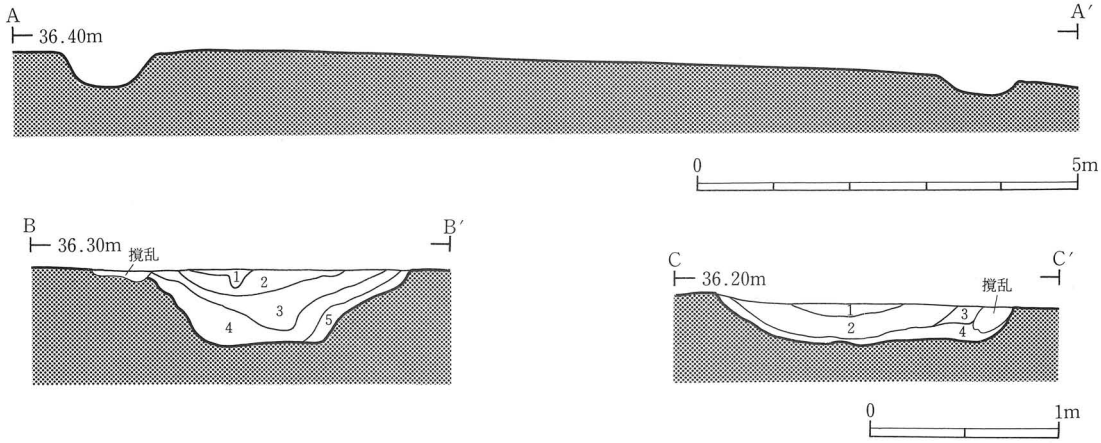
周溝内の遺物出土状況



2号墳確認状況

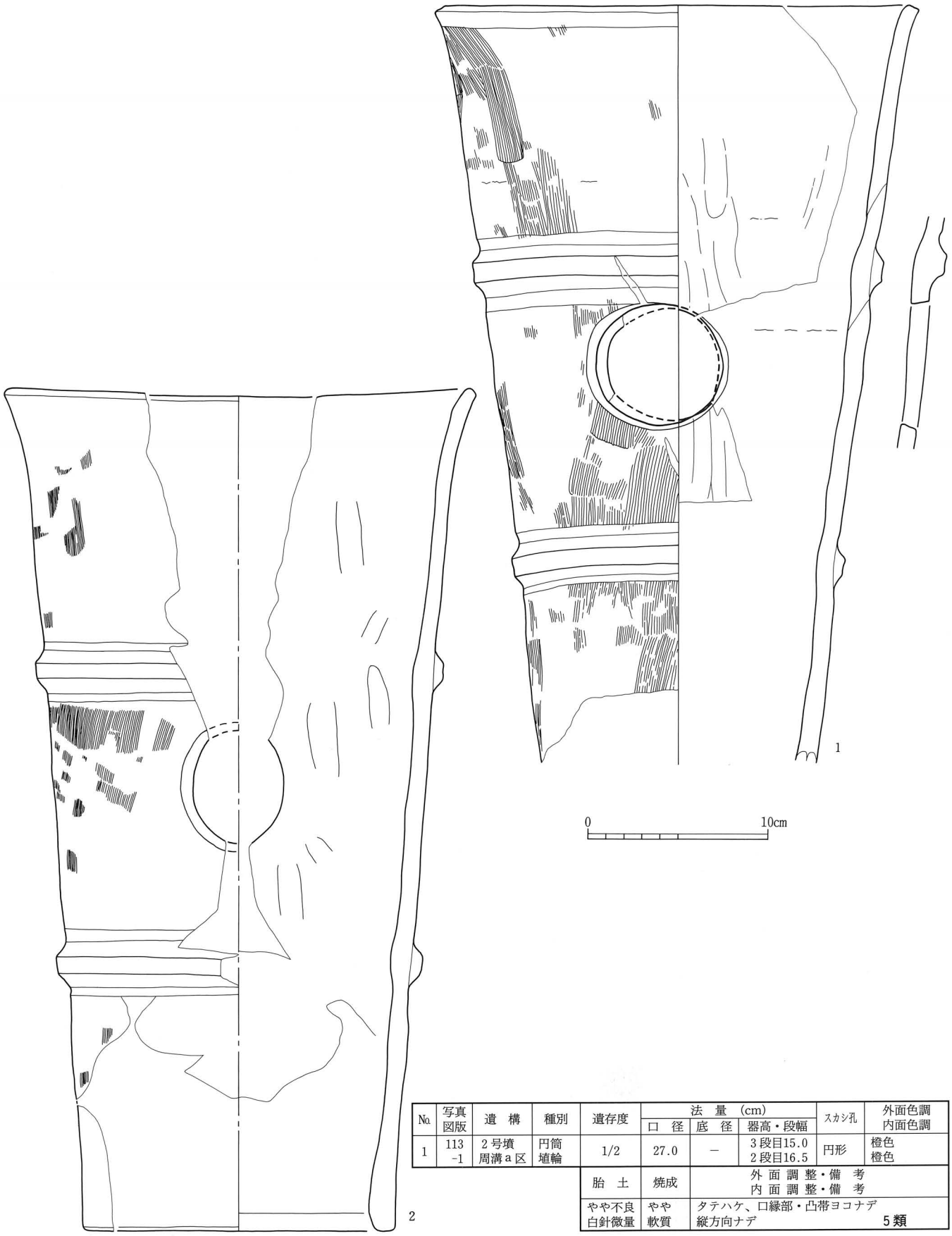
2号墳完掘状況





層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3/2 黒褐色	粘土質シルト	黒色シルトブロック少量
2	10YR 3/3 暗褐色	シルト	明黄褐色粘土ブロック・焼土・炭化物粒少量
3	10YR 4/4 褐色	粘土質シルト	明黄褐色粘土ブロック少量
4	10YR 3/2 黒褐色	シルト	焼土・炭化物粒多量
5	10YR 3/4 暗褐色	粘土質シルト	明黄褐色粘土ブロック多量

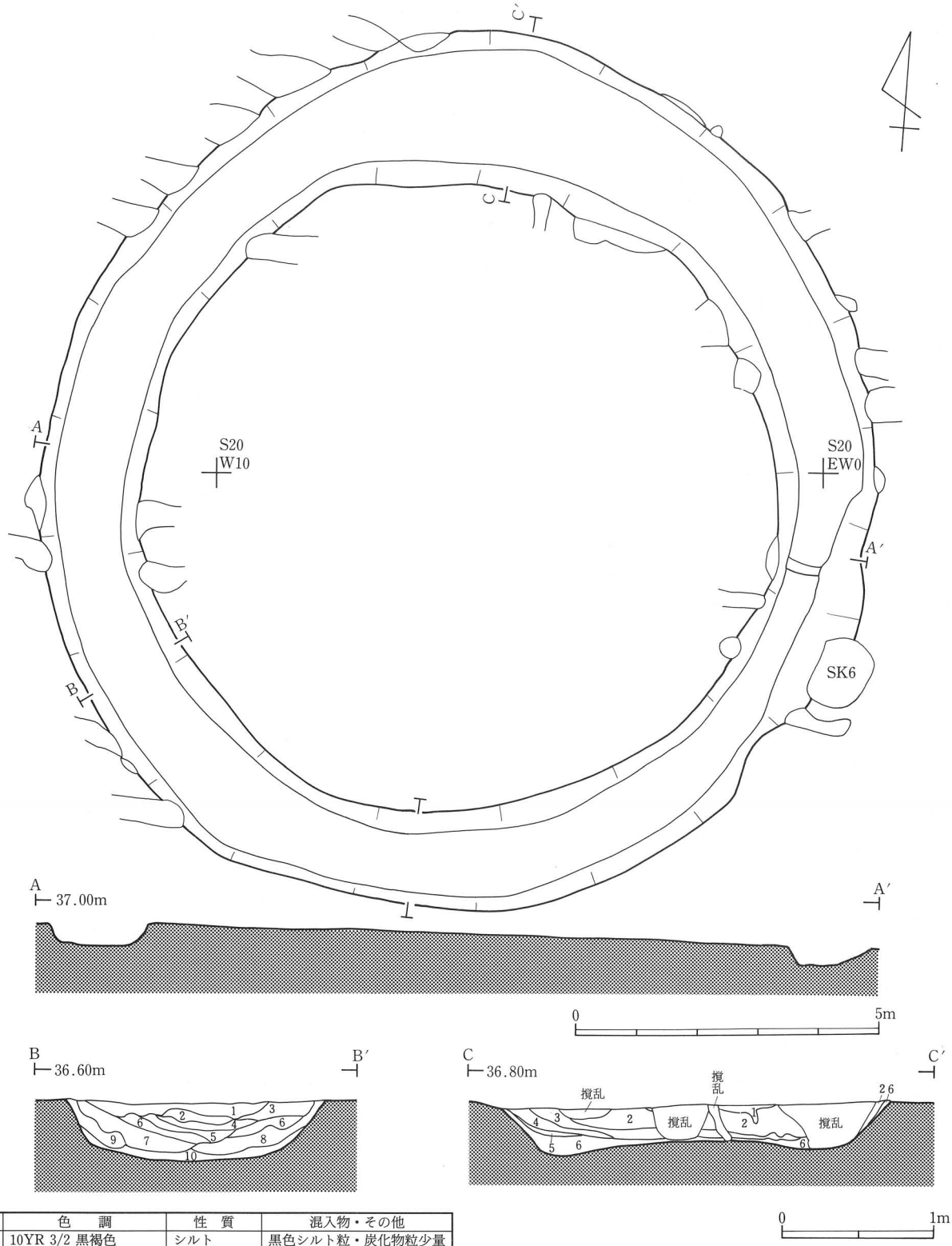
第９図　２号墳平面・断面図



No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm) 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調
1	113 -1	2号墳 周溝a区	円筒 埴輪	1/2	27.0	−	3段目15.0 2段目16.5	円形	橙色 橙色
				胎　土	焼成	外面調整・備　考 内面調整・備　考			
				やや不良 白針微量	やや 軟質	タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ　**5類**			

No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm) 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外面調整・備　考 内面調整・備　考
2	113 -2	2号墳 周溝b区	円筒 埴輪	1/4	(26.2)	(7.4)	47.7 1段目15.0 2段目16.5 3段目16.0	円形	浅黄橙色 浅黄橙色	やや不良 白針微量	やや軟質	タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ　**5類**

第10図　2号墳出土遺物



層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3/2 黒褐色	シルト	黒色シルト粒・炭化物粒少量
2	10YR 1.7/1 黒色	シルト	炭化物粒少量
3	10YR 3/4 暗褐色	シルト	炭化物粒少量
4	10YR 3/2 黒褐色	シルト	炭化物粒少量
5	10YR 2/1 黒色	粘土質シルト	炭化物粒少量
6	10YR 3/4 暗褐色	シルト	炭化物粒少量
7	10YR 3/3 暗褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土粒・焼土・炭化物粒少量
8	10YR 3/4 暗褐色	シルト	部分的に黄褐色粘土・黒褐色シルトとの互層
9	10YR 4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土ブロック少量
10	10YR 5/6 黄褐色 10YR 4/6 褐色 10YR 3/4 暗褐色	粘土質シルト 砂質シルト シルト	混合

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 2/1 黒色	シルト	
2	10YR 3/2 黒褐色	シルト	黒色シルト粒・炭化物粒少量
3	10YR 3/4 暗褐色	シルト	明黄褐色粘土ブロック少量
4	10YR 2/1 黒色	粘土質シルト	炭化物粒少量
5	10YR 3/4 暗褐色	シルト	炭化物粒少量
6	10YR 5/6 黄褐色 10YR 4/6 褐色 10YR 3/4 暗褐色	粘土質シルト 砂質シルト シルト	混合

第11図　３号墳平面・断面図

3．3号墳（第11図、写真19～21）

(1) 概　　要

調査区の南部、2号・4号・5号墳に囲まれて位置する。確認面であるIII層上面は南東側に緩やかに傾斜しており、古墳の北西側と南東側の比高差は約0.5mである。墳丘はすでに失われており、周溝が確認されたのみである。周溝はSK12を切っている他、周溝の内側に位置するSI 4の上にはかつて墳丘があったと推定されるので、これらの遺構よりも新しい。なお、周溝はSK 6に切られている。

古墳の平面形は、墳丘部はほぼ円形であるが、周溝の外側は北側がやや外側に突出した感じとなっている。

規模は墳丘部で径10.4m、周溝を含む規模は13.5～14.5mである。

(2) 周　　溝

周溝は幅1.1～2.6m、平均幅は約1.8m程で、前述したように周溝の外側のプランがやや北側に突出する関係で北側の幅がやや広い。底面に起伏があるために深さは20～45cmと一定せず、東側では明瞭な段差も認められる。堆積土は自然堆積である。

(3) 出土遺物

周溝内から円筒埴輪片が約20点（約0.7kg）出土している。この他に縄文土器片、弥生土器片、土師器片、剝片などが約120点出土している。確実に遺構に伴う遺物は確定できず、図化できた遺物もない。なお、埴輪はすべて小片でしかも磨滅が激しいため、調整技法などが判るものはない。

4．4号墳（第12図、写真22～26）

(1) 概　　要

調査区の中央部、2号・3号墳の北側に隣接して位置する。調査区中央～南部に集中する古墳群の中では最も規模が大きく、当遺跡のなかでも11号墳に次いで2番目に大きい。

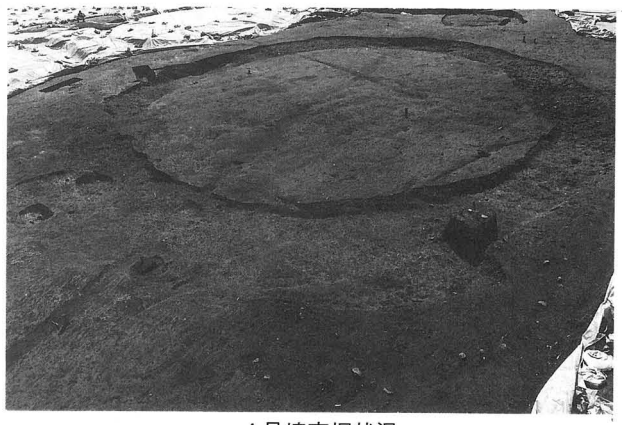
確認面であるIII層上面は南東側に緩やかに傾斜しており、古墳の北西側と南東側の比高差は約1 mである。墳丘はすでに失われており、周溝のみが確認された。周溝はSK 8・10、SD 5に切られている。

古墳の平面形は、墳丘部はほぼ円形であるが、周溝の北東～東側にかけては外側に張り出した形となっている。

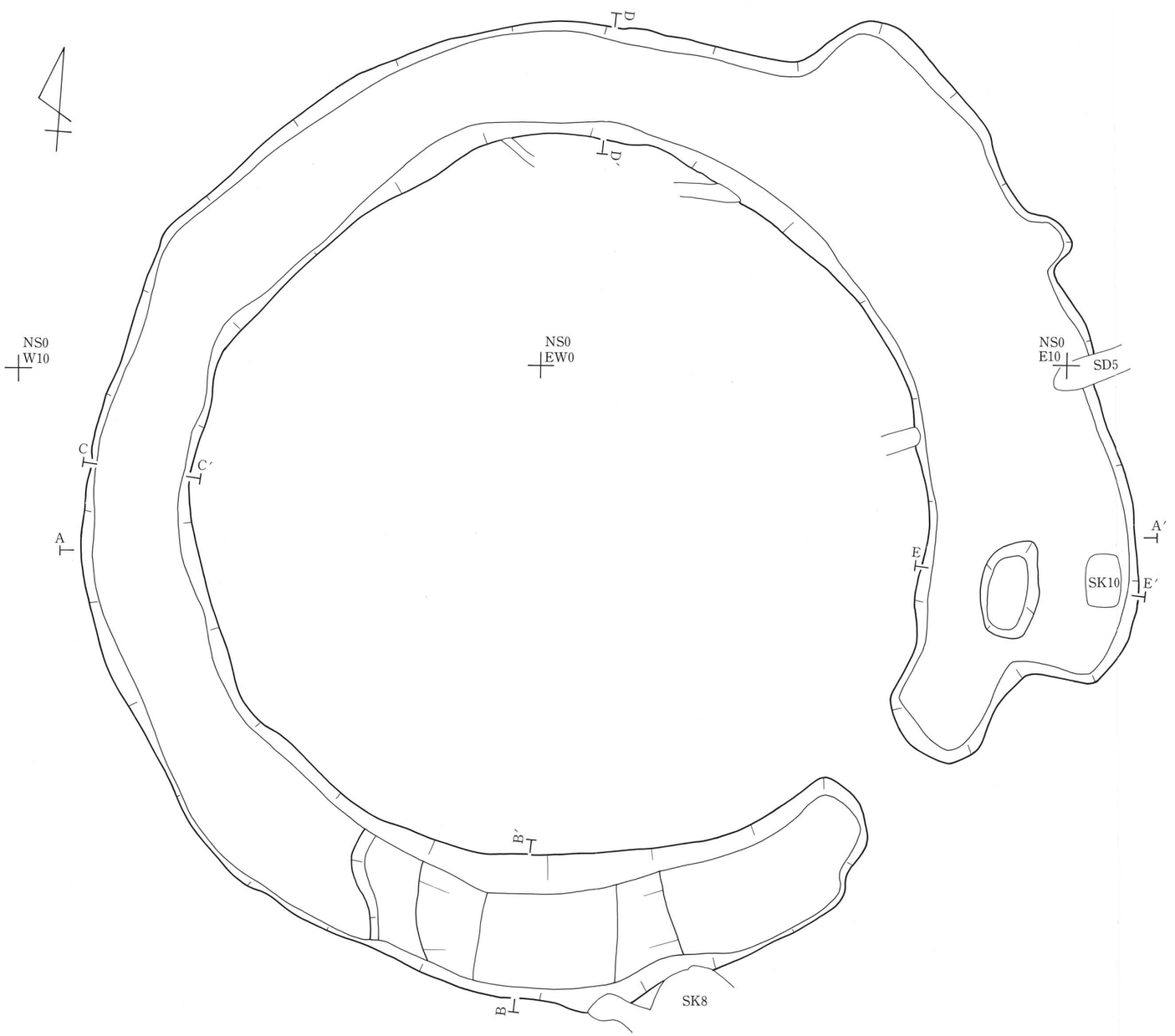
規模は墳丘部で径13.7m～14m、周溝を含む規模は18.0～20.0mである。

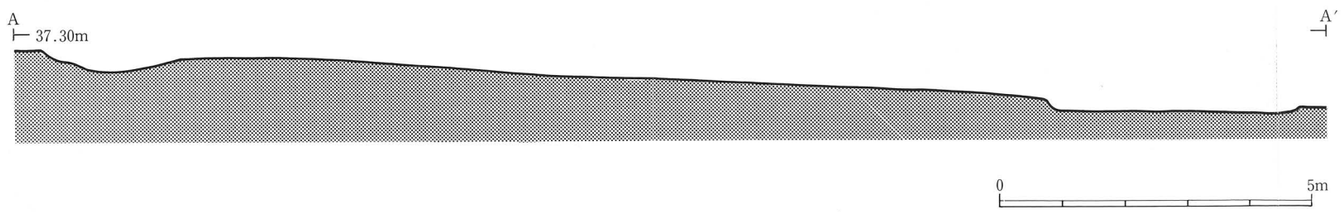
(2) 周　　溝

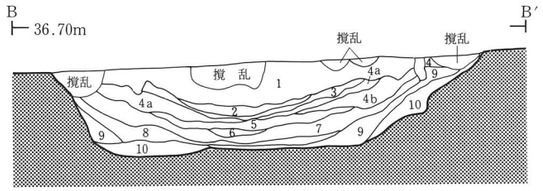
周溝は幅2.2～4.2m、平均幅は2.5m程度である。前述したように周溝の北東～東側の外側のプランが外側に張り出していて、この部分の幅が他と比べて極端に広い。南東部が長さ約1.4mにわたって途切れている。底面には起伏があるため深さは15～60cmと一定せず、南側には明瞭な段差、東側には土坑状の窪みが認められる。堆積土は自然堆積で、上層には灰白色火山灰がブロック状あるいは層状に認められた場所もあるが、堆積状況からするとこれらの火山灰は二次堆積と考えられる。

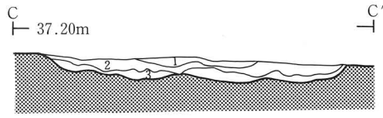


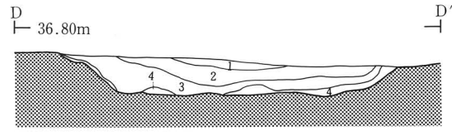
4号墳完掘状況

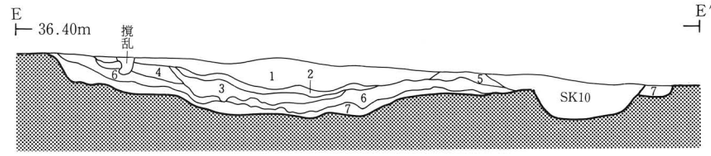












0　1m

B−B′

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 1.7/1 黒色	シルト	
2	10YR 8/4 浅黄 10YR 2/2 黒褐色	火山灰 粘土質シルト	互層
3	10YR 2/1 黒色	シルト質粘土	黒褐色シルト粒少量
4	10YR 3/3 暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルト質粘土ブロック少量
5	10YR 2/1 黒色	シルト質粘土	焼土・炭化物粒少量
6	10YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	粗砂粒少量
7	10YR 4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土粒・焼土・炭化物粒少量
8	10YR 2/3 黒褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土粒・焼土・炭化物粒少量
9	10YR 2/3 黒褐色 10YR 7/6 明黄褐色	シルト質粘土 シルト質粘土	互層
10	10YR 6/6 明黄褐色	粘土	黒褐色粘土質シルト粒少量

C−C′

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 2/1 黒色	シルト	黒色シルト質粘土ブロック少量
2	10YR 4/6 褐色	シルト	粗砂粒少量
3	10YR 6/6 明黄褐色	粘土	褐色粘土質シルトブロック少量

D−D′

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 1.7/1 黒色	シルト	灰白色火山灰ブロック少量
2	10YR 3/2 黒褐色	粘土質シルト	粗砂粒少量
3	10YR 3/3 暗褐色	粘土質シルト	
4	10YR 6/6 明黄褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土質シルトブロック多量

E−E′

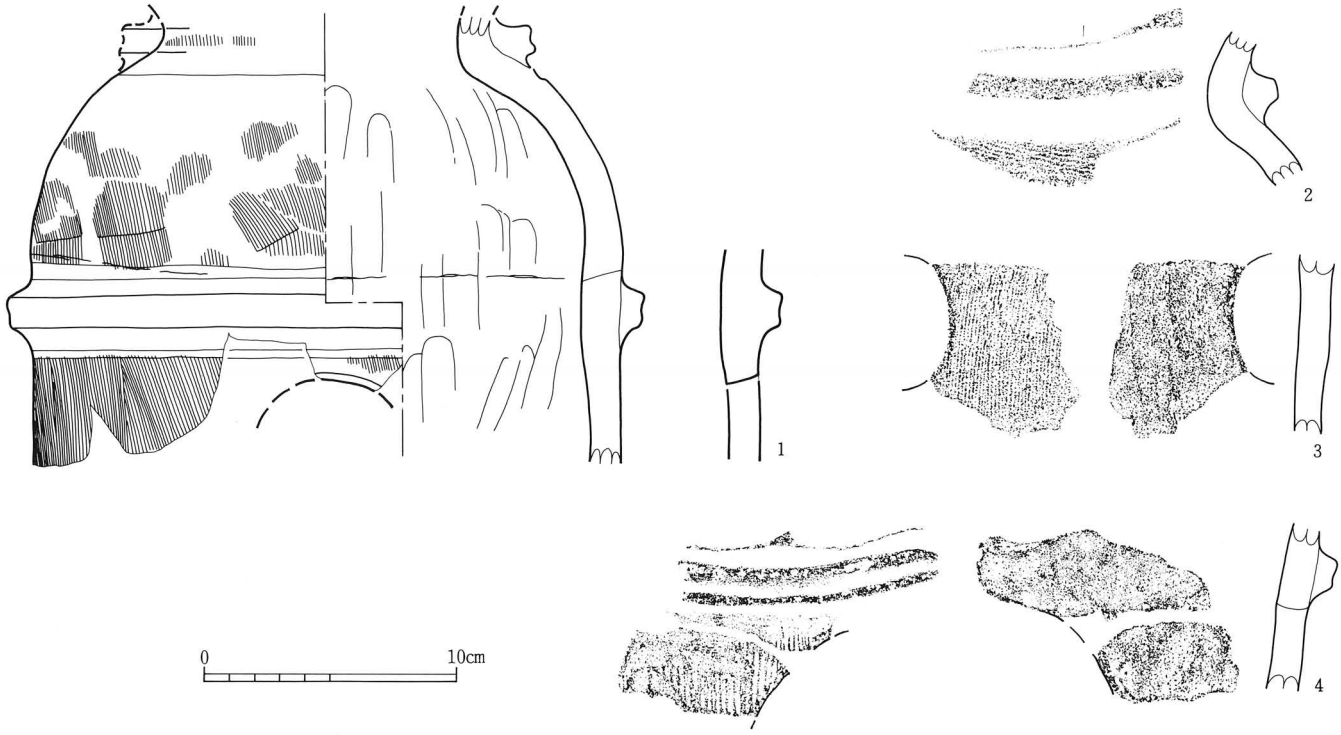
層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 1.7/1 黒色	シルト	
2	2.5Y 7/4 浅黄 10YR 3/2 黒褐色	火山灰 粘土質シルト	混合
3	10YR 3/2 黒褐色	シルト	明黄褐色粘土ブロック・焼土・炭化物粒少量
4	10YR 4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
5	10YR 4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色粘土ブロック少量
6	10YR 6/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	
7	10YR 6/6 明黄褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土質シルトブロック多量

第12図　４号墳平面・断面図

⑶　出土遺物（第13・14図、写真114）

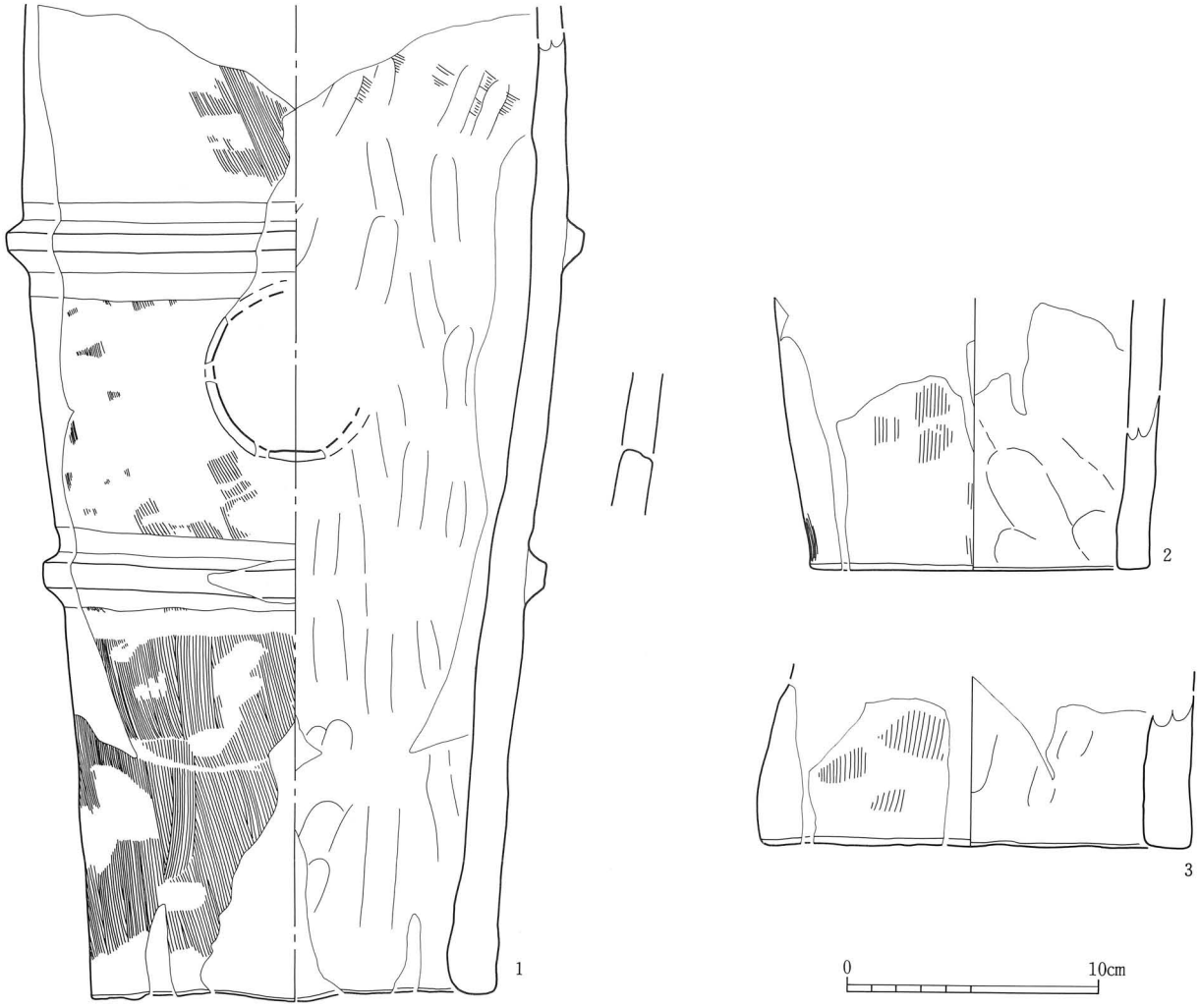
概要　周溝内から円筒埴輪片が約2400点（約43kg）、弥生土器片、土師器片などが約110点が出土している。埴輪の中にはその場所で潰れたように破片が集中して出土したものがいくつかあることから(写真22)、埴輪の多くは墳丘から転落したものである可能性が高い。その他の遺物については大部分が混入品と推定される。図化できたのは７点あり、このうち朝顔形埴輪が２点（第13図１・２）、円筒埴輪が５点（第13図３・４、第14図）である。

埴輪　朝顔形埴輪の外面調整は１が１次調整タテハケのみであるが、２は２次調整のヨコハケが施されている。内面調整は縦方向のナデである。頸部の凸帯は１は剝落して不明であるが、２は断面が台形のものである。スカシ孔は円形と推定される。円筒埴輪第14図１は外面調整が１次調整タテハケのみのものである。内面調整は縦方向のナデであるが、３段目はナデ調整以前の斜め方向ハケメが認められる。口縁部の形態が不明だが、スカシ孔は円形で、段の幅は上が狭い。凸帯は２条で、断面形は台形をしている。２と３の調整技法は１と同じである。なお、他の２点（第13図３・４）には円形と推定されるスカシ孔が認められる。



No.	写真図版	遺構	種別	遺存度	法量（cm） 口径	底径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎土	焼成	外面調整・備考 内面調整・備考
1	114 -1	４号墳 周溝ｃ区	朝顔形 埴輪	肩～体部 1/5	－	－	－	円形	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	やや不良 白針微量	やや軟質	タテハケ、凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ
2	114 -2	４号墳 周溝ｄ区	朝顔形 埴輪	頸部1/5	－	－	－	－	明黄褐色 明黄褐色	やや不良 白針微量	やや軟質	ヨコハケ、凸帯ヨコナデ ナデ
3	114 -3	４号墳 周溝ｄ区	円筒 埴輪	体部小片	－	－	－	円形	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	やや不良 白針微量	軟質	タテハケ 縦方向ナデ
4	114 -4	４号墳 周溝ｂ区	円筒 埴輪	体部小片	－	－	－	円形	浅黄橙色 浅黄橙色	不良 白針微量	良好	タテハケ、凸帯ヨコナデ ナデ　**５類**

第13図　４号墳出土遺物（1）



No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm) 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外面調整・備　考 内面調整・備　考
1	114 -5	4号墳 周溝c区	円筒 埴輪	1/6	—	16.2	2段目13.5 1段目17.0	円形	橙色 浅黄橙色	やや不良 白針微量	軟質	タテハケ、凸帯ヨコナデ　**5類** 縦方向ナデ、3段目は斜めハケメ→縦方向ナデ
2	114 -6	4号墳 周溝b区	円筒 埴輪	1段目 のみ	—	14.5	—	—	橙～黄橙色 橙色	良好 白針微量	軟質	タテハケ 斜め方向ナデ
3	114 -7	4号墳 周溝b区	円筒 埴輪	基部3/4	—	16.2	—	—	橙色 にぶい橙色	やや不良 白針微量	軟質	タテハケ ナデ

第14図　4号墳出土遺物 (2)

5．5号墳（第15・16図、写真27～32）

(1) 概　　要

調査区の西部に位置する。確認面であるIII層上面は南東側に緩やかに傾斜しており、古墳の北西側と南東側の比高差は約0.5m である。墳丘はすでに失われていたが墓壙の基底部が残存しており、周囲には周溝が確認された。周溝はSI 3・5を切り、SD 2、SK14に切られている。

古墳の平面形は円形だが、南北に比べて東西がわずかに長い。規模は墳丘部で径11.7～12.4m、周溝を含む規模は15.5～16.8m である。

(2) 周　　溝

周溝は幅1.6～3.0m、平均幅は約2.0mである。底面は起伏があり、深さは23～52cmと一定しない。堆積土は自然

堆積である。

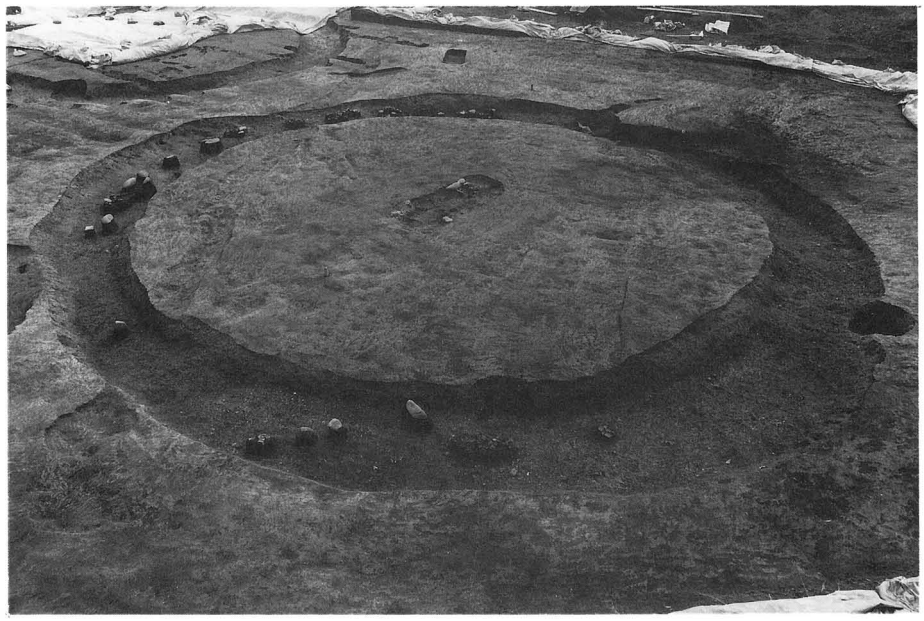
⑶　内部主体

墓壙は古墳のほぼ中心に位置し、平面形は片側短辺がやや丸みを帯びる長方形で、主軸長2.8m、幅約1.1～1.4m、主軸の方位はN-14°-Eである。

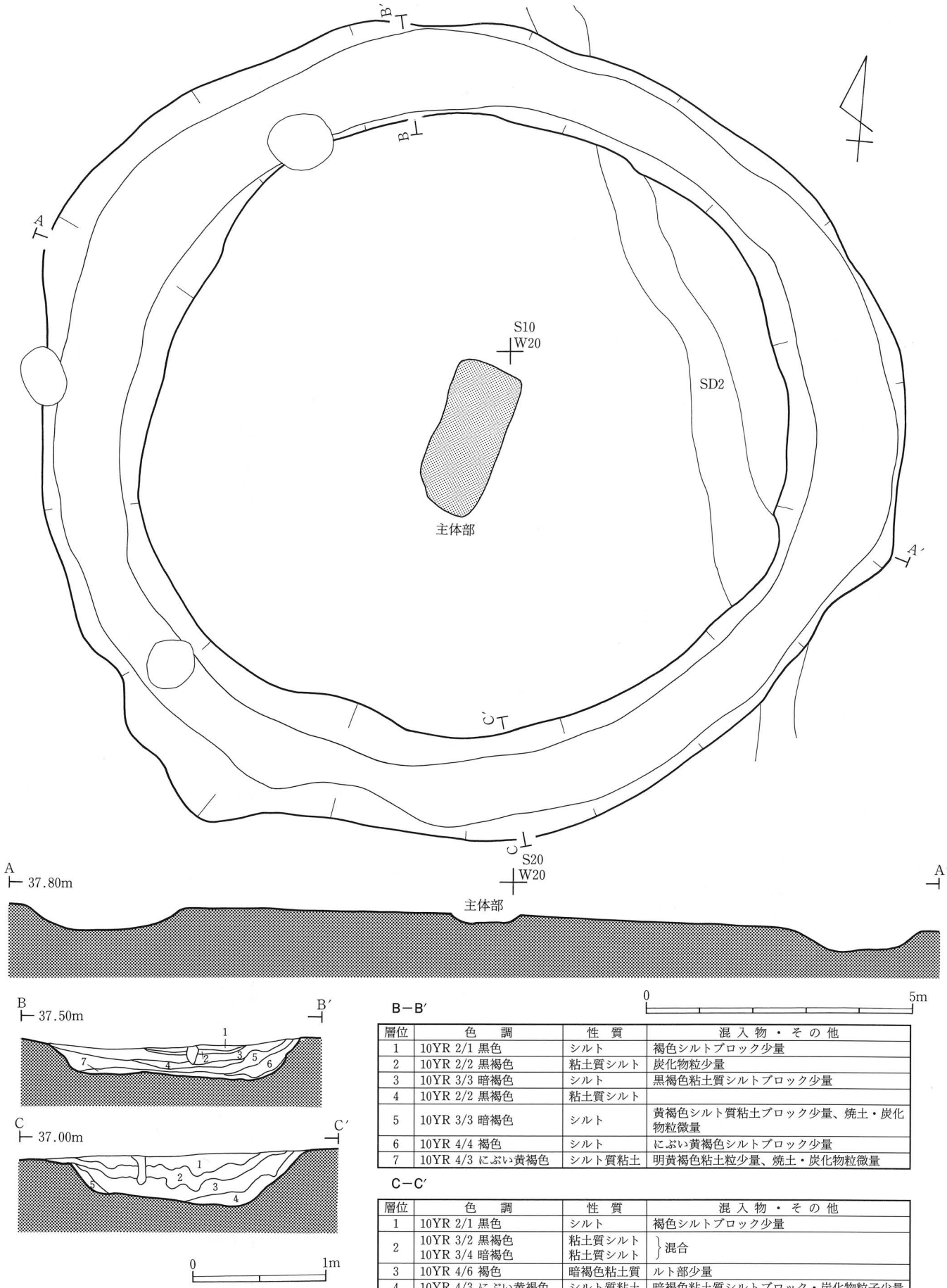
Ⅲ層上面で黒褐色および褐色土のプランを確認して掘り下げたところ、５～50cm程度の大きさの礫と抜き取り痕と推定されるピットが多数認められた。さらに堆積土をすべて取り除いたところ中央部に長さ約1.8m、幅約0.4mの長方形に掘り残した部分があり、その周囲に径10～45cm程度のピットが多数確認された。この長方形の部分は棺を安置する基台部で、その周辺のピットは棺を支える礫を埋め込んだ掘り方と推定されるため、遺存状況はよくないが小規模な竪穴式石室の棺床施設と考えられる。

この棺床施設は、墓壙掘り方底面の中央部に長方形の基台部を掘り残すと同時に、その周辺に礫を埋め込むための窪みを設け、礫を設置した後に基台部のやや上の高さまでブロック土で埋め戻して構築している。なお、礫の大部分が抜き取られるなど遺存状況が悪いため、さらにその上に礫敷があったかどうかは明らかではない。また、石室など上部の構造についても不明である。

５号墳確認状況



５号墳主体部と遺物出土状況



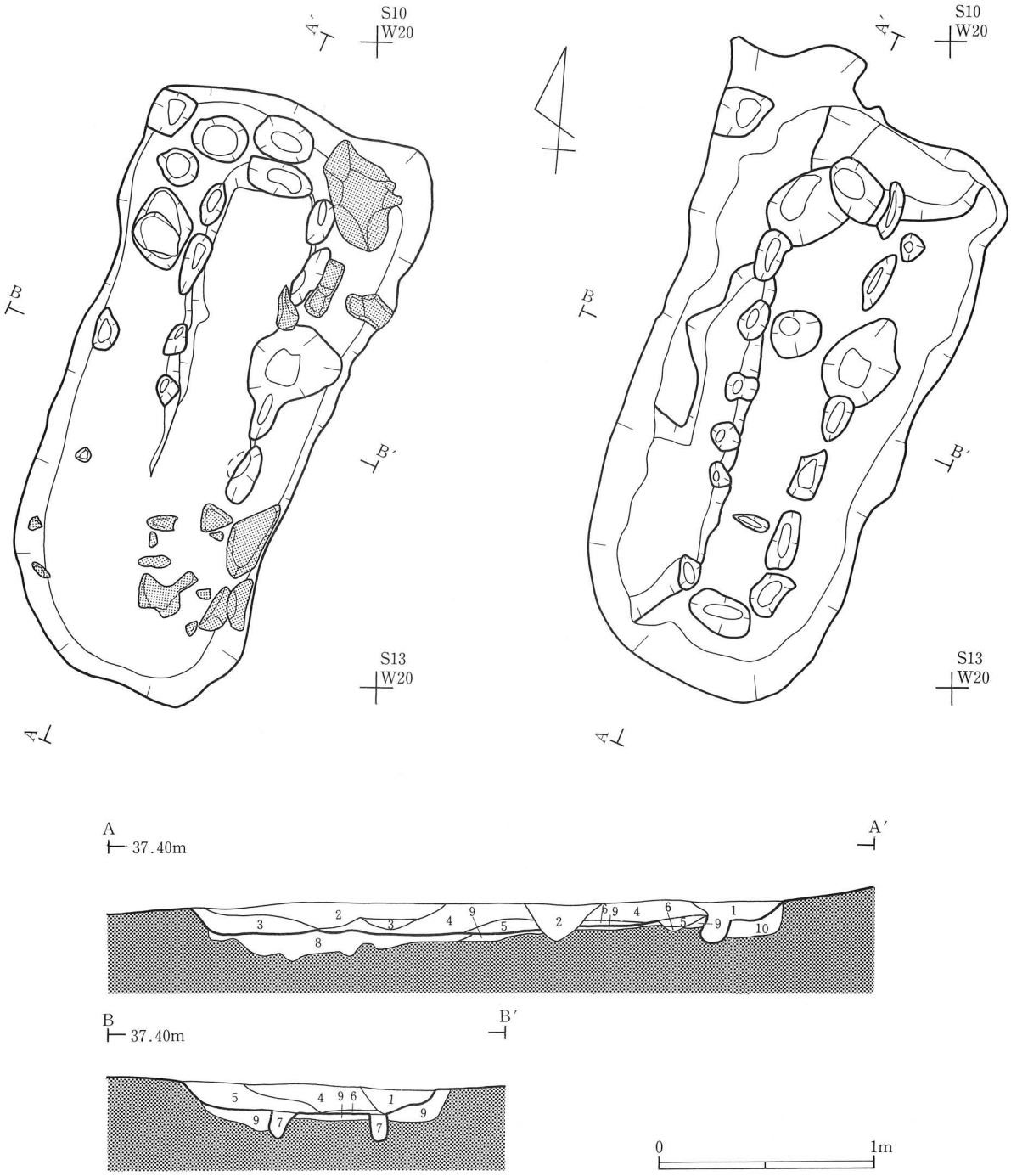
B－B′

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 2/1 黒色	シルト	褐色シルトブロック少量
2	10YR 2/2 黒褐色	粘土質シルト	炭化物粒少量
3	10YR 3/3 暗褐色	シルト	黒褐色粘土質シルトブロック少量
4	10YR 2/2 黒褐色	粘土質シルト	
5	10YR 3/3 暗褐色	シルト	黄褐色シルト質粘土ブロック少量、焼土・炭化物粒微量
6	10YR 4/4 褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトブロック少量
7	10YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色粘土粒少量、焼土・炭化物粒微量

C－C′

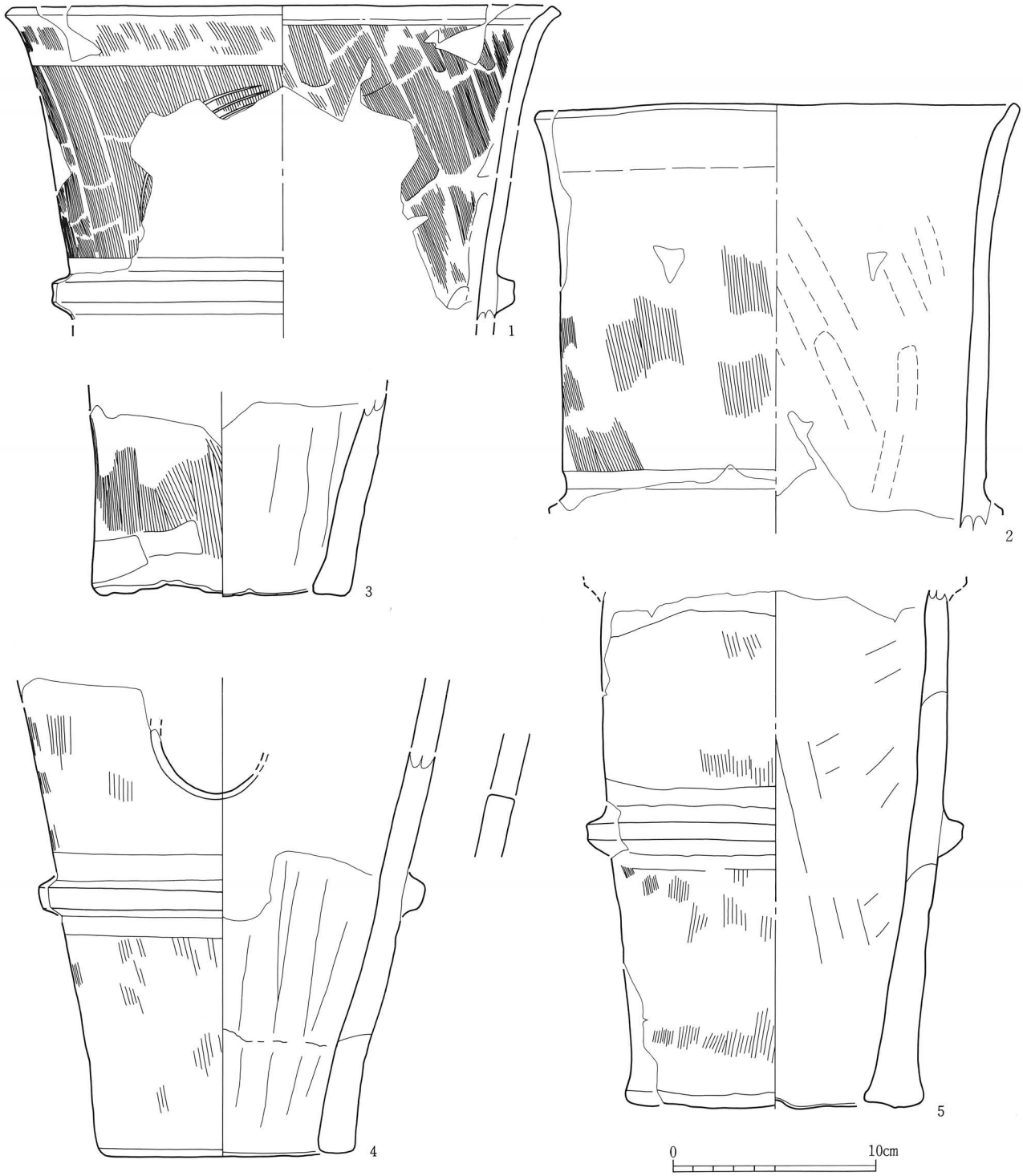
層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 2/1 黒色	シルト	褐色シルトブロック少量
2	10YR 3/2 黒褐色 10YR 3/4 暗褐色	粘土質シルト 粘土質シルト	混合
3	10YR 4/6 褐色	暗褐色粘土質	ルト部少量
4	10YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	暗褐色粘土質シルトブロック・炭化物粒子少量
5	10YR 6/6 明黄褐色	粘土	暗褐色粘土質シルトブロック少量

第15図　5号墳平面・断面図



層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3/2 黒褐色	シルト	灰白色粘土粒・凝灰岩粒少量
2	10YR 2/2 黒褐色	シルト	黄褐色粘土ブロック少量
3	10YR 2/2 黒褐色 10YR 5/6 黄褐色	シルト 粘土	混合、凝灰岩粒少量
4	10YR 4/4 褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土ブロック少量、非常に硬い
5	10YR 2/2 黒褐色 10YR 5/6 黄褐色 10YR 4/4 褐色	シルト 粘土 シルト	混合
6	10YR 4/3 にぶい黄褐色	粗砂	
7	10YR 2/2 黒褐色	シルト	
8	7.5YR 3/3 暗褐色 10YR 5/6 黄褐色	粘土質シルト 粘土質シルト	混合、黄褐色粘土ブロック少量
9	5Y 6/2 灰オリーブ	粘土	硬い
10	10YR 4/4 褐色 10YR 5/6 黄褐色	粘土質シルト 粘土質シルト	混合、炭化物粒微量

第16図　５号墳主体部平面・断面図



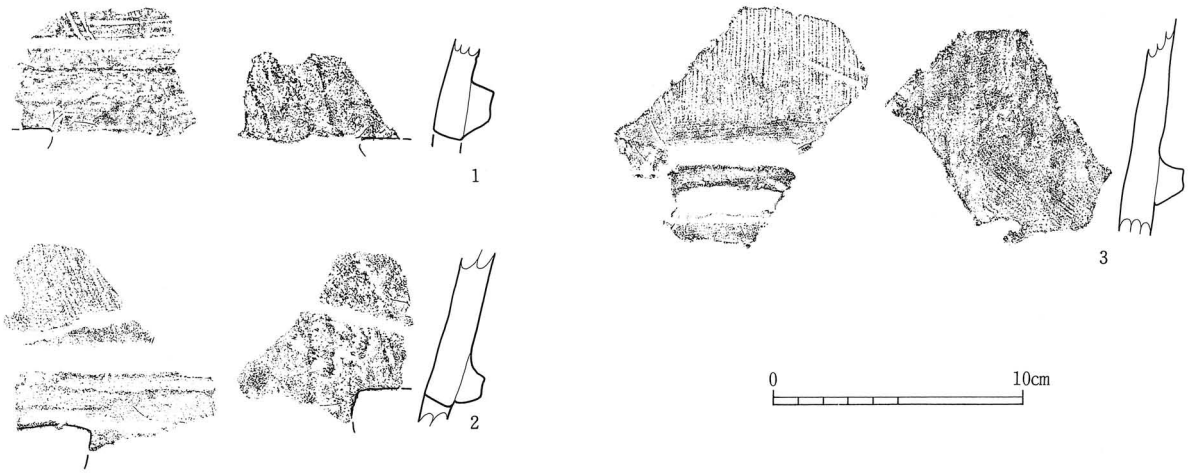
No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量 (cm) 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外面調整・備　考 内面調整・備　考
1	115 -1	5号墳 周溝c区	円筒 埴輪	3段目 1/3	(27.1)	—	3段目14.5	—	浅黄橙色 浅黄橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 弧状ヘラ描き線3本 斜め方向ハケメ　**2か3類**
2	115 -2	5号墳 周溝b区	円筒 埴輪	3段目 1/3	(23.2)	—	3段目20.5	—	橙色 橙色	良好 白針微量	軟質	タテハケ、凸帯ヨコナデ 斜め方向ナデ
3	116 -1	5号墳 周溝b区	円筒 埴輪	1段目 のみ	—	13.2	—	—	橙色 橙色	やや不良 白針微量	軟質	タテハケ、基部付近横方向ナデ 縦方向ナデ
4	116 -2	5号墳 周溝c区	円筒 埴輪	1，2段目 1/2	—	12.3	1段目13.0	円形か 半円形	橙色 橙色	やや不良 白針微量	軟質	タテハケ 縦方向ナデ
5	116 -3	5号墳 周溝b区	円筒 埴輪	1，2段目 1/4	—	(14.6)	1段目13.5	—	橙色 橙色	良好 白針微量	やや軟質	タテハケ、凸帯ヨコナデ、磨滅激しい 縦・斜め方向ナデ

第17図　5号墳出土遺物 (1)

⑷　出土遺物（第17・18図、写真115・116）

概要　周溝内から円筒埴輪片が約2240点（約34kg）、その他に縄文土器片、土師器片、剝片などが約110点出土している。埴輪の中にはその場所で潰れたように破片が集中して出土したものがいくつかあることから、埴輪の多くは墳丘から転落したものである可能性が高い。その他の遺物については大部分が混入品と推定される。図化できたのは円筒埴輪８点（第17・18図）である。

埴輪　図化できたもののうち全体形が判るものはないが、第17図１の円筒埴輪は口縁部が外反して内面に軽い段を形成している。外面の調整技法は確認できたものはすべて１次調整タテハケのみである。内面調整は縦あるいは斜め方向のナデが大部分であるが、第17図１の円筒埴輪だけが斜め方向のハケメ調整である。スカシ孔は孔の全体形が確認されたものはないが、第18図１・２は半円形と推定される。第17図４は円形かあるいは半円形の可能性もある。段の幅は第17図２だけが20cm以上あるが、その他は13～14.5cmである。凸帯の断面形は、台形のもの、側面がやや窪む台形のものがあるが、後者の中には上面が屈曲しているために上向きの印象を与えるもの（第17図５、第18図２・３）も認められる。



No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量（cm） 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外面調整・備　考 内面調整・備　考
1	116 -4	５号墳 周溝ａ区	円筒 埴輪	体部小片	－	－	－	半円形	橙色 橙色	良好 白針微量	良好	凸帯ヨコナデ、斜めヘラ描き線１本 縦方向ナデ　**３類**
2	116 -5	５号墳 周溝ｄ区	円筒 埴輪	体部小片	－	－	－	半円形	にぶい橙色 にぶい橙色	やや不良 白針微量	良好	タテハケ、凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ　**３類**
3	116 -6	５号墳 周溝ｃ区	円筒 埴輪	体部小片	－	－	－	－	橙色 橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ

第18図　５号墳出土遺物 ⑵

６．６号墳（第19図、写真33～36）

⑴　概　　要

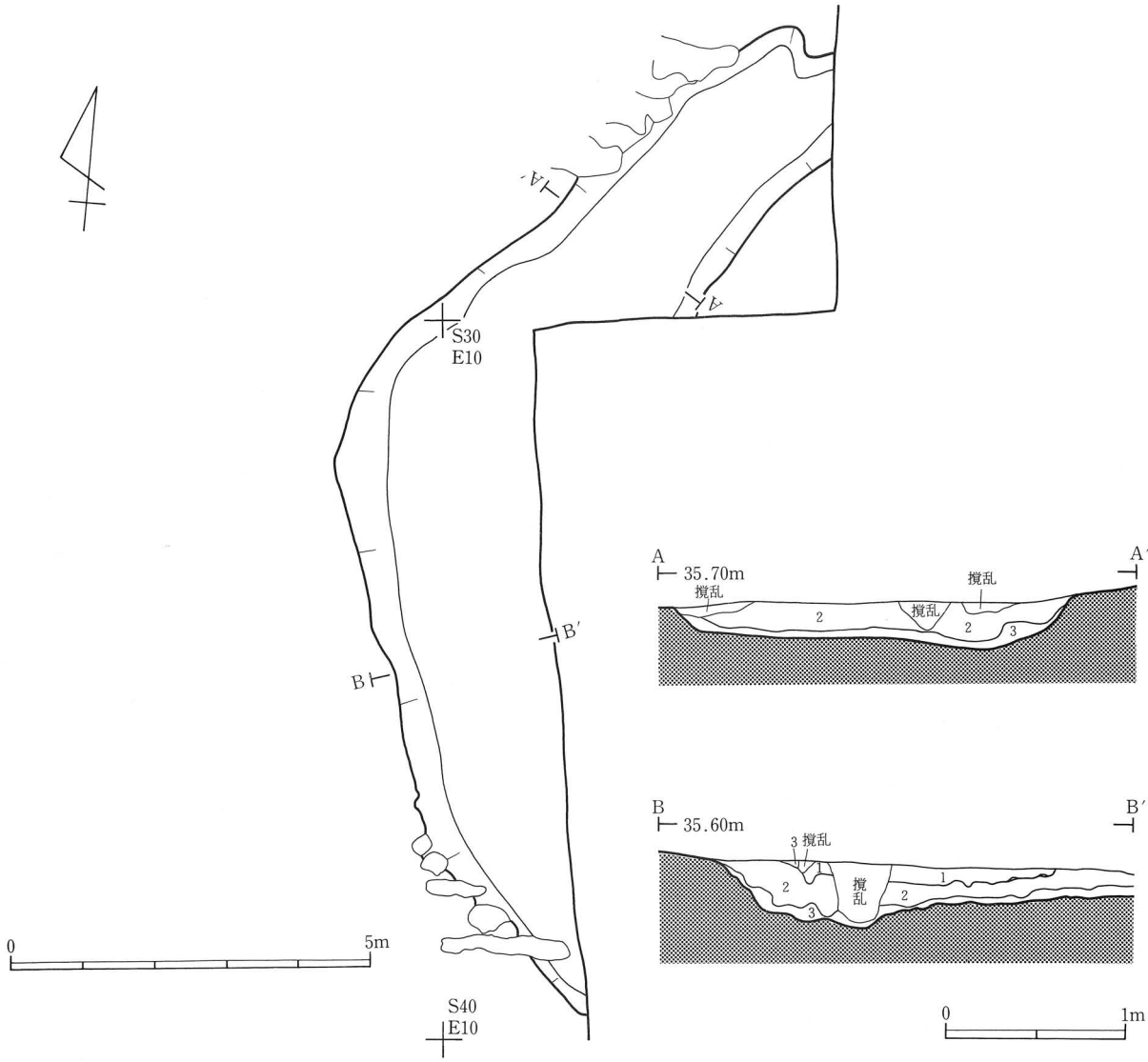
調査区の南東部で、１号墳の北東側、２号墳の南東側に隣接して位置する。墳丘はすでに失われていて周溝のみが確認されたが、大部分が調査区外のため部分的な調査に留まっている。

古墳の平面形や規模は不明であるが、周溝の２号墳に面する側（北西側）の外側のプランが直線的である。

⑵　周　　溝

周溝の幅は南西部が最も広く2.7m 以上あるが、北に向かって徐々に狭くなっている。深さも西側が30～35cmあるが、北側に向かって徐々に浅くなっている。堆積土は自然堆積で、中位には二次堆積と考えられる灰白色火山灰がブロック状に認められた。

6号墳確認作業（手前は2号墳）



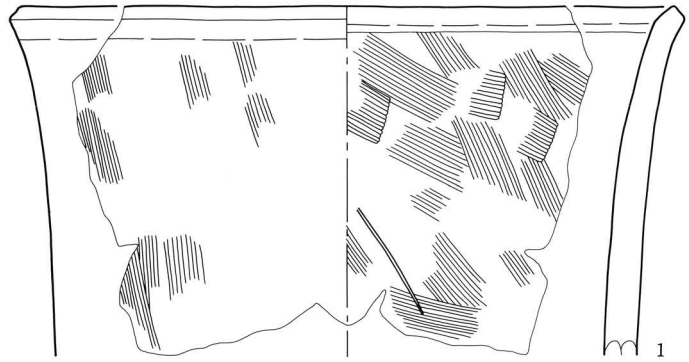
層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3/1 黒褐色	シルト	炭化物粒微量
2	10YR 4/2 灰黄褐色	シルト	炭化物粒微量 層上面に灰白色火山灰ブロック少量
3	10YR 4/2 灰黄褐色	シルト	褐色粘土ブロック少量

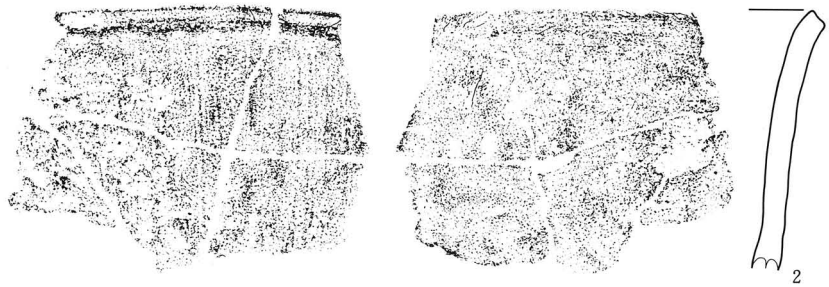
第19図　6号墳平面・断面図

⑶　出土遺物（第20・21図、写真117）

概要　周溝堆積土から埴輪片が約1870点(約32kg)、剝片４点が出土している。部分的な調査にもかかわらず、遺物量は比較的多い。図化できたのは円筒埴輪８点（第20・21図）であるが、このうち朝顔形埴輪の可能性のあるものが１点（第21図６）ある。埴輪のうち遺構に伴うものを厳密に確定することはできないが、他の古墳と同様に大部分は墳丘から転落したものと考えられる。ただし図化したうちの１点（第21図２）のみは周溝を切るⅠ層の天地返しの溝から出土したものであるので、他の古墳からの混入品の可能性もある。

埴輪　全体形が判るものはないが、円筒埴輪のうち２点は口縁部がごくわずかに外反するタイプで、そのうち１点(第20図１)は内面に軽い段を形成している。外面の調整技法はすべて１次調整タテハケのみである。内面の調整技法は大部分が縦方向のナデであるが、１点（第20図１）のみが斜め方向のハケメ調整である。スカシ孔は円形のものが２点あり（第21図５・６)、その他に前述したように混入品の可能性があるものの半円形と考えられる破片も１点（第21図２）認められる。段の幅は確認できた２点については13cm前後である。凸帯の断面形は、台形のもの、側面がやや窪む台形のものの他に、下面が屈曲しているために下向きに垂れ下がって見えるものが２点(第21図２・４）ある。

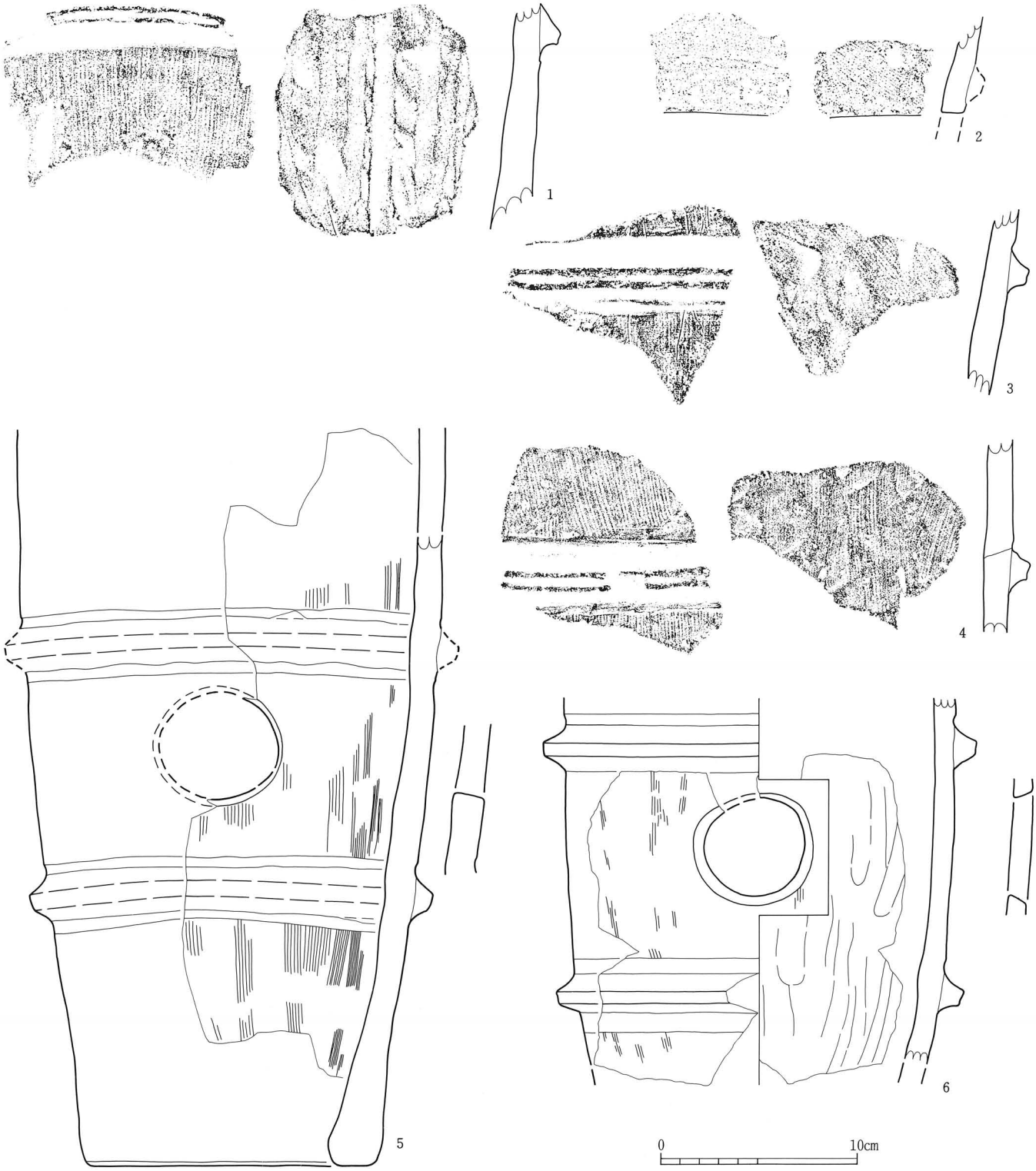




0　1m

No.	写真図版	遺構	種別	遺存度	法量 (cm) 口径	底径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎土	焼成	外面調整・備考 内面調整・備考
1	117 -2	６号墳 周溝	円筒 埴輪	３段目 1/4	(25.6)	－	－	－	橙色 橙色	やや不良 白針微量	軟質	タテハケ、口縁部ヨコナデ 斜め方向ハケメ　**２か３類**
2	117 -1	６号墳 周溝	円筒 埴輪	口縁部 小片	－	－	－	－	淡橙色 淡橙色	良好 白針微量	やや軟質	タテハケ、口縁部ヨコナデ ナデ、口縁部ヨコナデ

第20図　６号墳出土遺物 (1)



No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm) 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外面調整・備　考 内面調整・備　考
1	117 -5	6号墳 周溝	円筒 埴輪	体部片	—	—	—	—	橙色 橙色	やや不良 白針微量	やや軟質	タテハケ、凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ
2	—	6号墳 周溝・I層	円筒 埴輪	体部小片	—	—	—	半円？	黄橙色 黄橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ ナデ　**3類**
3	117 -6	6号墳 周溝	円筒 埴輪	体部片	—	—	—	—	橙色 橙色	やや不良 白針微量	軟質良好	タテハケ、凸帯ヨコナデ ナデ
4	117 -3	6号墳 周溝	円筒 埴輪	体部片	—	—	—	—	橙色 橙色	良好 白針微量	やや軟質	タテハケ、凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ
5	117 -4	6号墳 周溝	円筒 埴輪	1/3	—	(14.5)	2段目13.0 1段目13.5	円形	橙色 橙色	良好 白針微量	軟質	タテハケ、凸帯ヨコナデ　**5か6類** 縦方向ナデ（磨滅が激しく不明瞭）
6	117 -7	6号墳 周溝	朝顔形 埴輪？	2段目 付近1/4	—	—	2段目12.5	円形	橙色 にぶい橙色	やや不良 白針微量	軟質	タテハケ、磨滅が激しい 縦方向ナデ

第21図　6号墳出土遺物 (2)

７．７号墳（第22図、写真37～39）

⑴　概　　要

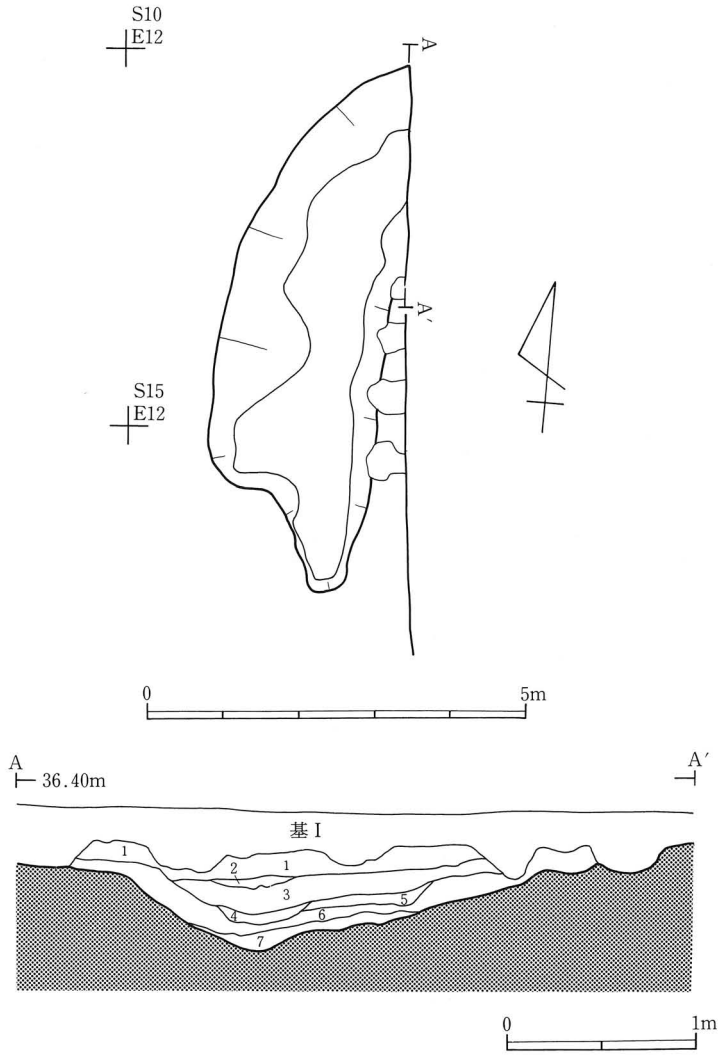
調査区の南東部で、２号墳の北東側に隣接して位置する。墳丘はすでに失われていて周溝のみが確認されたが、大部分が調査区外のため部分的な調査に留まっており、このため古墳の平面形や規模は不明である。

⑵　周　　溝

周溝の幅は約2.2m、深さは50cmあるが、南に向かって徐々に狭く・浅くなって途切れている。堆積土は自然堆積で、上層には二次堆積と考えられる灰白色火山灰がブロック状に認められた。

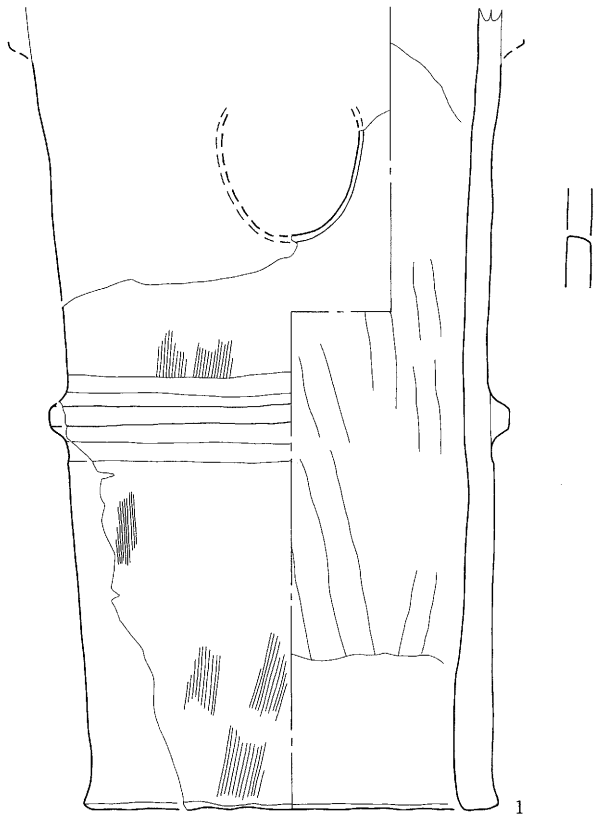
⑶　出土遺物（第23図、写真118）

概要　周溝内から円筒埴輪片が約200点（約４kg）の他、鉄釘と考えられる破片が１点出土している。埴輪は大部分



層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 2/2 黒褐色	シルト質粘土	
2	10YR 3/4 暗褐色	粘土	灰白色火山灰ブロック少量
3	10YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト	
4	10YR 3/2 黒褐色	シルト質粘土	
5	10YR 3/4 暗褐色	シルト	
6	10YR 3/3 暗褐色	粘土	部分的に黄褐色シルトブロック多量
7	10YR 3/4 暗褐色	粘土質シルト	

第22図　７号墳平面・断面図



が破片となって堆積土中に散在していて確実に遺構に伴うものを確定することはできないが、他の古墳と同様に大部分は墳丘から転落したものと考えられる。図化できたのはわずかに円筒埴輪１点（第23図１）のみである。

埴輪　１～２段目しか遺存していないため全体形は不明であるが、外面の調整技法は１次調整タテハケ、内面の調整技法は縦方向のナデが施されている。底部からほぼ直線的に立ち上がる器形で、２段目の上寄りに円形と考えられるスカシ孔がある。段の幅は１段目が15.5cm、凸帯の断面形は台形である。

No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm) 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外面調整・備　考 内面調整・備　考
1	118	７号墳 周溝	円筒 埴輪	1，2段目 1/4	－	(16.6)	１段目15.5	円形？	橙色 浅黄橙色	やや不良 白針微量	軟質	タテハケ、凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ　**５類**

第23図　７号墳出土遺物

８．９号墳（第24図、写真40～43）

(1) 概　　要

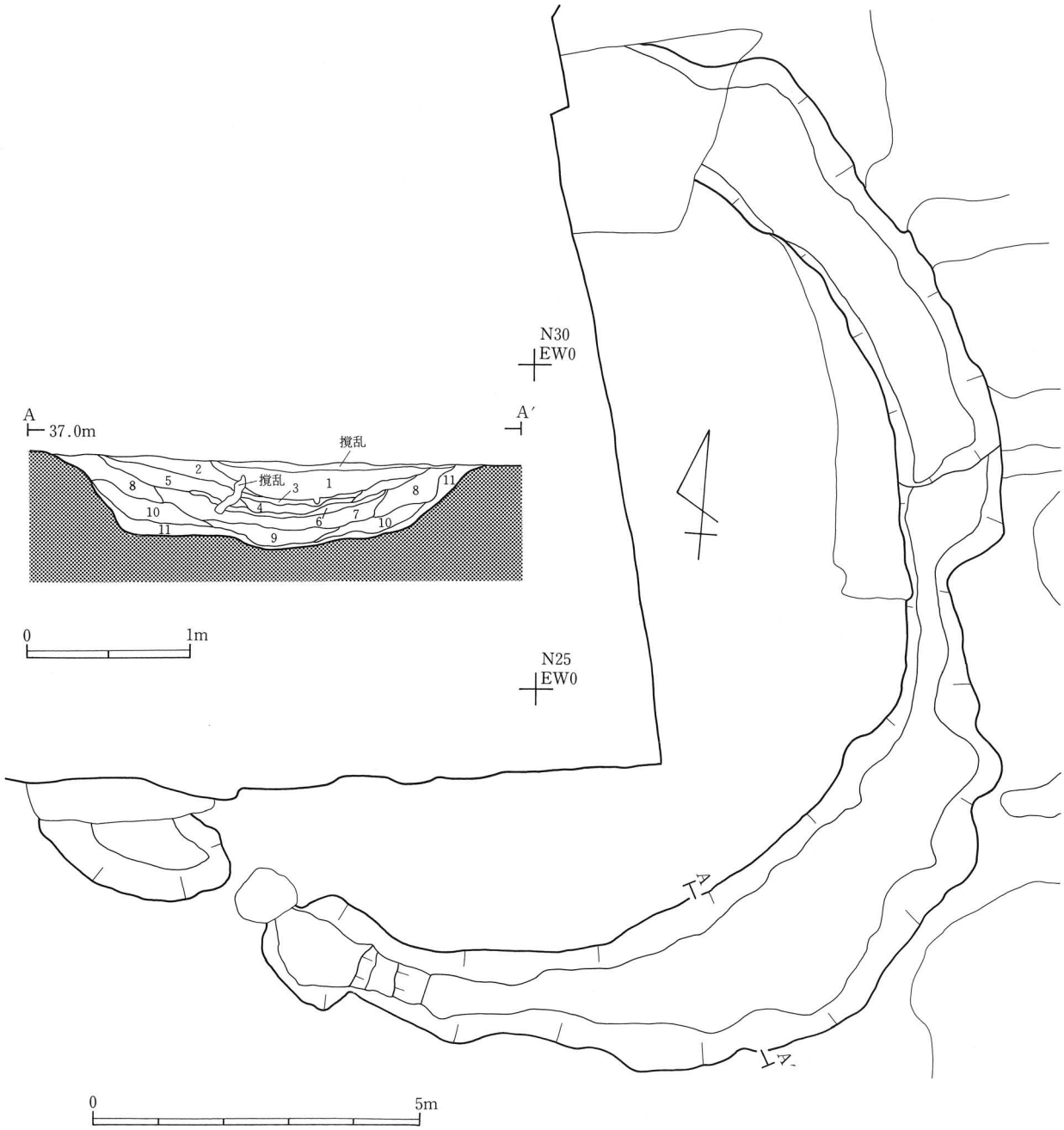
調査区北部、４号墳の北側に約13m離れ、10号墳の西側に隣接して位置する。古墳の北西部約1/3が調査区外のため未調査となっている他、北部も攪乱のために失われている。確認面であるⅢ層上面の傾斜はこの付近ではごく緩やかで、古墳の北側と南側の比高差は約0.3mである。墳丘はすでに失われており、周溝のみが確認された。

古墳の平面形は、墳丘部はほぼ円形と推定され、周溝は南東側がやや外側に張り出した形となっているが、Ⅰ層の耕作に伴う攪乱が著しく判然としない。

規模は墳丘部で径12.5m、周溝を含む規模は16.0mである。

(2) 周　　溝

周溝は幅0.7～2.8m、平均幅は1.5m程度である。南東部が長さ約１mにわたって途切れている他、東側の一部の幅が0.7mと極端に狭くなっている。底面には起伏があるため深さは６～50cmと一定せず、南東側が最も深くなっている。なお、南西側と東側には段差が認められる。堆積土は自然堆積で、中位には二次堆積と考えられる灰白色火山灰が層状に認められた。



層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 1.7/1 黒色	粘土	炭化物粒少量、部分的に黒褐色シルトと互層
2	7.5YR 2/1 黒色	シルト質粘土	黄褐色シルト粒少量
3	10YR 3/2 黒褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒少量
4	7.5YR 3/1 黒褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒少量、部分的に黒色シルトと互層
5	7.5YR 3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒、灰白色火山灰粒少量
6	10YR 6/6 明黄褐色	シルト	灰白色火山灰層
7	10YR 2/1 黒	シルト	炭化物粒・凝灰岩粒少量、部分的に暗褐色シルトと互層
8	10YR 3/3 暗褐色	粘土質シルト	黄褐色シルト粒少量
9	10YR 3/1 黒褐色	シルト質粘土	炭化物粒・黄褐色シルト粒少量
10	10YR 3/4 暗褐色	砂質シルト	炭化物粒・黄褐色シルト粒少量
11	10YR 5/6 黄褐色 10YR 4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト 砂質シルト	混合

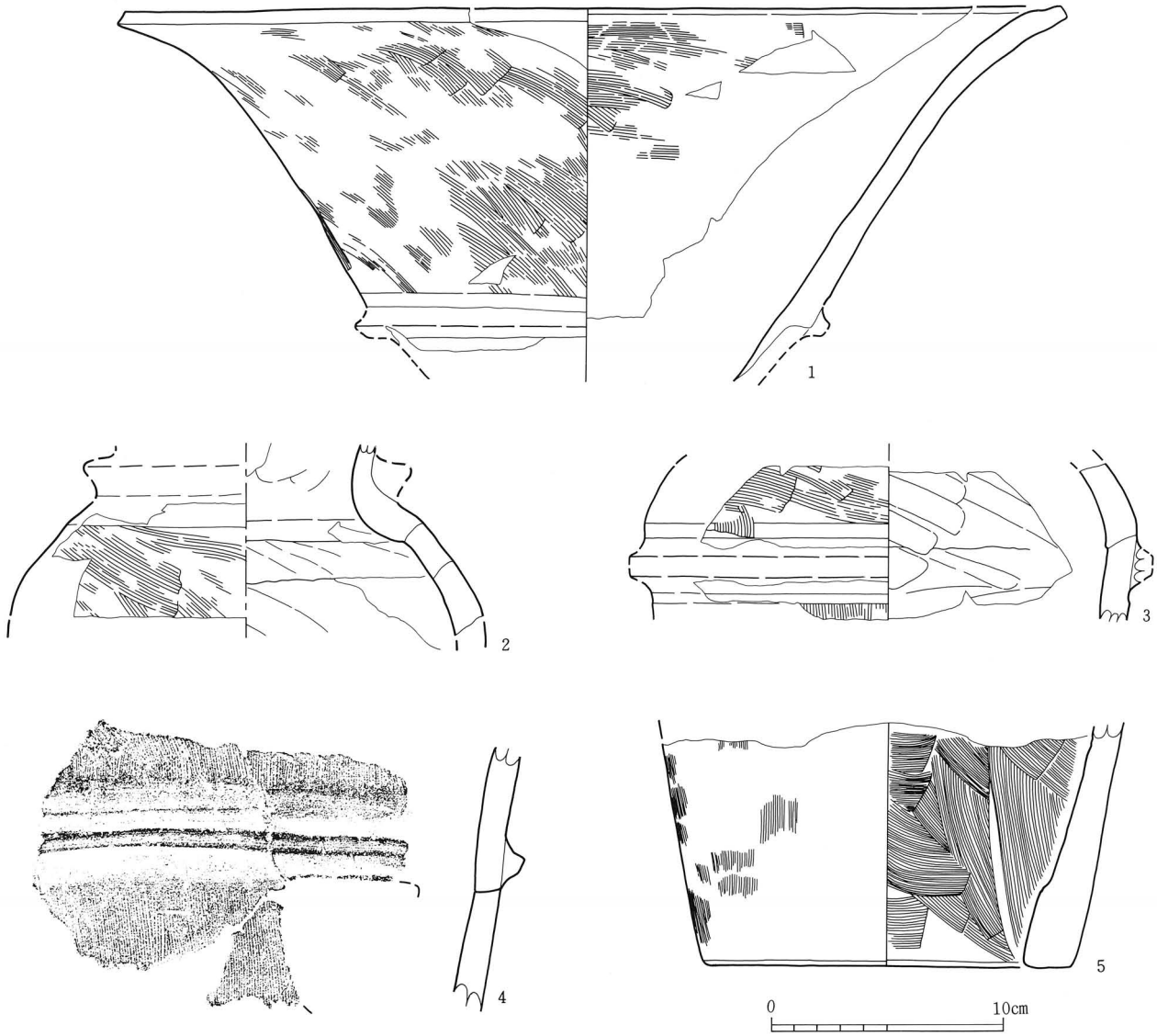
第24図　９号墳平面・断面図

⑶　出土遺物（第25図、写真119）

概要　周溝内から埴輪片が約600点（約13kg）出土している。埴輪は大部分が小破片となって散在していたが、集中して認められる傾向が数カ所あり、墳丘から転落した状況が窺えるものもある。図化できたのは５点で、このうち朝顔形埴輪が３点（１～３）、円筒埴輪が２点（４・５）である。

埴輪　朝顔形埴輪のうち１は口縁部から屈曲部にかけて全周して復元できたもので、口縁部内面に軽い段が認められる。２と３は肩～頸部の破片である。外面調整は１・２が横や斜め方向のハケメが認められ、３が１次調整タテハケの後２次調整ヨコハケを行っている。内面調整は１が横や斜め方向のハケメ、２・３がナデである。凸帯は３点共に剝落していて不明である。

円筒埴輪は、外面調整が１次調整タテハケのみで、内面調整は斜方向のハケメである。なお、４は凸帯部分の内面がナデ調整されている。凸帯の断面形は台形をしており、凸帯下には半円形と推定されるスカシ孔が認められる。



No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量（cm） 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外面調整・備　考 内面調整・備　考
1	119 -1	９号墳 周溝	朝顔形 埴輪	口縁部 のみ	40.4	－	－	－	橙色 橙色	良好 白針微量	やや軟質	斜め方向ハケメ、口縁部ヨコナデ 横・斜め方向ハケメ、口縁部ヨコナデ
2	119 -2	９号墳 周溝	朝顔形 埴輪	頸部～ 肩部1/3	－	－	－	－	橙色 橙色	やや不良 白針微量	やや軟質	肩部　横・斜め方向ハケメ ナデ
3	119 -3	９号墳 周溝	朝顔形 埴輪	肩部1/4	－	－	－	－	橙色 橙色	良好 白針微量	良好	肩部タテハケ→ヨコハケ、体部タテハケ ナデ
4	119 -4	９号墳 周溝	円筒 埴輪	体部小片	－	－	－	半円形	橙色 にぶい黄橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、凸帯ヨコナデ　**３類** 斜め方向ハケメ→凸帯部分は横方向ナデ
5	119 -5	９号墳 周溝	円筒 埴輪	１段目 1/4	－	15.6	－	－	にぶい橙色 にぶい橙色	やや不良 白針微量	やや軟質	タテハケ ナデ→斜め方向ハケメ　**２か３類**

第25図　９号墳出土遺物

９．10号墳（第26図、写真44～46）

(1) 概　　要

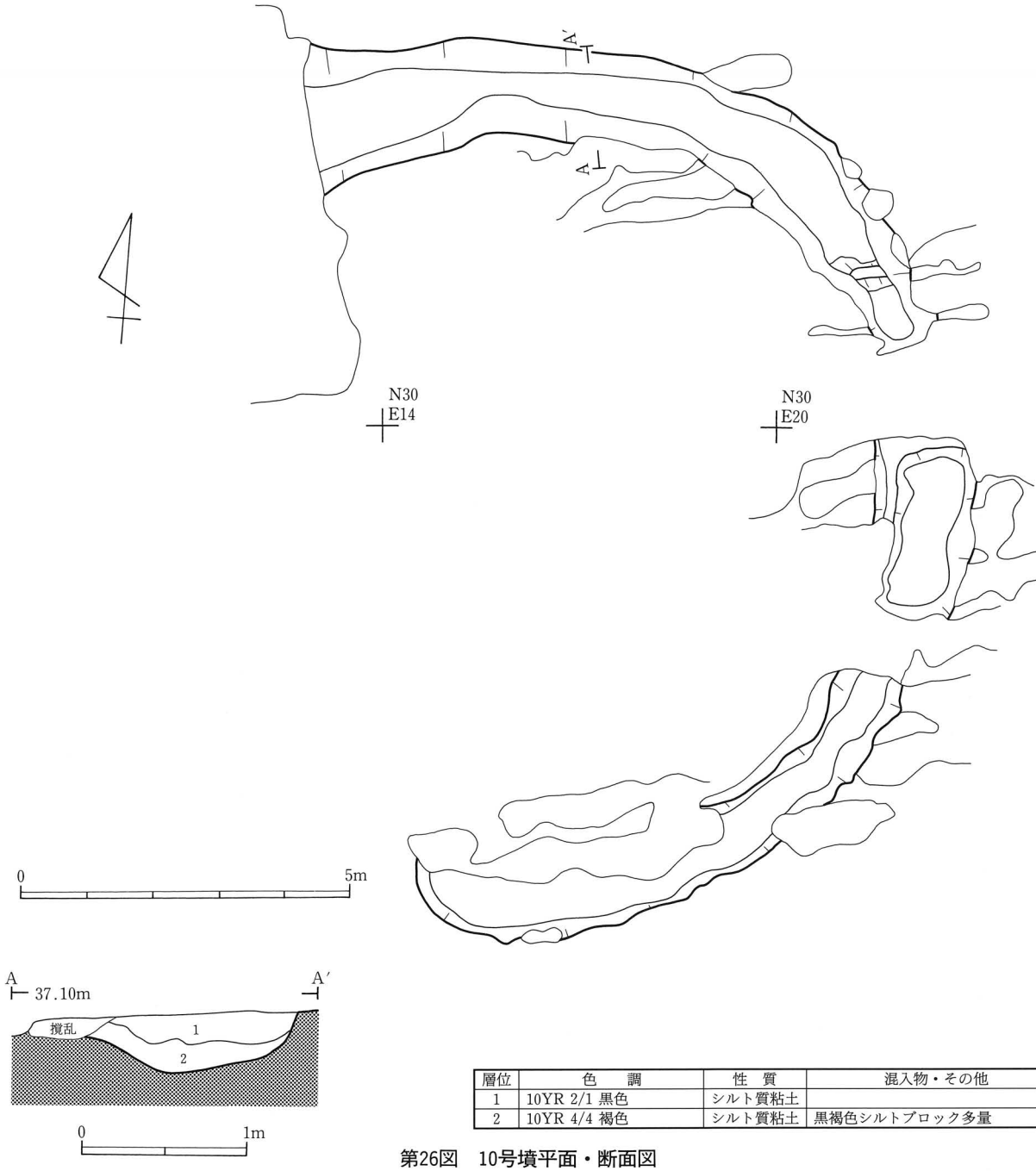
調査区の北部、９号墳の東側に隣接して位置する。北西部が攪乱のために破壊されている他、この周辺はＩ層の耕作に伴う攪乱が著しいために遺存状況は極めて悪い。確認面であるⅢ層上面は緩やかに南東に傾斜しており、古墳の北西側と南東側の比高差は約0.6m である。墳丘はすでに失われており、周溝のみが確認された。

古墳の平面形は、墳丘・周溝ともに西側が不明であるがほぼ円形に復元できる。

規模は墳丘部で径10.9m、周溝を含む規模は14.0m である。

(2) 周　　溝

周溝は幅0.8～1.7m、平均幅は1.2m程度である。西側は検出できなかった。底面には起伏があるため深さは９



層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 2/1 黒色	シルト質粘土	
2	10YR 4/4 褐色	シルト質粘土	黒褐色シルトブロック多量

第26図　10号墳平面・断面図

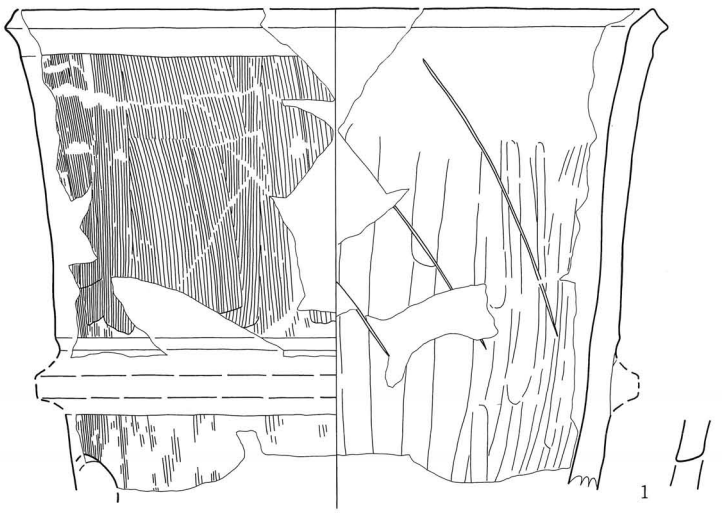
～41cmと一定せず、北側が最も深い。なお東側には段差が認められる。堆積土は自然堆積である。

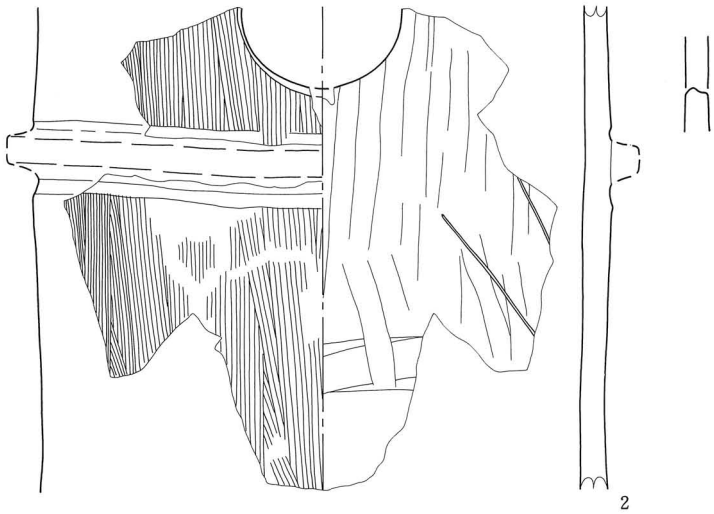
(3)　出土遺物（第27～29図、写真120）

概要　周溝内から埴輪片が約1130点（約20kg）の他、縄文土器片・陶器片・鉄製品などが数点出土している。埴輪は大部分が小破片となって散在していたが、その場で潰れたように破片が集中して認められるものもあることから、埴輪の多くは墳丘から転落したものである可能性が高い。その他の遺物については混入品と推定される。図化できたのは円筒埴輪12点である（第27～29図）。

埴輪　円筒埴輪の外面調整は１次調整タテハケのみである。内面調整は縦方向のナデが主体となっているが、凸帯部分の内側に横方向のナデが施されるもの（第28図５）やハケメ調整のもの（第28図４）もある。なお、内面調整後に斜め方向のヘラ描き線が施されたものも２点ある(第27図１・２)。なお、器形が明確なものはほとんどないが、大部分は底部からほぼ直線的に開くものと考えられる。口縁部はわずかに外反して端部はやや窪むものが多いが、１点だけ強く外反して端部が丸くおさめられるものがある(第28図４)。スカシ孔が認められたものは２点あり、いずれも円形である。凸帯の断面形が確認できたものは少ないが、台形あるいは端部がやや窪む台形をしている。段の幅は上に行くほど広くなるようである。

なお、第27図２は円筒部がほとんど開かない器形であることから朝顔形埴輪である可能性がある。

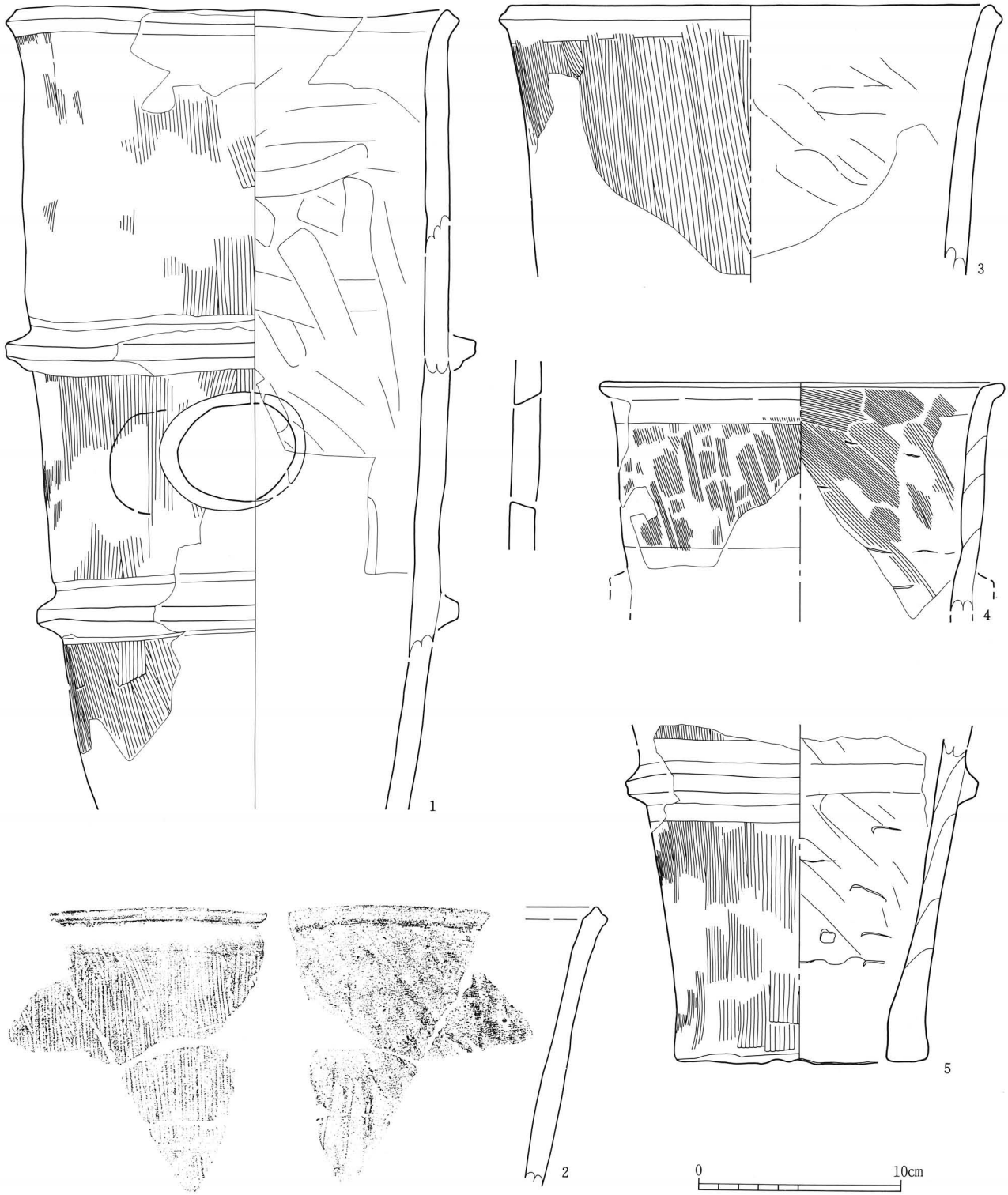




0　10cm

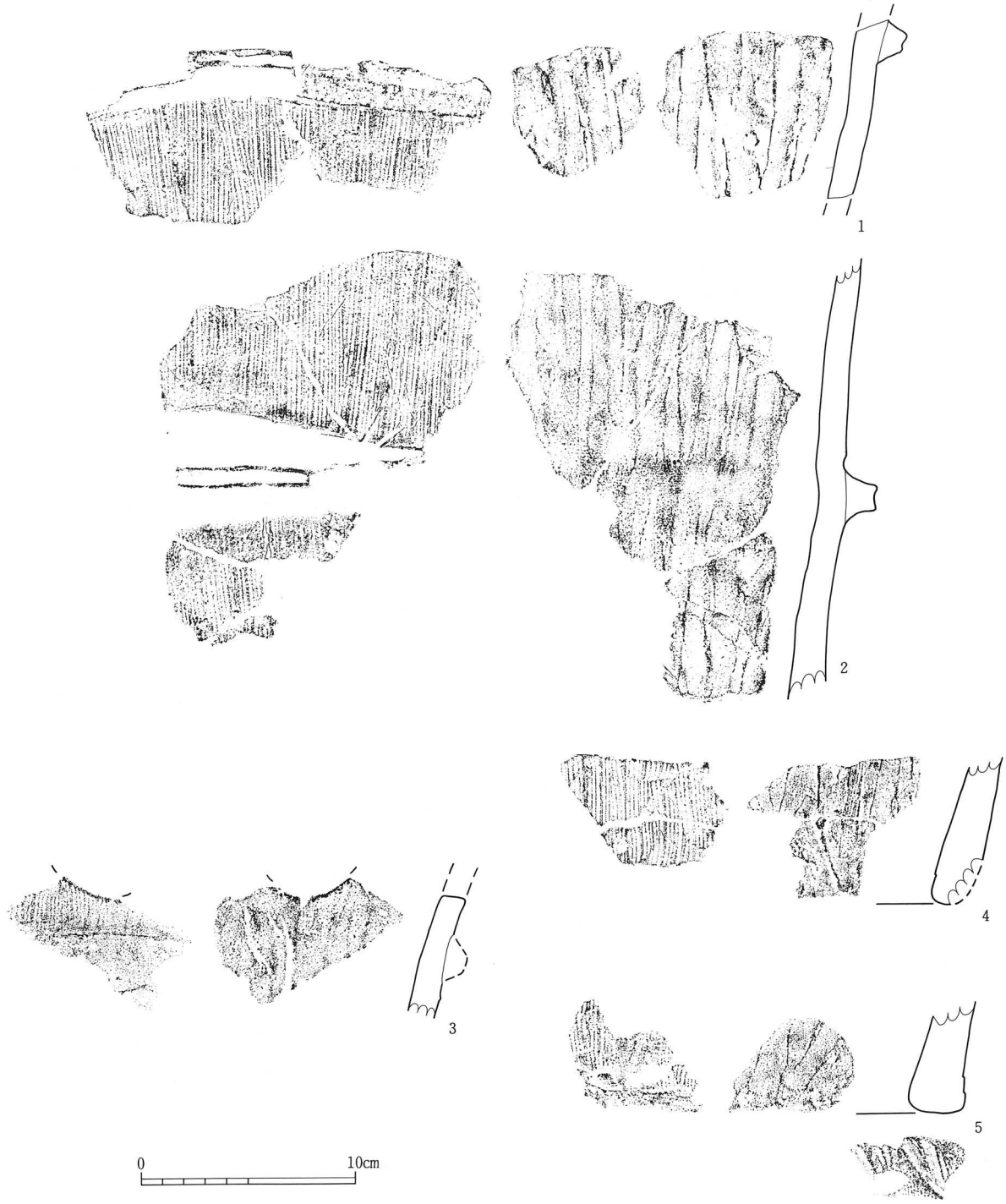
No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm) 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外面調整・備　考 内面調整・備　考
1	120 -1	10号墳 周溝ｂ区	円筒 埴輪	３段目 1/6	(26.1)	－	３段目15.0	円形	橙色 にぶい橙色	やや不良 白針微量	良好	タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ、上部は不定方向ナデ 斜めヘラ描き線３本　**５か６類**
2	120 -2	10号墳 周溝ｂ区	朝顔形 埴輪	1，2段目 1/5	－	－	－	円形	橙色 橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、凸帯剝離 縦方向ナデ、斜めヘラ描き線２本

第27図　10号墳出土遺物（1）



No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm) 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外面調整・備　考 内面調整・備　考
1	120 -3	10号墳 周溝ａ区	円筒 埴輪	2/3	22.4	－	３段目17.5 ２段目13.5	円形	橙色 橙色	良好 白針微量	やや軟質	タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ　**６類** 縦方向ナデ、３段目は横→縦方向ナデ
2	120 -4	10号墳 周溝ａ区	円筒 埴輪	口縁部片	－	－	－	－	橙色 橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、口縁部ヨコナデ 縦方向ナデ、口縁部ヨコナデ
3	120 -5	10号墳 周溝ｂ区	円筒 埴輪	３段目 1/4	(23.6)	－	－	－	橙色 橙色	良好 白針微量	軟質	タテハケ、口縁部ヨコナデ ナデ、口縁部ヨコナデ
4	120 -6	10号墳 周溝ｂ区	円筒 埴輪	３段目 1/4	(20.0)	－	－	－	浅黄橙色 浅黄橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、口縁部ヨコナデ　**２か３類** 斜め方向ハケメ、口縁部ヨコナデ
5	120 -7	10号墳 周溝ｂ区	円筒 埴輪	１段目 1/2	－	12.4	１段目14.0	－	橙色 橙色	良好 白針微量	やや軟質	タテハケ、凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ、凸帯部分横方向ナデ

第28図　10号墳出土遺物 (2)



No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm) 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外面調整・備　考 内面調整・備　考
1	120 -8	10号墳 周溝a区	円筒 埴輪	体部片	—	—	—	—	橙色 橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ
2	120 -12	10号墳 周溝b区	円筒 埴輪	体部片	—	—	—	—	にぶい赤褐色 明赤褐色	良好 白針微量	良好	タテハケ、凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ
3	120 -9	10号墳 周溝d区	円筒 埴輪	体部小片	—	—	—	円形か 半円形	黄橙色 黄橙色	良好 白針微量	やや軟質	タテハケ、凸帯剝離 ナデ
4	120 -10	10号墳 周溝a区	円筒 埴輪	基部小片	—	—	—	—	橙色 橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ 縦方向ナデ
5	120 -11	10号墳 周溝b区	円筒 埴輪	基部小片	—	—	—	—	褐灰色 明赤褐色	良好 白針微量	良好	タテハケ 縦方向ナデ

第29図　10号墳出土遺物 (3)

10．11号墳（第30～32図、写真47～71）

(1) 概　　要

東側に離れた調査区に位置し、10号墳からは約25m 離れている。当遺跡中の古墳群の中では最も規模が大きく、なおかつ墳丘盛土の一部が削平されずに遺存していた唯一の古墳であるが、墳丘中央部に盗掘孔と推定される大きな攪乱孔があり埋葬施設は遺存していない。また、北～北東側にかけては攪乱と調査区外のために未調査となっている。

墳丘部の表土の直下で、基本層のIII層と考えられる黄褐色シルト・砂質シルトと黒褐色粘土がブロック状に混じる層を確認したが、後に精査の結果、この層は盗掘の際に攪乱された層であることが判明した。これらを除去したところ、周溝に近い部分はIII層が露出するが、墳丘の中心部近くは墳丘積土および旧表土の一部がわずかに遺存していた。

なお、周溝は表土除去後のIII層上面で確認しているが、この付近におけるIII層は北西から南東に向かって下るごく緩やかな尾根状の地形となっており、III層上面における古墳の北西側と南東側の比高差は約0.8m である。

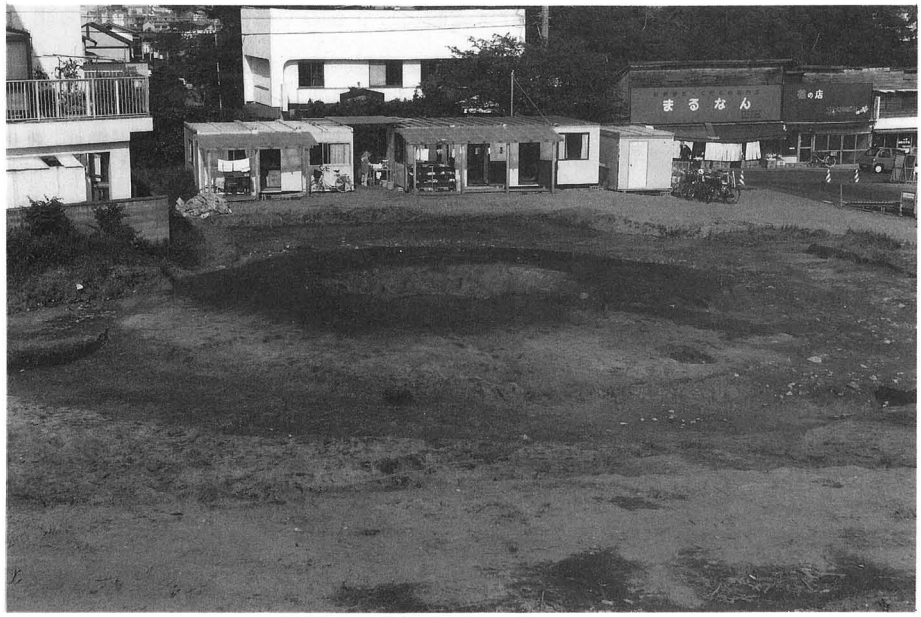
古墳の平面形は、墳丘部はほぼ円形であるが南東部が約１ m 張り出している。周溝も円形であるが南東部の外側のプランが検出できなかった。

規模は墳丘部で径17.7～18.2m、周溝を含む規模は25.5～26.5m である。

(2) 墳　　丘

墳丘は径17.7～18.2m で、積土の大部分が攪乱されていたため本来の高さは不明であるが、検出した周溝の内側の上端から墳丘中心の現表土上面までの比高差は0.65～１ m である。墳丘の積土は、黒褐色シルトが墳丘中心部の径約13m の範囲に薄く（最も厚い箇所で約20㎝）認められたが、墳丘の中央部には径５～６ m、深さ約１ m の攪乱孔が掘られているため、実際はドーナツ状に遺存している。なお、北西部の段は崩落あるいは攪乱のためと推定される。

なお、墳丘積土を残した状態での写真撮影と作図終了後、積土および旧表土と考えられる黒褐色シルト（第31図21層）を除去する際、III層上面で円形周溝状のプランを確認した。断面観察の結果、この溝は旧表土上面から掘り込まれていることが判明したが、溝の堆積土は最上層が薄い炭化物層、下層は黒褐色の粘土質シルトで、これらの色調が旧表土と類似するため旧表土面ではプラン確認ができず、結果的にIII層上面での確認となっている。プラン



11号墳墳丘積土の遺存状況

墳丘積土と旧表土除去後の状況（1）

墳丘積土と旧表土除去後の状況（2）

は北～南東部にかけて部分的に検出できない箇所があったが、平面形はドーナツ状でその外形はほぼ円形である。外周は径9.6～11.2m、円の中心は古墳の中心よりも0.5m程北東にずれる程度で、ほぼ一致する。溝の幅は0.8～1.2m、III層上面からの深さは5～10cm程度しかないが、本来の掘りこみ面からは約20cmある。性格は断定できないが、墳丘構築以前に行われた何らかの祭祀に関係する可能性も考えられる。

(3) 周　溝

周溝は幅3.0～4.7mで、底面には緩やかな起伏がある。深さは北西側が最も深くて約40cmあるが南西側に向かって徐々に浅くなっており、前述したように南東部に至ってプランが不明確になって途切れる。なお、西側には深さ約40cmの土坑状の窪みが認められる。堆積土は自然堆積で、層中位には二次堆積と考えられる灰白色火山灰が薄い層状に認められた。

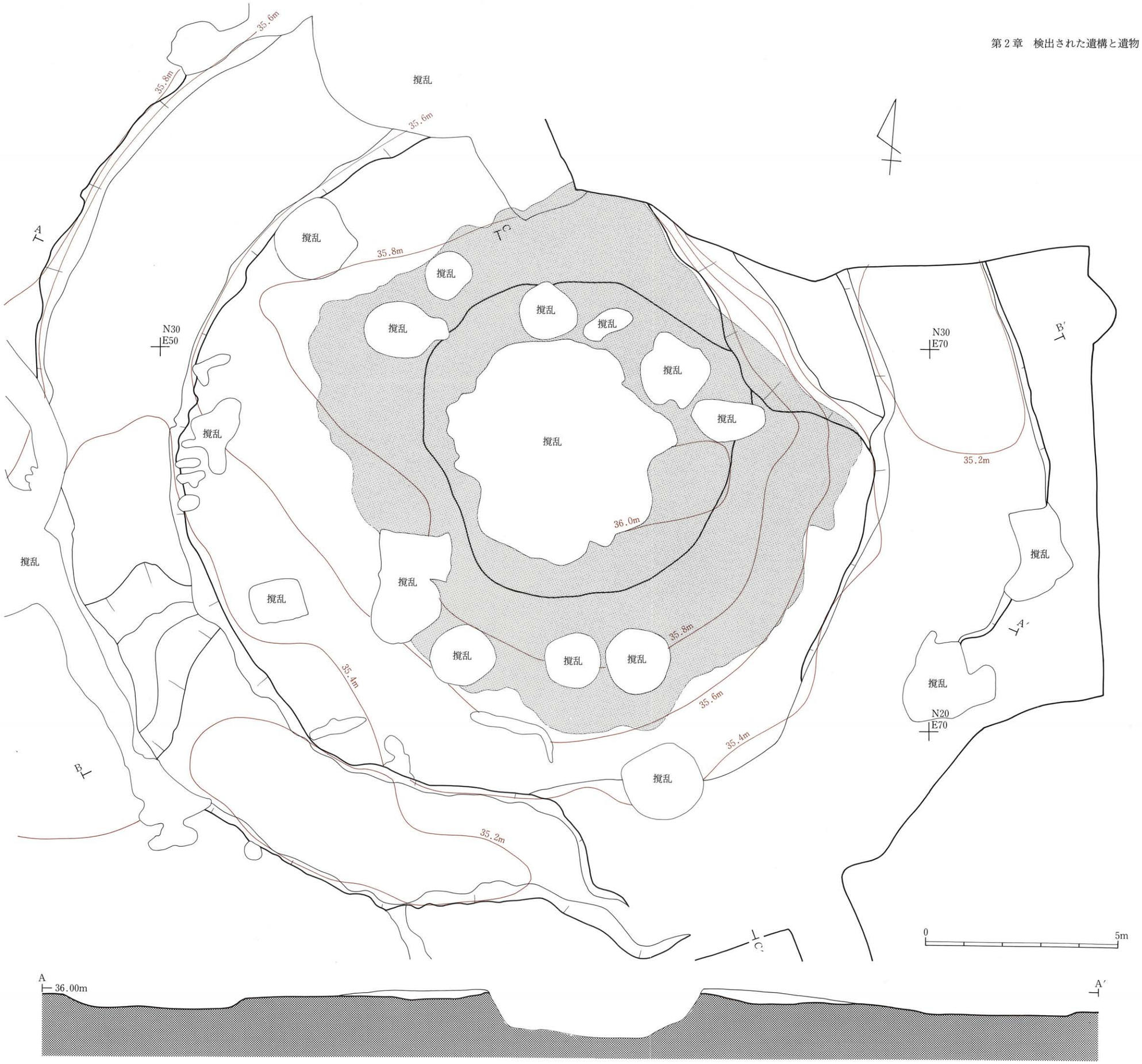
(4) 出土遺物（第33～45図、写真121～127）

概要　周溝内から埴輪片が約13,000点（154.2kg）出土した。これらの埴輪は大部分が小破片となって散在していたが、その場で潰れたように破片が集中して認められるものもあることから、多くは墳丘から転落したものである可能性が高い。また埴輪の他、周溝、墳丘積土・墳丘上の表土などから土師器片・須恵器片・陶器片・鉄製品・石製品などが数点出土している(第45図)。これらの大部分は遺構に伴うものではないが、周溝から出土した須恵器については当古墳に関連する遺物である可能性が考えられる（第3章II、3を参照)。

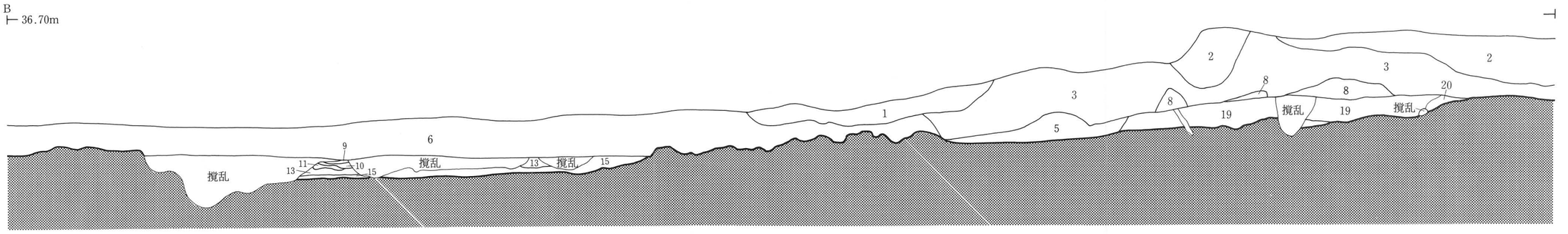
埴輪　図化できた埴輪は50点あるが、このうち朝顔形埴輪が7点（第33図)、円筒埴輪が43点（第34～44図）である。

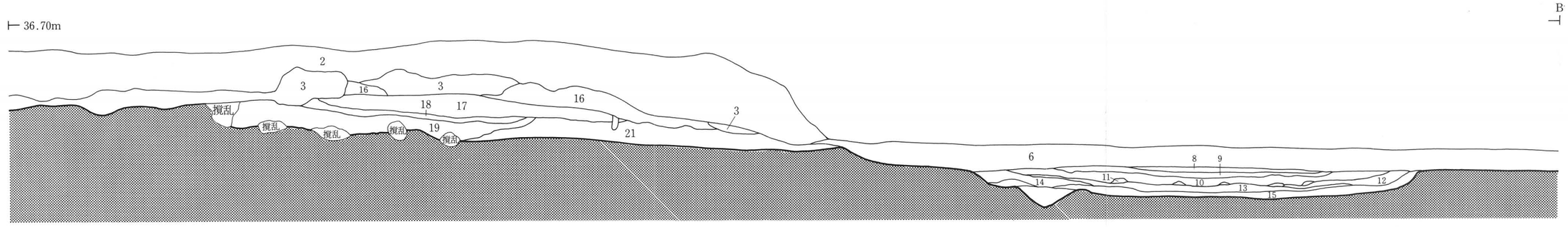
朝顔形埴輪と確定できたものは口縁部や肩部の破片で(第33図)、すべて小片のために全体形が分かるものはない。なお、この他に底形が大きくて上方があまり開かないタイプの円筒部（第42図3、第43図3など）も朝顔形埴輪の可能性がある。外面調整は磨滅しているために不明なものが多いが、口縁部は1次調整タテハケのみ、肩部は斜め方向のハケメ調整である。なお、肩部に3本の斜め方向のヘラ描き線が施されたものが1点ある(7)。内面調整は口縁部が横や斜め方向のハケメ、肩部がナデである。スカシ孔が認められたものは1点あり(4)、円形と推定される。凸帯の断面形が確認できたものは少ないが、頸部凸帯が三角形、円筒部の凸帯は台形あるいは端部がやや窪む台形をしている。段の幅は不明である。

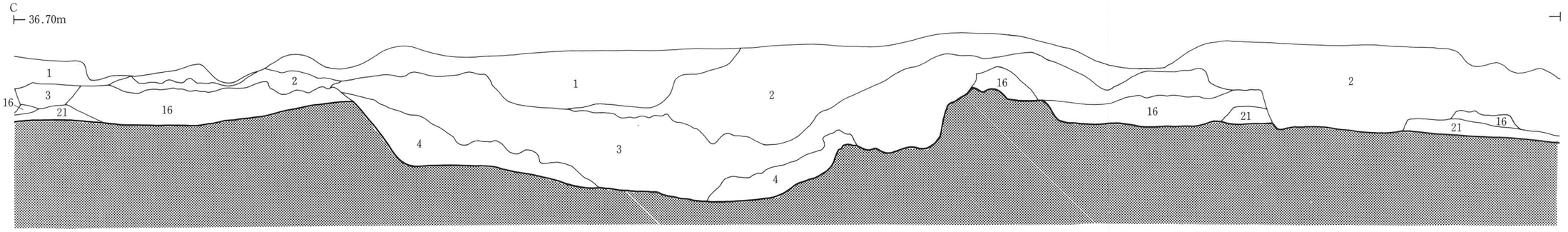
円筒埴輪43点（第34～44図）は、器形・調整技法・スカシ孔・凸帯の形態などに多様性が認められる。ここでは、a．調整技法、b．スカシ孔の形態、c．器形および口縁部の形態、d．その他の順に分類して述べる。

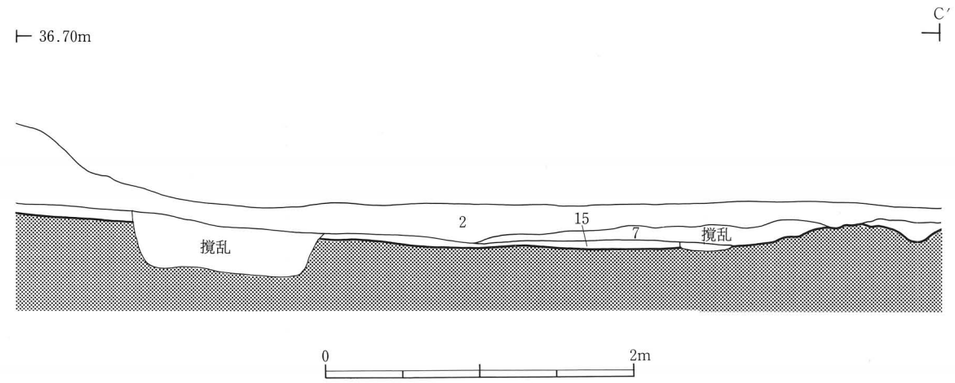


第30図　11号墳平面・断面図







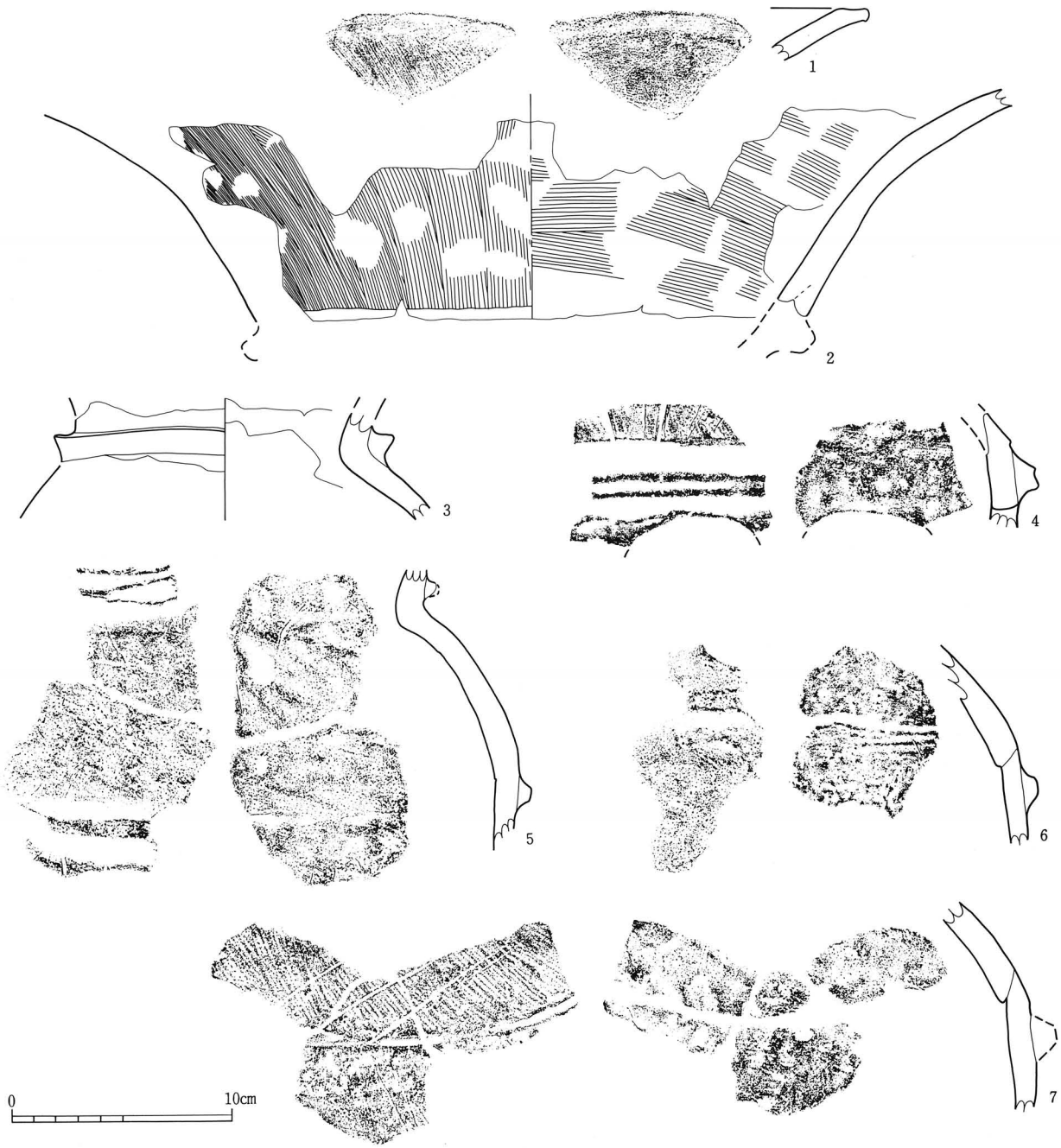


層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR4/4　褐色	シルト	にぶい黄橙色砂質シルトブロック微量(現表土)
2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	にぶい黄橙色砂質シルトブロック少量（撹乱）
3	10YR3/3　暗褐色	シルト	明黄褐色砂質シルトブロック多量、層下部に黒褐色粘土ブロック少量（撹乱）
4	10YR4/4　褐色	砂質シルト	黒褐色粘土ブロック多量（撹乱）
5	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	褐色粘土ブロック少量（撹乱）
6	10YR3/3　暗褐色	シルト	にぶい黄褐色砂質シルトブロック少量、炭化物粒微量
7	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	
8	7.5YR3/1　黒褐色	シルト	酸化鉄粒少量
9	2.5Y2/1　黒	粘土質シルト	酸化鉄粒少量
10	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	灰白色火山灰粒・マンガン粒微量

層位	色　調	性　質	混入物・その他
11	10YR6/4　にぶい黄橙色	シルト	灰白色火山灰層
12	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	マンガン粒多量
13	7.5YR3/1　黒褐色	シルト質粘土	炭化物粒・礫・明黄褐色砂質シルト粒少量
14	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	凝灰岩粒・酸化鉄粒少量気
15	10YR4/6　褐色	細砂	小礫・酸化粒少量
16	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	酸化粒微量（墳丘積土）
17	10YR3/2　黒褐色	シルト	炭化物粒微量、酸化酸化鉄粒多量（墳丘積土）
18	10YR2/2　黒褐色	シルト	炭化物粒少量（部分的に厚さ１～２㎜の層状） 酸化鉄粒多量（墳丘下溝の堆積土）
19	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	酸化粒少量（墳丘下溝の堆積土）
20	10YR3/4　暗褐色	粘土	黒褐色粘土ブロック
21	10YR3/1　黒褐色	シルト	黒褐色シルトブロック少量、酸化鉄粒微量

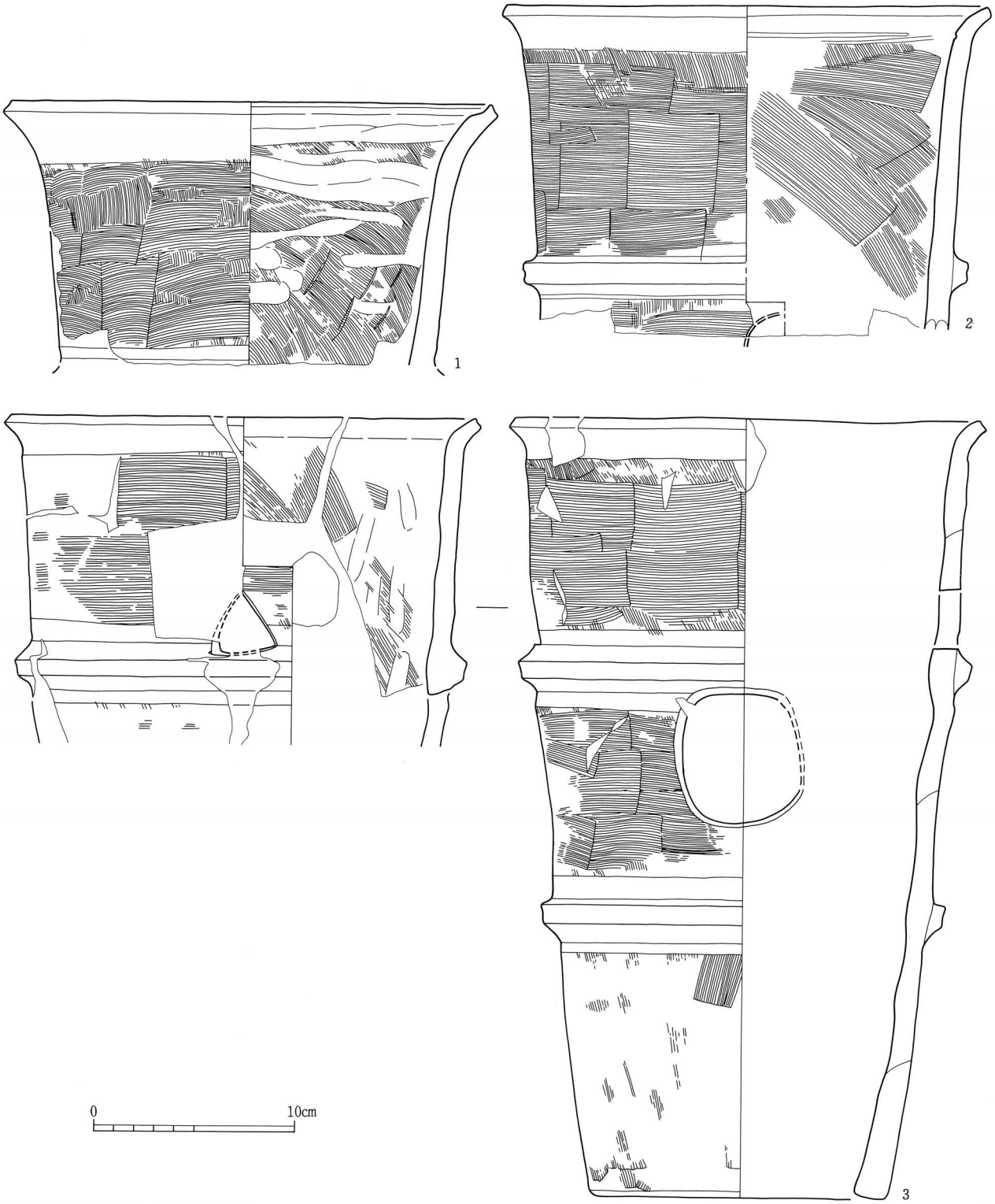
第31図　11号墳断面図

第32図　11号墳平面図 (2)



No.	写真図版	遺構	種別	遺存度	法量 (cm) 口径	底径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎土	焼成	外面調整・備考 内面調整・備考
1	121 -1	11号墳 周溝	朝顔形 埴輪	口縁部 小片	—	—	—	—	橙色 橙色	良好 白針微量	良好	斜め方向ハケメ、口縁部ヨコナデ ヨコハケ、口縁部ヨコナデ
2	121 -3	11号墳 周溝ｂ区	朝顔形 埴輪	口縁部 上半	—	—	—	—	明黄橙色 明黄橙色	良好 白針微量	やや軟質	タテハケ 横・斜め方向ハケメ
3	121 -2	11号墳 周溝ｂ区	朝顔形 埴輪	頸部 のみ	頸部凸帯径13.5		—	—	橙色 橙色	良好 白針微量	軟質	？（磨滅） ナデ？（磨滅）
4	121 -4	11号墳 周溝ｂ区	朝顔形 埴輪	体部片	—	—	—	円形	黄橙色 黄橙色	良好 白針微量	やや軟質	？（磨滅）、凸帯ヨコナデ ナデ
5	121 -5	11号墳 周溝ｂ区	朝顔形 埴輪	頸～肩部 1/8	—	—	—	—	浅黄橙色 浅黄橙色	良好 白針微量	軟質	？（磨滅）、凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ、一部に斜め方向ナデ
6	121 -6	11号墳 周溝ｂ区	朝顔形 埴輪	肩部片	—	—	—	—	橙色 橙色	良好 白針微量	軟質	？（磨滅）、凸帯ヨコナデ ナデ
7	121 -7	11号墳 周溝ｂ区	円筒 埴輪	体部片	—	—	—	—	にぶい橙色 にぶい橙色	良好 白針微量	良好	斜め方向ハケメ、斜めヘラ描き線３本 ナデ

第33図　11号墳出土遺物 (1)



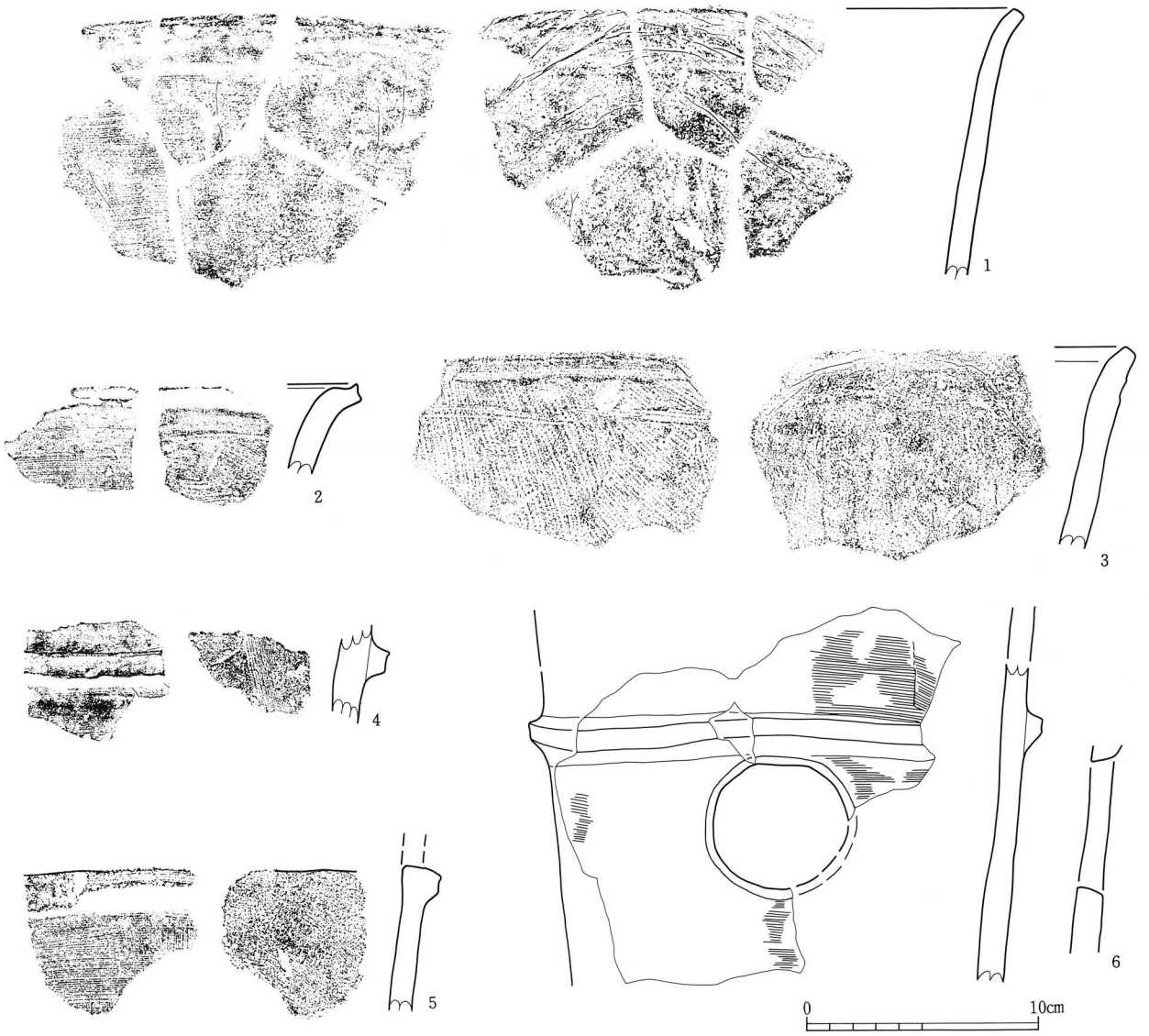
No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm) 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外面調整・備　考 内面調整・備　考
1	121 -8	11号墳 周溝	円筒 埴輪	3段目 1/4	(24.8)	—	3段目13.0	—	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ→B種ヨコハケ、口縁ヨコナデ 斜め方向ハケメ→上部は横方向ナデ、口縁部ヨコナデ　**1b類**
2	121 -9	11号墳 周溝d区	円筒 埴輪	3段目 1/3	24.2	—	3段目13.5	円形	橙色 橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ→B種ヨコハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 斜め方向ハケメ、口縁部ヨコナデ　**1a類**
3	122 -1	11号墳 周溝c区	朝顔形 埴輪	1/2	23.6	15.6	39.2 3段目12.5 2段目12.5 1段目14.0	三角形 ・ 歪んだ 円形	赤褐色 にぶい黄橙色	やや不良 白針少量	やや軟質	タテハケ→B種ヨコハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 斜め方向ハケメ→粗い縦方向ナデ　**1a類**

第34図　11号墳出土遺物 (2)

a．調整技法

第34・35図は外面の調整が１次調整タテハケ後に２次調整にヨコハケが施されるものである。２次調整のヨコハケは、小片のために確定できないものを除くとすべてＢ種ヨコハケである。内面調整は大部分が斜め方向のハケメであるが、口縁部の２点（第35図１・３）は縦方向のナデとなっている。

第36～44図は外面の調整が１次調整タテハケのみのものである。内面調整は縦方向のナデと斜め方向のハケメが



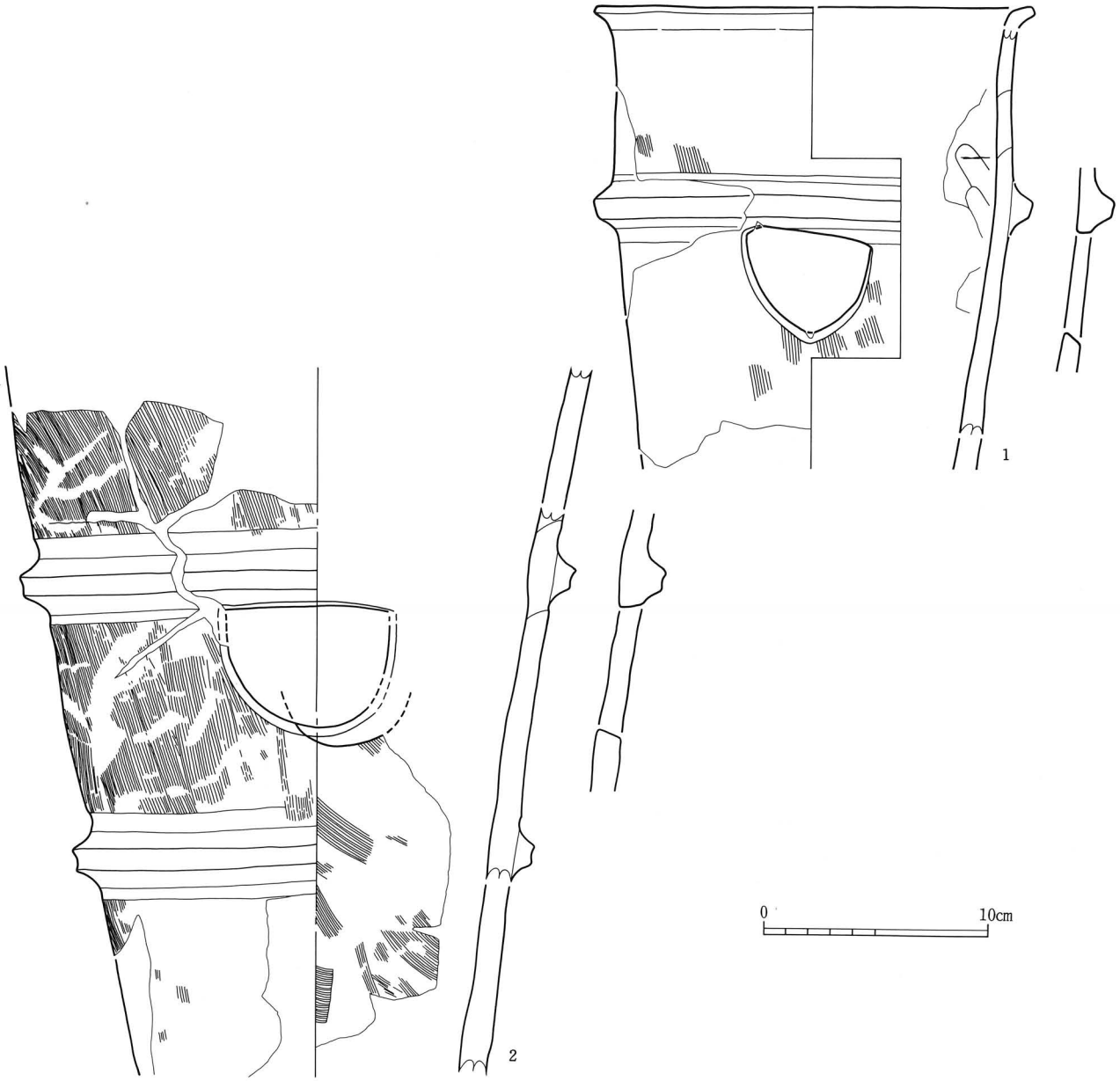
No.	写真図版	遺構	種別	遺存度	法量 (cm) 口径	底径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎土	焼成	外面調整・備考 内面調整・備考
1	122 -2	11号墳 周溝ｄ区	円筒 埴輪	３段目 1/4	－	－	－	－	にぶい橙色 にぶい橙色	良好 白針微量	やや軟質	Ｂ種ヨコハケ、口縁部ヨコナデ 縦方向ナデ、口縁部ヨコナデ　**1a 類**
2	122 -3	11号墳 周溝ｃ区	円筒 埴輪	口縁部 小片	－	－	－	－	浅黄橙色 浅黄橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ→Ｂ種ヨコハケ、口縁部ヨコナデ 斜め方向ハケメ、口縁部ヨコナデ　**1b 類**
3	122 -6	11号墳 周溝ｄ区	円筒 埴輪	口縁部 1/6	－	－	－	－	橙色 橙色	良好 白針微量	やや軟質	タテハケ→ヨコハケ？、口縁部ヨコナデ 縦方向ナデ、口縁部ヨコナデ　**1 類**
4	122 -5	11号墳 周溝ｃ区	円筒 埴輪	体部小片	－	－	－	－	にぶい橙色 にぶい黄橙色	良好 白針微量	良好	Ｂ種ヨコハケ、凸帯ヨコナデ 斜め方向ハケメ　**1 類**
5	122 -4	11号墳 周溝ｄ区	円筒 埴輪	体部小片	－	－	－	三角形 ？	にぶい橙色 にぶい橙色	良好 白針微量	良好	Ｂ種ヨコハケ、凸帯ヨコナデ 斜め方向ハケメ　**1 類**
6	122 -7	11号墳 周溝ｄ区	円筒 埴輪	２段目 1/4	－	－	－	円形	橙色 浅黄橙色	良好 白針微量	やや軟質	Ｂ種ヨコハケ ？（磨滅）　**1 類**

第35図　11号墳出土遺物 (3)

ある。例外もあるが、概して半円形や三角形のスカシ孔を持つものは斜め方向のハケメ調整で、円形のスカシ孔を持つものは縦方向のナデ調整が施されている。

b．スカシ孔の形態

2次調整にヨコハケが施される埴輪のうちスカシ孔が認められたものは4点ある。第34図3は2段目の上側に寄った位置にやや角張った円形のスカシ孔、3段目の下側に寄った位置に三角形のスカシ孔が90°ずらして配置されている。反対側が欠損しているために断定できないが、それぞれが一対づつ組み合わされていると推定される。な



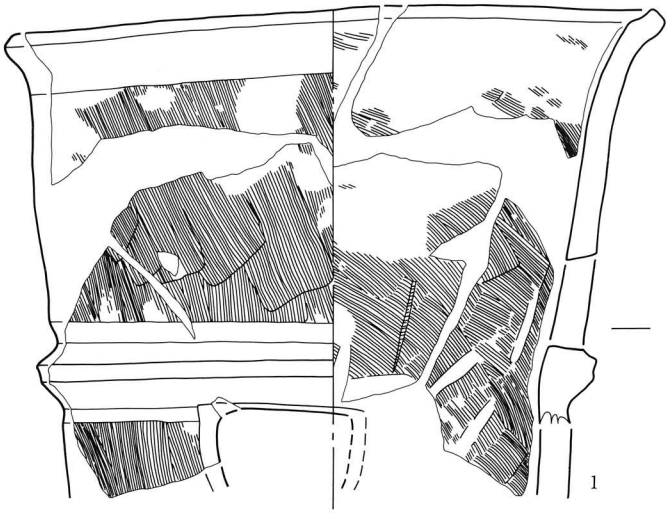
No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm)			スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外 面 調 整・備　考 内 面 調 整・備　考
					口　径	底　径	器高・段幅					
1	122 -8	11号墳 周溝a区	円筒 埴輪	2，3段目 1/3	19.6	－	3段目9.5	半円形	橙色 橙色	やや不良 白針微量	やや軟質	タテハケ、口縁部ヨコナデ 斜め方向ナデ、口縁部ヨコナデ　3b類
2	122 -9	11号墳 周溝a区	円筒 埴輪	1/2	－	－	2段目12.5	半円形	明赤褐色 にぶい褐色	やや不良 白針微量	良好	タテハケ、凸帯ヨコナデ 斜め方向ハケメ　3a類

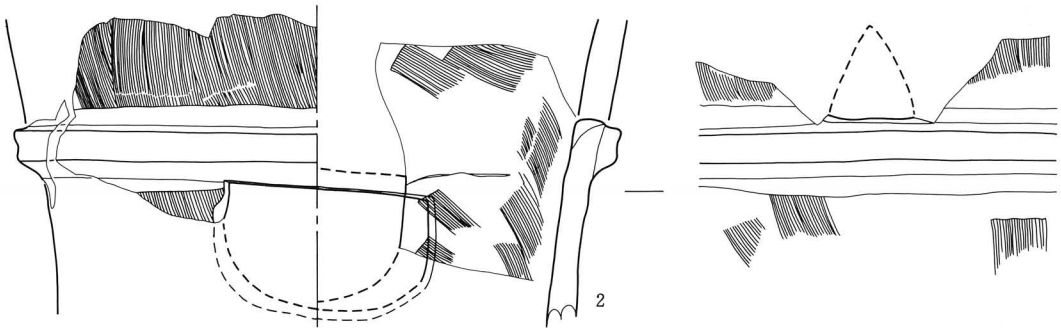
第36図　11号墳出土遺物 (4)

お、第34図２と35図６は円形、同図５は三角形と推定される小片であるが、これらも同様の組み合わせになる可能性がある。

次に１次調整タテハケのみの埴輪を見てみると、第36～38図１・２には半円形や三角形のスカシ孔が認められる。これらのうち、第37図１・２は２段目の上側に寄った位置に半円形のスカシ孔、３段目の下側に寄った位置に三角形のスカシ孔が90°ずらして配置されている。２は半円形のスカシ孔が対称の位置に認められることから三角形のスカシ孔も半円形のスカシ孔と同様に一対づつ組み合わされていると推定される。第38図の２点は３段目の下側に寄った位置に三角形のスカシ孔を持っているが、これらも第37図と同様に三角形と半円形のスカシ孔の組み合わせである可能性がある。なお、第36図の２点には三角形のスカシ孔は認められず、半円形のみのタイプである。

これ以外にスカシ孔が確認できた11点のうち10点（第38図３、第39図、第41図１、第42図１・３・５、第43図１・３・４）はすべて円形のスカシ孔で、２段目の上側に寄った位置にあり、小片を除いて対称の位置に２個確認できる。孔の全体形が判るものは少ないが、第39図１・２、第41図１、第42図１のように歪んだものも認められる。なお、第43図５については半円形である可能性がある。

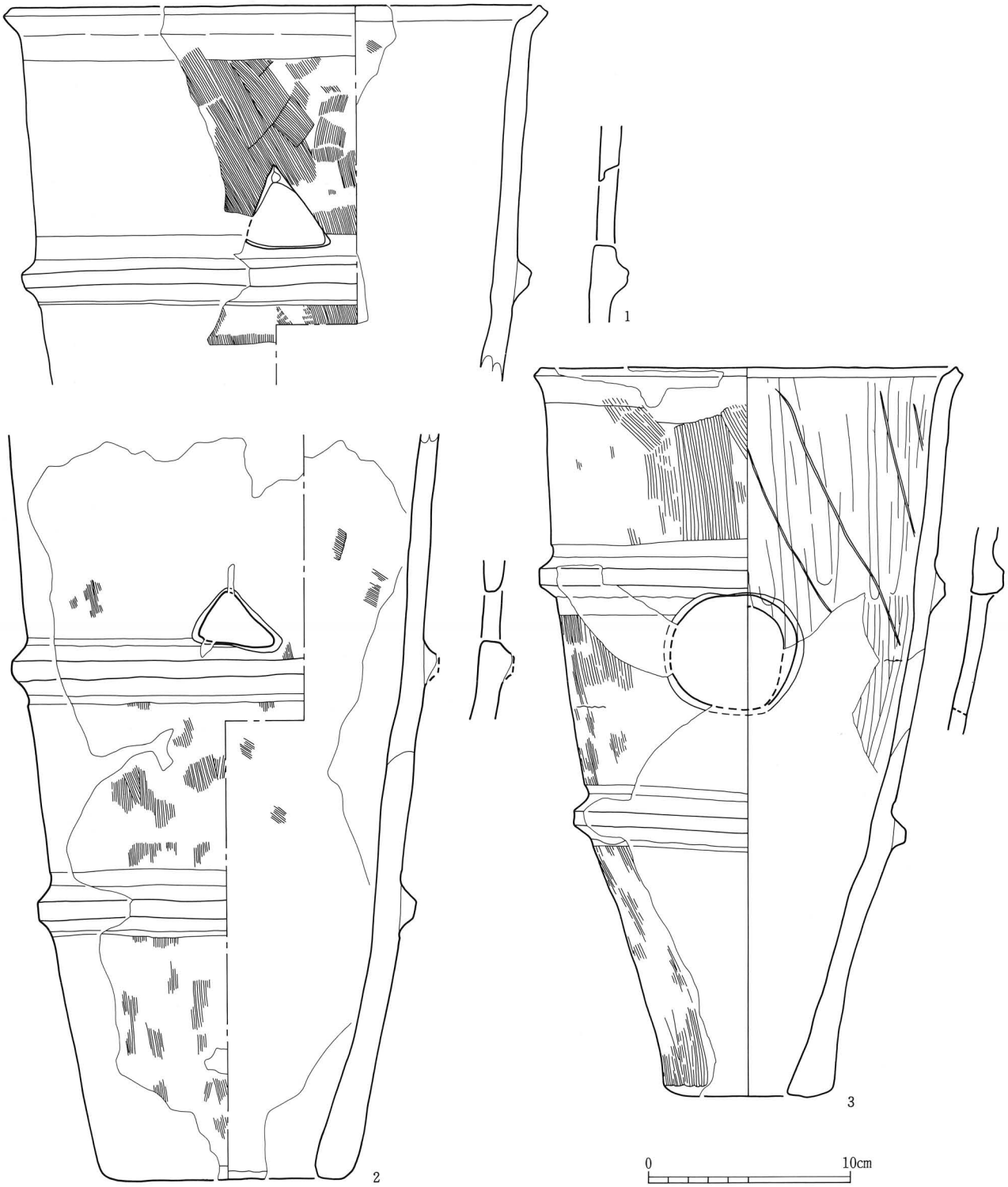




0　10cm

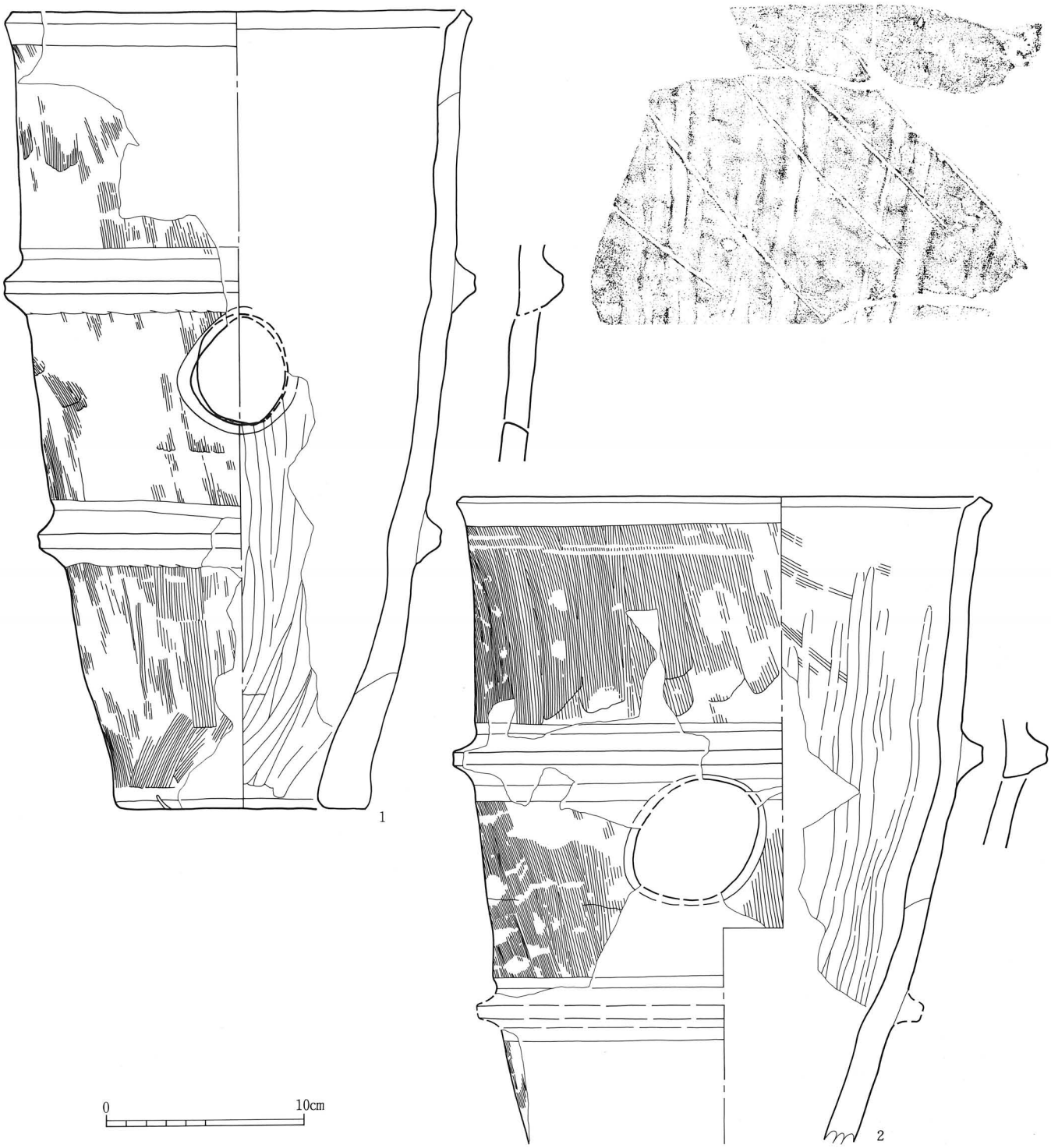
No.	写真図版	遺構	種別	遺存度	法量 (cm) 口径	底径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎土	焼成	外面調整・備考 内面調整・備考
1	123 -1	11号墳 周溝ａ区	円筒 埴輪	2，3段目 1/2	(26.0)	－	3段目14.0	三角形 半円形	にぶい黄褐色 橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 斜め方向ハケメ→粗い縦方向ナデ　**2類**
2	123 -2	11号墳 周溝ｃ区	円筒 埴輪	体部片	－	－	－	三角形 半円形	橙色 橙色	やや不良 白針微量	良好	タテハケ、凸帯ヨコナデ 斜め方向ハケメ　**2類**

第37図　11号墳出土遺物 (5)



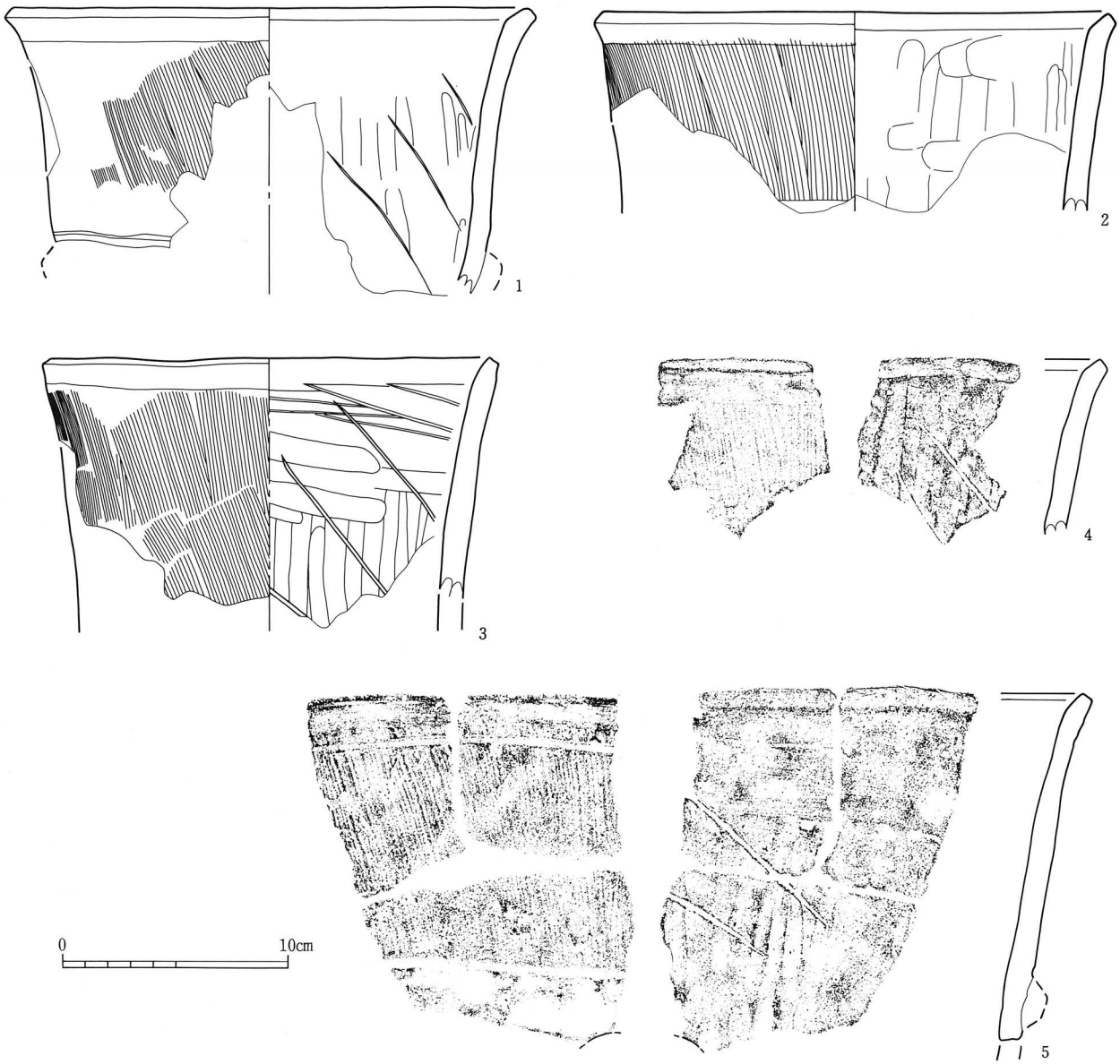
No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm) 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外面調整・備　考 内面調整・備　考
1	123 -3	11号墳 周溝b区	円筒 埴輪	上半1/5	(26.8)	—	3段目13.5	三角形	橙色 橙色	良好 白針微量	やや軟質	タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 斜め方向ハケメ　**2類？**
2	123 -4	11号墳 周溝d区	円筒 埴輪	1/4	—	(11.6)	2段目12.0 1段目13.5	三角形	橙色 橙色	やや不良 白針微量	軟質	タテハケ、磨滅が激しい 斜め方向ハケメ？、磨滅が激しい **2類？**
3	123 -5	11号墳 周溝b区	円筒 埴輪	2/3	21.4	(9.4)	36.5 3段目10.5 2段目12.0 1段目13.5	円形	橙～浅黄橙色 明黄褐色	良好 白針微量	良好	タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ、口縁部ヨコナデ 斜めヘラ描き線6本　**4c類**

第38図　11号墳出土遺物 (6)



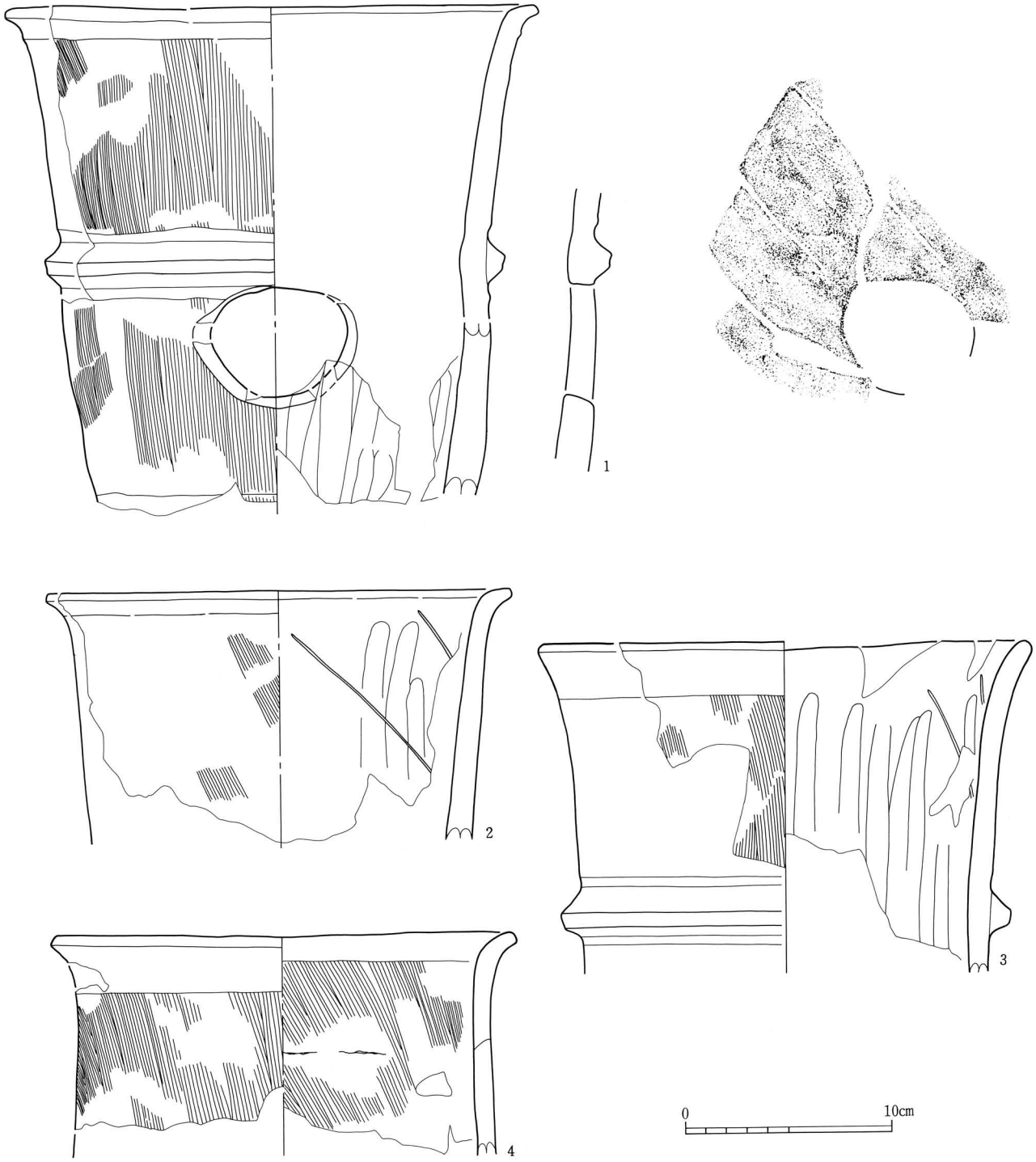
No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm) 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外面調整・備　考 内面調整・備　考
1	124 -1	11号墳 周溝ｃ区	円筒 埴輪	1/3	(23.6)	13.0	40.6 ３段目14.0 ２段目13.0 １段目13.5	円形	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ、口縁部ヨコナデ 斜めヘラ描き線５本　**4b 類**
2	124 -2	11号墳 周溝ｄ区	円筒 埴輪	1/3	(27.0)	－	３段目13.0 ２段目13.0	円形	橙色 にぶい橙色	やや不良 白針微量	やや軟質	タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ、一部に赤彩痕が残る 縦方向ナデ、３段目は斜めハケメ→縦方向ナデ　**4b 類**

第39図　11号墳出土遺物 (7)



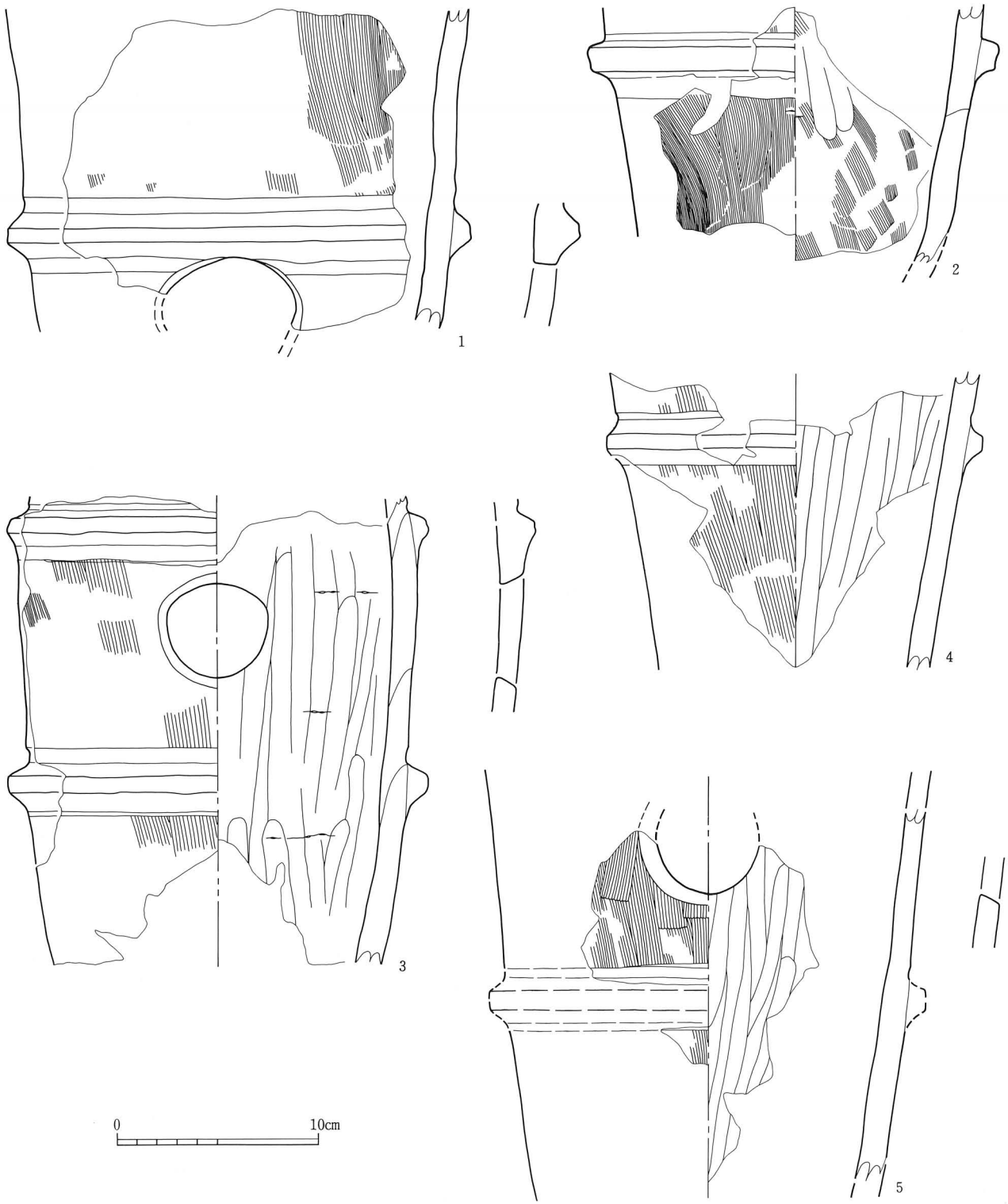
No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm) 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外面調整・備　考 内面調整・備　考
1	124 -3	11号墳 周溝d区	円筒 埴輪	3段目 1/4	(23.2)	—	—	—	淡橙色 橙色	良好 白針微量	やや軟質	タテハケ、口縁部ヨコナデ 縦方向ナデ、口縁部ヨコナデ 斜めヘラ描き線3本
2	124 -4	11号墳 周溝d区	円筒 埴輪	3段目 1/4	(23.0)	—	—	—	淡橙色 淡橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、口縁部ヨコナデ 縦・横方向ナデ、口縁部ヨコナデ
3	124 -5	11号墳 周溝b区	円筒 埴輪	3段目 1/4	(20.0)	—	3段目13.5	—	淡橙色 淡橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、口縁部ヨコナデ 縦方向ナデ、一部横方向ナデ、上部ヘラナデ、斜めヘラ描き線3本
4	124 -6	11号墳 周溝c区	円筒 埴輪	口縁部 小片	—	—	—	—	にぶい黄橙色 浅黄橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、口縁部ヨコナデ ナデ、口縁部ヨコナデ 斜めヘラ描き線2本
5	124 -7	11号墳 周溝d区	円筒 埴輪	3段目 1/5	—	—	3段目14.0	円形	浅黄橙色 浅黄橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、口縁部ヨコナデ 縦方向ナデ、口縁部ヨコナデ 斜めヘラ描き線2本

第40図　11号墳出土遺物 (8)



No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm) 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外 面 調 整・備　考 内 面 調 整・備　考
1	124 -8	11号墳 周溝ｄ区	円筒 埴輪	2，3段目 1/3	(25.8)	－	3段目12.5	歪んだ 円形	橙色 橙～浅黄橙色	やや不良 白針微量	良好	タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ、口縁部ヨコナデ 斜めヘラ描き線３本　**4b か4c 類**
2	125 -1	11号墳 周溝ｃ区	円筒 埴輪	3段目 1/4	(22.4)	－	－	－	橙色 橙色	やや不良 白針微量	軟質	タテハケ、口縁部ヨコナデ 縦方向ナデ、口縁部ヨコナデ 斜めヘラ描き線２本
3	125 -2	11号墳 周溝ｄ区	円筒 埴輪	3段目 1/2	23.4	－	3段目13.5	－	橙色 橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ、口縁部ヨコナデ 斜めヘラ描き線３本
4	125 -3	11号墳 周溝ｂ区	円筒 埴輪	3段目 1/3	－	－	－	－	淡橙色 淡橙色	良好 白針微量	軟質	タテハケ、口縁部ヨコナデ タテハケ、口縁部ヨコナデ　**2 か 3 類**

第41図　11号墳出土遺物 (9)



No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm) 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外面調整・備　考 内面調整・備　考
1	125 -4	11号墳 周溝d区	円筒 埴輪	2，3段目 1/4	—	—	—	円形	橙色 浅黄橙色	やや不良 白針微量	軟質	タテハケ、凸帯ヨコナデ ナデ？（磨滅）
2	125 -5	11号墳 周溝b区	円筒 埴輪	体部片	—	—	—	—	橙色 橙色	良好 白針微量	やや軟質	タテハケ、凸帯ヨコナデ 斜め方向ハケメ→縦方向ナデ　**2か3類**
3	126 -1	11号墳 周溝b区	朝顔形 埴輪？	体部1/6	—	—	2段目13.0	円形	橙色 淡橙色	良好 白針微量	軟質	タテハケ、凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ
4	126 -2	11号墳 周溝d区	円筒 埴輪	1段目 1/4	—	—	—	—	赤橙色 橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ
5	126 -5	11号墳 周溝d区	円筒 埴輪	1，2段目 1/5	—	—	—	円形？	橙色 橙色	良好 白針微量	軟質	タテハケ 縦方向ナデ

第42図　11号墳出土遺物 (10)

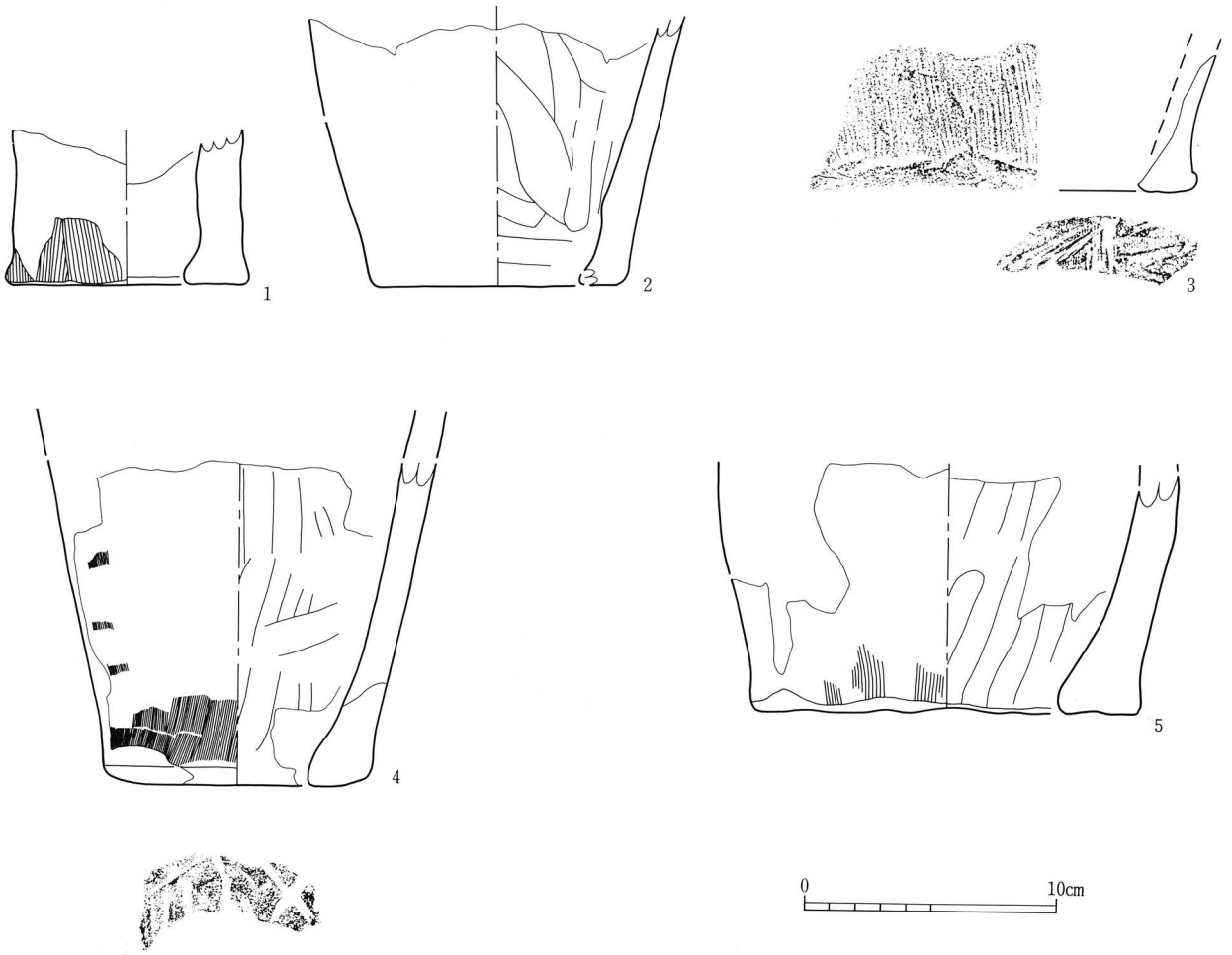
No.	写真図版	遺構	種別	遺存度	法量 (cm) 口径	底径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎土	焼成	外面調整・備考 内面調整・備考
1	126 -3	11号墳 周溝ｂ区	円筒 埴輪	体部片	－	－	－	円形	浅黄橙色 浅黄橙色	良好 白針微量	やや軟質	？（磨滅）、凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ
2	126 -4	11号墳 周溝ａ区	円筒 埴輪	１段目 1/4	－	－	１段目14.0	－	浅黄橙色 浅黄橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、凸帯ヨコナデ 斜め方向ハケメ　**２か３類**
3	126 -6	11号墳 周溝ａ区	朝顔形 埴輪？	1，2段目 1/4	－	－	－	円形か 半円形	橙～淡橙色 浅黄橙～橙色	良好 白針微量	やや軟質	タテハケ、凸帯ヨコナデ 縦・斜め方向ナデ
4	126 -7	11号墳 周溝ａ区	円筒 埴輪	体部片	－	－	－	円形か 半円形	橙色 橙色	良好 白針微量	やや軟質	タテハケ？（磨滅） 縦方向ナデ
5	126 -8	11号墳 周溝ｃ区	円筒 埴輪	体部下半	－	13.0	１段目14.0	半円？	橙色 橙色	やや不良 白針微量	良好	タテハケ、凸帯ヨコナデ 斜め方向ハケメ　**２か３類**
6	127 -1	11号墳 周溝ｃ区	円筒 埴輪	１段目	－	13.1	１段目14.0	－	橙色 橙色	やや不良 白針微量	良好	タテハケ、凸帯ヨコナデ 斜め方向ハケメ　**２か３類**

第43図　11号墳出土遺物 (11)

ｃ．器形および口縁部の形態

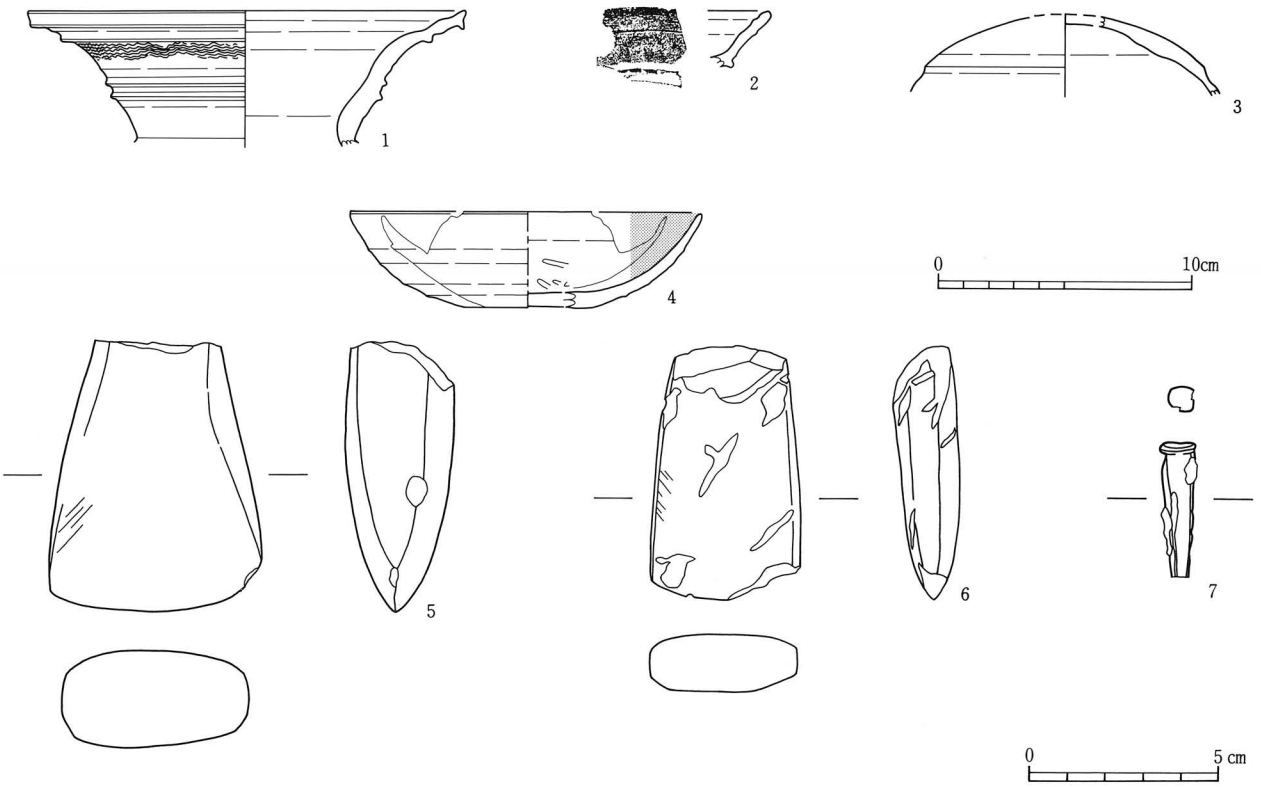
器形は、底径が大きくて比較的直線的に口縁部に至るものと、底径が小さく、やや内湾して立ち上がって口縁部に至るものとがある。調整技法との関連でみると、前者は外面に２次調整のヨコハケが施されるものに多く、後者は１次調整タテハケのみのものに多い。なお、後者の中には極端に底径が小さいものもある（第38図３、第44図１）。

口縁部は、外反の強弱・口縁端部の形態・内面の段の有無などによって様々な形態がある。まず外反の強弱を見ると、ごくわずかに外反するもの（第35図１・３、第40図）と強く外反するものとがある。さらに、強く外反するものについて口縁端部の形態との関連でみると端部が丸くおさめられているもの（第36図１、第41図）と、端部が



No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm) 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外面調整・備　考 内面調整・備　考
1	127 -2	11号墳 周溝ｂ区	円筒 埴輪	基部1/3	－	9.4	－	－	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	やや不良 白針微量	やや軟質	タテハケ ナデ？（磨滅）　**4c 類**
2	127 -3	11号墳 周溝ａ区	円筒 埴輪	基部2/3	－	9.8	－	－	明赤褐色 橙色	良好 白針微量	軟質	？（磨滅） 縦方向ナデ
3	127 -4	11号墳 周溝ｄ区	円筒 埴輪	基部1/4	－	－	－	－	明黄褐色 明黄褐色	良好 白針微量	良好	タテハケ ？（剝離）
4	127 -5	11号墳 周溝ｃ区	円筒 埴輪	１段目 1/3	－	(10.4)	－	－	浅黄～橙色 浅黄橙色	良好 白針微量	やや軟質	タテハケ、基部付近ナデ 縦方向ナデ、一部横方向ナデ
5	127 -6	11号墳 周溝ｂ区	円筒 埴輪	１段目 2/3	－	15.0	－	－	橙色 橙色	やや不良 白針微量	良好	タテハケ 縦方向ナデ

第44図　11号墳出土遺物 ⑿



No.	写真図版	遺構	種別	遺存度	法量 (cm) 口径	底径	器高	外面色調 内面色調	胎土	焼成	調整・備考
1	127 -7	11号墳 周溝ｃ区	須恵器・甕	口縁部 1/4	(19.2)	－	－	灰色 灰白色	良好 白針微量	良好	
2	127 -8	11号墳 周溝ｂ区	須恵器・甕	口縁部 小片	－	－	－	灰色 褐灰色	良好 白針微量	良好	
3	127 -9	11号墳 周溝ｃ区	須恵器・蓋	天井部 1/4	－	－	－	灰色 灰色	良好 白針微量	良好	内外面の天井部ナデ
4	127 -10	11号墳 墳丘表土	土師器・坏	1/3	(13.8) 底径／口径0.36	(5.0)	3.8	浅黄橙色 黒色	良好 白針微量	良好	(外) ロクロ調整、底部手持ちヘラケズリ (内) ヘラミガキ黒色処理

No.	写真図版	遺構・層位	種別	遺存度	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴
5	127-11	11号墳墳丘	石器・磨製石斧	基部欠損	(7.2)	5.0	2.5	157.1	
6	127-12	11号墳墳丘	石器・磨製石斧	基部欠損	(6.7)	3.9	1.5	68.7	
7	127-13	11号墳周溝	鉄製品・釘	先端部欠損	(3.6)	0.7	0.7	3.5	

第45図　11号墳出土遺物 ⒀

わずかに窪むか平坦なものとに分けられる。なお、端部が窪むか平坦なものについて内面の段の有無から見てみると、強いヨコナデによって口縁端部が上方に突出した形となり、その結果内面にはっきりした段を形成するもの（第34図１、第37図１、第38図１・３、第39図）と、段が認められないか、あってもごく軽いもの（第34図２・３、第35図１・３、第40図）とに分けられる。

ｄ．その他

凸帯の断面形が確認できたものは台形、あるいは端部がやや窪む台形をしている。段の幅はほぼ同じか、上にいくほど狭くなるものが多いが、最上段がやや広いものもある（第39図１）。

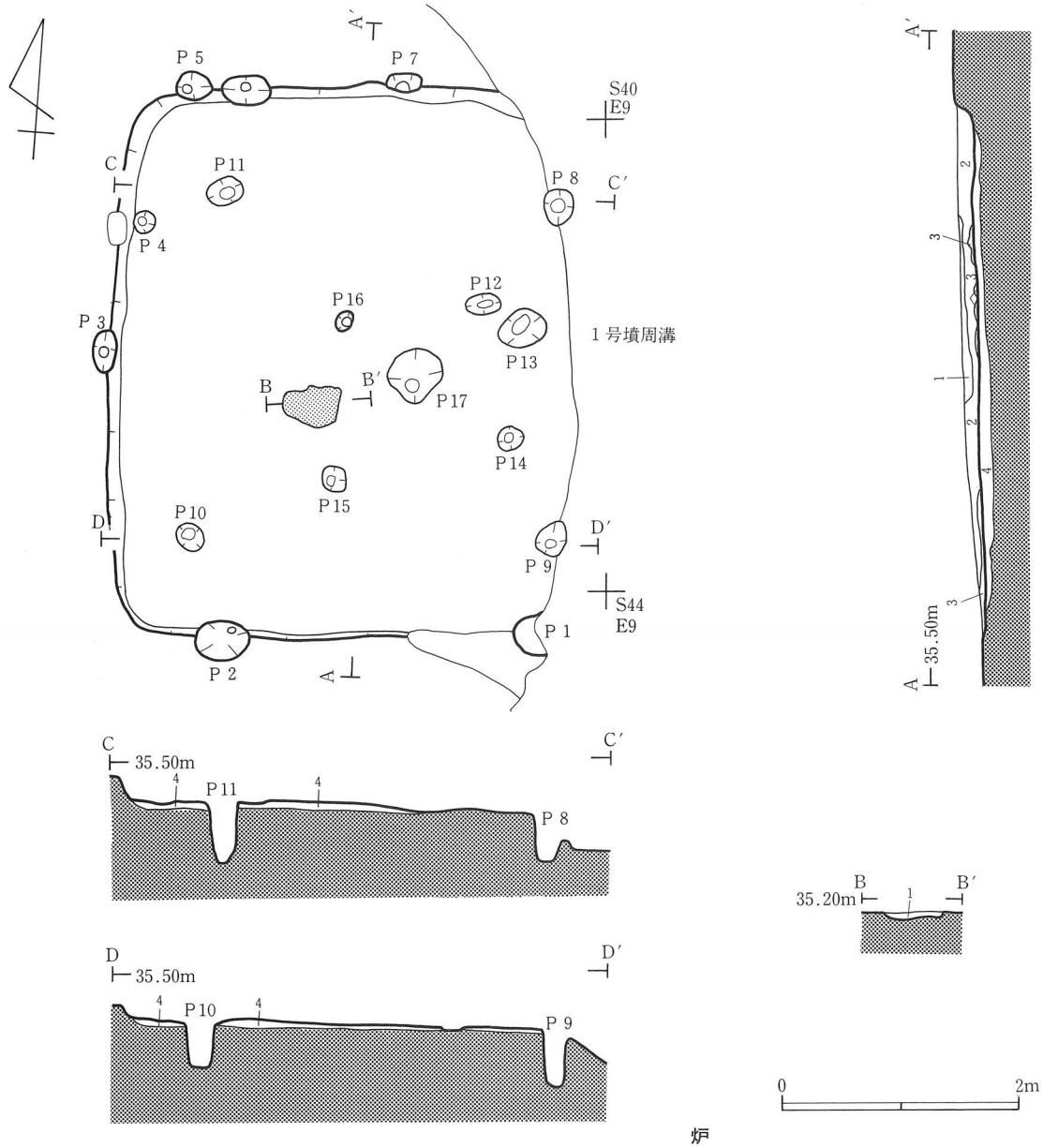
なお、内面にヘラによって沈線が描かれたものが９点ある（第38図３、第39図１、第40図１・３～５、第41図１～３）。

第２節　竪穴住居跡

１．１号住居跡－ＳＩ１－

(1) 遺　　構（第46図、写真72・73）

調査区南部に位置する。東辺を１号墳の周溝に切られている他、調査時は確認できなかったが以前はこの上に１号墳の墳丘が積み上げられていたと考えられる。平面形は東辺を欠くために明確ではないが隅円のほぼ正方形と推定され、南北長4.7m、主軸方向はＮ－３°－Ｗで、内部には炉が設けられている。



層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3/3 暗褐色	シルト	炭化材片少量
2	10YR 2/2 黒褐色	シルト質粘土	層下部に炭化材片多量
3	10YR 2/4 暗褐色	シルト	
4	10YR 3/3 暗褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトブロック多量

炉

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	5YR 4/4 にぶい赤褐色	シルト	焼土・炭化物粒多量

第46図　SI１平面・断面図

壁は北壁はほぼ垂直に立ち上がるが、西壁はやや崩落していると考えられる。最も遺存状態が良い北壁の高さは約20cmである。

堆積土は自然堆積と推定され、３層に分層される。床面近くには炭化材片が多量に認められた。

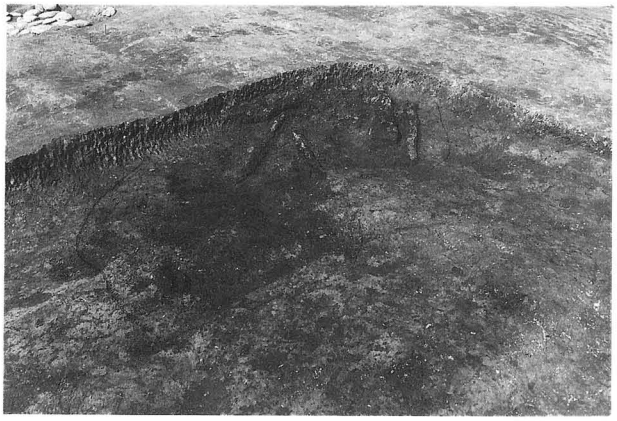
床面は住居の掘り方を暗褐色シルトで５～10cmほど埋め戻して構築している。床面は北西から南東方向に向かって緩やかに傾斜しており、その高低差は約８cmある。なお、掘り方は壁際が中央部に比べてわずかに深い部分もある。床面上には北西部を中心に炭化材片が集中して認められた。

ピットは17個検出した。詳細は表２の通りであるが、このうち主柱穴と考えられるのがＰ８～11で、住居の対角線上と推定される位置にある。柱の間隔は2.8～3.0m である。また、壁際にはＰ１～７の壁柱穴が巡っている。なお、住居の中央付近にあるＰ12～17の性格は確定できないが、深さからするとＰ15・16は支柱穴の可能性が考えられる。

炉は住居の中央からやや南西寄りにある。平面形はやや歪んだ方形で、大きさは35～50cm、床面を７～８cm程度掘り窪めただけのものである。

⑵　出土遺物（第47図、写真128）

堆積土中から土師器片などが約430点出土した。土師器はすべて非ロクロ調整で、図化できたのはヘラミガキ調整の壺と考えられるもの３点と器台１点、土製の紡錘車１点のみである。

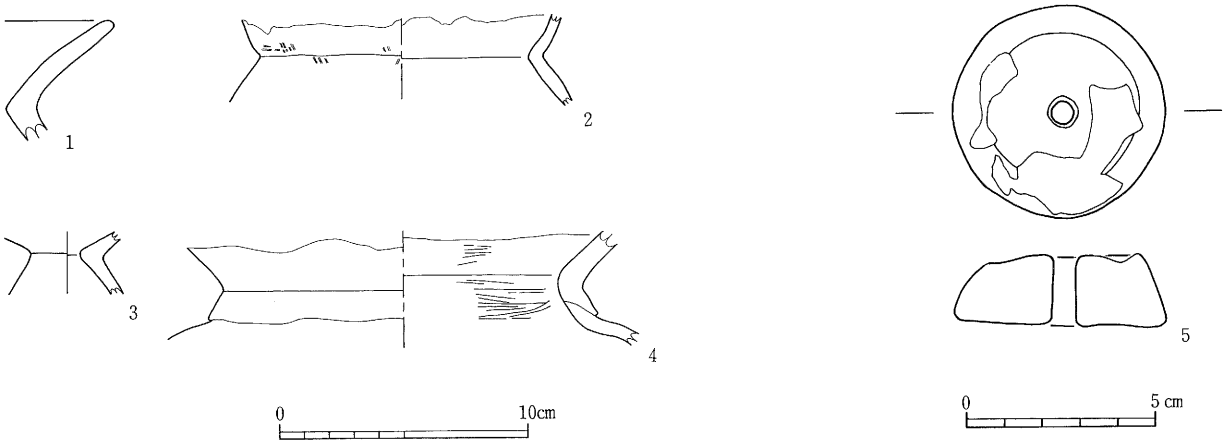


床面の炭化材出土状況

掘り方完掘状況

No.	掘り方（cm）				柱痕跡（cm）		備考
	上端径	下端径	深さ	土質	径	土質	
1	35	?	?	?		?	壁柱穴
2	33～45	6	10	?		?	壁柱穴
3	18～35	10	18	?		?	壁柱穴
4	18～20	7	29	10YR3/2黒褐色シルト、にぶい黄褐色シルトブロック多量		?	壁柱穴？
5	25～30	7	15	?		?	壁柱穴
6	25～41	7	17	?		?	壁柱穴
7	16～30	8	10	?		?	壁柱穴
8	25～29	10	43	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト、黒褐色シルト多量	15	10YR2/3 黒褐色シルト、炭化物少量	主柱穴
9	25～31	8	50	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト、褐色シルト・礫少量	14	10YR2/3 黒褐色シルト、炭化物少量	主柱穴
10	21～24	12	41	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト、褐色シルト・礫少量	11	10YR2/1 黒色シルト、炭化物多量	主柱穴
11	24～30	13	53	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト、褐色シルト・礫少量	10	10YR2/1 黒色シルト、炭化物多量	主柱穴
12	17～30	24	17	10YR2/3 黒褐色シルト、炭化物少量		——	
13	32～40	18	18	10YR2/3 黒褐色シルト、炭化物少量		——	
14	20	7	15	10YR2/3 黒褐色シルト、炭化物少量		——	
15	20～25	8	44	10YR3/2 黒褐色シルト、炭化物少量		?	支柱穴？
16	15～18	7	37	?		?	支柱穴？
17	45	13	14	10YR2/3黒褐色シルト、明黄褐色粘土ブロック少量、炭化物少量		?	

表２　SI １ピット一覧表



No.	写真図版	遺構	種別	遺存度	法量 (cm) 口径	底径	器高	外面色調 内面色調	胎土	焼成	調整・備考
1	128 -1	SI 1	土師器・壺？	口縁部 小片	－	－	－	橙色 にぶい黄橙色	良好 白針微量	やや軟質	(外) ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ (内) ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ
2	128 -2	SI 1	土師器・壺？	頸部のみ	－	－	－	にぶい黄橙色 にぶい赤褐色	良好 白針微量	やや軟質	(外) ハケメ→ヘラミガキ (内) ナデ、口縁部ヘラミガキ
3	128 -3	SI 1	土師器・器台	脚部上半 のみ	－	－	－	橙色 橙色	やや不良 白針微量	軟質	(外)？(磨滅) (内)？(磨滅)
4	128 -4	SI 1	土師器・壺	頸部のみ	－	－	－	にぶい橙色 黄灰色	良好 白針微量	やや軟質	(外) ヘラミガキ (内) ヘラミガキ

No.	写真図版	遺構・層位	種別	遺存度	径 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴
5	128-5	SI 1	土製品・紡錘車	ほぼ完形	5.6	1.9	56.3	

第47図　SI1 出土遺物

２．２号住居跡－ＳＩ２－

(1) 遺　　構（第48図、写真74）

調査区南部に位置する。南辺の一部を１号墳の周溝に切られており１号墳よりも古い。また、床面の下からはＳＫ18を検出している。平面形はやや歪んでいるが隅円のほぼ正方形で、南北長4.4m、東西長4.3m、主軸方向はN-32°-Wで、内部には炉が設けられている。

堆積土は自然堆積と推定される。層中には焼土や炭化材を多量に含んでいる。

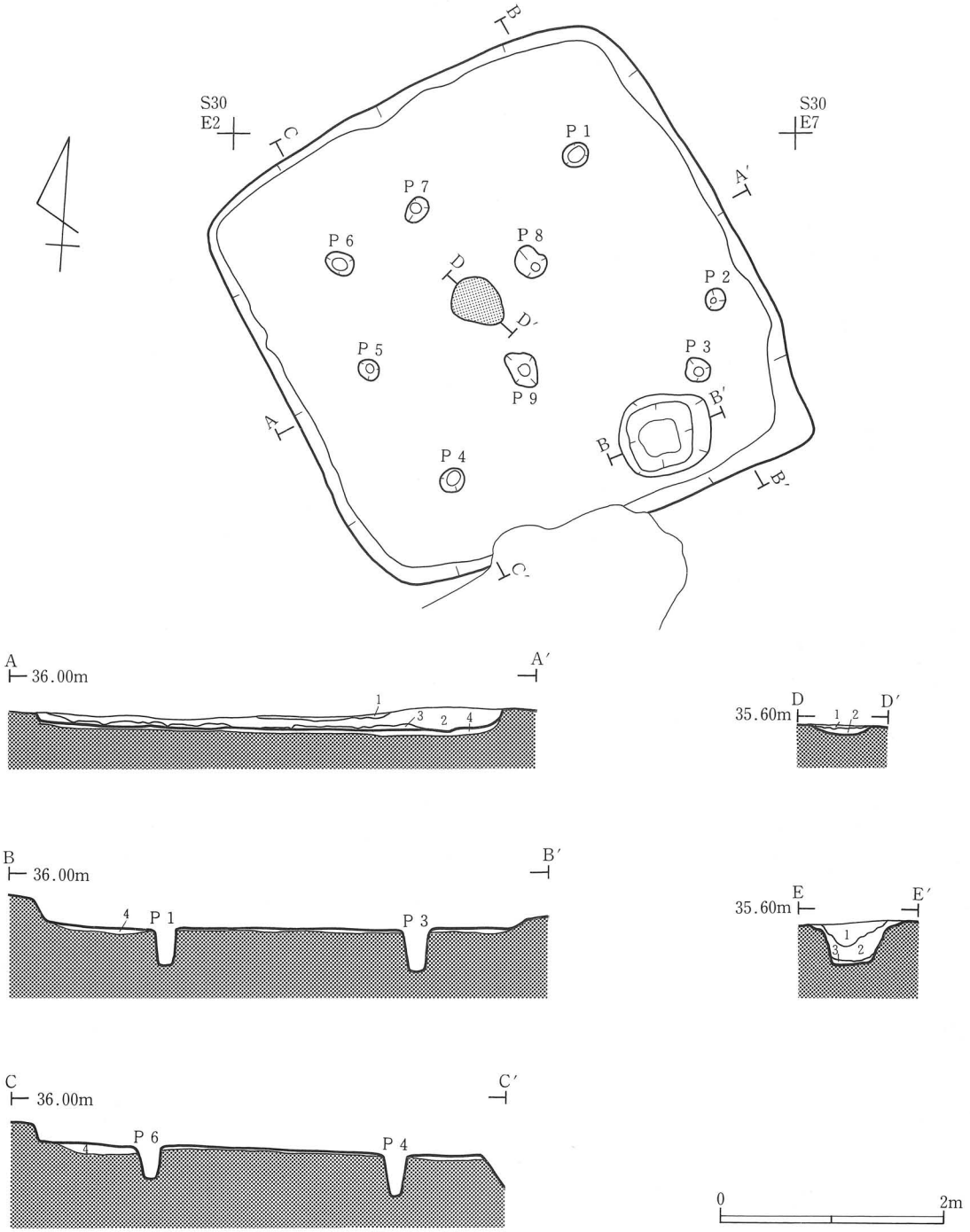
壁はやや崩落していると考えられ、わずかに傾斜して立ち上がる。最も遺存状態が良いのは東壁で高さは約18cmある。

床面は住居の掘り方をにぶい黄褐色シルトで２～５cmほど埋め戻して構築している。床面は北西から南東方向に向かって緩やかに傾斜しており、その高低差は約12cmある。なお、掘り方は壁際が中央部に比べてわずかに深い。

床面からはピット９個、貯蔵穴１基、炉１基を検出した。ピットの詳細は表３の通りであるが、このうち主柱穴と考えられるのがＰ１・３・４・６で住居のほぼ対角線上に位置している。それぞれの心々の距離は2.15～2.4mで

No.	掘り方 (cm) 上端径	下端径	深さ	土質	柱痕跡	備考
1	21～24	11～15	31	10YR2/3 黒褐色粘土	?	主柱穴
2	16～19	5	11	10YR4/4 褐色粘土	?	
3	20	10	36	10YR2/3 黒褐色粘土、焼土・炭化物粒少量	?	主柱穴
4	13～15	7～10	38	10YR2/3 黒褐色粘土、焼土・炭化物粒少量	?	主柱穴
5	13～14	4	10	10YR4/4 褐色粘土	?	
6	12～16	6～9	29	10YR2/3 黒褐色粘土、焼土・炭化物粒少量	?	主柱穴
7	11～15	6	11	10YR2/3 黒褐色粘土	?	
8	15～20	5	13	10YR2/3 黒褐色粘土、焼土・炭化物粒少量	?	
9	16～25	7	14	10YR2/3 黒褐色粘土、焼土・炭化物粒少量	?	
貯蔵穴	75～80	30～35	38	図参照	——	方形

表３　SI ２ピット一覧表



層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 2/3 黒褐色	粘土	炭化物片少量
2	10YR 3/4 暗褐色	粘土	黄褐色粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化材片多量
3	10YR 3/3 暗褐色	シルト	黄褐色粘土ブロック少量
4	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト	暗褐色粘土ブロック多量

炉

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	5YR 2/4 極暗赤褐色	シルト質粘土	炭化材片少量
2	5YR 4/6 赤褐色	シルト質粘土	炭化物粒少量

貯蔵穴

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3/4 暗褐色	粘土	層下部炭化物片少量
2	10YR 3/3 暗褐色	粘土	炭化物片多量
3	10YR 6/5 明黄褐色	粘土	

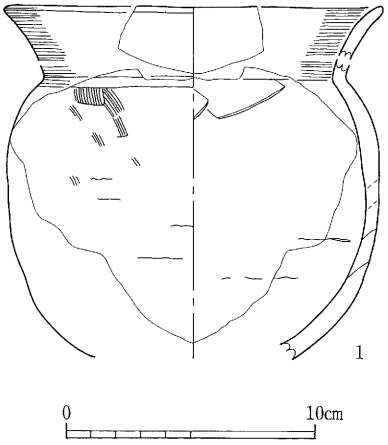
第48図　SI 2 平面・断面図

ある。貯蔵穴と考えられる土坑は南壁際の東寄りにあり、平面形はやや歪んだ方形である。

炉は床面を約10cm掘り窪めたもので、住居の中央からやや西寄りにある。平面形は歪んだ楕円形で大きさは40～50cm、内部には焼土が堆積していた。

(2)　出土遺物（第49図、写真129）

堆積土中から土師器片が約140点、剝片が約20点出土した。土師器はすべて非ロクロ調整で、図化できたのは小型の甕１点のみである。外面はハケメ調整後ナデが施されている。



No.	写真図版	遺　構	種　別	遺存度	法　量（cm）			外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	調　整・備　考
					口　径	底　径	器　高				
1	129	SI　2	土師器・甕	1/2	(15.2)	－	－	暗褐色 暗褐色	やや不良 白針微量	良好	(外) ハケメ→ナデ、(内) ナデ→一部ヘラナデ

第49図　SI2 出土遺物

３．３号住居跡－ＳＩ３－

(1)　遺　　構（第51図、写真75・76）

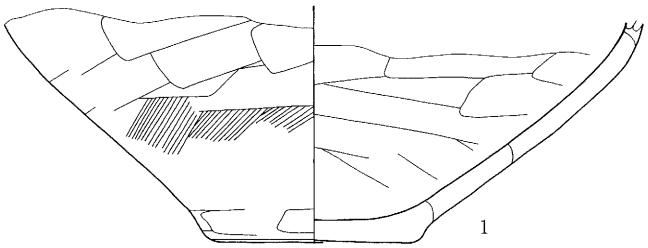
調査区中央やや西寄りに位置する。南コーナーを５号墳の周溝に切られている。平面形はやや歪んだ隅円の方形で、わずかに胴が張る。主軸方向はN-32°-W、北西～南東長4.3m、南西～北東長4.45mで、内部には炉が設けられている。

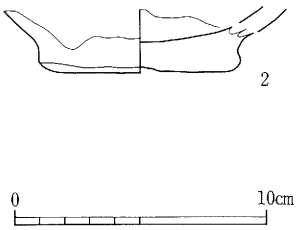
堆積土は自然堆積で、下層には焼土や炭化材を多量に含んでいる。

壁はやや崩落していると考えられ、わずかに傾斜して立ち上がる。最も遺存状態が良いのは北西側で高さは約35cmある。

床面は住居の掘り方を暗褐色シルトで約５cmほど埋め戻して構築している。床面のレベルは北東側が他よりも約５cm低い。

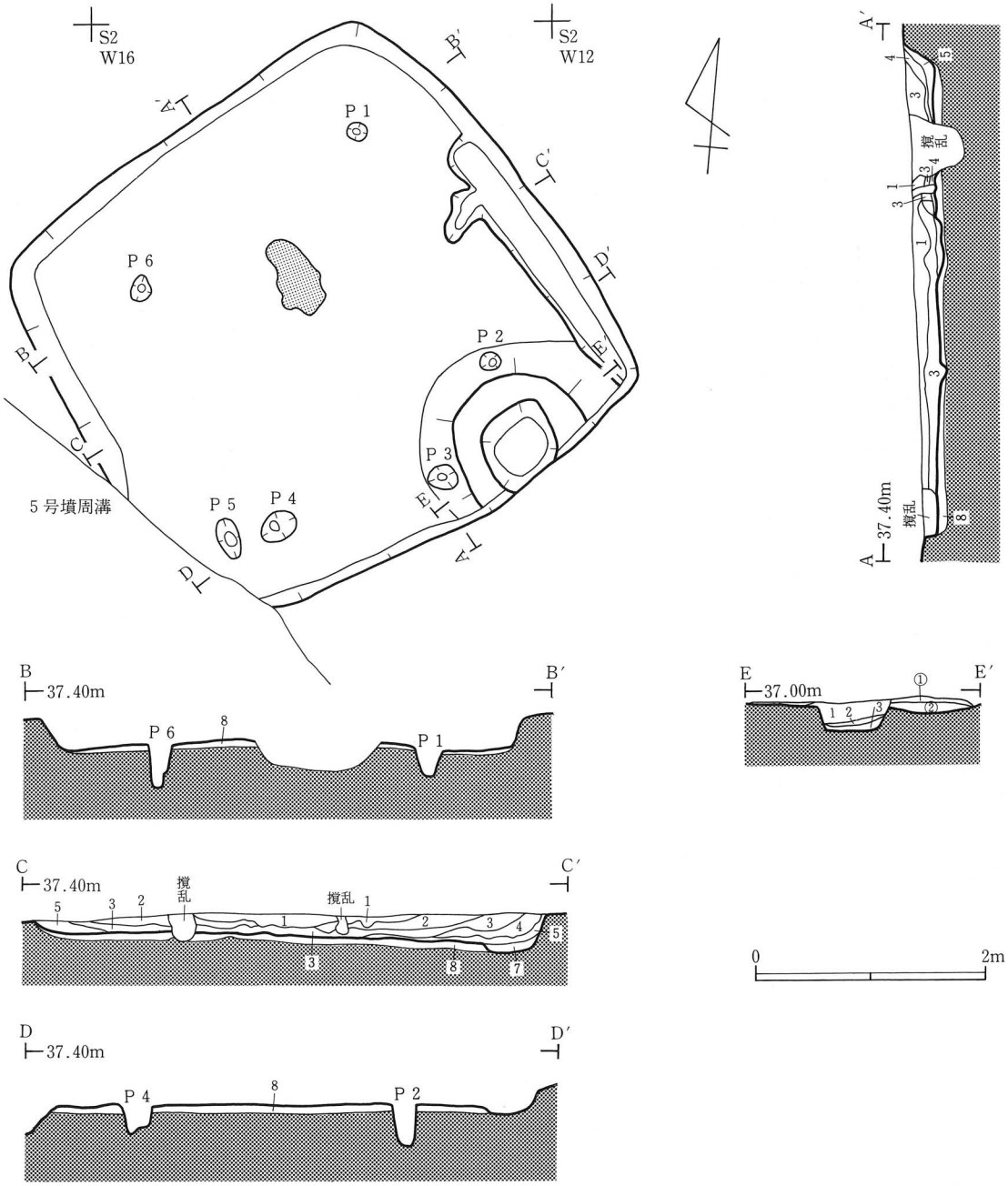
床面からはピット６基、貯蔵穴１基、炉１基の他、北東壁際には周溝を検出した。ピットの詳細は表４の通りであるが、このうち主柱穴と考えられるのがＰ１・２・４・６で住居のほぼ対角線上に位置している。柱の間隔は2.3～2.35mである。Ｐ３は支柱穴と推定される。貯蔵穴と考えられる土坑は南東壁際の東寄りにあり、平面形はやや歪んだ方形で、周囲に盛土をして土手状の施設を造っている。





No.	写真図版	遺　構	種　別	遺存度	法　量（cm）			外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	調　整・備　考
					口　径	底　径	器　高				
1	130 -1	SI　3	土師器・甕？	体部下半 1/3	－	8.0	－	橙色 橙色	良好 白針微量	良好	(外) ハケメ→ナデ (内) ヘラナデ
2	130 -2	SI　3	土師器・甕？	底部のみ	－	8.0	－	明黄褐色 にぶい黄橙色	やや不良 白針微量	軟質	(外) 磨滅のため不明 (内) ヘラナデ

第50図　SI3 出土遺物



層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3/2 黒褐色	シルト	炭化物片微量
2	10YR 3/4 暗褐色	シルト	焼土粒・炭化物片微量
3	10YR 4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	焼土粒・炭化物片少量
4	10YR 4/4 褐色	シルト	明黄褐色粘土ブロック少量
5	7.5YR 2/3 極暗褐色	シルト	焼土粒・炭化物片多量、明黄褐色粘土粒少量
6	5YR 2/4 極暗赤褐色	粘土質シルト	焼土粒・炭化物粒多量
7	10YR 3/3 暗褐色	シルト	焼土粒・炭化物粒少量、明黄褐色粘土質シルト少量
8	10YR 4/2 灰黄褐色 10YR 5/8 黄褐色	粘土質シルト 粘土	混合、炭化物粒少量（掘り方）

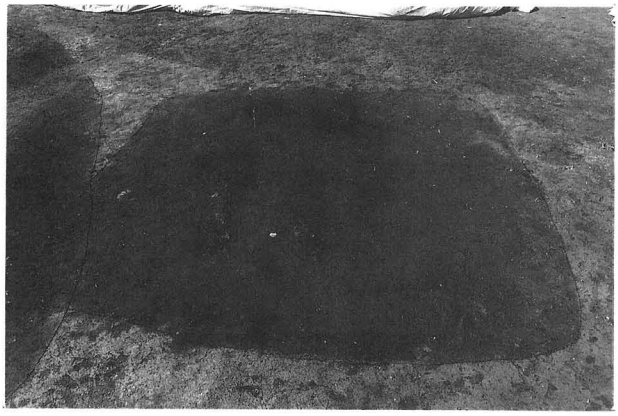
貯蔵穴

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3/2 黒褐色	シルト質粘土	炭化物片多量、焼土粒少量
2	10YR 4/4 褐色	シルト	
3	10YR 3/2 黒褐色	シルト質粘土	
①	10YR 6/6 明黄褐色	シルト	黒褐色シルトブロック少量（周堤帯盛土）
②	10YR 3/2 黒褐色	シルト	明黄褐色シルトブロック少量（土手状の盛土）

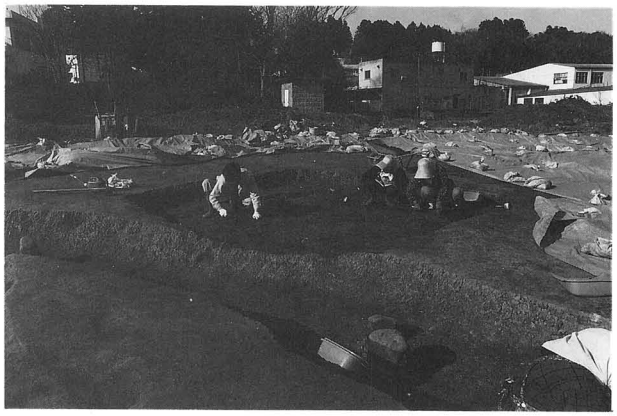
第51図　SI 3 平面・断面図

No.	掘り方(cm)				柱痕跡(cm)		備考
	上端径	下端径	深さ	土質	径	土質	
1	15～17	6	27	10YR3/2 黒褐色粘土質シルト、炭化物粒少量		?	主柱穴
2	15～19	6	38	10YR3/2 黒褐色粘土質シルト、炭化物粒少量		?	主柱穴
3	22～28	6	29	10YR4/4 褐色シルト、にぶい黄褐色シルトブロック多量	7	10YR3/2 黒褐色シルト、炭化物粒微量	主柱穴？
4	25～34	6	28	10YR3/2 黒褐色シルト、炭化物粒多量		?	主柱穴
5	18～35	9～14	11	10YR3/2 黒褐色シルト、炭化物粒多量		——	
6	18～24	6	37	10YR3/2 黒褐色シルト、炭化物粒多量		?	主柱穴
貯蔵穴	65	40～47	33	図参照		——	方形、周囲に土手状の盛土

表４　SI ３ピット一覧表



ＳＩ３確認状況



ＳＩ３調査風景

炉は床面を約５cm掘り窪めたもので、住居の中央からやや北西寄りにある。平面形は歪んだ楕円形で大きさは35～70cm、内部には焼土が堆積していた。

(2)　出土遺物（第50図、写真130）

堆積土中から土師器片が約330点出土した。土師器はすべて非ロクロ調整で、図化できたのは甕か壺の底部付近２点のみである。１は外面がハケメ調整後ナデが施されている。

４．４号住居跡－ＳＩ４－

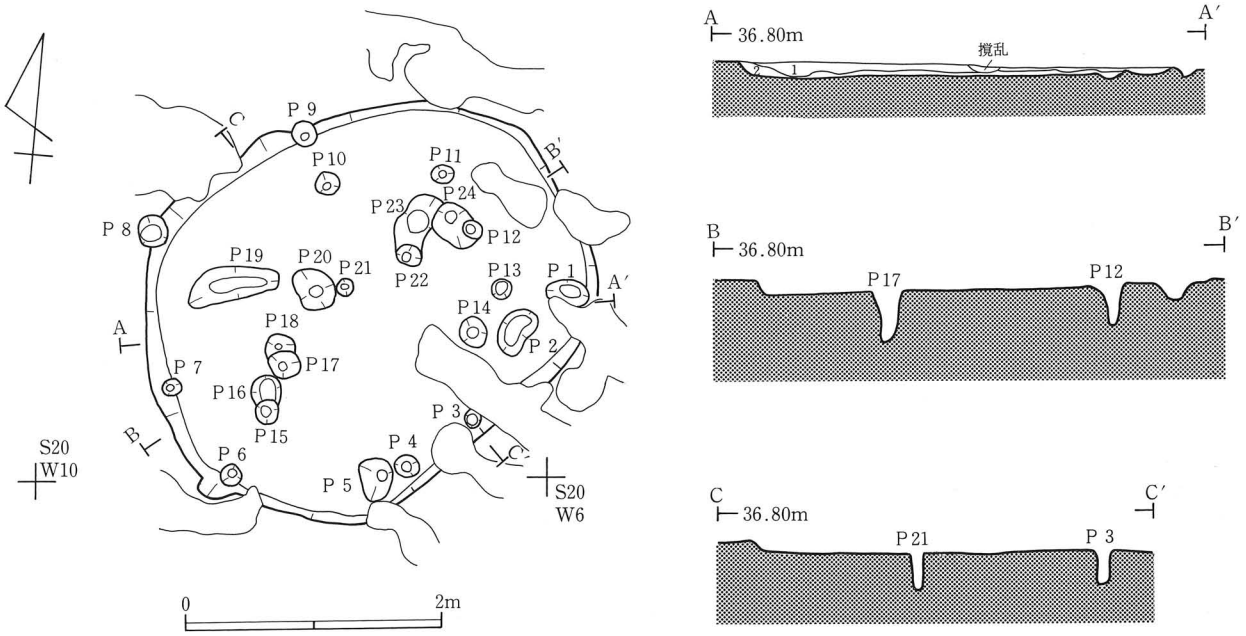
(1)　遺　　構（第52図、写真77・78）

調査区のほぼ中央に位置する。プラン全体が３号墳の墳丘部に当たる位置にあり、調査時は確認できなかったが、かつてはこの上に３号墳の墳丘が積み上げられていたと推定される。平面形は楕円形で、主軸方向はN-53°-E、長軸長3.6m、短軸長2.9mである。

堆積土は２層確認できたが、いずれも自然堆積層と考えられる。

ＳＩ４確認状況

ＳＩ４完掘状況



層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 2/2 黒褐色	シルト	炭化物片微量
2	10YR 3/3 暗褐色	シルト	黄褐色シルト粒少量

第52図　SI 4 平面・断面図

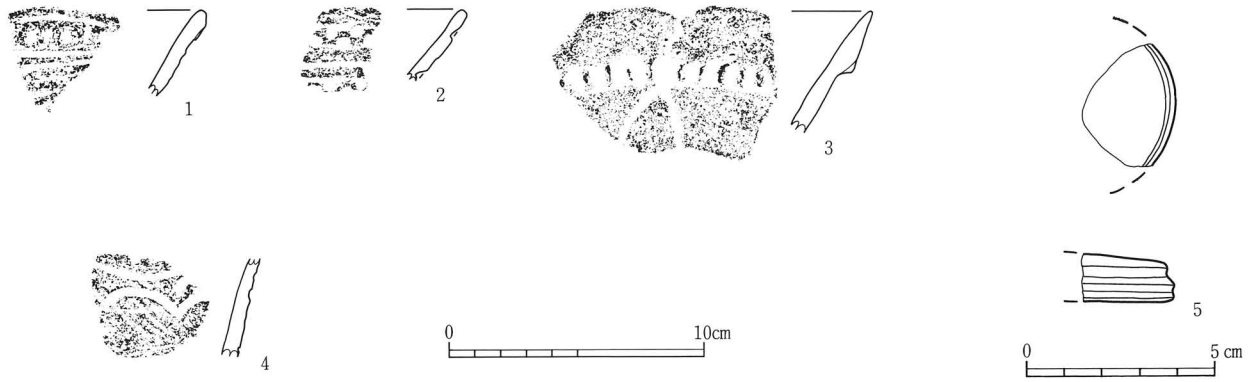
No.	掘り方（cm）				柱痕跡	備考
	上端径	下端径	深さ	土質		
1	20～34	7～18	8	10YR2/2 黒褐色シルト	—	壁柱穴
2	22～38	10～26	6	10YR2/2 黒褐色シルト	—	
3	13	9	25	10YR6/6 明黄褐色シルトと10YR3/4 暗褐色シルトの混合	?	主柱穴
4	18～20	8	9	10YR2/2 黒褐色シルト	?	壁柱穴？
5	25～35	9	14	10YR3/3 暗褐色シルト	?	壁柱穴？
6	15～18	6	5	?	?	壁柱穴？
7	15	6	11	?	?	壁柱穴？
8	24～26	15	12	?	?	壁柱穴？
9	17～21	6	15	?	?	壁柱穴？
10	17～21	5	10	10YR2/2 黒褐色シルト	?	支柱穴？
11	14～17	6	5	?	?	支柱穴？
12	14～17	8	33	10YR6/6 明黄褐色シルトと10YR3/4 暗褐色シルトの混合	?	主柱穴
13	15	9	?	?	?	支柱穴？
14	21～25	9	12	10YR2/2 黒褐色シルト	?	支柱穴？
15	17～20	9	10	10YR2/2 黒褐色シルト、炭化物粒多量	?	支柱穴？
16	25	12～16	4	?	?	
17	22～30	6	29	10YR6/6 明黄褐色シルトと10YR3/4 暗褐色シルトの混合	?	主柱穴
18	23	5	19	10YR2/2 黒褐色シルト、炭化物粒多量	?	
19	27～75	10～45	9	10YR2/2 黒褐色シルト、炭化物粒多量	—	
20	26～38	10	11	10YR2/2 黒褐色シルト、炭化物粒多量	?	
21	12	5	30	10YR2/2 黒褐色シルト	?	主柱穴
22	16～21	6	9	10YR2/2 黒褐色シルト	?	支柱穴？
23	25～45	15～20	10	?	—	
24	30～40	10	12	?	—	

表５　SI 4 ピット一覧表

壁はわずかに傾斜して立ち上がる。最も遺存状態が良いのは西側で高さは約12cmある。

床面は掘りこんだ底面をそのまま使用しているが、床面は北から南に向かって緩やかに傾斜しており、高低差は約10cmある。

床面からはピット24基を検出したが、炉などの施設は検出できなかった。ピットの詳細は表５の通りであるが、深さから考えて主柱穴の可能性があるのがＰ３・12・17・21で、このうちＰ12・17は住居のほぼ長軸線上に位置しており、Ｐ３を含めると平面的には歪んだ三角形を形成している。柱の間隔はＰ３～Ｐ12が1.50m、Ｐ３～Ｐ17が



No.	写真図版	遺構	種別	遺存度	法量（cm） 口径	底径	器高	外面色調 内面色調	胎土	焼成	調整・備考
1	131 -1	SI 4	弥生土器	口縁部 小片	－	－	－	灰黄褐色 黒褐色	良好 白針微量	軟質	連続する刻目、沈線 内面磨滅
2	131 -2	SI 4	弥生土器	口縁部 小片	－	－	－	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	良好 白針微量	軟質	千鳥状に連続する刺突、沈線 内面磨滅
3	131 -3	SI 4	弥生土器	口縁部 小片	－	－	－	赤褐色 明赤褐色	やや不良 白針微量	軟質	連続する押圧 内面ナデ
4	131 -4	SI 4	弥生土器	体部小片	－	－	－	にぶい黄橙色 橙色	やや不良 白針微量	軟質	沈線（連弧文）、R 撚糸圧痕 内面磨滅
5	－	SI 4	土製品 紡錘車	1/4	推定径５cm 厚さ1.2cm			にぶい黄褐色	やや不良 白針少量	軟質	側面に平行沈線２条、磨滅が激しい

第53図　SI4 出土遺物

1.55m、P12～17が1.85m である。P21はこの三角形からはややずれるがＰ３とは対称的な位置にある。なお、壁際のＰ１・Ｐ４～９のピットは一部を除いてほぼ規則的に並んでおり、これらも柱穴と推定される。

⑵　出土遺物（第53図、写真131）

堆積土中から弥生土器片が約200点の他、土師器片数点が出土した。土師器片は混入品と推定される。図化できたのは弥生土器４点と土製紡錘車１点である。外面に刻目や刺突、指頭状の押圧、沈線が施されている。

５．５号住居跡－ＳＩ５－

⑴　遺　　構（第54図、写真79）

調査区西部に位置する。中央部を５号墳の周溝に切られている他、ＳＫ20・21にも切られている。平面形は隅円長方形で、主軸方向はN-47°-E、北西～南東長3.3m、南西～北東長4.25m である。

堆積土は２層確認され、自然堆積と推定される。床面上には炭化材が認められた（写真79）。

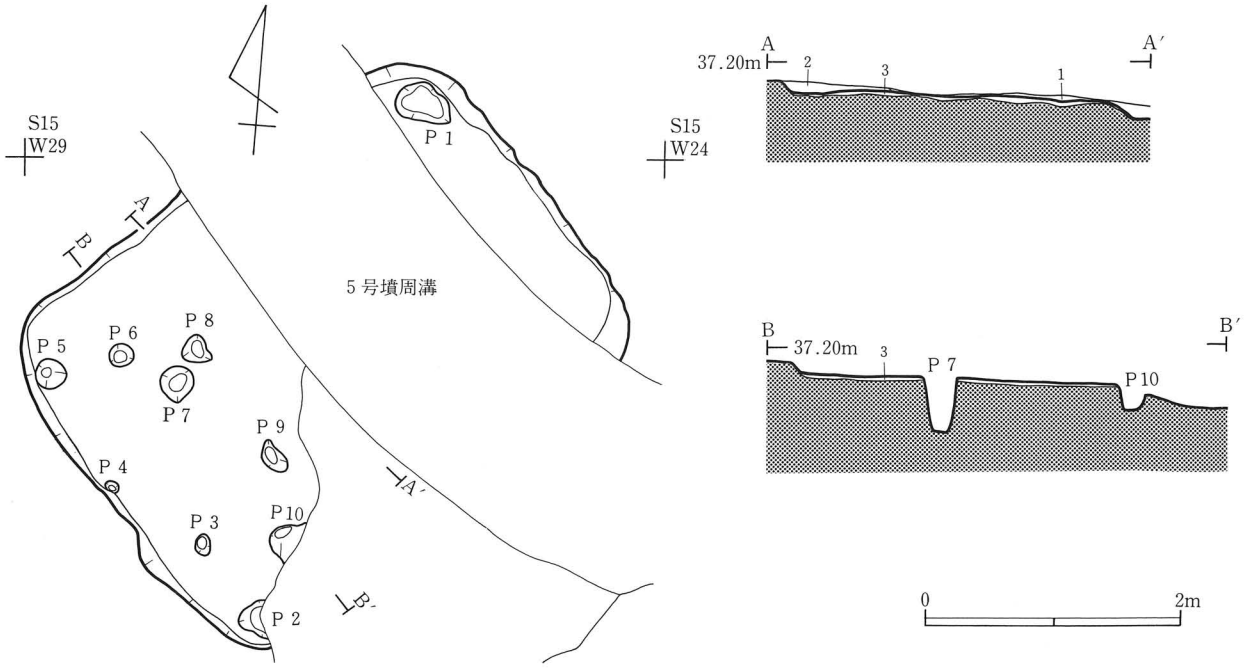
壁はやや崩落していると考えられ、傾斜して立ち上がる。最も遺存状態が良いのは北西側で高さは約10cmある。

床面は住居の掘り方を褐色シルトで２～３cmほど埋め戻して構築している。床面のレベルはほぼ水平である。

床面からはピット10基を検出した。詳細は表６の通りであるが、このうち主柱穴と考えられるのがＰ７・10で住居のほぼ対角線上に位置している。柱穴の間隔は1.45m である。また壁際に規則的並ぶＰ１・２・４・５は壁柱穴の可能性がある。

⑵　出土遺物（第55図、写真132）

堆積土中から弥生土器片が約30点、土師器片と剝片数点が出土した。土師器片は混入品と推定される。弥生土器は大部分が同一個体の破片と推定されたが接合できず、図化できたのは小片２点のみである。壺と推定され、口縁部外面に連続する刺突が施されている。

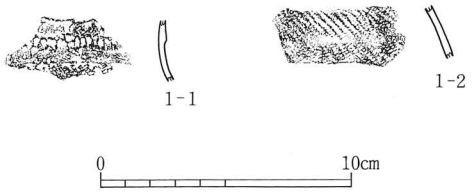


層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3/2 黒褐色	シルト	黄褐色シルトブロック多量、炭化物粒多量
2	10YR 3/3 暗褐色	シルト	黄褐色シルトブロック多量、炭化物粒多量
3	10YR 4/6 褐色	シルト	暗褐色シルトブロック多量、炭化物粒少量

第54図　SI 5 平面・断面図

No.	掘り方 (cm) 上端径	下端径	深さ	土質	柱痕跡	備考
1	30～45	23～30	7	5YR3/3 赤褐色粘土質シルト、焼土粒少量、炭化物粒多量	?	壁柱穴？
2	27	18	17	5YR3/3 赤褐色粘土質シルト、焼土粒少量、炭化物粒多量	?	壁柱穴？
3	13～17	7～12	7	5YR3/3 赤褐色粘土質シルト、焼土粒少量、炭化物粒多量	?	
4	9～11	5	?	5YR3/3 赤褐色粘土質シルト、焼土粒少量、炭化物粒多量	?	壁柱穴？
5	25	8	9	5YR3/3 赤褐色粘土質シルト、焼土粒少量、炭化物粒多量	?	壁柱穴？
6	20	9	5	10YR3/3 暗褐色粘土質シルト、褐色シルト質粘土ブロック少量	?	
7	25～30	10～17	38	10YR3/3 暗褐色粘土質シルト、褐色シルト質粘土ブロック少量	?	主柱穴
8	20～25	9～14	9	10YR4/6 褐色シルト、暗褐色シルトブロック少量	?	
9	15～28	7～14	7	10YR3/3 暗褐色粘土質シルト、褐色シルト質粘土ブロック少量	?	
10	30	7～13	20	5YR3/3 赤褐色粘土質シルト、焼土粒少量、炭化物粒多量	?	主柱穴

表６　SI 5 ピット一覧表



No.	写真図版	遺構	種別	遺存度	法量 (cm) 口径	底径	器高	外面色調 内面色調	胎土	焼成	調整・備考
1	132	SI 5	弥生土器・壺	小片	－	－	－	黒褐色 にぶい黄褐色	良好 白針微量	良好	連続する刺突、縄文 LR 内面ナデ

第55図　SI5 出土遺物

６．６号住居跡－ＳＩ６－

(1) 遺　　構（第56図、写真80）

調査区西部のＳＤ４の北側に位置する。南東コーナーが攪乱のため切られているが、平面形はやや歪んだ隅円長方形である。主軸方向はＮ－３°－Ｗ、南北長5.25m、東西長5.85mで、内部には炉が設けられている。

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3/4 暗褐色	シルト	
2	10YR 4/4 褐色	シルト	焼土粒・炭化物粒少量
3	7.5YR 3/3 暗褐色	シルト	焼土粒・炭化物粒多量

貯蔵穴

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 2/2 黒褐色	シルト	焼土粒微量
2	10YR 3/2 黒褐色	シルト	炭化物粒多量・焼土粒少量
3	7.5YR 3/2 黒褐色	シルト	焼土粒・炭化物粒少量

炉

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 2/2 黒色	シルト	焼土ブロック少量、炭化物粒微量
2	2.5YR 4/6 赤褐色	シルト	炭化物粒微量
3	5YR 3/6 暗赤褐色	シルト	焼土粒少量、炭化物粒微量 粗砂多量
4	2.5YR 4/6 赤褐色	シルト	焼土
5	10YR 4/4 褐色	シルト	焼土粒少量、炭化物粒微量

第56図　SI６平面・断面図

No.	掘り方(cm)				柱痕跡	備考
	上端径	下端径	深さ	土質		
1	31～35	9～11	46	10YR3/2 黒褐色シルト、焼土粒少量、炭化物粒少量	?	主柱穴
2	20～27	12～16	7	10YR3/2 黒褐色シルト、褐色シルトブロック少量、焼土粒・炭化物粒少量	?	支柱穴?
3	20	11	39	10YR3/2 黒褐色シルト、褐色シルトブロック少量、焼土粒・炭化物粒少量	?	主柱穴
4	30	5～17	21	上層10YR4/4 褐色粘土質シルト、黒褐色シルトブロック少量 下層10YR3/3 暗褐色シルト、焼土粒少量、炭化物粒少量	?	支柱穴
5	22～32	10～15	47	10YR3/2 黒褐色シルト、焼土粒少量、炭化物粒	?	主柱穴
6	20～30	6～15	11	10YR3/2 黒褐色シルト、褐色シルトブロック少量、焼土粒・炭化物粒少量	?	支柱穴?
7	20～30	11～22	8	10YR3/2 黒褐色シルト、褐色シルトブロック少量、焼土粒・炭化物粒少量	?	支柱穴?
8	35～40	13～17	45	10YR3/2 黒褐色シルト、褐色シルトブロック少量、焼土粒・炭化物粒少量	?	主柱穴
9	16～25	10～13	9	10YR3/2 黒褐色シルト、焼土粒少量、炭化物粒少量	?	
10	35～47	7	17	10YR3/2 黒褐色シルト、褐色シルトブロック少量、焼土粒・炭化物粒少量	?	
11	35	10～14	10	10YR3/2 黒褐色シルト、焼土粒少量、炭化物粒少量	?	
12	35～50	7～24	12	10YR3/2 黒褐色シルト、褐色シルトブロック少量、焼土粒・炭化物粒少量	?	
貯蔵穴	70～80	30～44	39	図参照	－	方形

表７　SI ６ピット一覧表

堆積土は自然堆積で、下層には焼土や炭化材を多量に含んでいる。

壁は傾斜して立ち上がり、最も遺存状態が良い北側の高さは約30cmである。

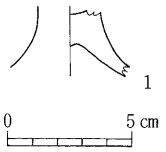
床面は掘り込んだ底面をそのまま利用して床面としている。床面は北東から南西に向かって緩やかに傾斜しており、高低差は約12cmある。

床面からはピット12基、貯蔵穴１基、炉１基を検出した。ピットの詳細は表７の通りであるが、このうち主柱穴と考えられるのがＰ１・３・５・８で住居のほぼ対角線上に位置している。柱の間隔は南北が2.65～2.7m、東西が3.0～3.05m である。南壁際のＰ４は支柱穴と推定される。貯蔵穴と考えられる土坑は南壁際の東寄りにあり、平面形は方形である。

炉は床面を５～10cm掘り窪めたもので、住居のほぼ中央にある。平面形は不整形で、大きさは60～150cm、内部には焼土が堆積していて、その一部は硬化していた。

⑵　出土遺物（第57図、写真133）

堆積土中から土師器片約40点の他、埴輪片、陶器片、瓦片、剝片などが出土した。遺構に伴う遺物を確定することはできないが、土師器以外の遺物は混入品と推定される。土師器はすべて非ロクロ調整で、図化できたのは高坏１点のみである。



No.	写真図版	遺構	種別	遺存度	法量(cm)			外面色調 内面色調	胎土	焼成	調整・備考
					口径	底径	器高				
1	133	SI 6	土師器・高杯	脚部上半のみ	－	－	－	橙～褐色 にぶい黄褐色	やや不良 白針微量	軟質	(外)？(磨滅) (内)？(磨滅)

第57図　SI6 出土遺物

第３節　埴輪棺墓

⑴　遺　　構（第58図、写真81～83）

円筒埴輪を棺として転用した埴輪棺墓を１基検出し、ＳＫ３とした。位置は３号墳の南側で、周溝から約２ｍ離れている。Ⅲ層上面でプランを確認した際は埴輪棺の上側になっている面は既に削平されていた。

土壙の平面形は短辺側がやや丸みを帯びる長方形で、長さ0.9m、幅0.35m、主軸方向は真東西方向を向いている。土壙の断面形は円筒埴輪に合わせて「Ｕ」字形に掘られており、遺存していた深さは約15cmであった。規模は埴輪よりもやや大きい程度である。

埴輪棺は口縁部を西にして横倒しに埋納されていた。口縁部と底部は別の埴輪片でふさがれていたが、蓋とされた破片は棺内部に倒れ込んでおり、棺内部にも土が流入していた。なお、内部の土壌は全て水洗したが何も検出できなかった。

⑵　出土遺物（第59・60図、写真134）

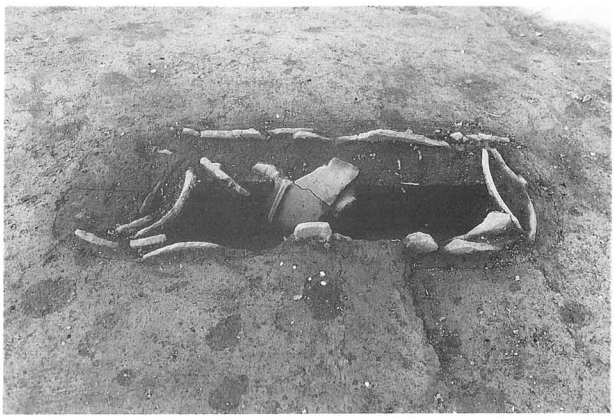
遺物は埴輪片が約160点（約4.1kg）出土したが、その大部分は埴輪棺として使用された円筒埴輪である。その他に蓋として使用されていた円筒埴輪片２点、棺の下から出土した円筒埴輪片１点がある。

埴輪棺（第59図）　器高が60cm近くあり、凸帯も３条あるなど、古墳出土の埴輪とは異なっている。外面調整は１次調整のタテハケのみ、内面調整は１～３段目が縦方向のナデ、３～４段目がヨコハケである。底部からほぼ直立して立ち上がる器形で、４段目から口縁部にかけて緩やかに外反し、口縁端部はやや丸く収められている。スカシ孔は３段目の上方に寄っており、比較的歪みは少ない円形である。凸帯は先に述べたように３条あり、断面形は台形である。段の幅は３段目だけが13.5cmとやや狭いが、１・２段目と４段目は15～15.5cmで、ほぼ同じである。なお、底部には棒状の圧痕が認められた。

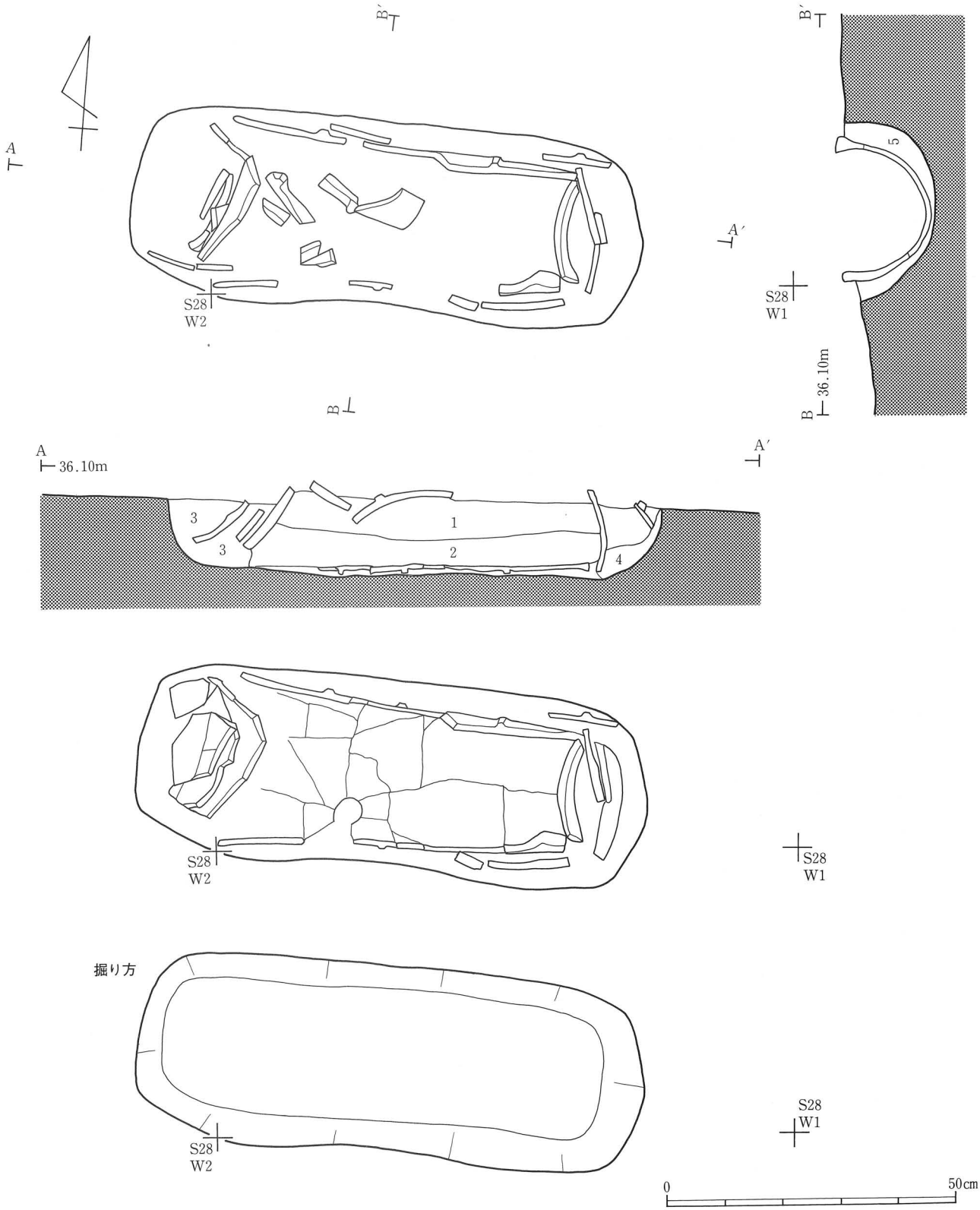
埴輪棺東蓋（第60図１）　埴輪棺の底部側の蓋として利用されていた。円筒埴輪の口縁部片で、外面調整は１次調整のタテハケのみ、内面調整はヨコハケである。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部はほぼ平坦である。器形や調整技法は埴輪棺と類似しているが、復元した口径は埴輪棺よりもひと回り大きい。

埴輪棺西蓋（第60図２）　埴輪棺の口縁部側の蓋として利用されていた。円筒埴輪の円筒部の破片で、外面調整は１次調整のタテハケのみ、内面調整は縦方向のナデである。凸帯の断面形は端面がやや窪む台形である。

棺下出土（第60図３）　埴輪棺の下から出土したもので、棺との関連は不明である。円筒埴輪の口縁部片で、外面調整は１次調整のタテハケのみ、内面調整は斜め方向のナデである。口縁端部がわずかにくびれている特徴を持つ。

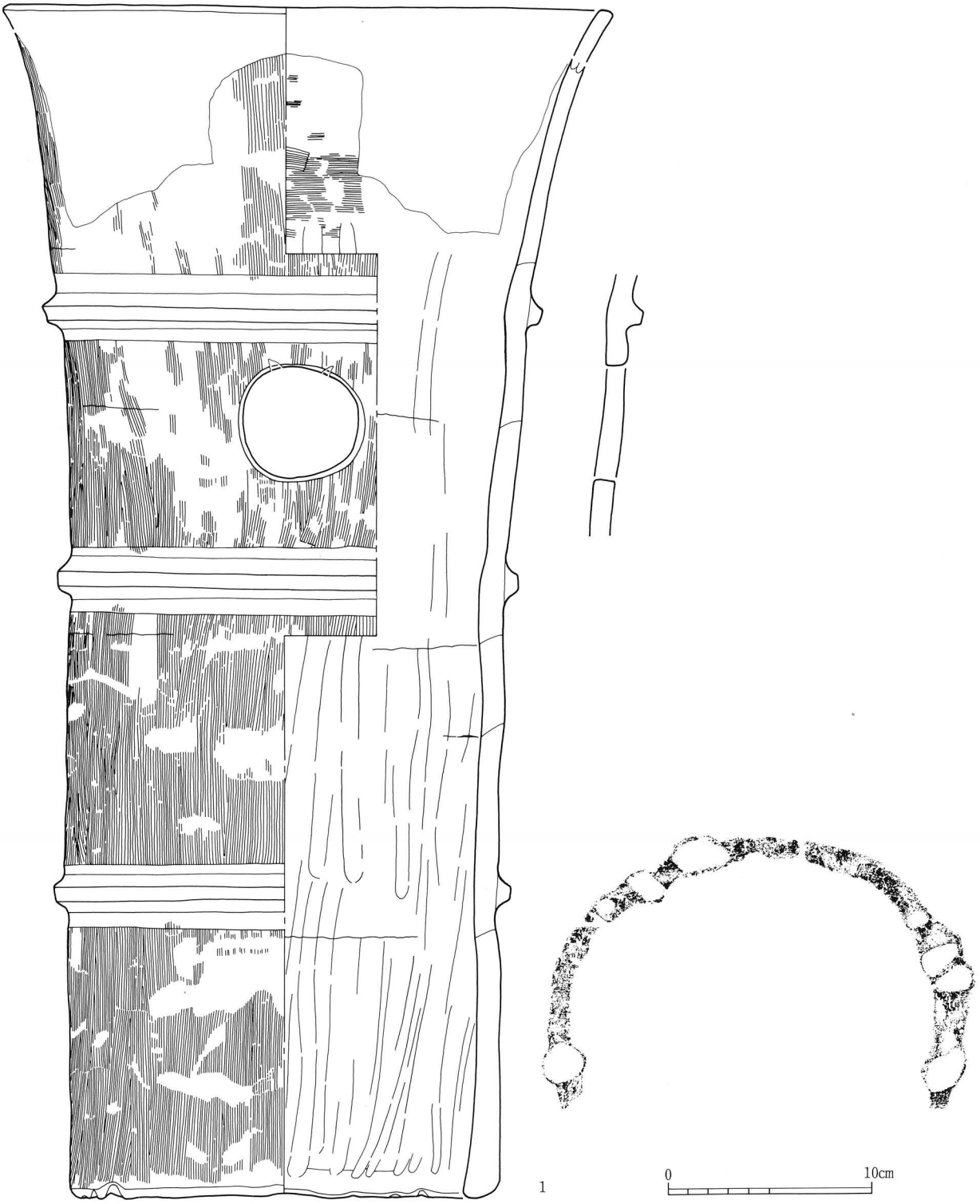


ＳＫ３―埴輪棺墓



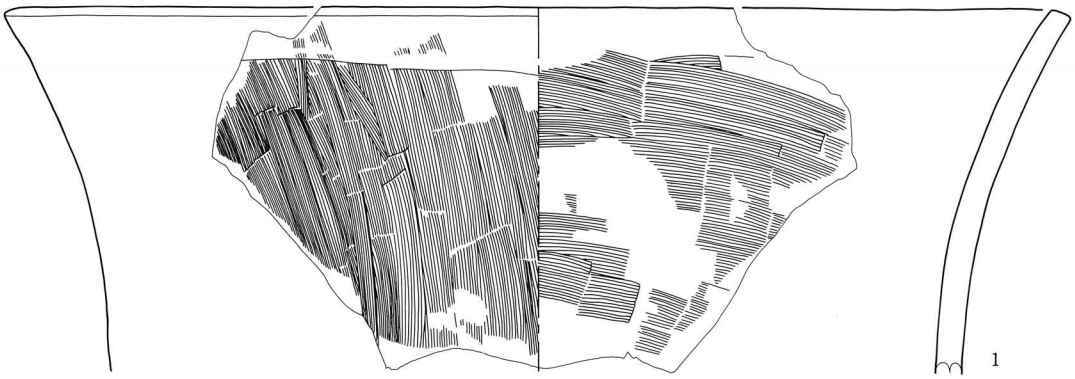
層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3/3 暗褐色	シルト	黄褐色粘土質シルトブロック少量
2	10YR 2/3 黒褐色	シルト	黄褐色粘土質シルトブロック微量
3	10YR 3/4 暗褐色	シルト	黄褐色粘土質シルトブロック微量
4	10YR 3/4 暗褐色	シルト	黄褐色粘土質シルトブロック少量
5	10YR 6/6 明黄褐色 10YR 3/3 暗褐色	粘土 シルト	混合

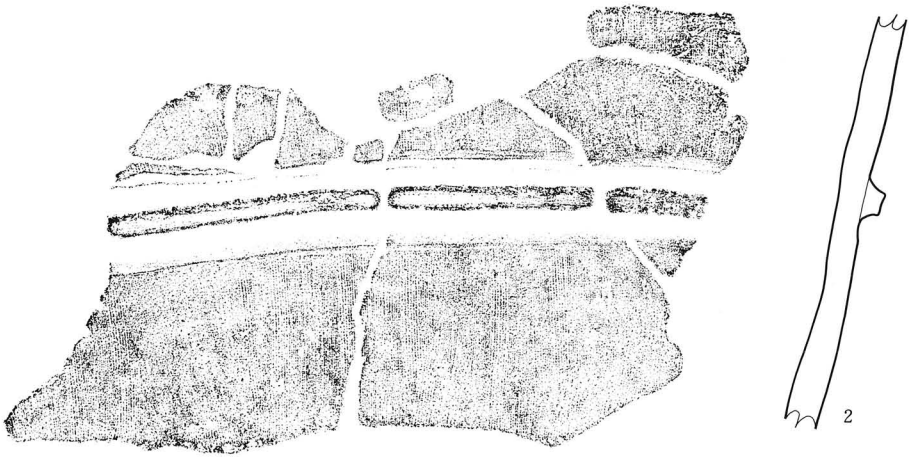
第58図　SK３（埴輪棺墓）平面・断面図

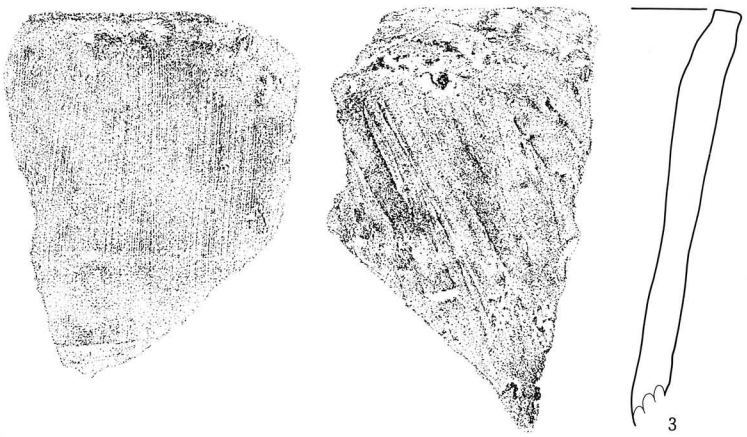


No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm) 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外面調整・備　考 内面調整・備　考
1	134 -1	SK　3 埴輪棺	円筒 埴輪	1/2	(30.0)	21.2	59.4 4段目15.0 3段目13.5 2段目15.5 1段目15.0	円形	橙色 橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 1～3段目縦方向ナデ、3・4段目ヨコハケ **7類**

第59図　SK3－埴輪棺墓出土遺物（1）







0　10cm

No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm) 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外面調整・備　考 内面調整・備　考
1	134 -2	SK　3 埴輪棺東蓋	円筒 埴輪	口縁部 1/4	(41.8)	－	－	－	橙色 橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、口縁部ヨコナデ 横方向ハケメ、口縁部ヨコナデ
2	134 -3	SK　3 埴輪棺西蓋	円筒 埴輪	体部片	－	－	－	－	明赤褐色 明赤褐色	良好 白針微量	良好	タテハケ、凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ
3	134 -4	SK　3 埴輪棺下	円筒 埴輪	口縁部 1/7	－	－	－	－	橙色 橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、口縁部ヨコナデ 斜め方向ナデ、口縁部横方向ナデ

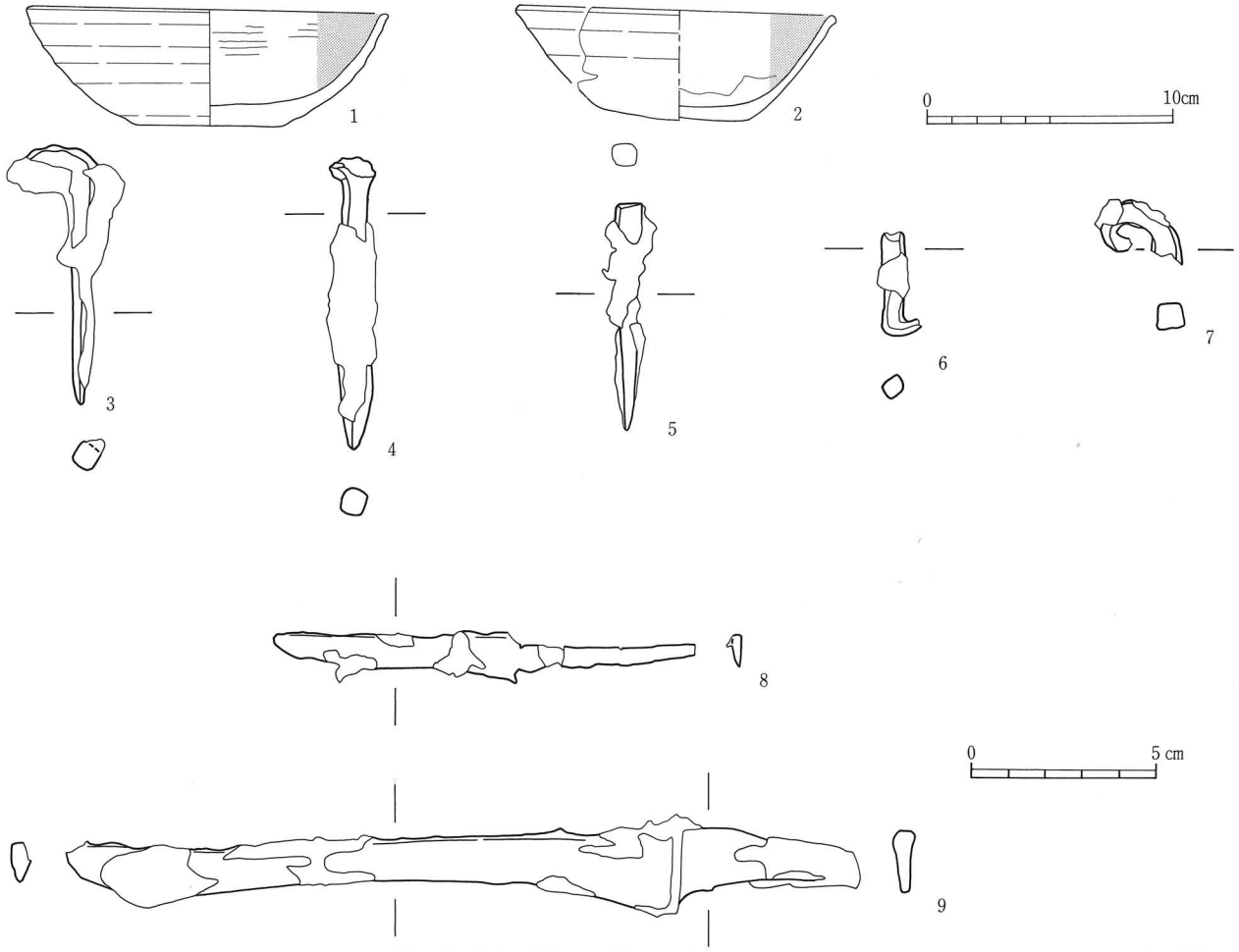
第60図　SK3－埴輪棺墓出土遺物 (2)

第４節　土 壙 墓

調査区南部で長方形の土坑を数基検出した。このうちＳＫ２・７・11については副葬品とみられる土師器坏や鉄製刀子が出土していることから平安時代の「墓」と推定される。棺は確認できなかったので一応「土壙墓」としたが、ＳＫ２からは鉄釘が出土していることから木棺墓であった可能性がある。なお、ＳＫ８については平面形がほぼ同じであることからこの項に入れたが、別の性格を持つ可能性もある。

１．２号土壙 ― ＳＫ２ ―

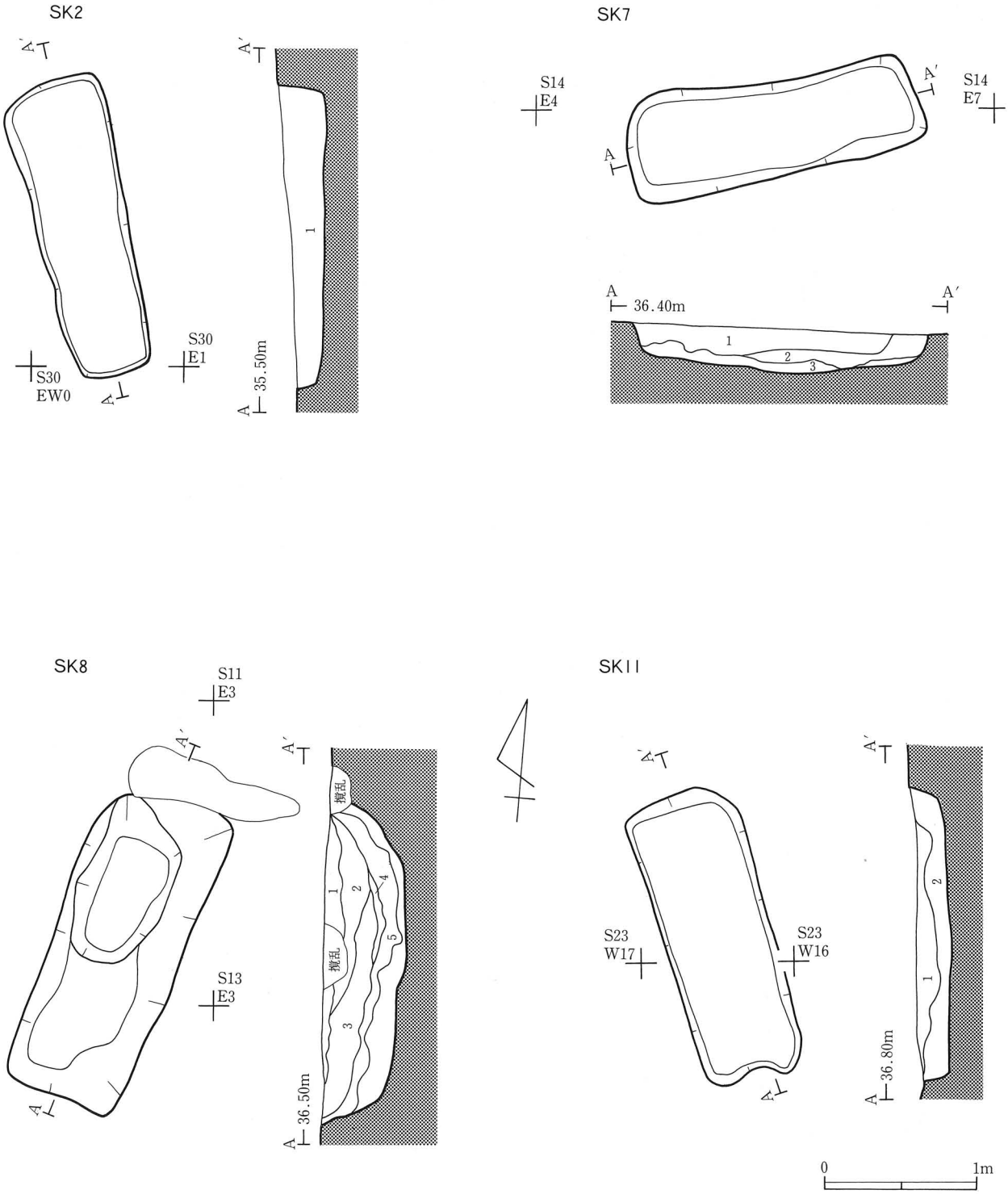
２号墳と３号墳の南に位置する。平面形は長方形で、規模は2.0×0.55～0.7m、遺存する深さ30cm、主軸方向はＮ-18°-Ｗである。堆積土はブロック混じりの単層で、一度に埋め戻されたような状況を示している。底面は平坦である。ロクロ調整の土師器坏１点、鉄製刀子１点、鉄釘５点（第61図１・３～８）が出土している。



No.	写真図版	遺構	種別	遺存度	法量 (cm) 口径	底径	器高	外面色調 内面色調	胎土	焼成	調整・備考
1	135 -1	SK 2	土師器・杯	ほぼ完形	14.6 底径／口径0.41	6.0	4.8	橙色 黒色	良好 白針多量	良好	(外) ロクロ調整、底部調整技法不明（磨滅） (内) ヘラミガキ黒色処理
2	135 -2	SK 11	土師器・杯	1/3	12.8 底径／口径0.45	5.8	4.3	橙色 黒色	良好 白針多量	やや軟質	(外) ロクロ調整、底部回転糸切り無調整 (内) ヘラミガキ黒色処理（磨滅激しい）

No.	写真図版	遺構・層位	種別	遺存度	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴
3	135-3	SK 2	鉄製品・釘	ほぼ完形	7.0	0.6	0.6	12.3	
4	135-4	SK 2	鉄製品・釘	ほぼ完形	7.9	0.5	0.7	10.1	
5	135-5	SK 2	鉄製品・釘	頭部欠損	(6.2)	0.7	0.6	5.7	
6	135-6	SK 2	鉄製品・釘	両端欠損	(2.8)	0.6	0.7	2.5	
7	135-7	SK 2	鉄製品・釘	小片	(2.6)	0.6	0.7	3.2	
8	135-8	SK 2	鉄製品・刀子	ほぼ完形	(11.3)	1.4	0.3	5.7	茎端部欠損
9	135-9	SK 7	鉄製品・刀子	ほぼ完形	(21.4)	2.3	0.6	37.4	茎端部欠損

第61図　SK2・7・11（土壙墓）出土遺物



SK2

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3/2 黒褐色	シルト質粘土	褐色粘土ブロック少量

SK8

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3/4 暗褐色	シルト	炭化物粒微量
2	10YR 2/3 黒褐色	シルト質粘土	
3	7.5YR 3/2 黒褐色	シルト質粘土	小礫少量
4	10YR 4/6 褐色	粘土	
5	7.5YR 3/3 暗褐色	シルト質粘土	炭化物粒微量

SK7

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 2/2 黒褐色	シルト質粘土	黄褐色粘土質シルトブロック少量
2	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	
3	10YR 4/6 褐色	粘土	小礫少量

SK11

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3/3 暗褐色 10YR 6/6 明黄褐色	シルト 粘土質シルト	混合
2	10YR 4/3 にぶい黄褐色 10YR 6/6 明黄褐色	粘土質シルト 粘土質シルト	混合

第62図　SK２．７．８．11平面・断面図

２．７号土壙―ＳＫ７―

２号墳の北側に位置する。平面形は長方形で、規模は1.95×0.6～0.7m、遺存する深さは約30cm、主軸方向はＮ-73°-Ｅである。堆積土は３層確認されたが、ブロック混じりの層を主とし、一度に埋め戻されたような状況を示している。底面は平坦である。やや大型の鉄製刀子１点（第61図９）が出土している。

３．８号土壙―ＳＫ８―

４号墳の南側に隣接して位置し、ＳＫ７にも近い。平面形は長方形で、規模は2.1×0.85m、遺存する深さは約50cm、主軸方向はＮ-18°-Ｅである。堆積土は５層確認された。平面形は他の土壙と類似するが、底面は他の土壙とは異なって平坦ではなく、堆積土の状況もやや異なる印象を受ける。このため他とは異った性格を有する可能性もある。出土遺物はない。

４．11号土壙―ＳＫ11―

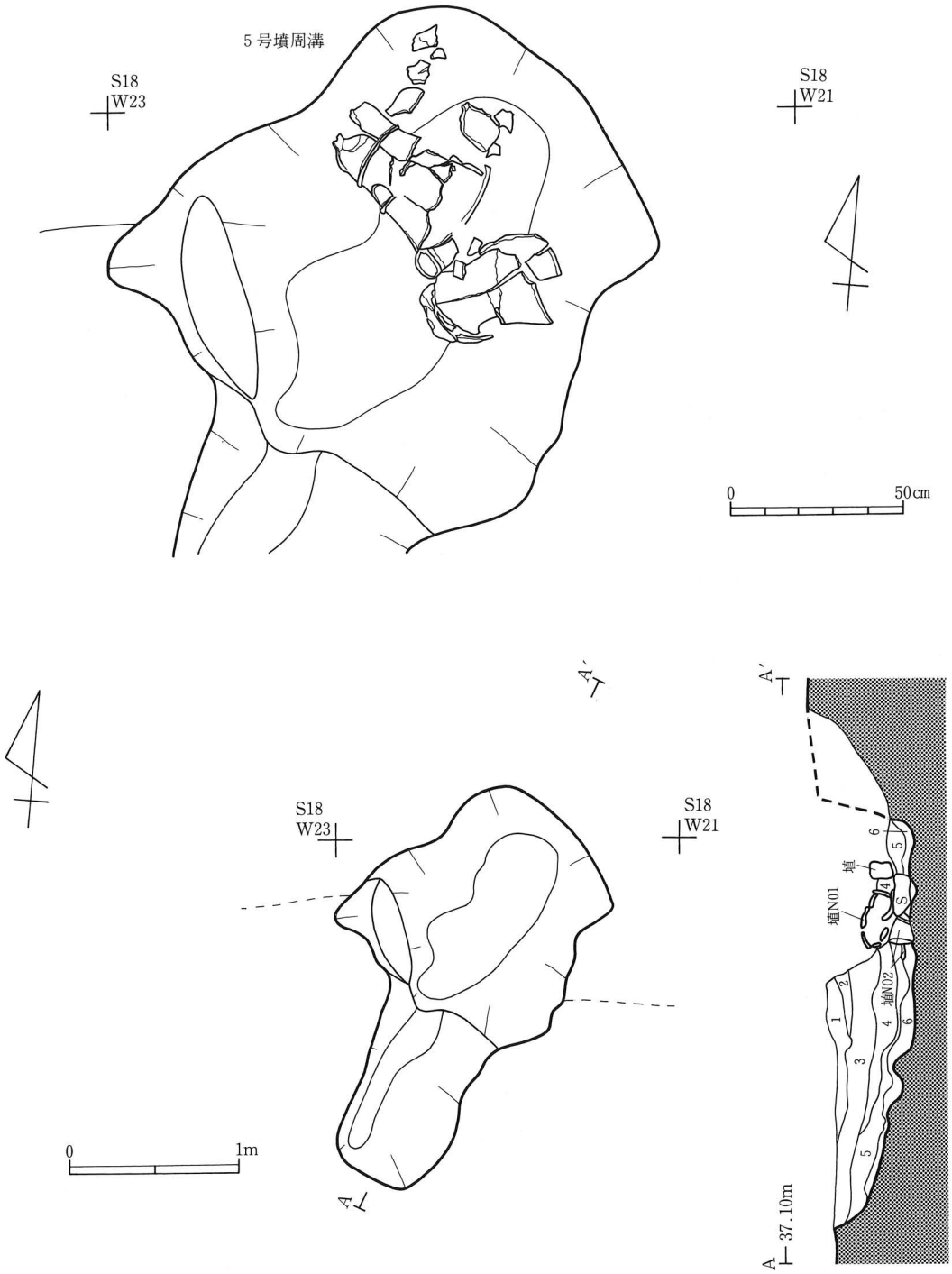
５号墳の南側に位置する。平面形は長方形で、規模は2.0×0.70m、遺存する深さは約25cm、主軸方向はＮ-67°-Ｅである。堆積土は２層確認されたが、ブロック混じりの層を主とし、一度に埋め戻されたような状況を示している。底面は平坦である。ロクロ調整の土師器坏１点（第61図２）が出土している。

第５節　その他の土坑

その他の土坑は29基ある。これらは埴輪が廃棄されたかのような状態で出土した１基、壁面が火を受けて焼土化した９基、さらにその他の19基に分けられる。後の２者については出土遺物がほとんどないため年代の特定が困難であり、性格もほとんど不明なため、ここでの記述は割愛し、一覧表（表８）で示すこととする。以下にはＳＫ14についてのみ記述する。

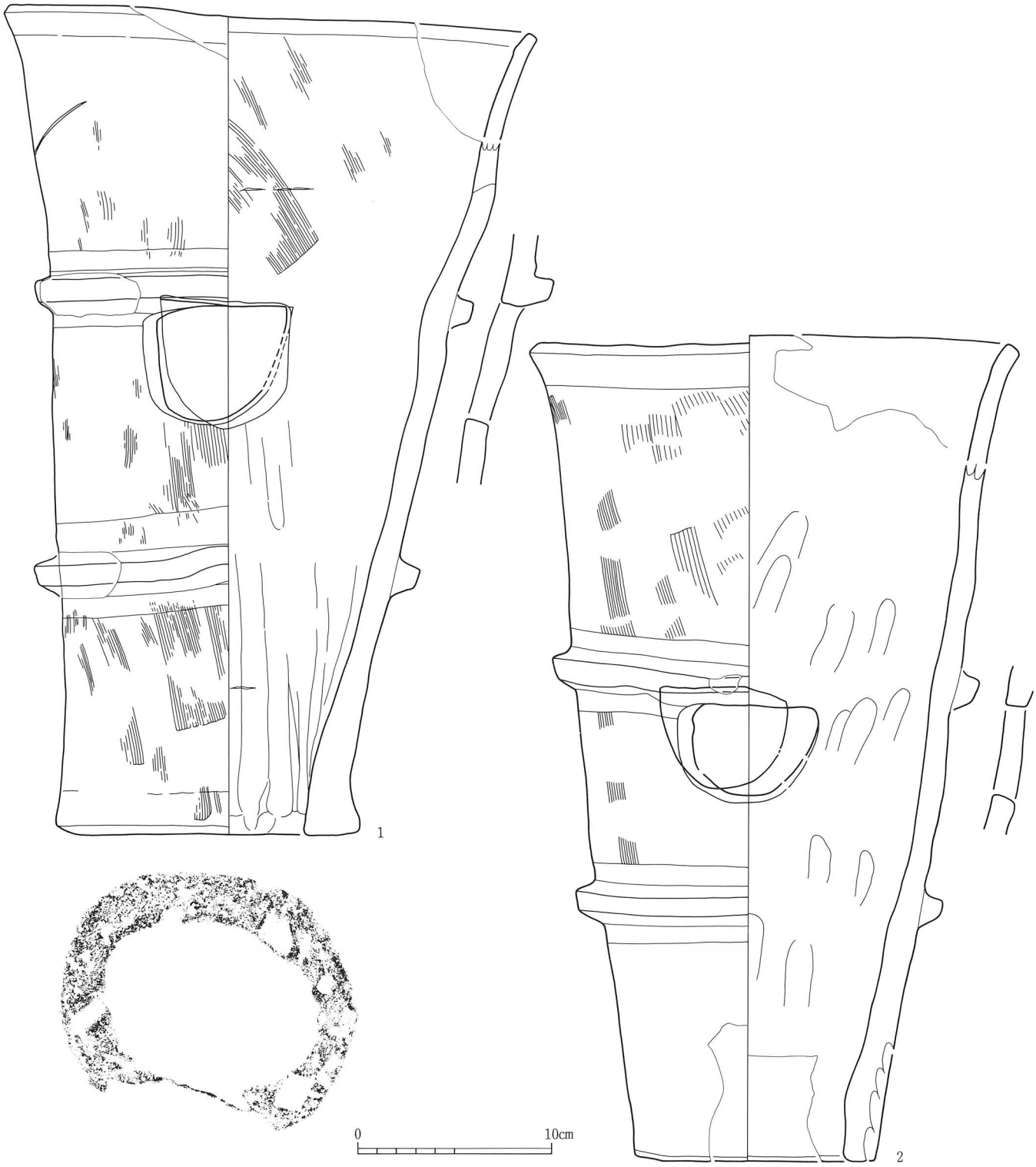
No.	平面形	規模（m）	深さ（m）	切り合い関係	主軸方向	備　考
1	長方形	2.1×0.65	0.35		Ｎ－５°－Ｅ	
2	長方形	2.0×0.6	0.25		Ｎ－18°－Ｗ	土壙墓
3	長方形	0.9×0.35	0.15		ＥＷ	埴輪棺墓
4	楕円形	0.9×0.35以上	0.15	１号墳周溝に切られる	Ｎ－34°－Ｅ	
5	円形？	0.95×0.65以上	0.25	２号墳周溝に切られる		壁面が焼土化
6	楕円形	1.25×0.95	0.25	３号墳周溝に切られる	Ｎ－18°－Ｅ	壁面が焼土化
7	長方形	1.95×0.6	0.25		Ｎ－73°－Ｅ	土壙墓
8	長方形	2.1×0.85	0.55		Ｎ－18°－Ｅ	土壙墓？
9	不整形	2.0？以上×1.15	0.25	１号墳周溝に切られる	Ｎ－69°－Ｅ	
10	長方形	1.0×0.75	0.2	４号墳周溝を切る	Ｎ－10°－Ｅ	壁面が焼土化
11	長方形	2.0×0.7	0.2		Ｎ－67°－Ｅ	土壙墓
12	円　形	1.0×1.0	0.1	３号墳周溝に切られる	Ｎ－15°－Ｗ	
13	長方形	2.4×0.6	0.45	SD2に切られる	Ｎ－52°－Ｅ	
14	不整形	2.4×1.3	0.1	５号墳周溝・SK23を切る		
15	楕円形	1.0×0.6	0.05		Ｎ－54°－Ｗ	
16	長方形	0.75以上×0.5	0.10		Ｎ－53°－Ｅ	
17	楕円形	0.95×0.7	0.20		Ｎ－24°－Ｅ	
18	不整形	1.4×0.9	0.15	２号住居跡に切られる	Ｎ－75°－Ｗ	剝片出土
19	長方形	1.0×0.5	0.4	SK23を切る、SK22に切られる	Ｎ－24°－Ｅ	
20	長方形	3.2×0.75	0.15	５号住居跡・SK21を切る	Ｎ－18°－Ｗ	
21	不整形	2.5×2.2	0.15	５号住居跡を切る ５号墳周溝・SK20に切られる	Ｎ－52°－Ｅ	
22	不整形	0.85×0.5	0.15	SK19を切る	Ｎ－25°－Ｅ	
23	不整形	?	0.15	SK14・19に切られる	Ｎ－57°－Ｗ	
24	長方形	1.15×0.65	0.35		Ｎ－62°－Ｗ	壁面が焼土化
25	長方形	1.0×0.6	0.15		Ｎ－76°－Ｗ	壁面が焼土化
26	長方形	0.85×0.6	0.2		Ｎ－51°－Ｗ	壁面が焼土化
27	不整形	2.05×1.05	0.3	SK29を切る	Ｎ－41°－Ｅ	
28	長方形	0.9×0.6	0.15		Ｎ－３°－Ｅ	壁面が焼土化
29	不整形	1.5以上×0.65	0.25	SK27・SD3に切られる	Ｎ－41°－Ｅ	
30	楕円形	1.25×0.85	0.15		Ｎ－89°－Ｗ	
31	長方形	0.95×0.6	0.20		Ｎ－56°－Ｗ	壁面が焼土化
32	長方形	0.95×0.9	0.15		Ｎ－76°－Ｗ	壁面が焼土化
33	不整形	4以上×1.3	0.25	11号墳墳丘下 SK34と重複、新旧不明	Ｎ－13°－Ｗ	
34	不整形	2以上×0.65	0.4	11号墳墳丘下 SK33と重複、新旧不明	Ｎ－40°－Ｅ	

表８　土坑一覧表



層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	褐色粘土ブロック少量
2	7.5YR 3/3 暗褐色	シルト質粘土	
3	7.5YR 3/2 黒褐色	粘土	炭化物片少量
4	10YR 2/3 黒褐色	粘土	
5	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	黄褐色粘土質シルトブロック少量

第63図　SK14平面・断面図



No.	写真図版	遺構	種別	遺存度	法量 (cm) 口径	底径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎土	焼成	外面調整・備考 内面調整・備考
1	136 -1	SK14	円筒 埴輪	ほぼ完形	27.5	15.0	42.8 3段目14.5 2段目14.5 1段目13.5	半円形	橙色 橙色	やや不良 白針微量	やや軟質	タテハケ、口縁・凸帯ヨコナデ、「V」字ヘラ描き線 1・2段目縦方向ナデ、3段目斜め方向ハケメ　**3c類**
2	136 -2	SK14	円筒 埴輪	4/5	22.4	12.3	42.6 3段目16.5 2段目12.0 1段目13.5	半円形	橙色 橙色	やや不良 白針微量	軟質	タテハケ、口縁・凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ　**3c類**

第64図　SK14 出土遺物 (1)

１．第14号土坑－ＳＫ14－

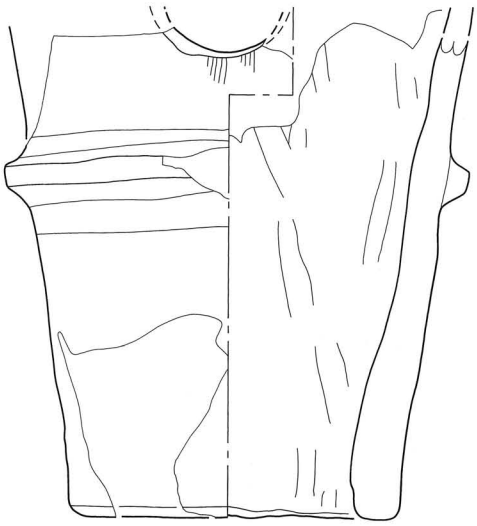
(1)　遺構（第63図、写真90・91）

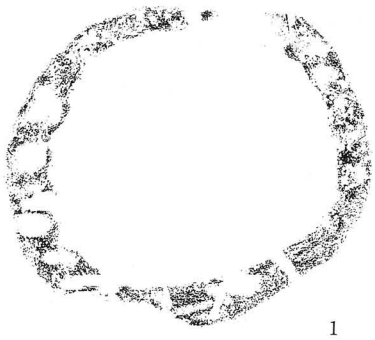
５号墳南側に位置し、周溝の埋没途中あるいは周溝が埋没した後に周溝を切って掘り込まれた土坑である。調査当初はプランが不明確であったため５号墳の周溝として掘り込んでいたが、後で別な遺構であることが判明した。このため平面形の一部が不明であるが、本来は楕円形であったと推定される。規模は1.3×2.4m、深さは約50cm、底面はやや凹凸がある。底面には円筒埴輪３個体が半分潰れたような状態で横たわっており、なんらかの理由で廃棄されたものと考えられる。

(2)　遺　　物（第64・65図、写真136）

円筒埴輪が３点である。２点はほぼ完形に近く（第64図）、他の１点は下半部のみ遺存している。外面調整は１次調整のタテハケのみ、内面調整は縦方向のナデであるが、第64図１のみは３段目が斜め方向のハケメである。底部からほぼ直立して立ち上がる器形で、口縁はごくわずかに外反している。口縁端部は平坦である。スカシ孔は２段目の上方に寄って半円形のものが１対認められたが、第65図のものは円形か半円形か確認できない。凸帯は２条で、断面形は台形である。段の幅は第64図１がほぼ同じであるが２は３段目が広い。なお、底部には棒状の圧痕が認められた。

ＳＫ14　遺物出土状況



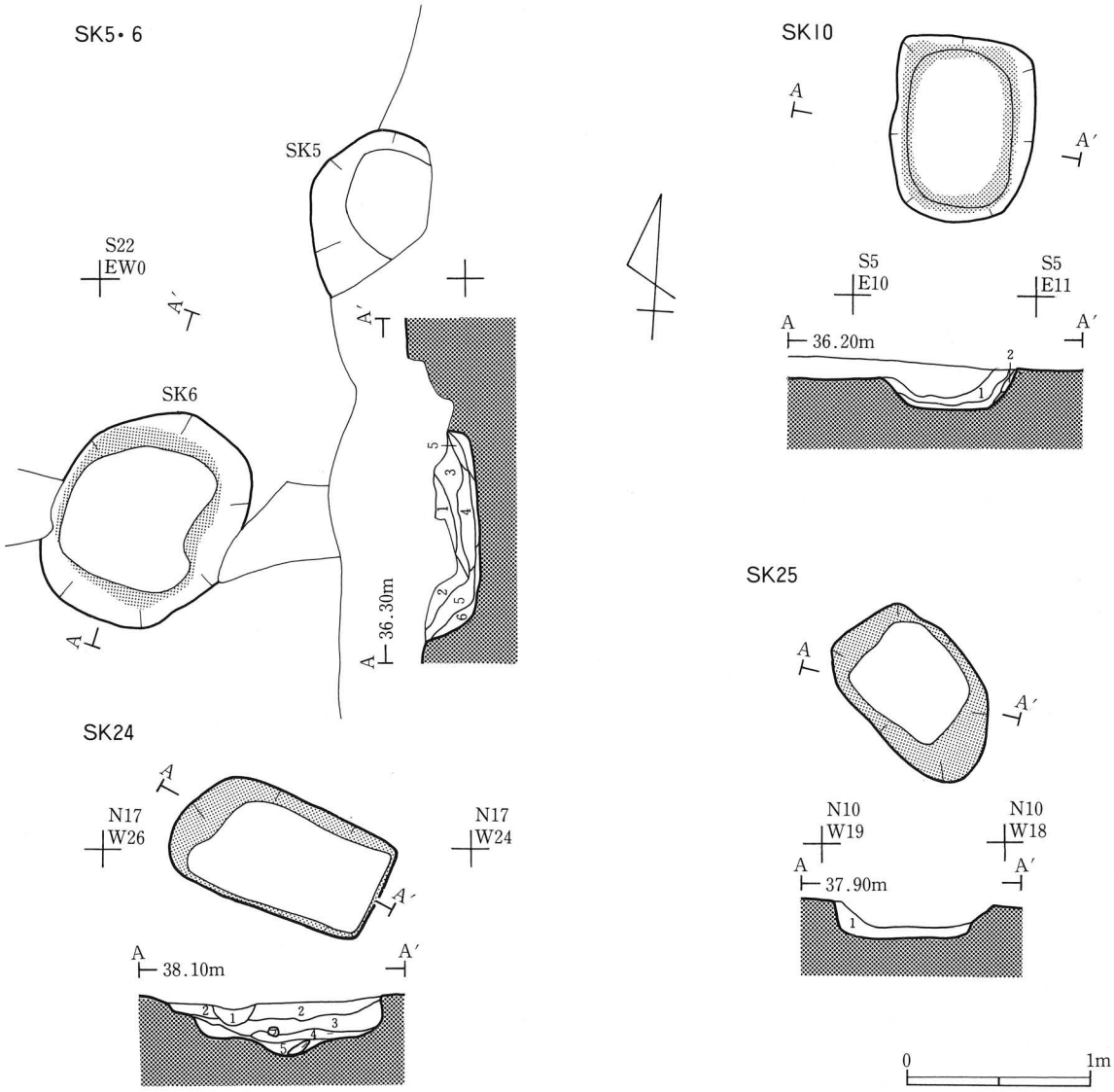


1

0　10cm

No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm) 口　径	底　径	器高・段幅	スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外面調整・備　考 内面調整・備　考
1	136 -3	SK14	円筒 埴輪？	1，2段目	－	13.2	1段目13.5	円形？	橙色 浅黄橙色	やや不良 白針微量	軟質	タテハケ、凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ

第65図　SK14 出土遺物 (2)



SK6

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3/2 黒褐色	粘土質シルト	
2	10YR 3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒少量
3	10YR 3/3 暗褐色	シルト質粘土	炭化物粒少量
4	10YR 3/2 黒褐色	粘土質シルト	炭化物粒少量、層下部に焼土粒少量
5	10YR 3/3 暗褐色	シルト質粘土	黄褐色粘土質シルトブロック少量
6	10YR 6/6 明黄褐色	粘土	部分的に焼土・炭化物粒と互層

SK25

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 2/3 黒褐色	粘土質シルト	炭化物粒多量

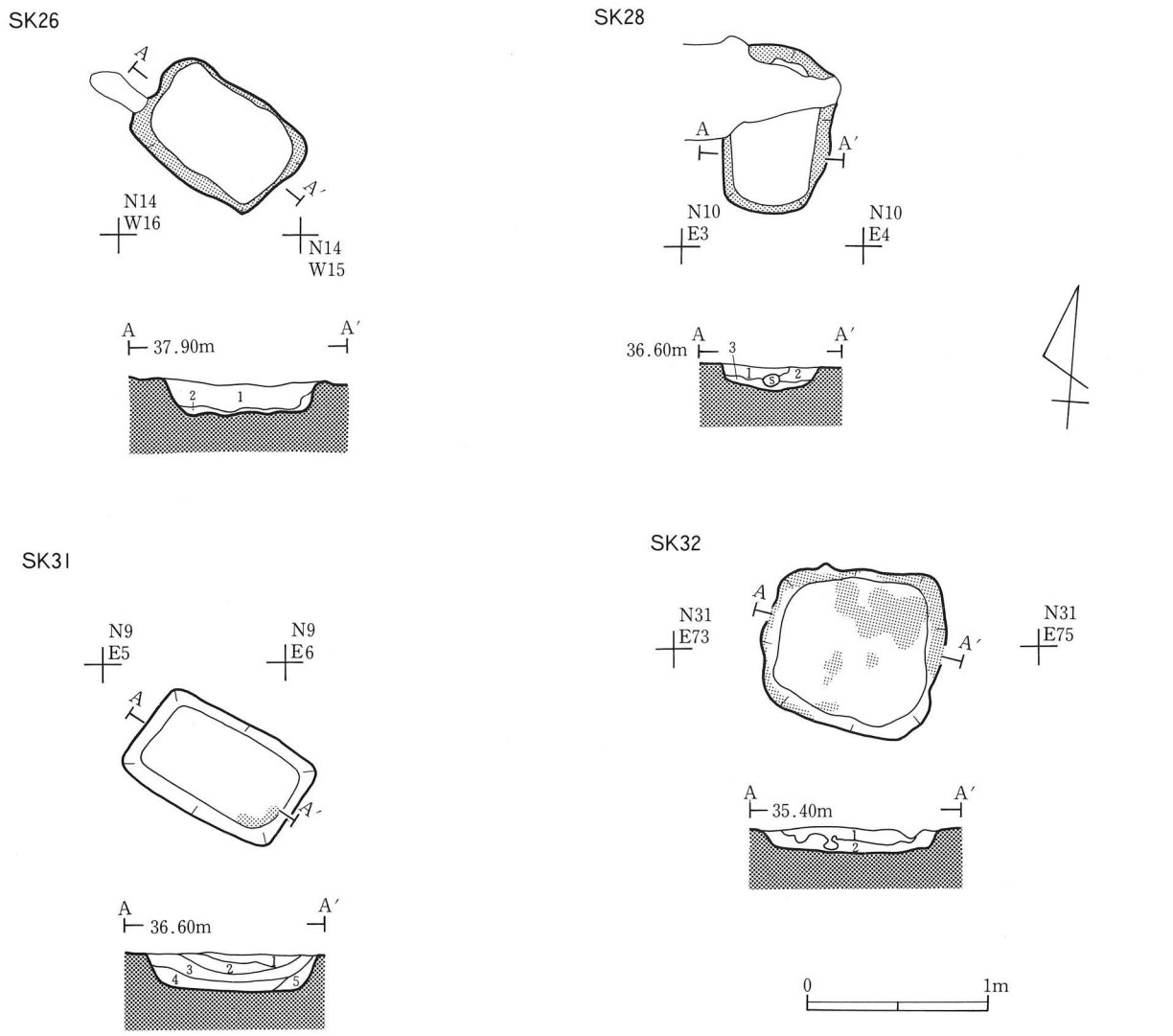
SK10

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土質シルトブロック微量・焼土粒・炭化物粒少量
2	10YR 6/3 にぶい黄橙色	シルト質粘土	焼土粒・炭化物粒少量
3	10YR 6/3 にぶい黄橙色	シルト質粘土	焼土粒・炭化物粒多量

SK24

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3/3 暗褐色	シルト	
2	10YR 3/4 暗褐色	シルト	炭化物粒少量
3	10YR 2/3 黒褐色	粘土質シルト	焼土粒少量、炭化物粒多量
4	10YR 4/4 褐色	粘土質シルト	
5	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	

第66図　その他の土坑　平面・断面図 (1)



SK26

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 2/2 黒褐色	シルト	
2	10YR 3/1 黒褐色	シルト	焼土粒・炭化物粒多量

SK28

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 2/3 黒褐色	シルト	炭化物多量
2	10YR 3/3 暗褐色	シルト	炭化物微量
3	10YR 2/2 黒褐色	粘土質シルト	焼土粒・炭化物多量、黄褐色粘土粒微量

SK31

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	7.5YR 2/1 黒色	シルト	炭化物少量
2	10YR 2/2 黒褐色	シルト	焼土粒微量・炭化物多量
3	7.5YR 2/2 黒褐色	粘土質シルト	炭化物微量
4	10YR 2/1 黒色	粘土質シルト	焼土粒・炭化物・黄褐色粘土粒多量
5	10YR 3/2 黒褐色	シルト質粘土	焼土粒・炭化物多量

SK32

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3/1 黒褐色	シルト	炭化物粒多量
2	10YR 2/1 黒色	シルト	炭化物粒多量

第67図　その他の土坑　平面・断面図 (2)

第６節　溝　　跡

溝跡は６条確認しているが、このうちＳＤ２・３・５・６については遺構の切り合い関係から古墳や土坑等よりも新しいことが判っている。ＳＤ２・３と、ＳＤ５・６はそれぞれがほぼ平行する位置関係にあり、ＳＤ５は、ＳＤ３に切られるもののこれとほぼ直交していることから、これらの溝跡は若干の時間差はあるものの互いに関連が

深いものと推定される。出土遺物がほとんどないため年代は確定できないが、ＳＤ３については調査区壁の断面観察で表土（Ｉ層）直下から掘り込まれていることを確認していることから、現代に近い時期が考えられる。

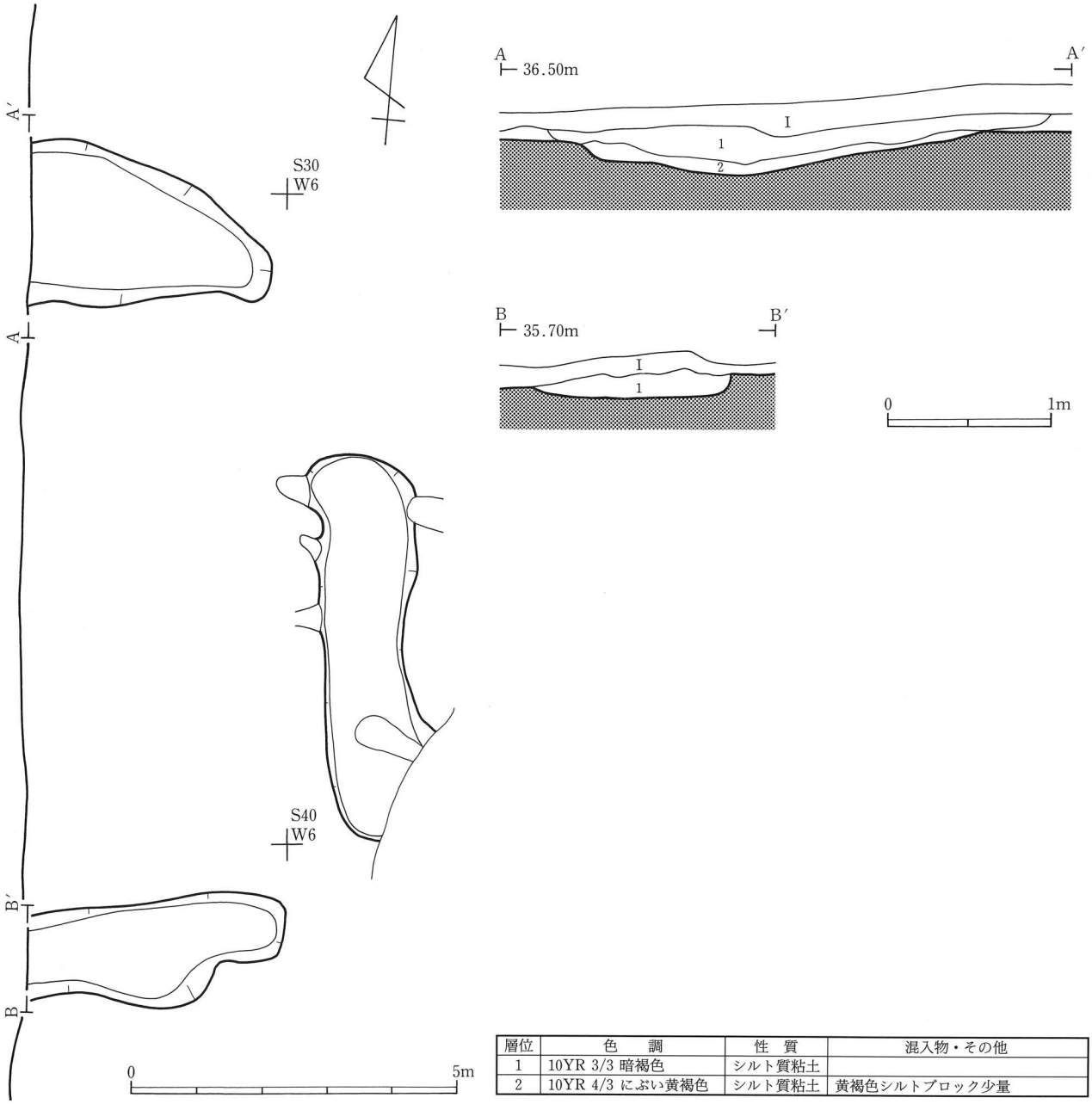
ここではＳＤ１と４についてのみ記述する。

１．第１号溝跡－ＳＤ １－（第68図）

調査区南西部に位置し、西側は調査区外のために未調査となっている。１号墳の西側周溝とＳＫ４に切られている。平面形はコーナー部が途切れる「コ」字状を示し、全体の規模は南北13.2m、東西６ｍ以上ある。方向はほぼ真北と考えられる。溝の幅は1.2～2.5m と一定せず、深さは15～30cmである。堆積土は２層確認され、自然堆積と推定される。

遺物は上層から円筒埴輪片約110点、土師器片、陶器片などが出土しているが、図示できるものはない。

性格は断定できないが、古墳よりも古いことと溝の平面形から方形周溝墓の可能性も考えられる。



層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3/3 暗褐色	シルト質粘土	
2	10YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	黄褐色シルトブロック少量

第68図　SD１平面・断面図

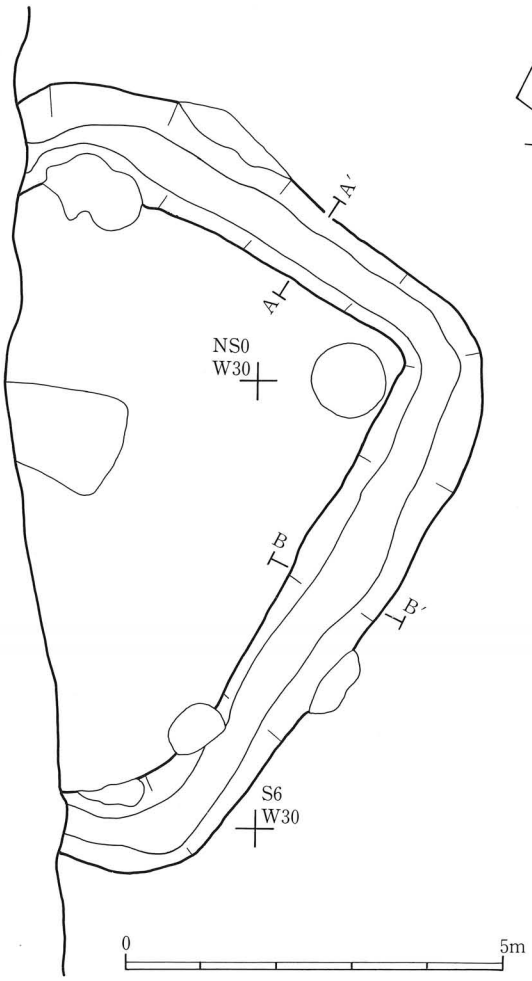
２．第４号溝跡－ＳＤ４－（第69図）

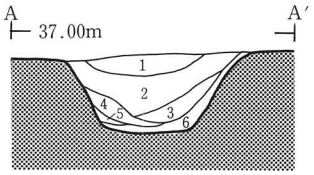
調査区西部に位置し、西側は調査区外のために未調査となっている。平面形は長方形に近い周溝状である。全体の規模は南北約９ｍ、東西７～7.5mと推定されある。方向はN-23°-Eである。溝の幅は0.8～1.5mで、平均1.2ｍ程、深さは45～55cmである。底面はゆるやかな凹凸があり、底面のレベルは南側が低い。堆積土は自然堆積である。

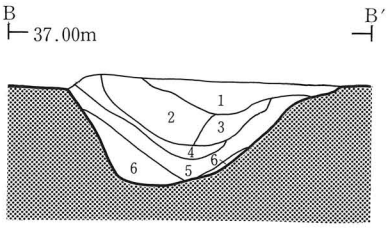
遺物は土師器片、弥生土器片など約70点が出土しているが、図示できるものはない。

性格は断定できないが、溝の平面形から方形周溝墓の可能性も考えられる。

ＳＤ４の調査







A－A′

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト	焼土粒・炭化物微量
2	10YR 3/3 暗褐色	シルト	炭化物・黄褐色粘土粒少量
3	7.5YR 3/3 暗褐色	シルト	黄褐色粘土粒・小礫少量
4	7.5YR 4/4 褐色	シルト	炭化物・黄褐色粘土粒少量
5	10YR 4/3 褐色 10YR 6/6 明黄褐色	シルト 粘土質シルト	混合、炭化物粒微量
6	10YR 5/8 黄褐色	粘土質シルト	褐色シルトブロック少量

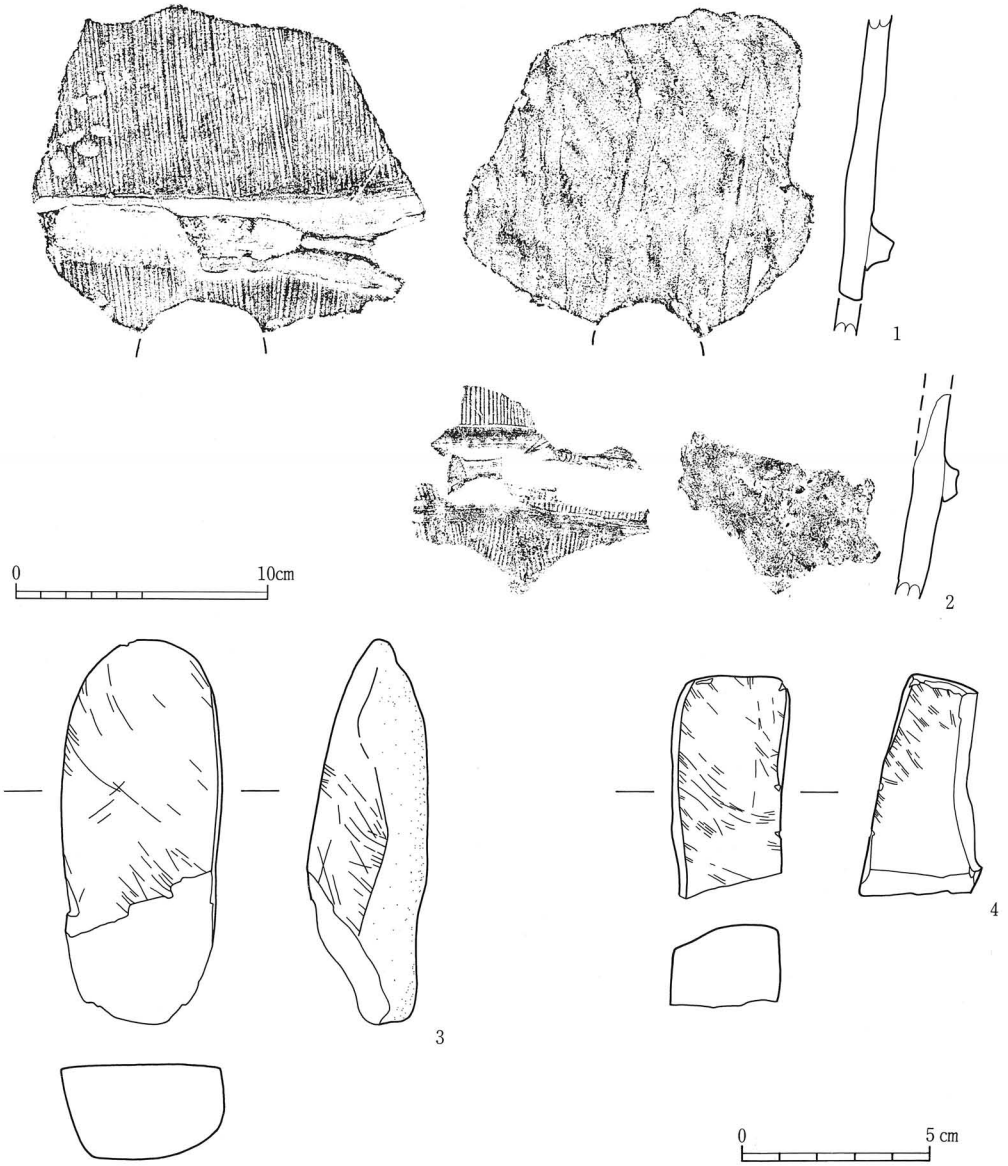
B-B′

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト	焼土粒・炭化物微量
2	10YR 4/3 にぶい黄褐色 10YR 5/6 黄褐色	シルト 粘土質シルト	混合、炭化物少量
3	10YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト	黄褐色粘土粒少量
4	7.5YR 3/2 黒褐色	シルト	炭化物少量
5	7.5YR 4/4 褐色	シルト	黄褐色粘土粒少量
6	10YR 4/4 褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土粒少量

第69図　SD４平面・断面図

第７節　その他の出土遺物

遺構外からも埴輪片、土師器片などが出土しているが、このうち円筒埴輪２点と砥石２点が図化できた(第70図)。円筒埴輪は２点とも外面調整が１次調整タテハケのみ、内面調整がナデのものである。



No.	写真図版	遺　構	種別	遺存度	法　量　(cm)			スカシ孔	外面色調 内面色調	胎　土	焼　成	外 面 調 整・備　考 内 面 調 整・備　考
					口　径	底　径	器高・段幅					
1	137 -1	基本層 Ⅰ層	円筒 埴輪？	体部小片	－	－	－	円形	明赤褐色 明赤褐色	良好 白針微量	良好	タテハケ、凸帯ヨコナデ 縦方向ナデ
2	137 -2	基本層 Ⅰ層	円筒 埴輪？	体部小片	－	－	－	－	浅黄橙色 浅黄橙色	良好 白針微量	良好	タテハケ、凸帯ヨコナデ ナデ

No.	写真図版	層　位	種　　別	遺存度	長さ(cm)	幅　(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特　　徴
3	137-3	基本層Ⅰ層	石製品・砥石	端部欠損	(10.2)	4.3	2.5	149.8	
4	137-4	基本層Ⅰ層	石製品・砥石	端部欠損	(5.9)	2.9	2.1	65.4	

第70図　その他の出土遺物

第3章　まとめ

今回検出した遺構は古墳が中心で、出土した遺物は円筒埴輪が最も多い。朝顔形埴輪を含めた破片数で見ると全体の約9割を占めており（表9）、復元・図化できたものの大部分は円筒埴輪である。したがってここでは円筒埴輪と古墳を中心に検討を行い、その他の遺構と遺物については第2章で触れられなかった点について補足する程度に留めておきたい。

Ⅰ．埴輪

1．埴輪の分類

(1)　円筒埴輪

円筒埴輪は主に古墳の周溝から出土している他、埴輪棺墓であるSK 3と埴輪を廃棄したSK14から数個体出土している。全体形が判るものは少ないが、全体の器形・口縁部形態・口縁端部の形態・凸帯の形態・各段の幅・スカシ孔の形態・内外面の調整技法などの属性に違いがあり、その違いによって7類に大別（細別12類）した。

1類

外面が2次調整B種ヨコハケ、内面に斜め方向のハケメ調整が施され、スカシ孔が三角形とやや角張った円形の組み合わせのものを1類とした。スカシ孔は三角形が3段目の下部、円形が2段目の上部のそれぞれ凸帯に接した位置に1対づつ千鳥に配置されている。全体形はわずかに内湾しながら開き、口縁部は外反して、端部は平坦かわずかに窪む。凸帯は2条で断面は台形か端面がやや窪む台形、段の幅は上がやや狭い。

口縁部内面の段の有無によって1a類と1b類に細分した。

1a類（第34図2・3）口縁部内面に段が付かない。

1b類（第34図1、第35図2）破片資料のためスカシ孔が確認できないが、調整技法から1類の可能性が考えられるので設定した。口縁部が強くヨコナデされた結果、端部が上方につまみ出されて内面に段が付く。

2類（第37図1・2）

外面が1次調整タテハケのみ、内面に斜め方向のハケメ調整が施され、スカシ孔が三角形と半円形の組み合わせのものを2類とした。スカシ孔は三角形が3段目の下部、半円形が2段目の上部のそれぞれ凸帯に接した位置に1対づつ千鳥に配置されている。全体形が判るものはなく口縁部が遺存するものも1点しかないが、口縁部は1b類ほどではないが強くヨコナデされて端部が少し上方につまみ出され、内面に段がつく。凸帯は2条で断面は端面がやや窪む台形である。

3類

外面が1次調整タテハケのみ、内面に斜め方向のハケメ調整あるいは縦方向のナデが施され、スカシ孔が半円形のものを3類とした。スカシ孔は2段目の上部の凸帯に接した位置にある。全体形はほぼ直線的に開き、凸帯は2条で断面は台形か端面がやや窪む台形である。

スカシ孔・内面の調整技法・口縁部・段の幅の違いによって3a・3b・3c類に細分した。

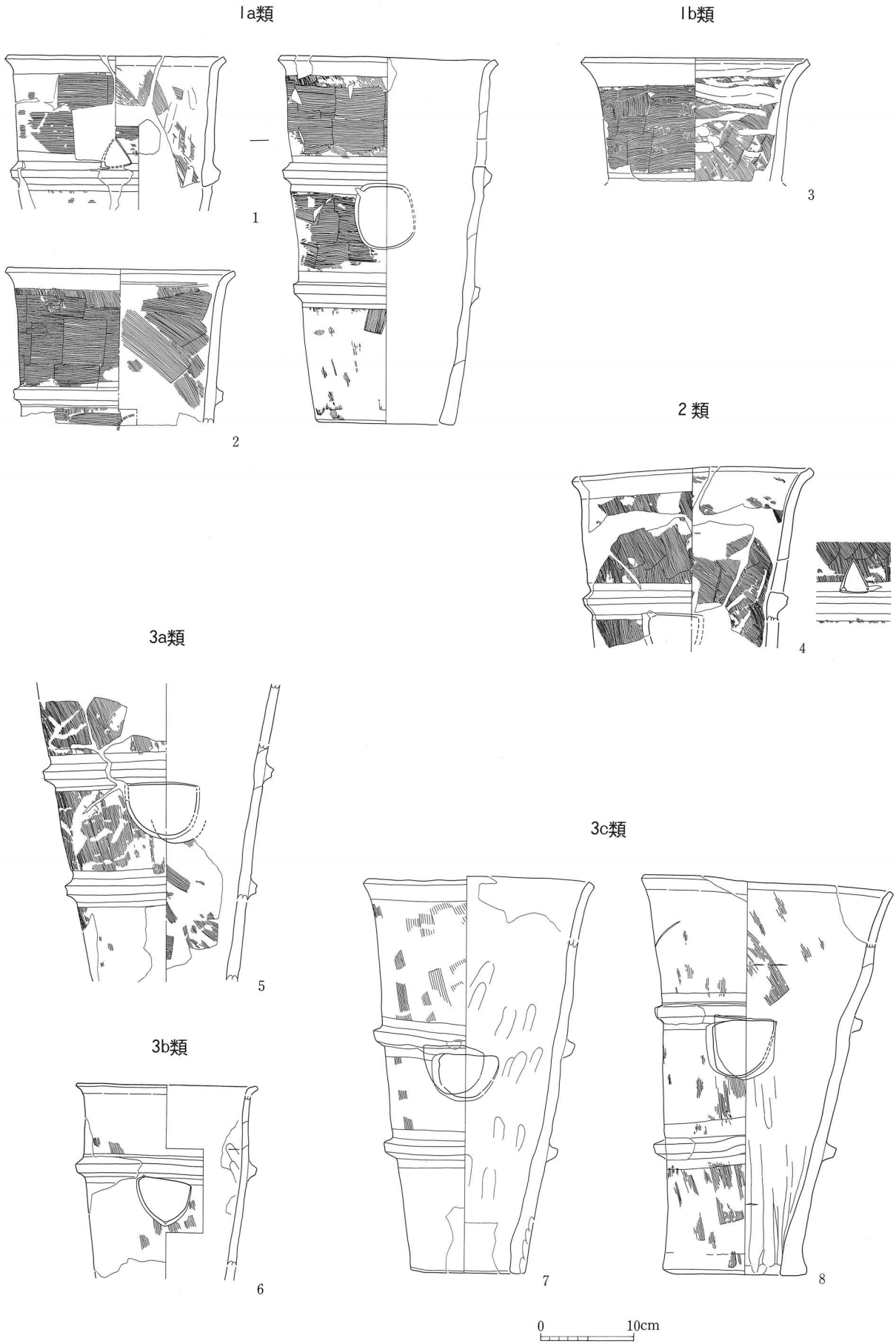
3a類（第36図2）口縁部の形態は不明だが、スカシ孔は整った半円形で、内面調整は斜め方向のハケメである。

3b類（第36図1）やや小型である。スカシ孔はやや歪んだ半円形で、内面調整は縦方向のナデである。口縁部は、強く外反して端部が丸く収められている。段の幅は3段目が狭い。

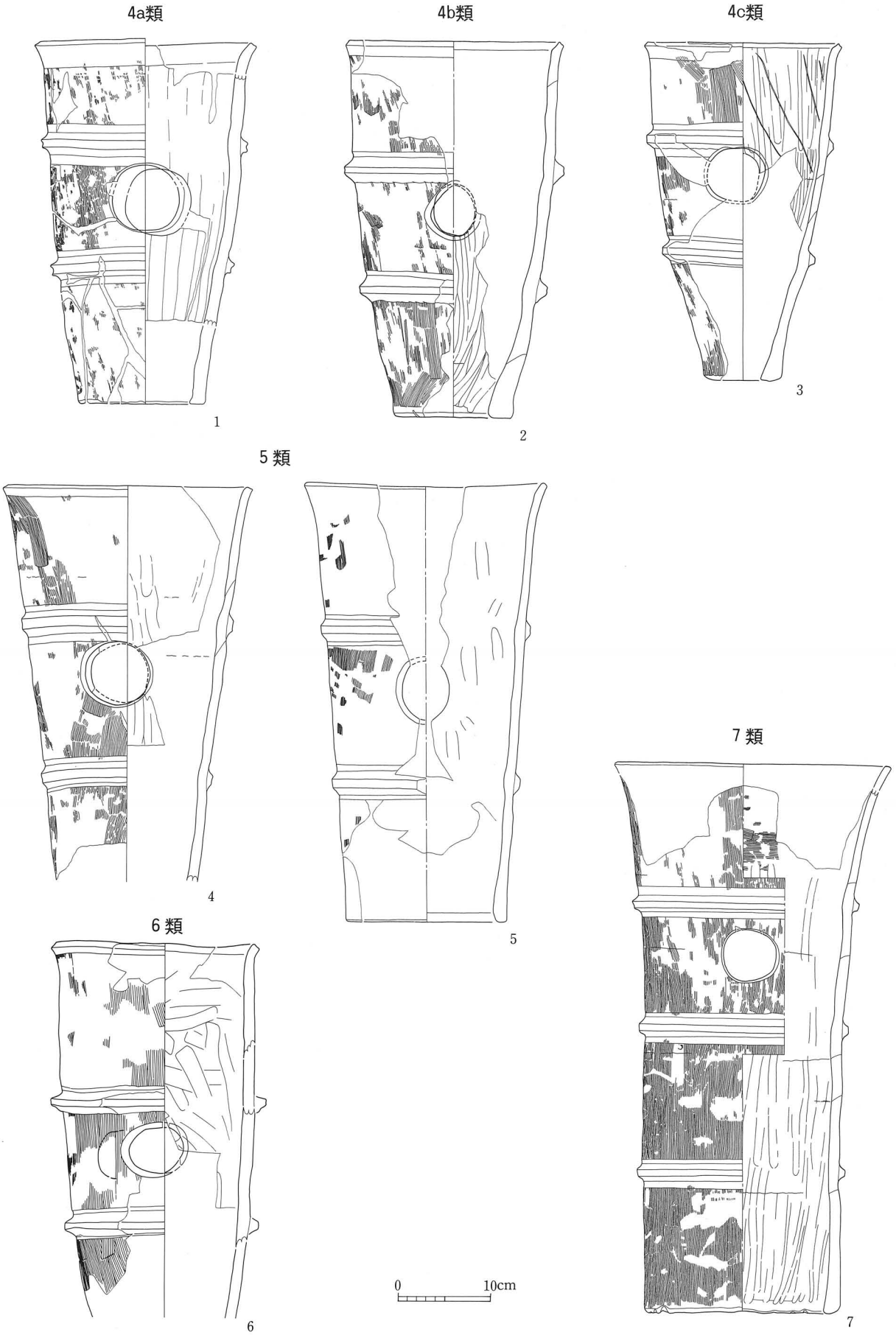
3c類（第64図1・2）スカシ孔はやや歪んだ半円形で、内面調整は縦方向のナデあるいは3段目のみが斜め方向のハケメである。口縁部はごくわずかに外反して端部がやや丸みを帯びる。段の幅はほぼ同じか3段目が広い。

4類

外面が1次調整タテハケのみ、内面が縦方向のナデ調整で、スカシ孔は円形である。スカシ孔は2段目の上部の



第71図　円筒埴輪分類（1）



第72図　円筒埴輪分類 (2)

凸帯に接した位置に配置されている。凸帯は２条で全体形はやや内湾しながら開き、口縁部はわずかに外反する。

口縁部・底径・スカシ孔・凸帯・段の幅の違いによって4a・4b・4c類に細分した。

４ａ類（第８図１・２）口縁部内面に段が付かず、端部は平坦かわずかに窪む。凸帯の断面は台形かM字形をしており、段の幅は上が徐々に狭くなる。

４ｂ類（第39図１・２）口縁部内面に軽い段が付き、端部はわずかに窪む。凸帯の断面は端面がやや窪む台形で、段の幅は上がわずかに広い。スカシ孔は4a類に比べて歪んでおり、小さいものも認められる。

４ｃ類（第38図３）底径が小さいもの。口縁部内面に軽い段が付き、端部はわずかに窪む。凸帯の断面は台形で、段の幅は上が徐々に狭くなる。

５類（第10図１・２）

外面が１次調整タテハケのみ、内面が縦方向のナデ調整で、スカシ孔は円形である。スカシ孔は２段目の上部の凸帯に接した位置か、凸帯のやや下に配置されている。全体形は直線的に開き、３段目に至ってごくわずかに外反しながらそのまま口縁部に至る。口縁端部は平坦かやや丸い。凸帯は２条で断面は端面がわずかに窪む台形、高さは低い。段の幅は３段目がわずかに狭い。

６類（第28図１）

外面が１次調整タテハケのみ、内面が縦方向のナデ調整で、スカシ孔は円形である。スカシ孔は２段目の上部に寄った位置に配置されている。全体形はごくわずかに内湾しており、あまり開かない。口縁部はやや外反し、端部はごくわずかに窪む。凸帯は２条で断面は台形、高さは高い。段の幅は１段目が不明であるが２段目に比べて３段目がかなり広い。

７類（第59図１）

１～６類とは異なり、凸帯が３条巡るものである。調整は外面が１次調整タテハケのみ、内面が１～３段目が縦方向のナデ、３段目～４段目がヨコハケである。スカシ孔は円形で、３段目の上部に寄った位置にある。全体形は凸帯数を除けば５類に似ており、底部からほぼ直立して立ち上がって３段目から外反ぎみに開き、そのまま口縁部に至る。口縁端部はやや丸みを帯びている。凸帯の断面は台形でやや低く、段の幅は１・２・４段目がほぼ同じであるが３段目がやや狭い。

⑵　朝顔形埴輪

朝顔形埴輪の製作技法は基本的に円筒埴輪と同じで、小片になると円筒埴輪との区別が困難である。このため確認できた数は本来の数よりも少ないと考えられる。実際に出土している遺構は４・９・11号墳（第13・25・33図）で、この他に朝顔形埴輪の可能性のあるものが６号墳と10号墳（第21図６・第27図２）から出土している。全体形が判るものはなく点数も少ないため分類は行わなかったが、肩部の外面調整や頸部凸帯などにいくつかの違いが認められることから細分できる可能性はある。

２．埴輪の共伴関係と編年的位置

次に、細分した円筒埴輪と朝顔形埴輪の遺構ごとの共伴関係を確認し、その編年的位置について検討するが、埴輪は図化できたものも含めて小片のものが多く、上記の分類にあてはまらないものが大部分で、このため詳細なセット関係を捉えることはできなかった。しかし、当遺跡周辺の円筒埴輪については藤沢敦氏によって編年案が示されているので、ここでは分類した埴輪を藤沢氏の分類と編年に対応させることによって各遺構の埴輪の編年的位置を考えてみたい。

１号墳

円筒埴輪4a類のみが確認できた（第８図）。4a類はやや小振りであるが、器形・調整技法などは富沢窯跡系列・裏町古墳Ｂ群３類とされたタイプに相当する。

2号墳

円筒埴輪5類のみが確認できた（第10図）。5類は最上段の幅がやや広くなることや凸帯が退化した形態であること、またスカシ孔の位置がやや下がるものもあることなど、富沢窯跡系列・大野田1号墳のタイプに相当する。

3号墳

分類可能な埴輪はない。

4号墳

確認できるのは円筒埴輪5類だけである（第13図4・第14図1）。朝顔形埴輪は肩部がタテハケのもので、凸帯は円筒埴輪同様にやや低い（第13図1）。5類は富沢窯跡系列・大野田1号墳のタイプに相当し、朝顔形埴輪についても全く同じではないが、大野田1号墳のものに類似する。

5号墳

スカシ孔が半円形の3類や調整技法から2か3類と考えられるものが認められるが、細別分類できる円筒埴輪はない（第17・18図）。半円形のスカシ孔の3類は五反田古墳系列と推定されるが、その他は確定できない。編年的位置づけが難しいが、凸帯が高いものが多い点に注目すると裏町古墳と同時期かやや新しい時期と推定される。

6号墳

細別分類できるものはない。円筒埴輪はスカシ孔が半円形の3類、調整技法から2か3類と考えられるもの、5か6類と考えられるものなどがあり（第20・21図）、この他に朝顔形埴輪の可能性があるものが1点ある。半円形のスカシ孔の3類は遺構に伴うとは断定できないが、五反田古墳系列と推定され、この他に円形のスカシ孔のものもあるので、6号墳には裏町古墳同様に五反田古墳系列と富沢窯跡系列の円筒埴輪が伴っていた可能性がある。編年的位置づけが難しいが、凸帯が下向きのものが認められることから大野田1号墳に近い時期が考えられる。

7号墳

円筒埴輪は5類が確認できたのみである（第23図）。5類は富沢窯跡系列・大野田1号墳のタイプに相当する。

9号墳

細別分類できるものはない。円筒埴輪はスカシ孔が半円形の3類、調整技法から2か3類と考えられるものがある。朝顔形埴輪は口縁部内面に段があり、肩部の外面が斜め方向のハケメ調整されるものである（第25図）。朝顔形埴輪の口縁部内面の段は五反田古墳系列・裏町古墳A群と共通する特徴であり、また円筒埴輪の凸帯の上面が屈曲するものが認められるが、これも裏町古墳A群の朝顔形埴輪に見られる。これらのことから9号墳の埴輪は五反田古墳系列で、裏町古墳に近い時期が考えられる。なお遺物の点数が少ないため富沢窯跡系列の埴輪が伴うかどうかは不明である。

10号墳

確認できるのは6類のみで（第28図1）、他に調整技法から2か3類と考えられるもの、5か6類と考えられるものなどがある（第27～29図）。6類は富沢窯跡系列と考えられるものである。最上段の幅が広く、スカシ孔もやや粗雑であるなどの新しい要素が認められ、この点は大野田1号墳に近い。ただし凸帯の高さが高い点は裏町古墳や大野田2号墳に近く、他の円筒埴輪の凸帯も高いことからこれらの埴輪は大野田2号墳に近い時期と推定される。なお、五反田古墳系列の埴輪が伴うかどうかは不明である。

11号墳

1a・1b・2・3a・3b・4b・4c類がある（第34～39図）。朝顔形埴輪は肩部外面が斜め方向のハケメ調整されるものである（第33図）。

1a類は三角形とやや角張った円形のスカシ孔の組み合わせは独特のものである。なお、調整技法は裏町古墳A群の1類と共通するが、口縁部内面に段が付かない点が裏町古墳1類と異なっている。川西編年Ⅳ期に対比される。

1b 類は調整技法と口縁部内面に段がつくのは裏町古墳Ａ群の１類と同じであり、もしスカシ孔が１ａ類と違って半円形のみであれば裏町古墳Ａ群１類に相当することとなる。1a 類同様川西編年Ⅳ期に対比される。

２類はスカシ孔の組み合わせは独特であるが、調整技法や口縁部内面に段が付くことは五反田古墳系列・裏町古墳Ａ群の２類と共通する。

3a 類はスカシ孔は整った半円形で、内面の調整技法は斜め方向のハケメである。五反田古墳系列・裏町古墳Ａ群の２類とされたタイプに相当する。

3b 類は上段の幅が狭い点は裏町古墳Ａ群と共通するが、やや小型である点と口縁部内面に段がつかない点が異なっている。

4b 類は全体の器形は富沢窯跡系列・裏町古墳Ｂ群３類に似ているが、口縁部内面に段が付くこと、スカシ孔が小さいこと、３段目の幅がやや広い点が異なっている。スカシ孔の矮小化と最上段の幅がやや広いことなどの新しい要素が認められるが、全体の器形は古い要素を残している。裏町古墳Ｂ群３類よりは大野田２号墳に近いタイプと考えられるが内面の段は富沢窯跡系列の埴輪には認められない要素である。

4c 類は底径が極端に小さい点が他の円筒埴輪と大きく異なる特徴であるが、段の幅は4a 類に類似し、口縁部の形態は4b 類に類似している。

以上のように11号墳の円筒埴輪は多様であるが、大別すると①制作技法は裏町古墳Ａ群１類（川西編年Ⅳ期に対応）や２類に共通し、なおかつ三角形のスカシ孔などの古い要素を持つタイプ（1a・1b・２類）、②裏町古墳Ａ群２類とほぼ同じタイプ（3a 類）、③新旧の要素や別系統の要素を併せ持つタイプ（3b・4b・4c 類）が認められる。時期は、三角形のスカシ孔を持つ1a・1b・２類と裏町古墳と同じタイプの3a 類の両者の存在を考慮すると、裏町古墳と近接するが、やや古い可能性が考えられる。

SK ３

７類のみが確認できた（59図）。７類は、製作技法・スカシ孔の位置・凸帯の形態・口縁部の形態は５類に近く、また胎土や焼成も特に他の埴輪と違いは認められないが、これまでにこの周辺では出土例がないので一応５類に近い可能性があるものの別系列のものと考えておきたい。

SK14

3c 類のみが確認できた（第64図）。3c 類はスカシ孔がやや歪んだ半円形であることと、口縁部形態、各段の幅が五反田古墳系列・五反田古墳のタイプに似ている。ただし五反田古墳の円筒埴輪は凸帯の形状が不明であり、対応は確実ではない。

Ⅱ．古墳

１．古墳の系列

以上のように古墳を始めとする各遺構の円筒埴輪・朝顔形埴輪の系列と編年的位置を検討してみた。確認できた埴輪が組成のすべてであるとは断定できないが、各古墳はそれぞれが持つ埴輪の系列の組み合わせによって３つのグループに分けられる可能性はある。各グループごとにまとめると以下のようになる。

①五反田古墳系列の埴輪を持つグループ―― ５号墳・９号墳・(SK14)

②富沢窯跡系列の埴輪を持つグループ―― １号墳・２号墳・４号墳・７号墳・10号墳

③五反田古墳系列と富沢窯跡系列の両者の埴輪を持つグループ―― （６号墳）・11号墳

２．古墳の位置と平面形

古墳の平面形を見ると２号墳の周溝が３号墳の周溝を避け、６号墳の周溝が２号墳の周溝を避けるように歪んでいる。このことから、３号墳よりも２号墳が新しく、さらに２号墳よりも６号墳のほうが新しいことが推定される

が、3号墳には分類できる埴輪が無いため埴輪から実証することはできない。2号墳と6号墳については、6号墳の埴輪の様相が明瞭でないため断定できないが、一応ほぼ同じ形式と比定される中の時間差である可能性はある。

3．出土土器

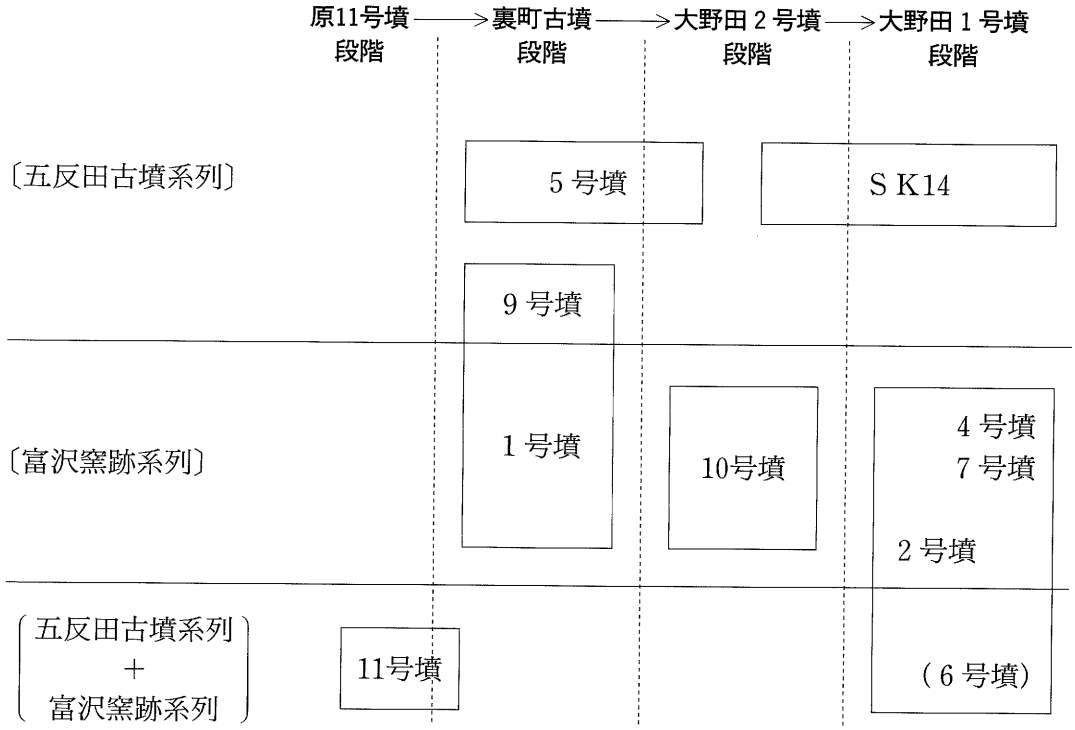
1号墳と11号墳からは土師器と須恵器が出土しているので補足しておく。

1号墳の甕（第8図）は、周溝埋没途中に廃棄された状態で出土しているので古墳と直接の関係はないと考えられる。他に共伴遺物がないので時期は確定しにくいが、器形は南小泉遺跡第18次調査SI－01出土の甕に共通するので、住社式に比定される。

11号墳の周溝中からは須恵器が3点出土している。甕のうち1点（第45図1）はTK 216形式に類例があり、他の2点は小片のため器形が明確ではないが、甕（第45図2）と蓋と推定されるもの（第45図3）はTK73形式に似ている。出土状況からは古墳に伴うとは断定できないので良好な共伴資料とは言えないが、先に11号墳の埴輪の時期を裏町古墳よりもわずかに古い時期と推定し、裏町古墳がTK208　形式の時期とされていることからすれば、TK208形式より古い須恵器が伴うことは矛盾しない。ただし須恵器3点の間に形式差があることと小片であることを考慮すれば、これらの須恵器は「古墳に近い時期のものである」程度に考えておきたい。

4．古墳の時期

周辺の円筒埴輪は五反田古墳系列が裏町古墳A群→五反田古墳と変遷し、富沢窯跡系列が裏町古墳B群→大野田2号墳→大野田1号墳と変遷することが明らかにされているので、当遺跡の古墳をこの編年に当てはめることができる。先述した古墳の平面形から推定される新旧関係も考慮してまとめると以下のような変遷が考えられる。



3号墳は埴輪の系列が不明なためこの図からは除外したが、2号墳との位置関係からすると大野田1号墳より古いと考えられるので、裏町古墳～大野田2号墳の時期と推定される。なお、各古墳がそれぞれの系列ごとに築造され、変遷していったのかどうかは不明である。

なお、6号墳は半円形のスカシ孔を持つ3類が確実に伴うとは断定できないため（　）で示している。6号墳出土の3類が混入品であれば6号墳は「富沢窯跡系列」に含まれることとなる。

また、SK14については性格がはっきりしないが、SK14は5号墳の周溝を切っている土坑であるので土坑内から出土した埴輪は本来5号墳に伴うものである可能性はある。SK14出土の円筒埴輪3c類の時期が不確定ではあるが、この場合は5号墳の時期は裏町古墳よりは下り、大野田2号墳～1号墳の頃になると考えられる。

III. 埴輪棺墓

3号墳の南側から埴輪棺墓が1基検出されている（SK 3）。東北地方では福島県本宮町の天王壇古墳で見つかっているが、当遺跡が最北の検出例となった。天王壇古墳では古墳に使用された埴輪と同じ規格の埴輪が使用されているなど、古墳と埴輪棺に使われた埴輪との間に密接な関係が認められているが、当遺跡の場合は埴輪棺と古墳の埴輪とでは製作技法は似ているが規格が異なるものである。

IV. 竪穴住居跡

SI 1～6まで6軒検出した。このうちSI 1～5は古墳の周溝に切られるかあるいは上に墳丘が造られる位置関係にある。遺物が少ないため詳細な時期は不明であるが、SI 1・2・3・6には器台・高坏・ハケメ調整やヘラミガキ調整の壺や甕などが認められるので塩釜式期、SI 4・5には口縁部近くに連続する刺突や押圧が認められる壺などが認められるので天王山式期と推定される。

種別／遺跡	埴輪（円筒・朝顔形）	縄文土器	弥生土器	土師器	須恵器	陶器	磁器	瓦	土製品	鉄製品	石器	剥片	石製品
1号墳	319（35.3kg）	8	8	344					1			17	
2号墳	1,269（17.6kg）	38		4								5	
3号墳	18（0.7kg）	107	41	3		2						1	
4号墳	2,395（42.9kg）		34	75									
5号墳	2,238（34.2kg）	4		103				1				1	
6号墳	1,874（32.0kg）											4	
7号墳	196（4.2kg）									1			
9号墳	599（12.8kg）												
10号墳	1,133（19.5kg）	1				2				1		1	
11号墳	13,043（154.2kg）			7	15					4	2		
1号住居跡				426					1				
2号住居跡				144								19	
3号住居跡				330									
4号住居跡			205	7					1				
5号住居跡			32	4								2	
6号住居跡	2（0.2kg）			42		9		6				2	
SK 2	12（0.2kg）			25						6		2	
SK 3	159（4.1kg）												
SK 6		5										2	
SK 7										1			
SK10										2			
SK11			5	44									
SK12		2											
SK13		2											
SK14	144（15.7kg）		9									1	
SK18												10	
SK20			3										
SK21				79									
SK22			2										
SK34													
SD 1	114（1.7kg）			3		3		1				3	
SD 3	58（1.9kg）			5								1	
SD 4			13	61								1	
表土その他	52（0.6kg）		2	4		21	1	5				5	2
計	22,625（377.8kg）	167	354	1,710	15	37	1	13	3	15	2	77	2

表9　遺物集計表

引用・参考文献

伊東信雄・伊藤玄三・岩淵康治　1974『裏町古墳発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第７集　仙台市教育委員会

氏家和典　1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

氏家和典　1984「宮城の古墳」『宮城の研究　第１巻　考古学篇』清文堂出版

大河内光夫・山崎義夫　1984『天王壇古墳』本宮町文化財調査報告書第８集　本宮町教育委員会

岡田茂弘・桑原滋郎　1974「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要　Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所

加藤道男　1996「東北地方の古墳時代の土器（土師器）」『日本土器辞典』雄山閣

川西宏幸　1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号

佐藤　洋　1990『南小泉遺跡　第16～18次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第140集　仙台市教育委員会

主浜光朗・小川淳一　1992『土手内－土手内遺跡・土手内窯跡・土手内横穴Ｂ地点発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第165集　仙台市教育委員会

庄子貞雄・山田一郎　1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城市－昭和54年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡研究所

白鳥良一　1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要　Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所

鈴木啓・辻秀人他　1982『原山１号墳発掘調査概報』福島県立博物館調査報告書第１集

仙台市史編さん委員会 1995 『仙台市史　特別編２　考古資料』仙台市

田辺昭三　1966「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古学クラブ

中村　浩他　1978『陶邑Ⅱ』大阪府文化財調査報告書第29輯　大阪府教育委員会

中村　浩他　1978『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯　大阪府教育委員会

藤沢　淳　1990「東北　宮城・岩手」『古墳時代の研究11　地域の古墳Ⅱ　東日本』雄山閣

藤沢　淳　1992「円筒埴輪　東北」『古墳時代の研究９　古墳Ⅲ　埴輪』雄山閣

古川一明・白鳥良一　1991「土師器の編年　８東北」『古墳時代の研究６　土師器と須恵器』雄山閣

真山　悟他1991『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報1991　宮城県多賀城跡調査研究所

山本三郎　1992「竪穴系の埋葬施設」『古墳時代の研究７　古墳Ⅰ　墳丘と内部構造』雄山閣

結城慎一・藤沢淳　1987『大野田古墳群　春日社古墳・鳥居塚古墳　発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第108集　仙台市教育委員会

渡邊泰伸他　1974『富沢窯跡 ― 仙台市三神峰丘陵所在埴輪窯跡調査報告書 ― 』研究報告第３冊　古窯跡研究会

渡邊泰伸・結城慎一　1975「仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告書」『陸奥国官窯跡群Ⅱ』研究報告第４冊　古窯跡研究会

写　真　図　版

写真１　１次調査区全景（北東から）

写真２　１次調査区全景

写真 3
2 次調査区西部全景
（南から）

写真 4
2 次調査区北部全景
（南から）

写真 5
2 次調査区東部全景
（西から）

写真６　１号墳完掘状況（東から）

写真７　１号墳完掘状況

写真８　１号墳周溝断面（西ベルト、南から）

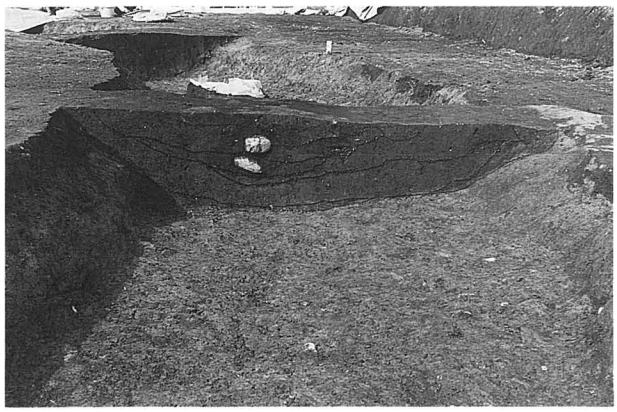


写真９　１号墳周溝断面（東ベルト、南から）

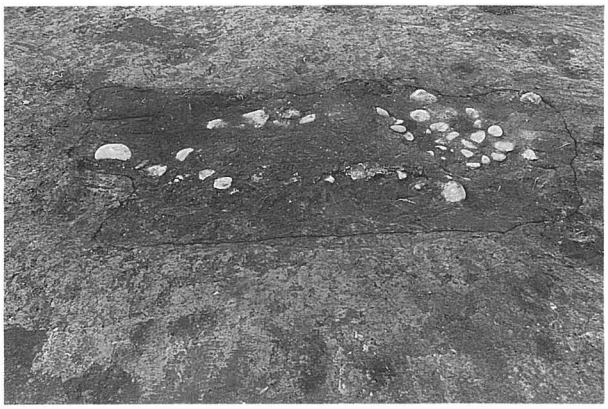


写真10　１号墳主体部確認状況（南から）

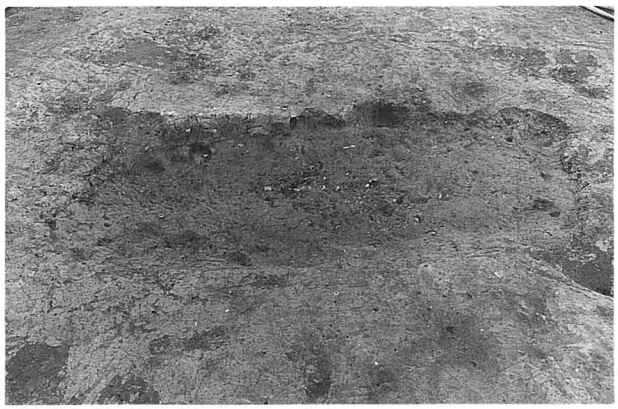


写真11　１号墳主体部掘り方完掘状況（南から）

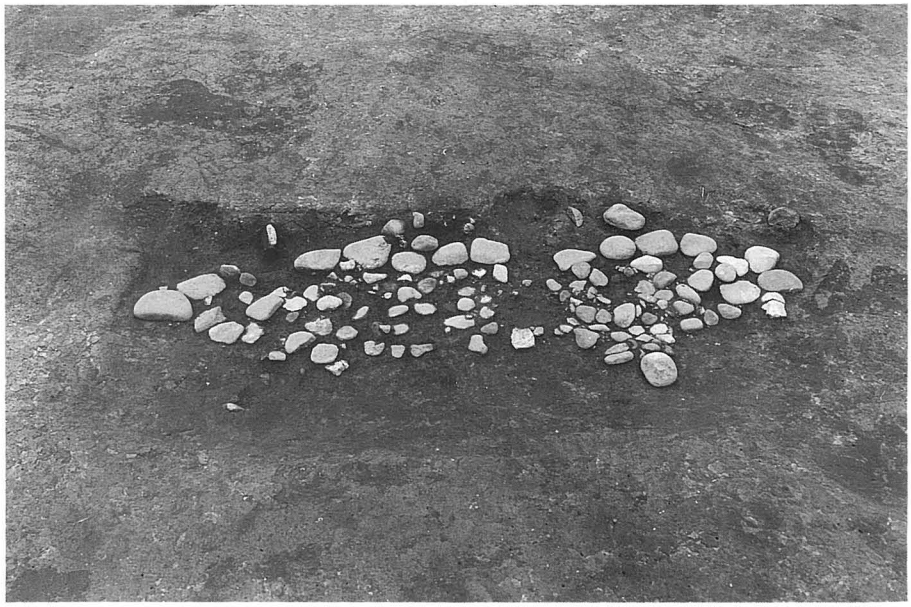


写真12　１号墳主体部完掘状況（南から）

写真13　2号墳完掘状況（東から）

写真14　2号墳完掘状況

写真15　2号墳確認状況（南東から）

写真16　2号墳周溝断面（西ベルト、南から）

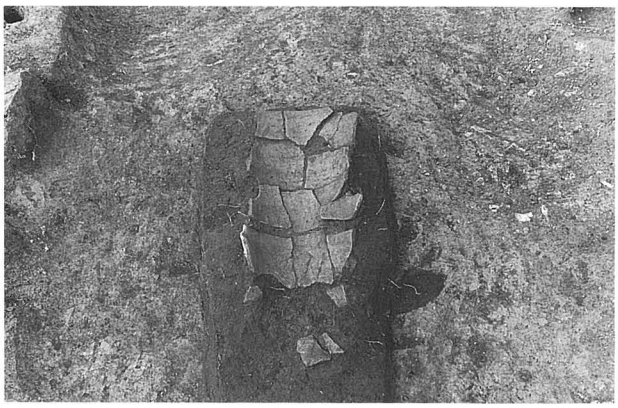


写真17　2号墳遺物出土状況(1)

写真18　2号墳遺物出土状況(2)

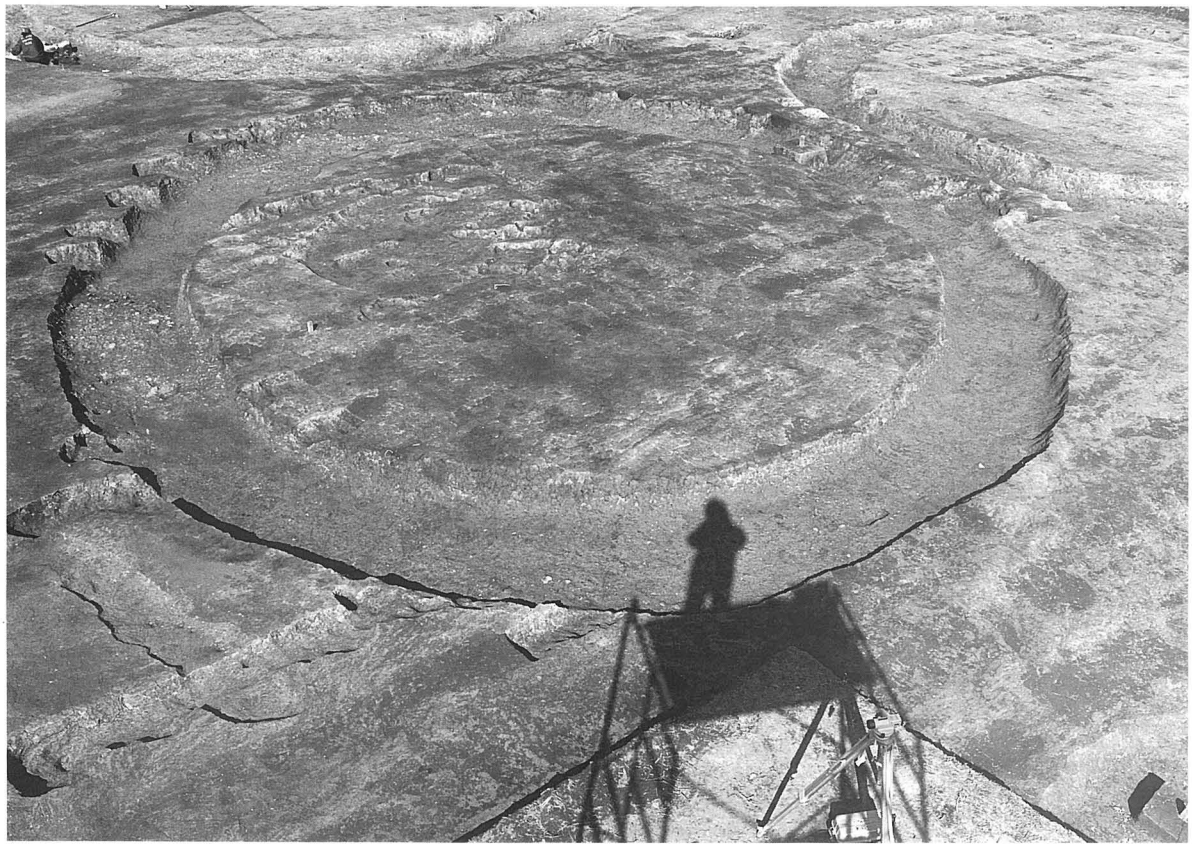


写真19　3号墳完掘状況（南西から）

写真20　3号墳完掘状況

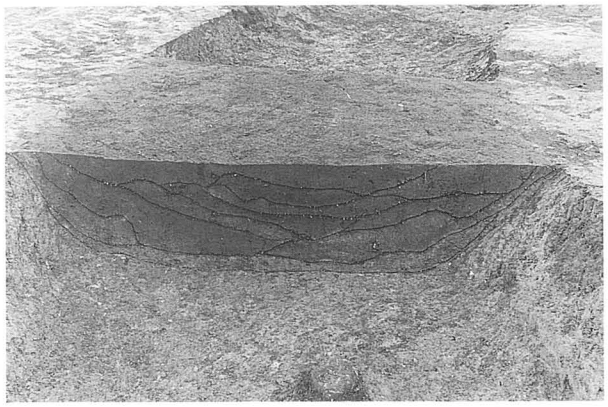


写真21　3号墳周溝断面（西ベルト、南から）

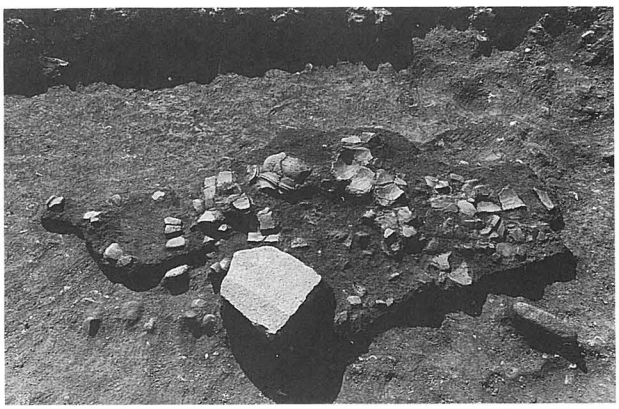


写真22　4号墳遺物出土状況

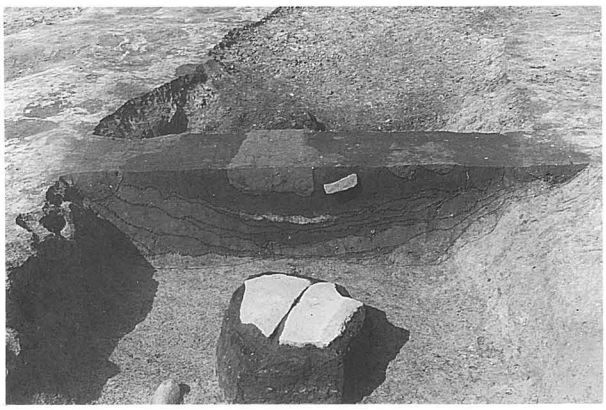


写真23　4号墳周溝断面（南ベルト、東から）

写真24　4号墳周溝断面（東ベルト、南から）

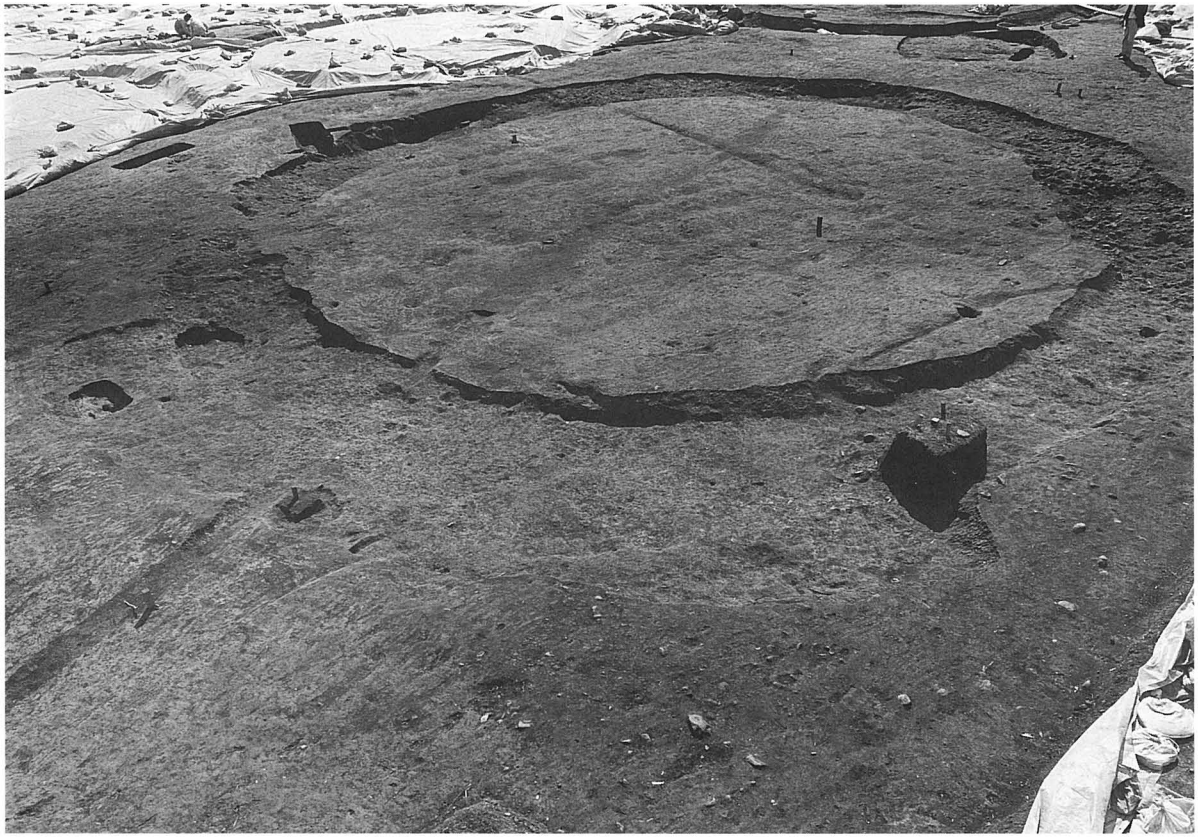


写真25　4号墳完掘状況（北東から）

写真26　4号墳完掘状況

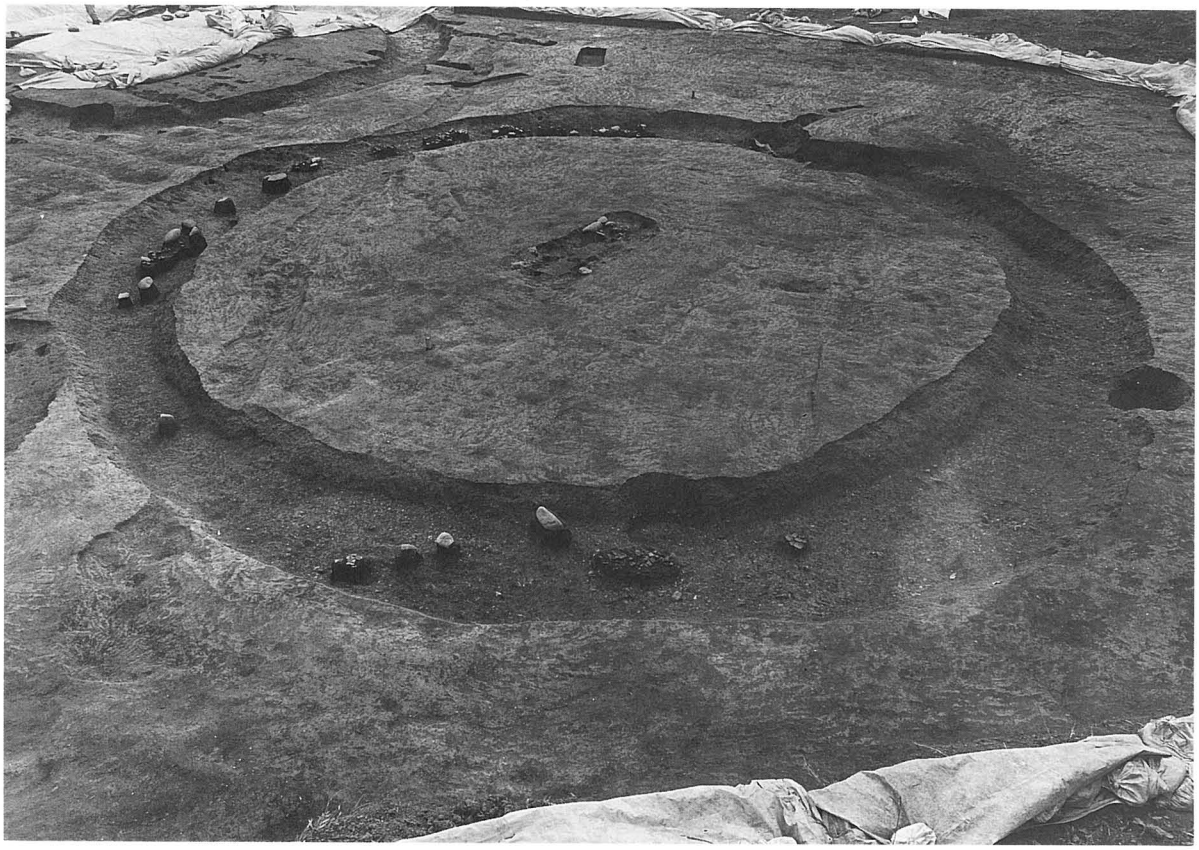


写真27　5号墳完掘状況（北西から）

写真28　5号墳完掘状況

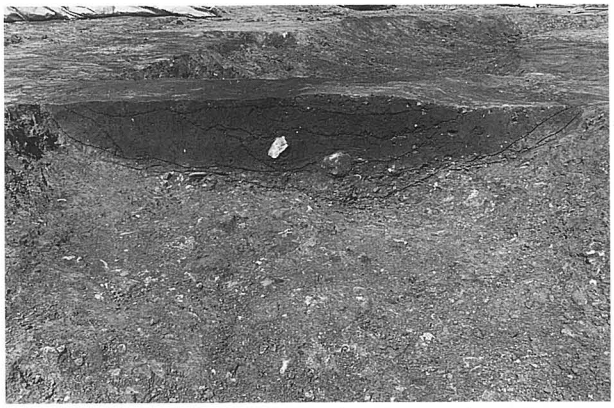


写真29　5号墳周溝断面（西ベルト、南から）

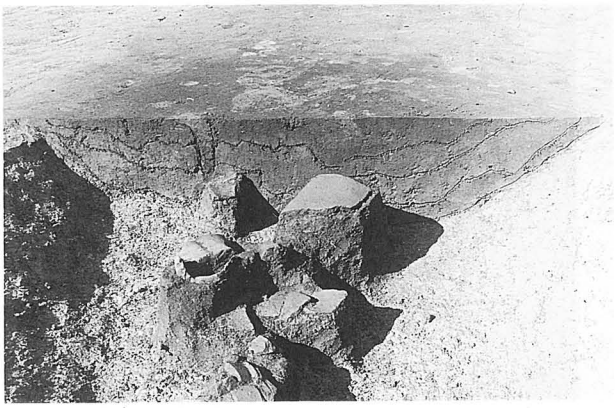


写真30　5号墳周溝断面（南ベルト、東から）

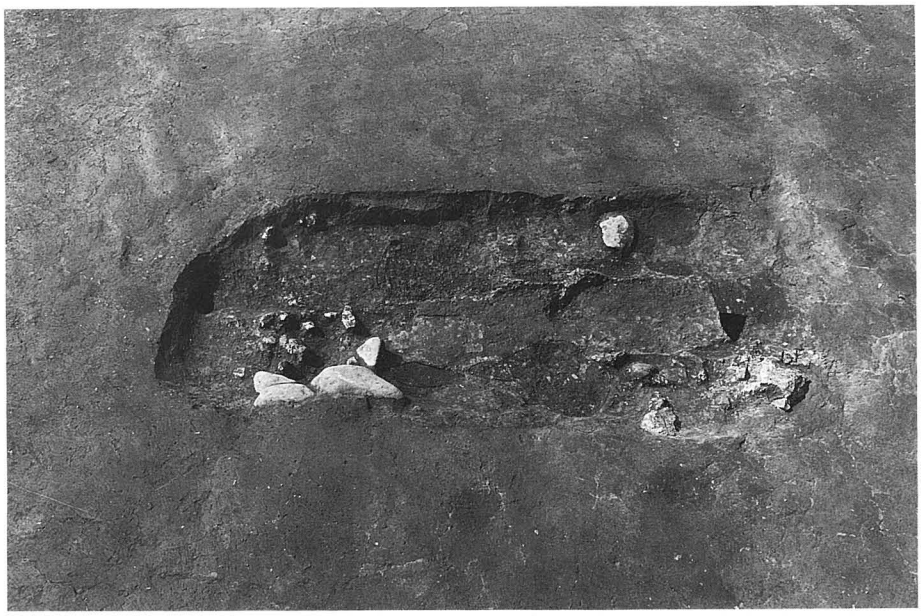


写真31
5号墳主体部完掘状況
（東から）

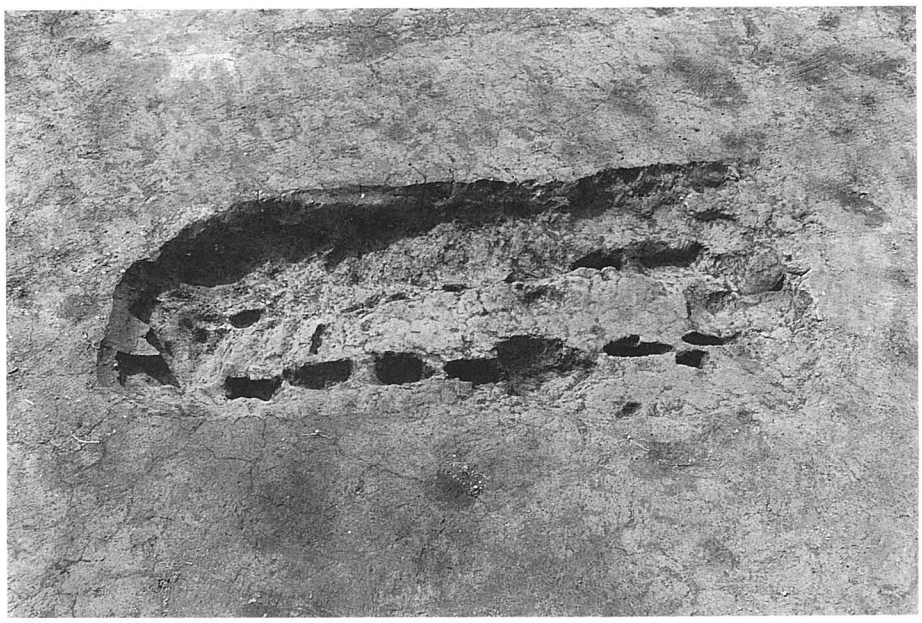


写真32
5号墳主体部掘り方完掘状況
（東から）

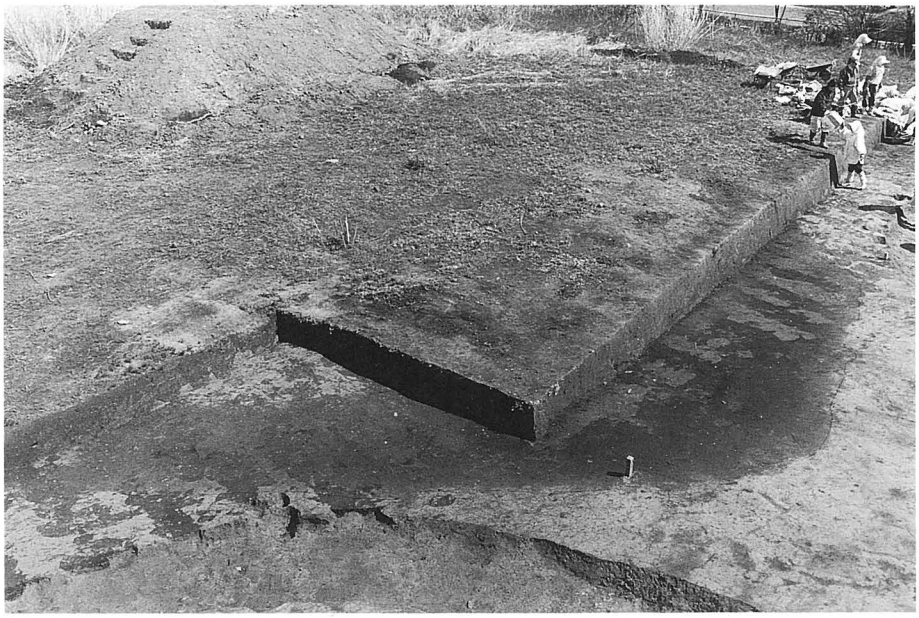


写真33
6号墳確認状況
（北西から）

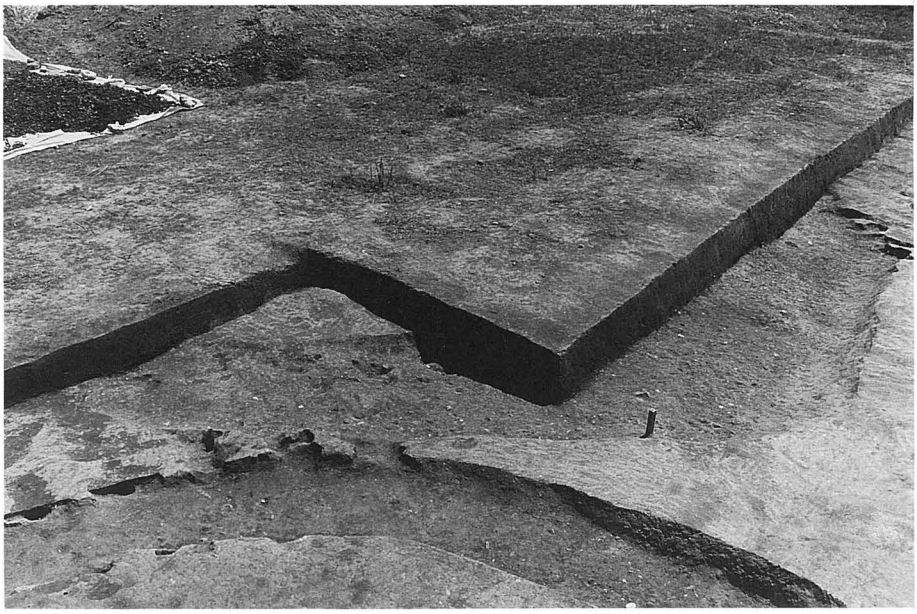


写真34
6号墳完掘状況
（北西から）

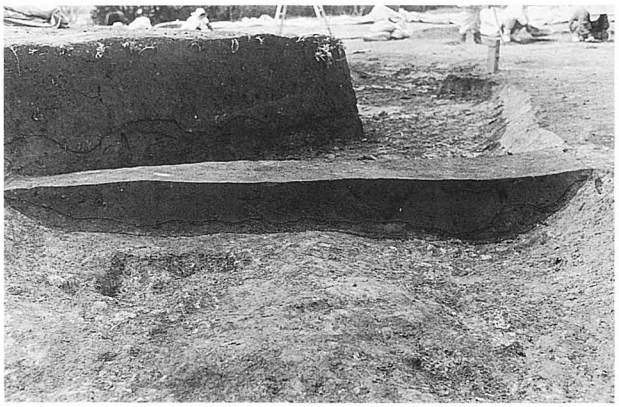


写真35　6号墳周溝断面（北ベルト、北から）

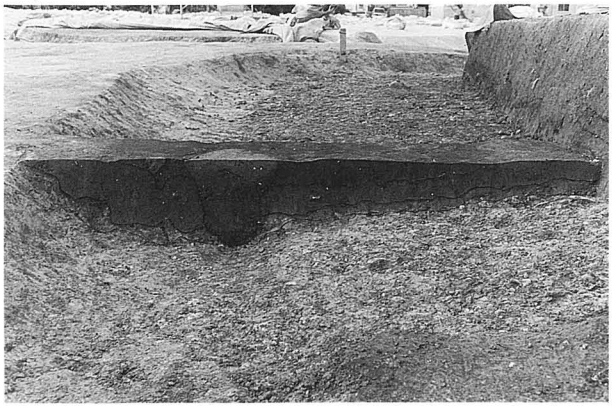


写真36　6号墳周溝断面（南ベルト、南から）

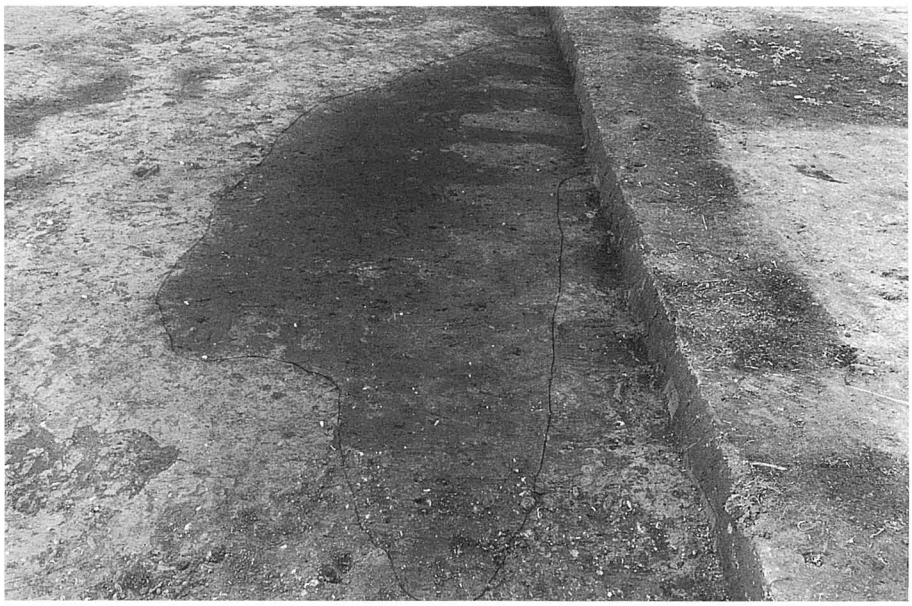


写真37
7号墳確認状況
（南から）

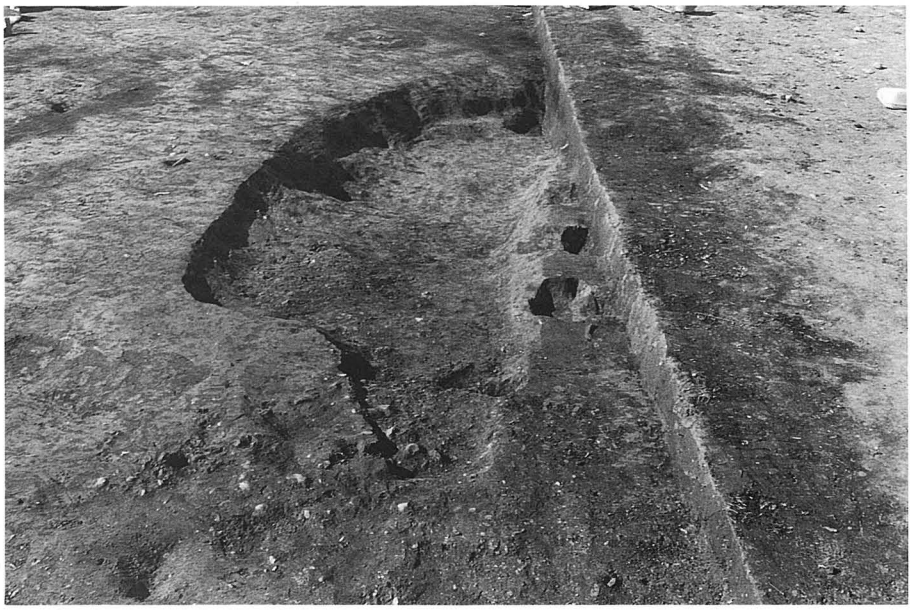


写真38
7号墳完掘状況
（南から）

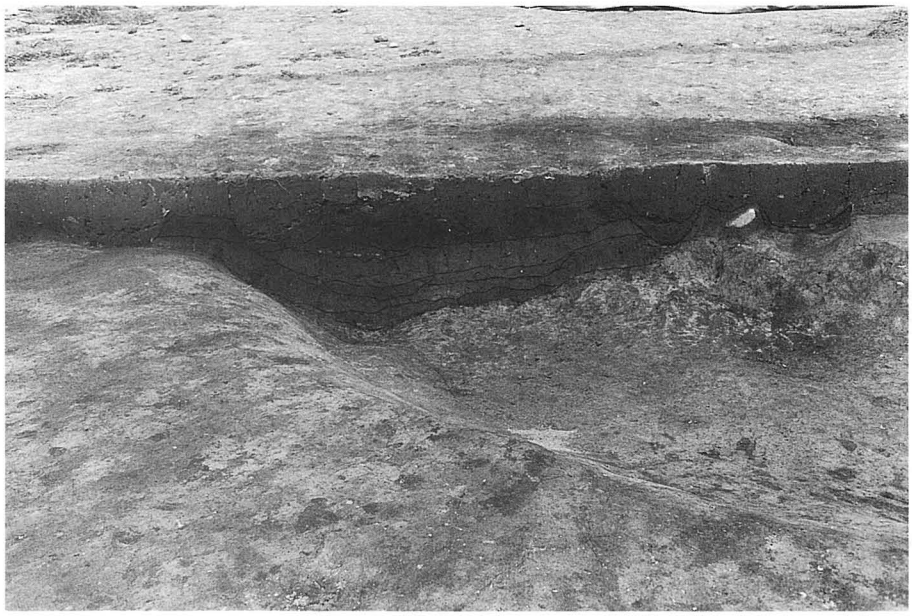


写真39
7号墳周溝断面
（調査区東壁、西から）

写真40
9号墳確認状況
（南から）

写真41
9号墳完掘状況
（南から）

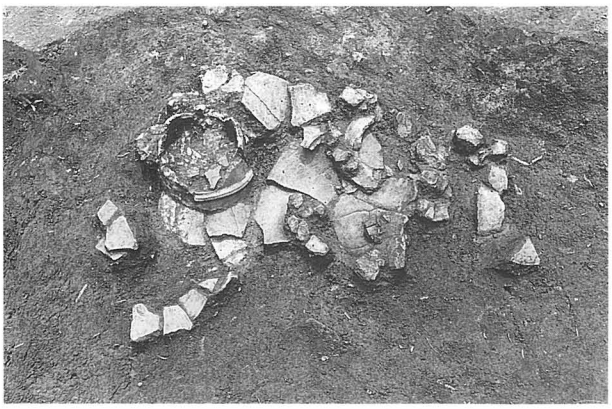


写真42　9号墳遺物出土状況

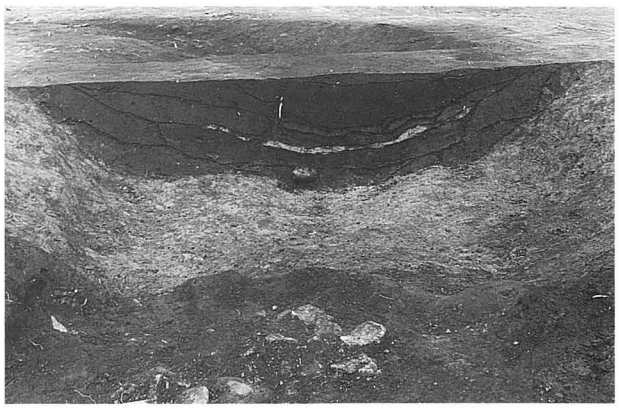


写真43　9号墳周溝断面（南ベルト、西から）

写真44
10号墳確認状況
（南から）

写真45
10号墳調査状況
（南から）

写真46
10号墳完掘状況
（南から）

写真47　11号墳墳丘断面（東西ベルト①、南から）

写真48　11号墳墳丘断面（東西ベルト②、南から）

写真49　11号墳墳丘断面（東西ベルト③、南から）

写真50　11号墳墳丘断面（東西ベルト④、南から）

写真51　11号墳墳丘断面（南北ベルト①、西から）

写真52　11号墳墳丘断面（南北ベルト②、西から）

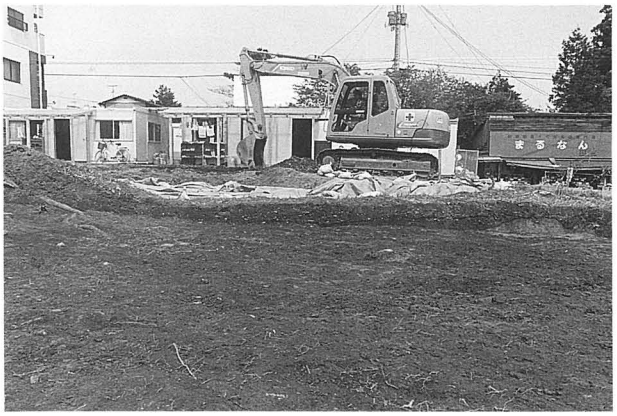


写真53　11号墳墳丘断面（南北ベルト③、西から）

写真54　11号墳攪乱坑断面（西から）

写真55　11号墳表土除去作業（西から）

写真56　11号墳周溝と墳丘盛土確認状況
（撹乱坑掘り込み以前、西から）

写真57　11号墳周溝と墳丘盛土確認状況（撹乱坑完掘後、西から）

写真58　11号墳完掘状況（北西から）

写真59
11号墳調査状況
（北西から）

写真60
11号墳周溝断面
（西ベルト、南から）

写真61
11号墳周溝断面
（東ベルト、南から）

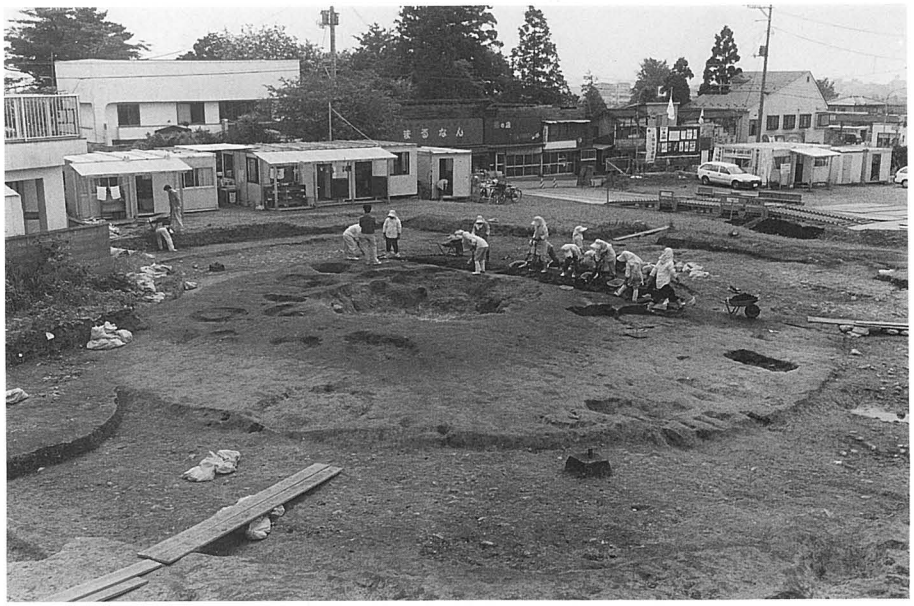


写真62
11号墳墳丘盛土除去作業
（北西から）

写真63
11号墳墳丘盛土除去作業
（南西から）

写真64
11号墳墳丘下の溝確認状況
（南西から）

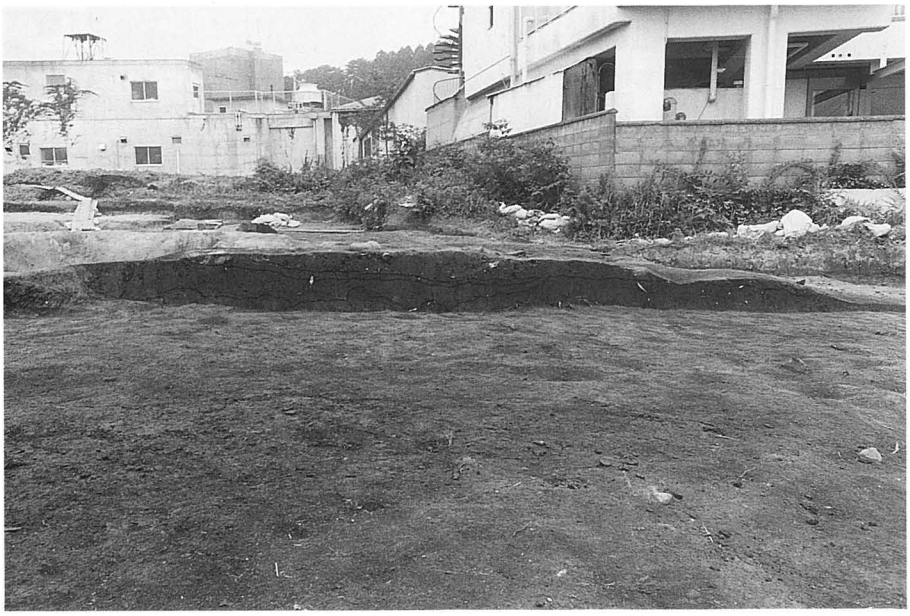


写真65
11号墳墳丘盛土断面
（東西ベルト、南から）

写真66
11号墳墳丘盛土断面
（東西ベルト拡大①）

写真67
11号墳墳丘盛土断面
（東西ベルト拡大②）

写真68
11号墳墳丘下の溝完掘状況(1)
（南西から）

写真69
11号墳墳丘下の溝完掘状況(2)
（拡大、南西から）

写真70　11号墳墳丘下中心部(1)（南から）

写真71　11号墳墳丘下中心部(2)（北西から）

写真72
SI1 床面確認状況
（東から）

写真73
SI1 完掘状況
（南から）

写真74
SI2 完掘状況
（南から）

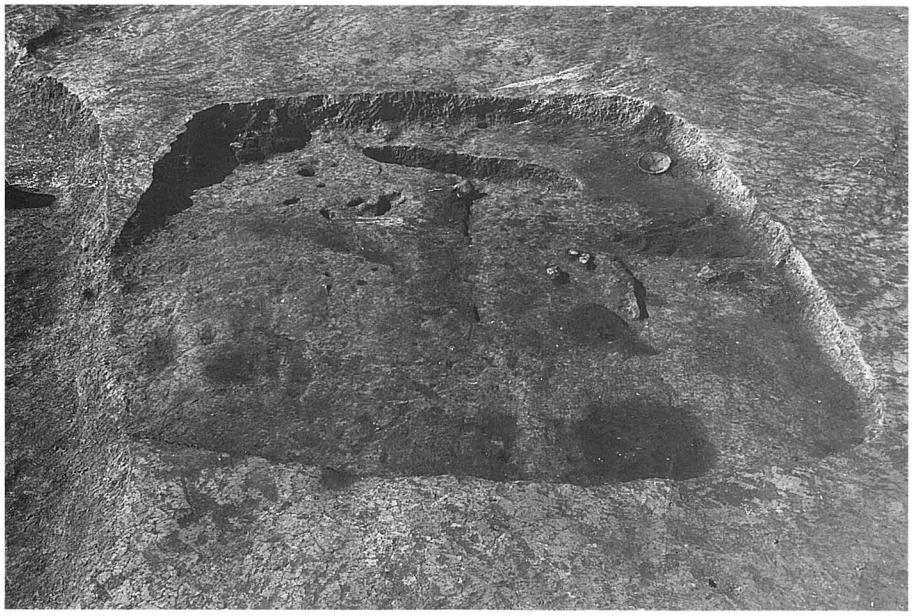


写真75
SI3 床面確認状況
（南東から）

写真76
SI3 完掘状況
（南東から）

写真77
SI4 床面確認状況
（東から）

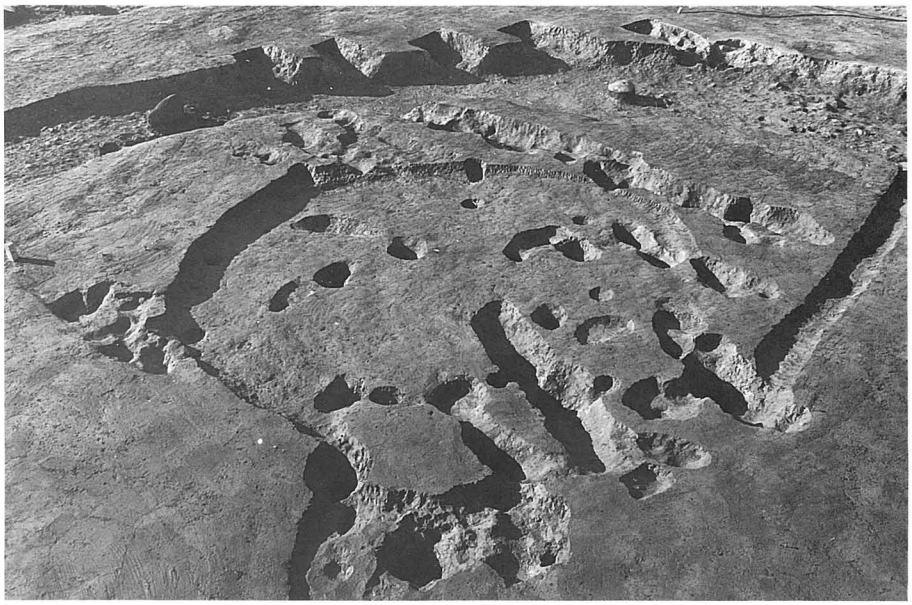


写真78
SI4 完掘状況
（南から）

写真79
SI5 炭化材確認状況
（南から）

写真80
SI6 完掘状況
（南から）

写真81
SK3 埴輪棺墓確認状況
（南から）

写真82
SK3 埴輪棺墓完掘状況
（北から）

写真83
SK3 埴輪棺墓掘り方
完掘状況（南から）

写真84　SK2 遺物出土状況（西から）

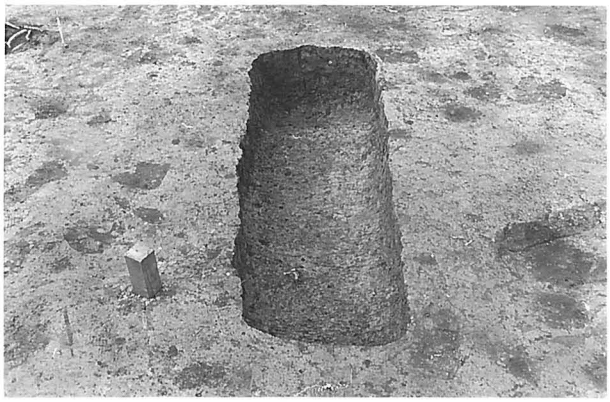


写真85　SK2 完掘状況（南から）

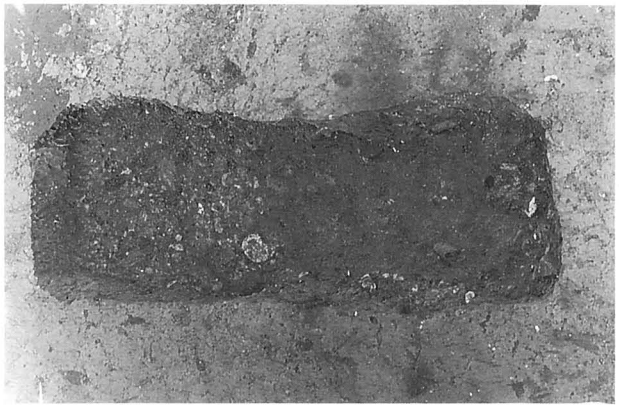


写真86　SK7 完掘状況

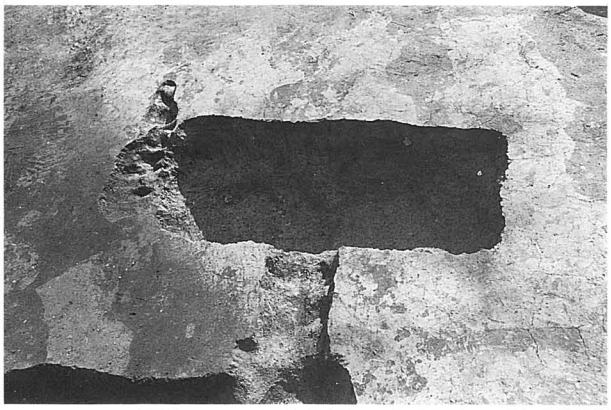


写真87　SK8 完掘状況（西から）

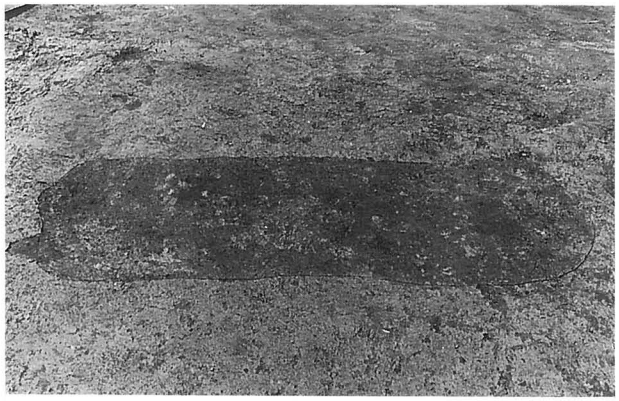


写真88　SK11 確認状況（東から）

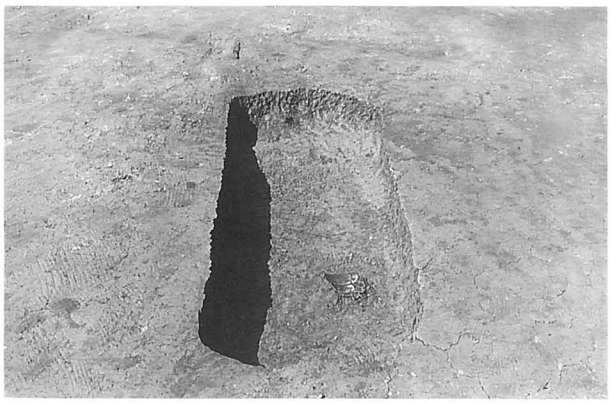


写真89　SK11 完掘状況（南から）

写真90　SK14 遺物出土状況

写真91　SK14 完掘状況（南から）

写真92　SK5 完掘状況（東から）

写真93　SK6 完掘状況（東から）

写真94　SK9 完掘状況（南から）

写真95　SK12 完掘状況（北から）

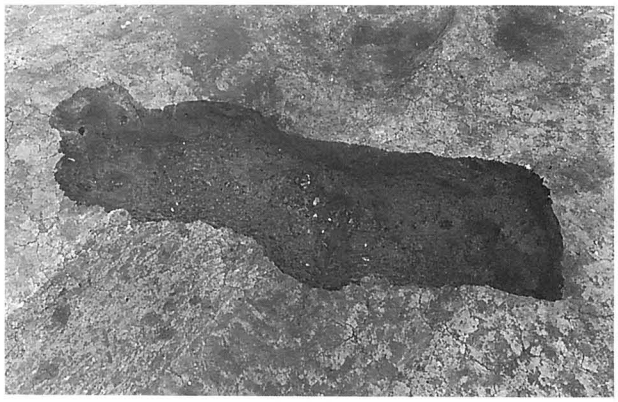


写真96　SK13 完掘状況（南から）

写真97　SK15 完掘状況

写真98　SK16 完掘状況

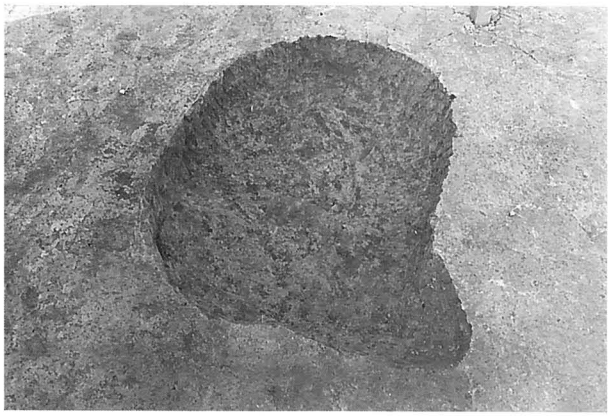


写真99　SK17 完掘状況

写真100　SK18 完掘状況

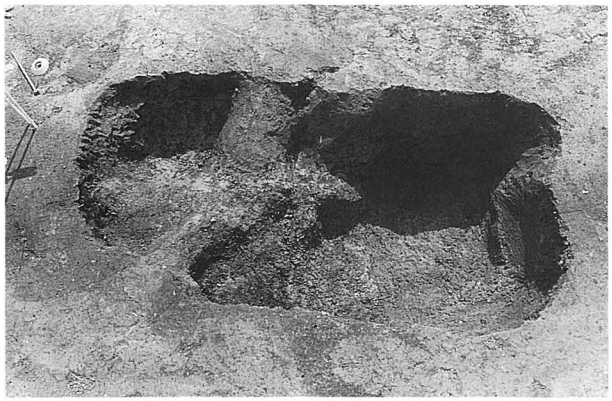


写真101　SK19 完掘状況

写真102　SK24 完掘状況

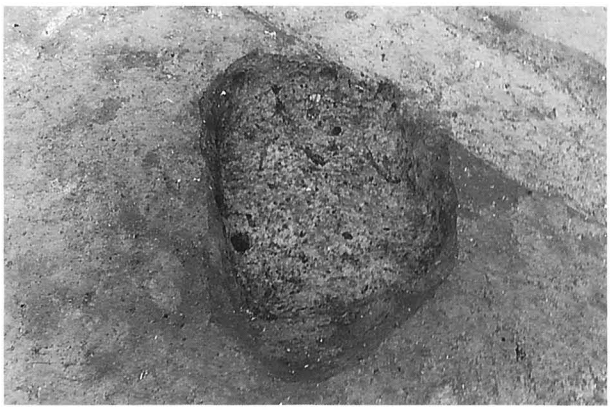


写真103　SK25 完掘状況

写真104　SK26 完掘状況

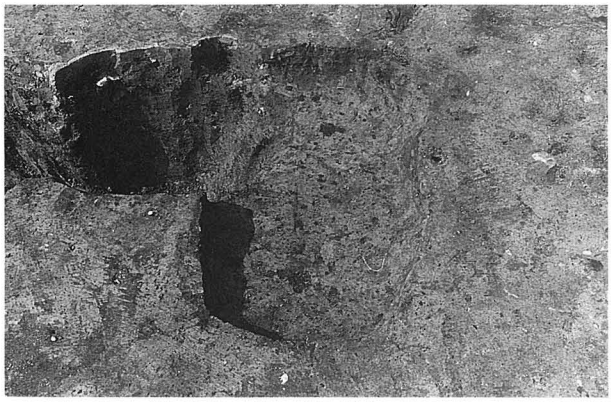


写真105　SK28 完掘状況

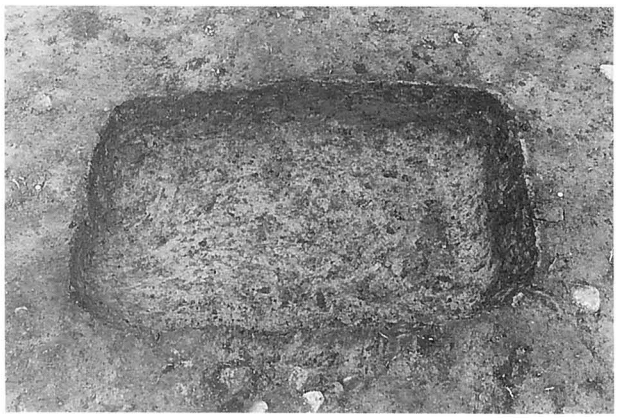


写真106　SK31 完掘状況

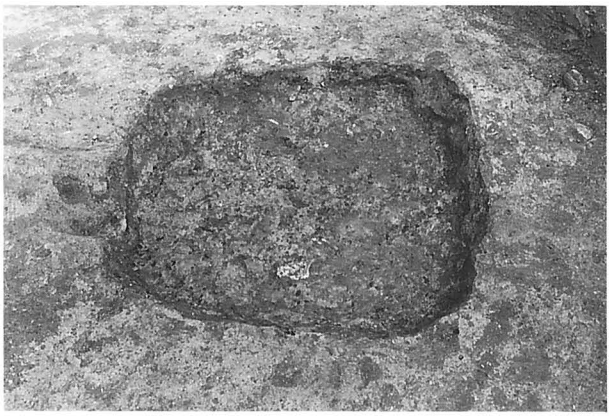


写真107　SK32 完掘状況

写真108
SD4 調査状況
（南西から）

写真109
SD4 完掘状況
（南西から）

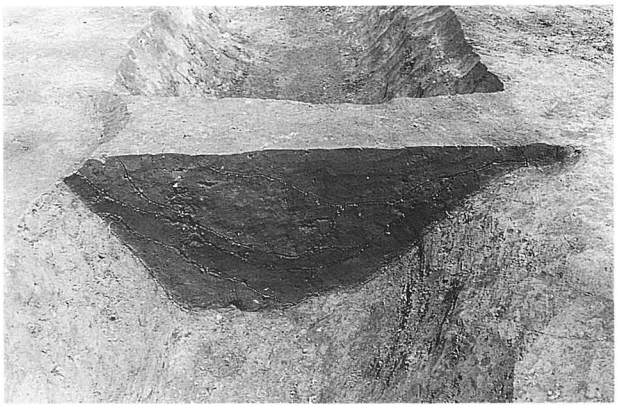


写真110　SD4 断面（東ベルト、南から）

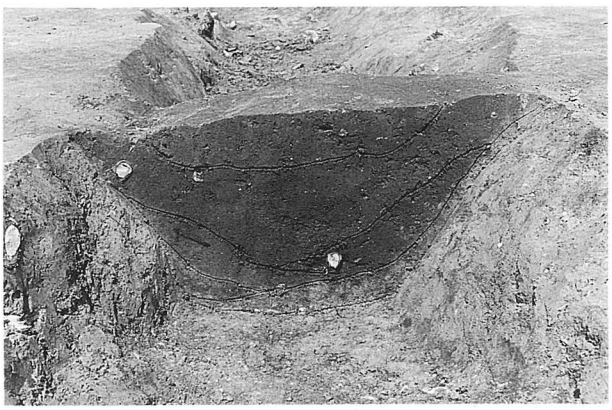


写真111　SD4 断面（北ベルト、東から）

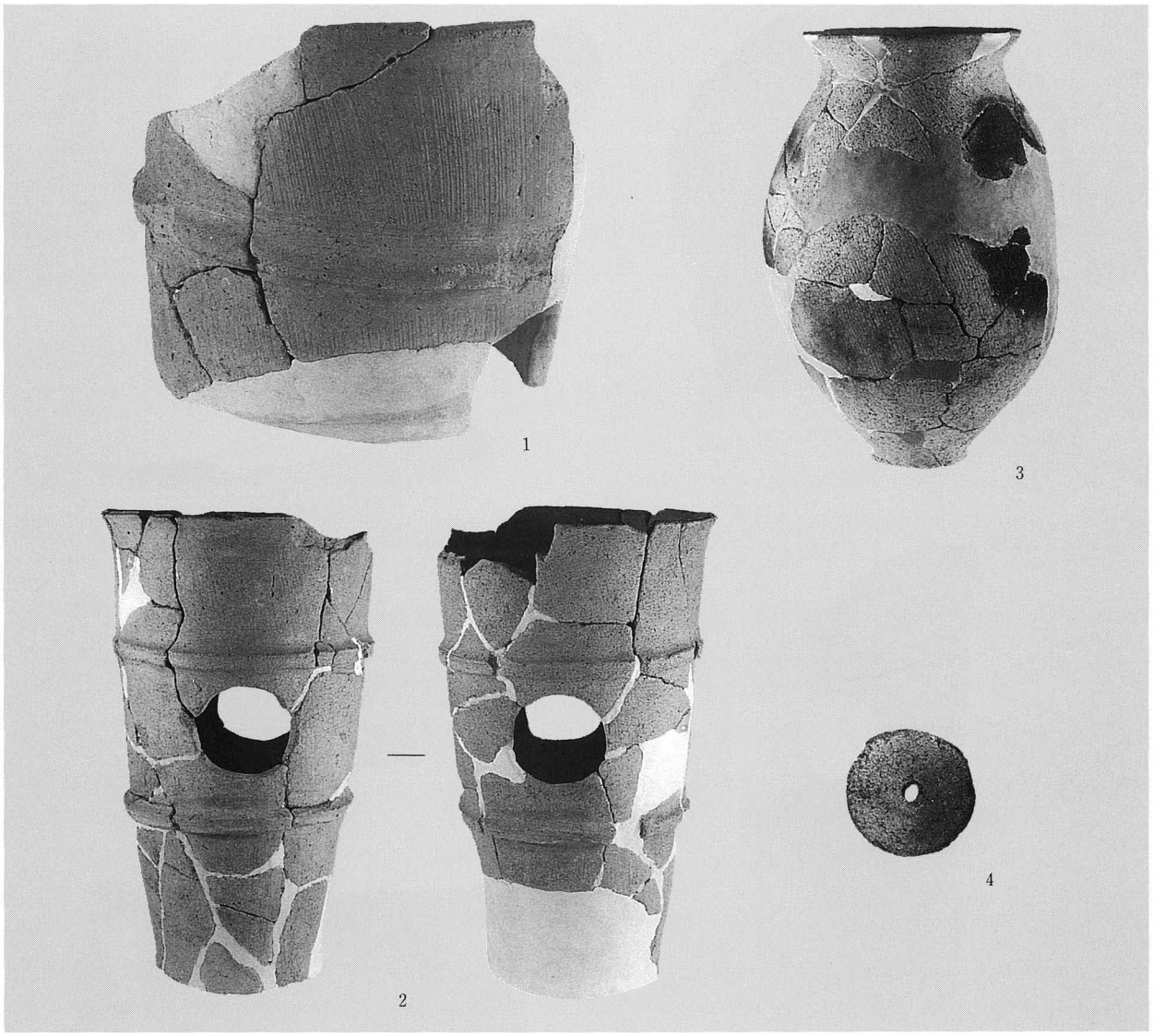


写真112　1号墳出土遺物

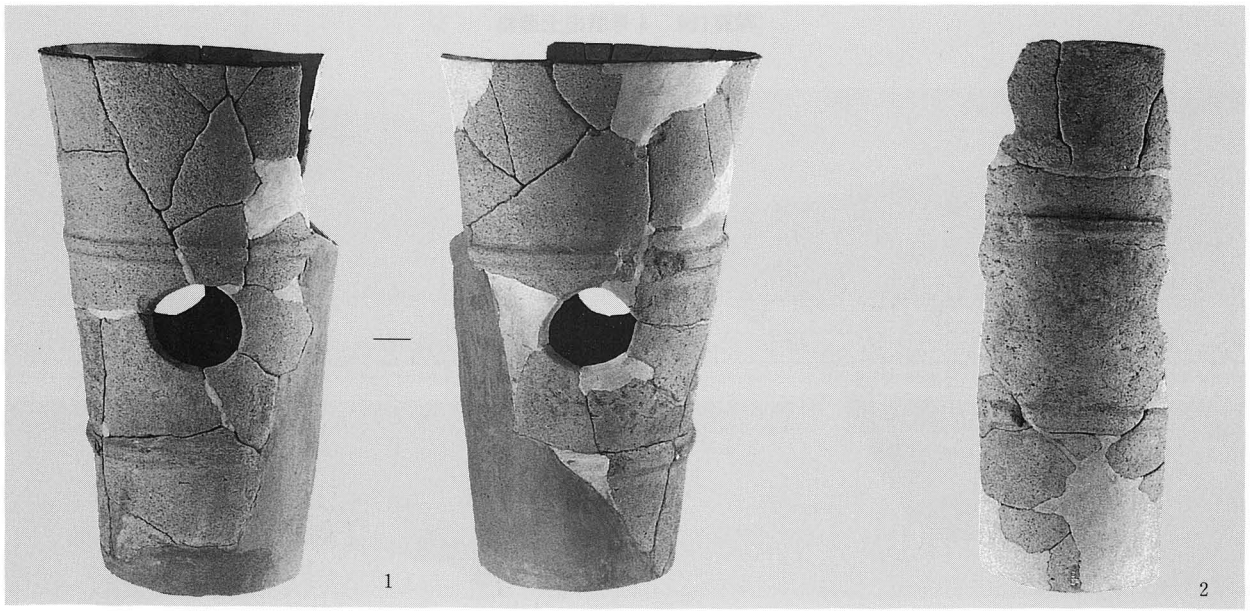


写真113　2号墳出土遺物

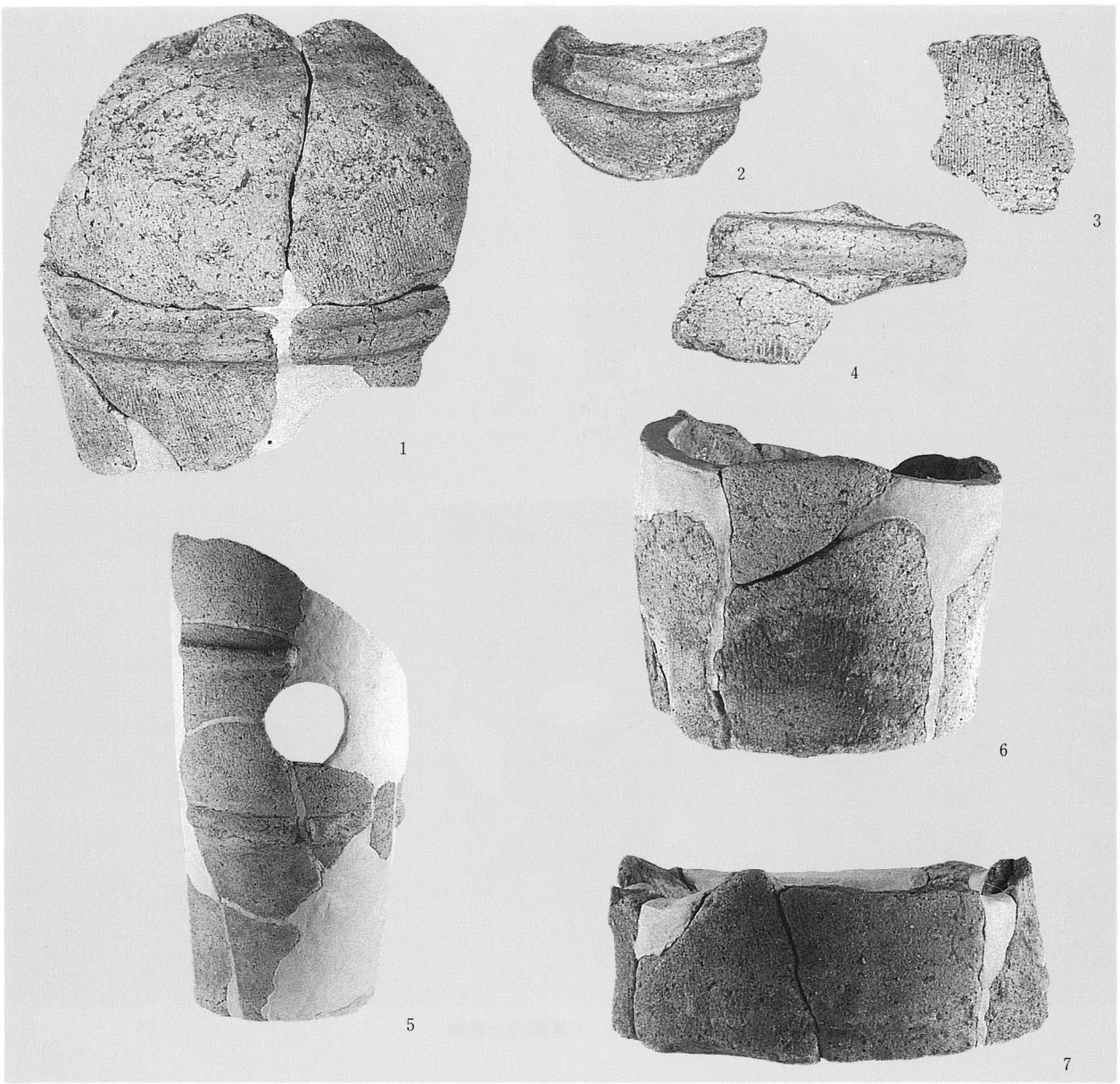


写真114　4号墳出土遺物

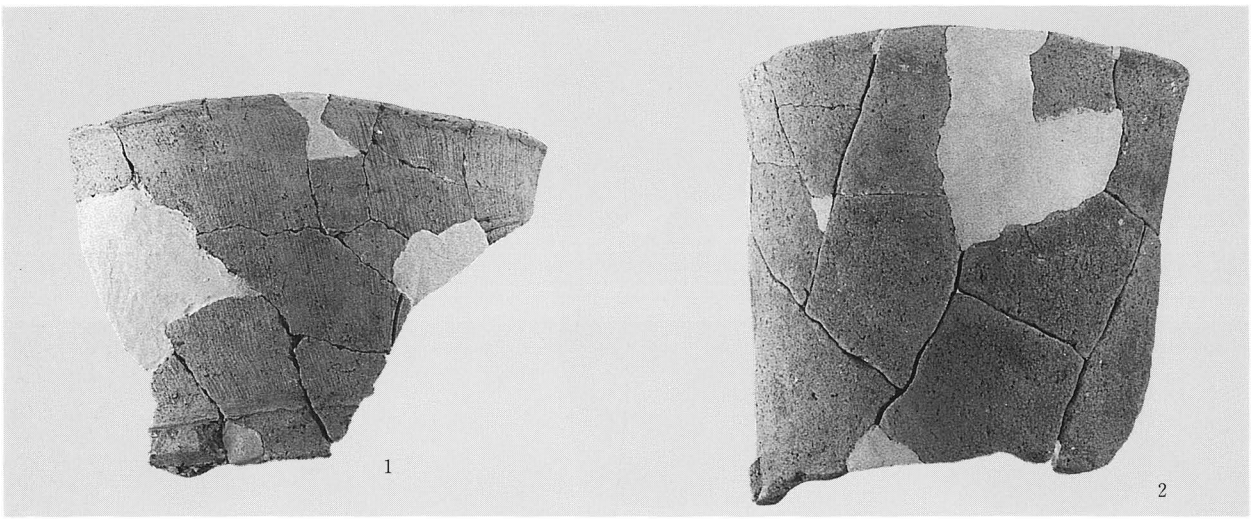


写真115　5号墳出土遺物 (1)

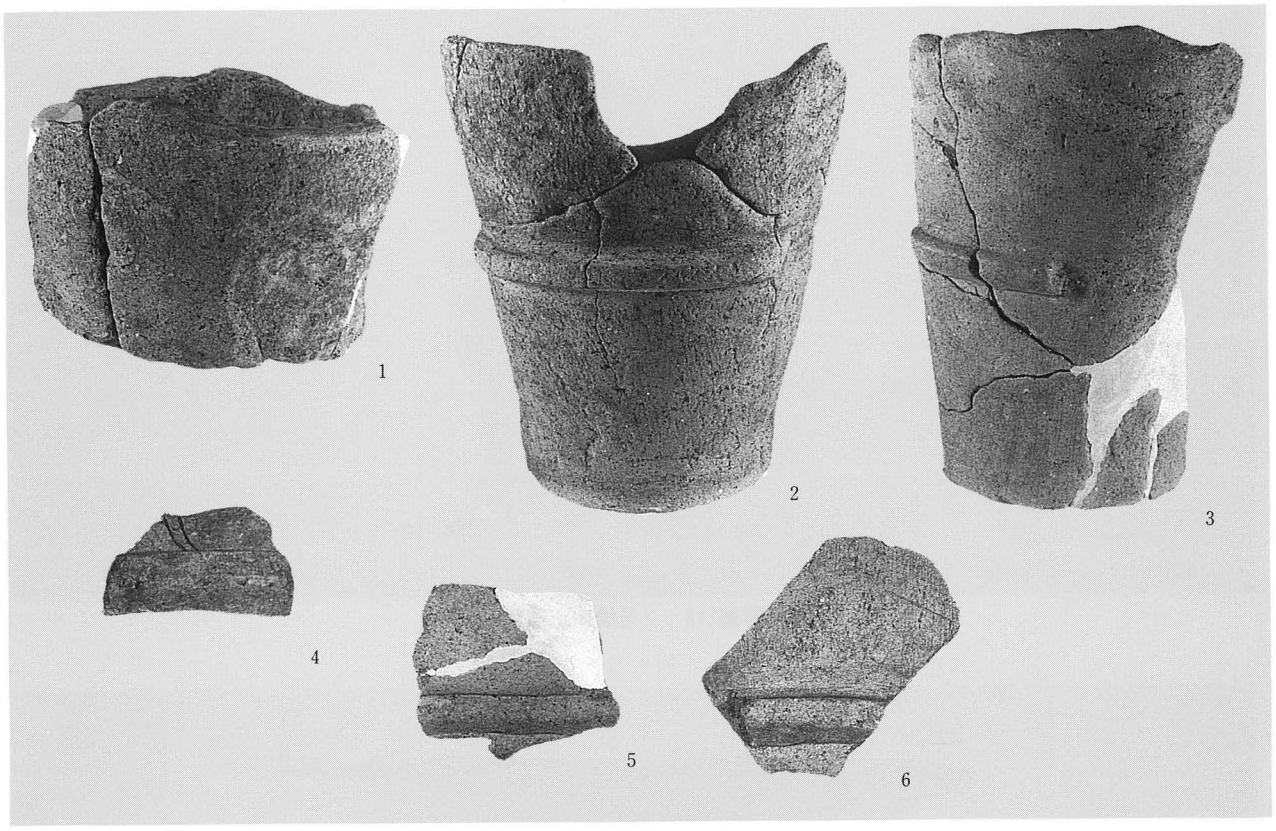


写真116　5号墳出土遺物 (2)

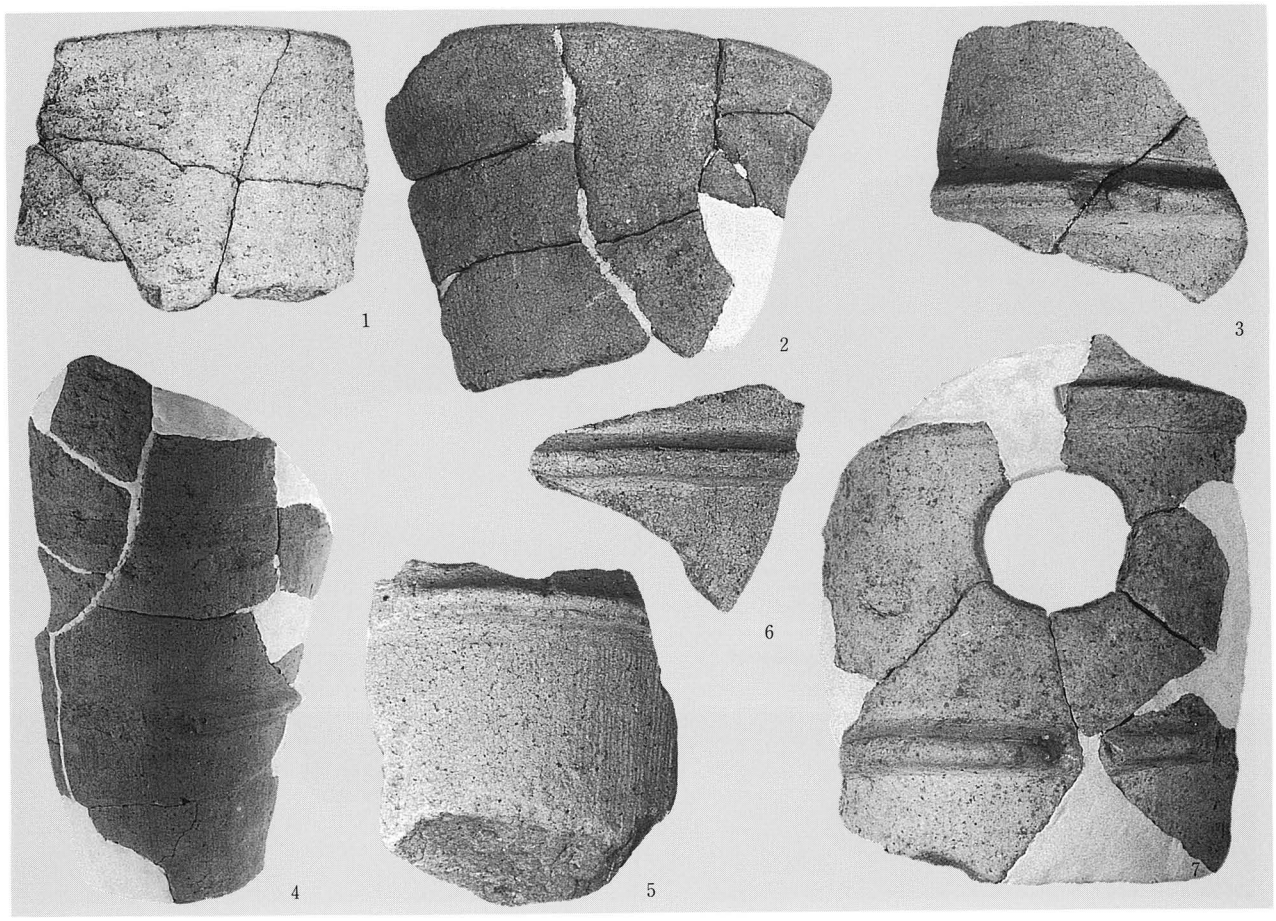


写真117　6号墳出土遺物

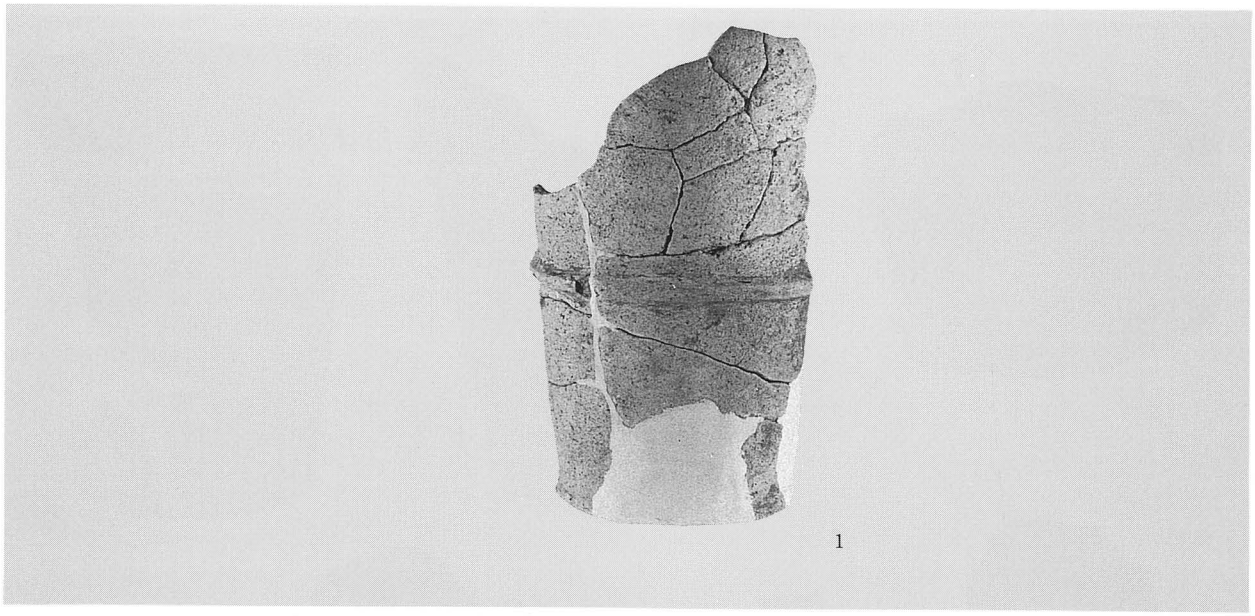


写真118　7号墳出土遺物

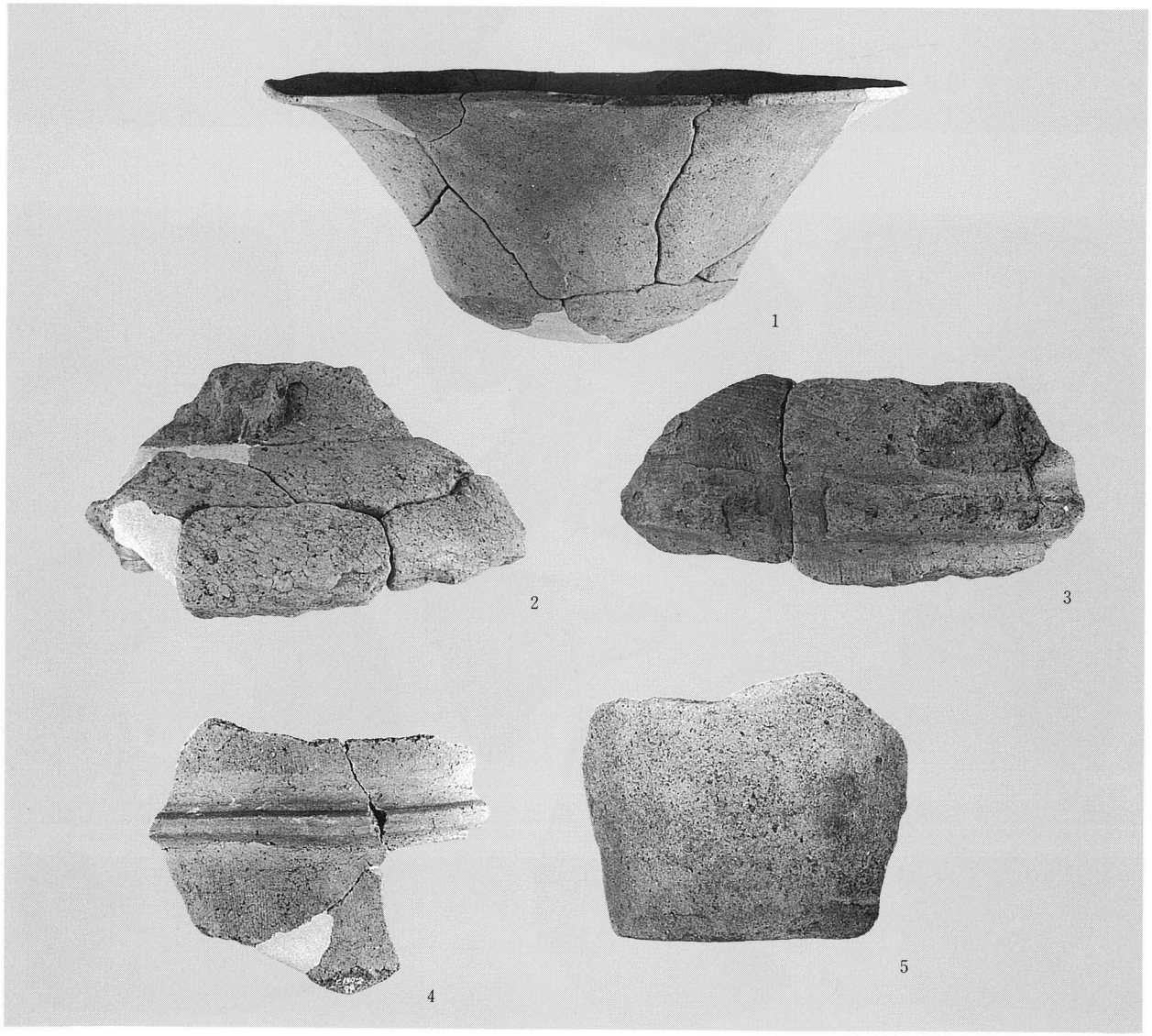


写真119　9号墳出土遺物

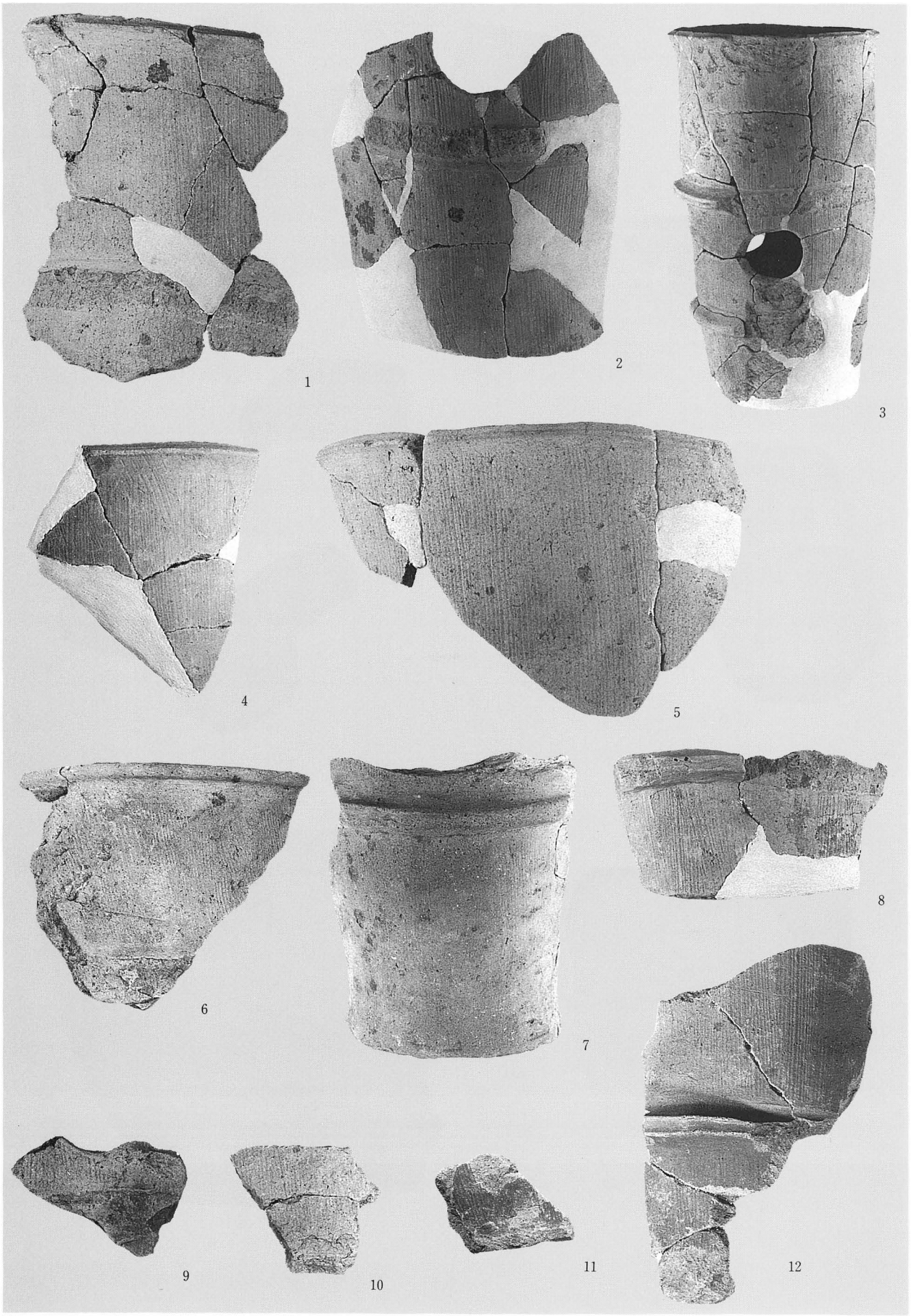


写真120　10号墳出土遺物

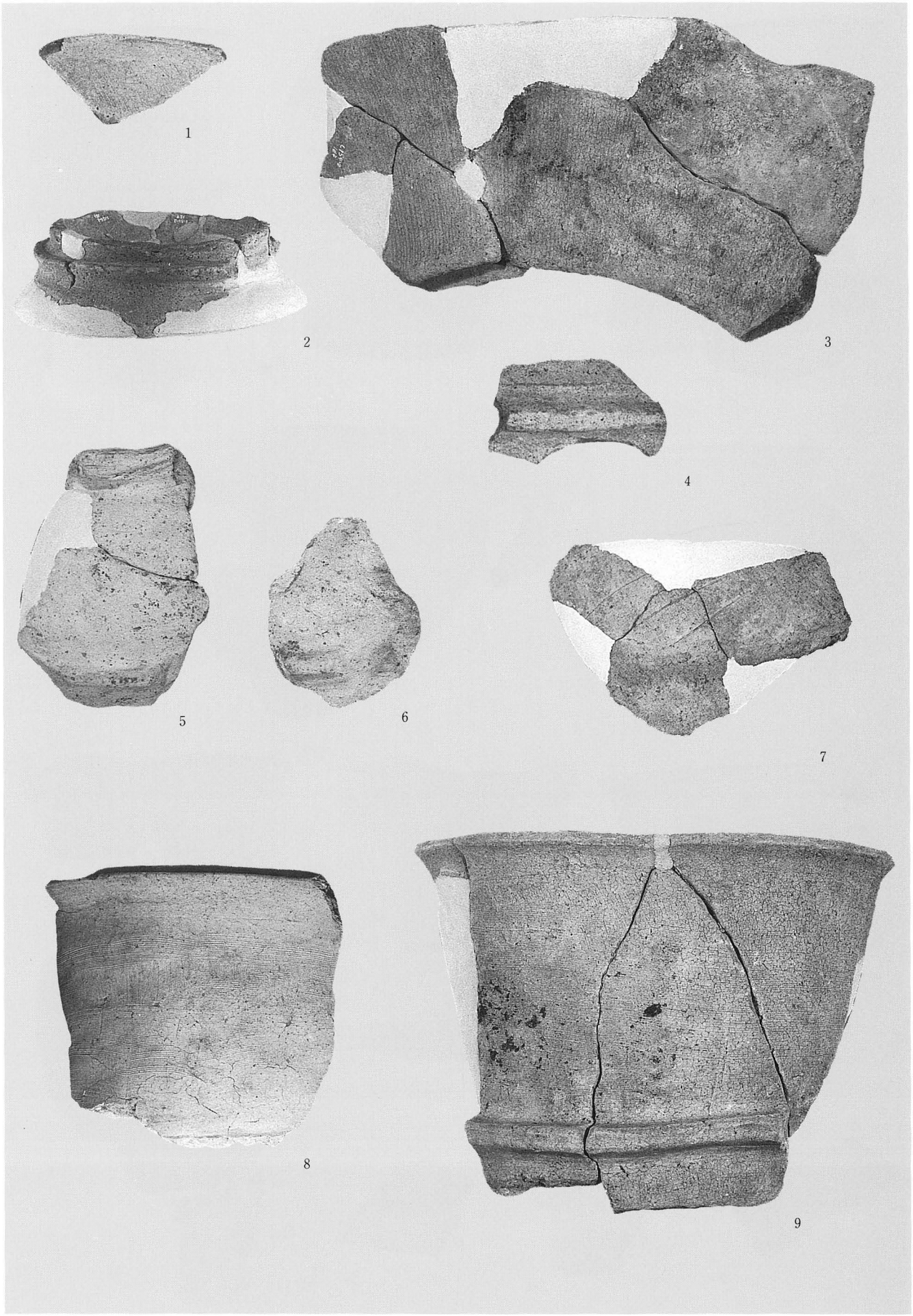


写真121　11号墳出土遺物（1）

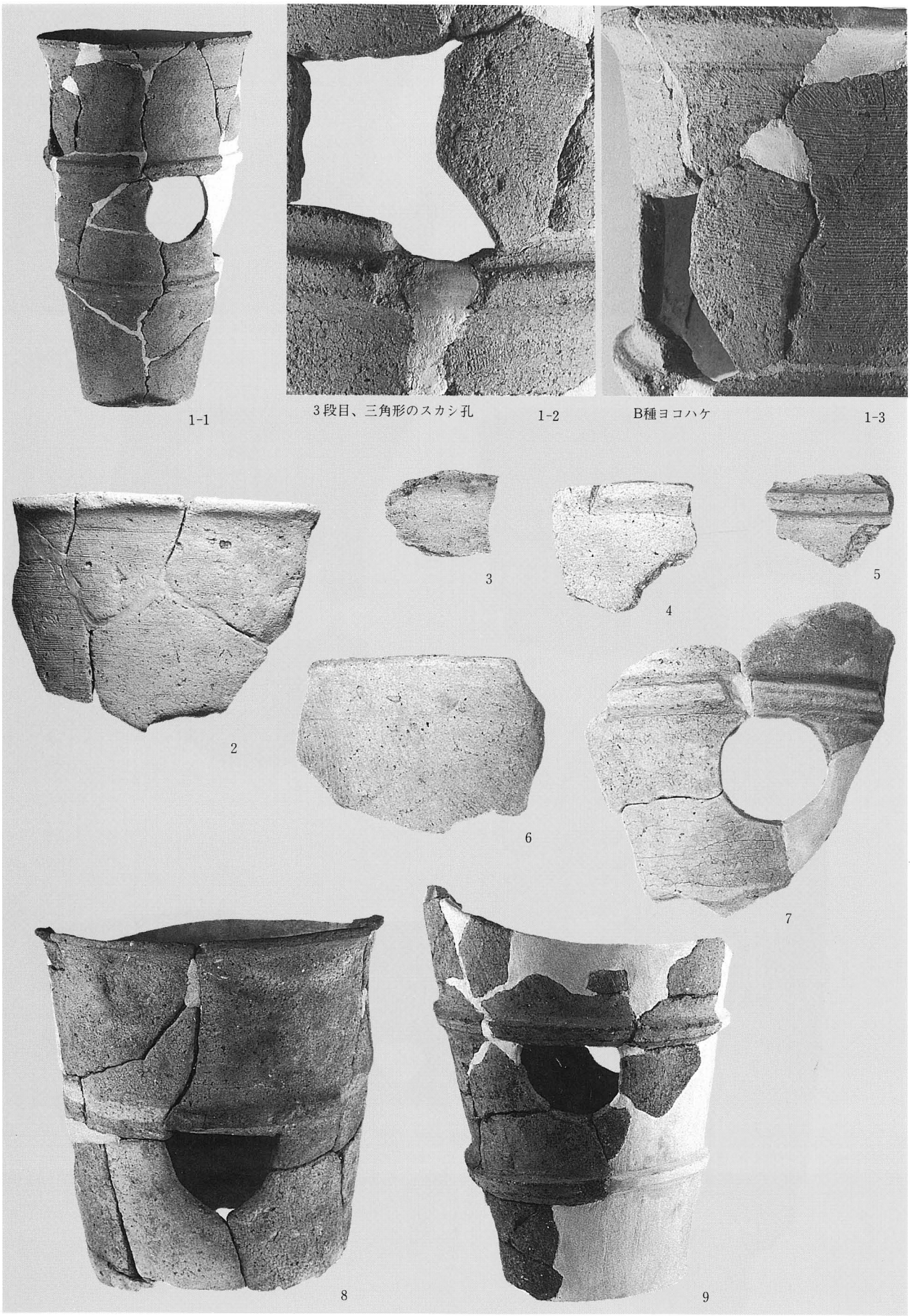
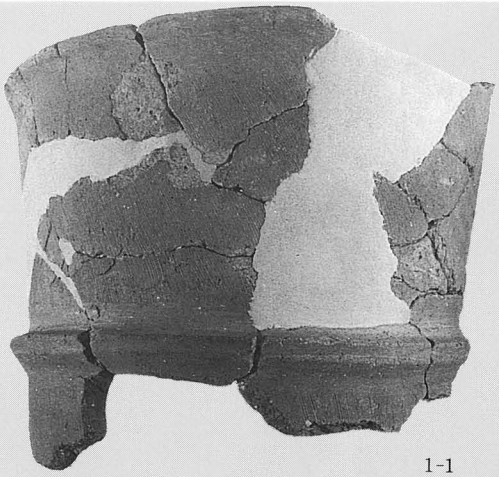
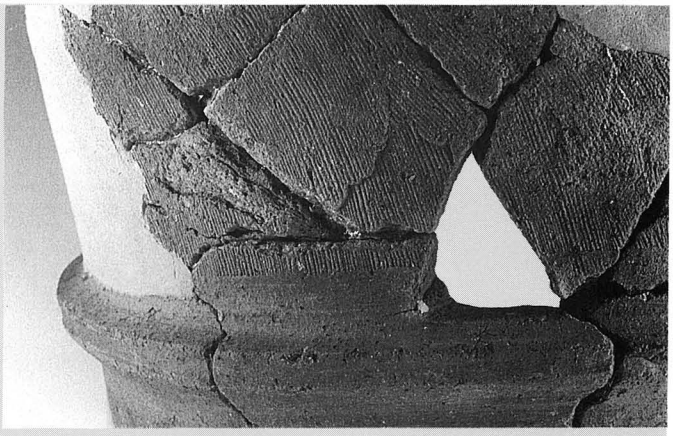


写真122　11号墳出土遺物 (2)

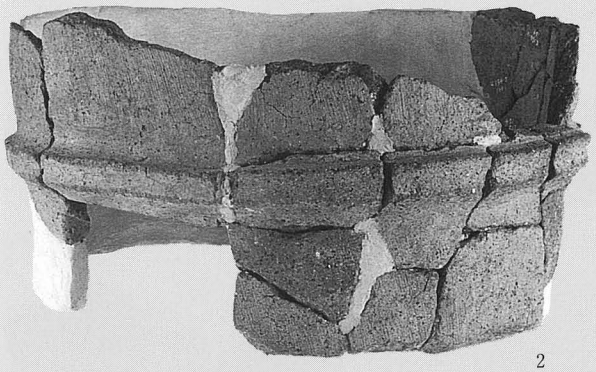


1-1



3段目、三角形のスカシ孔

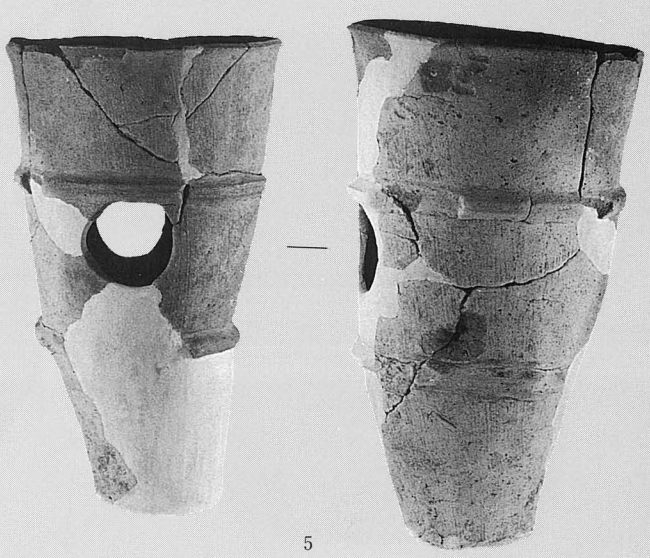
1-2



2

3

4



5

写真123　11号墳出土遺物 (3)

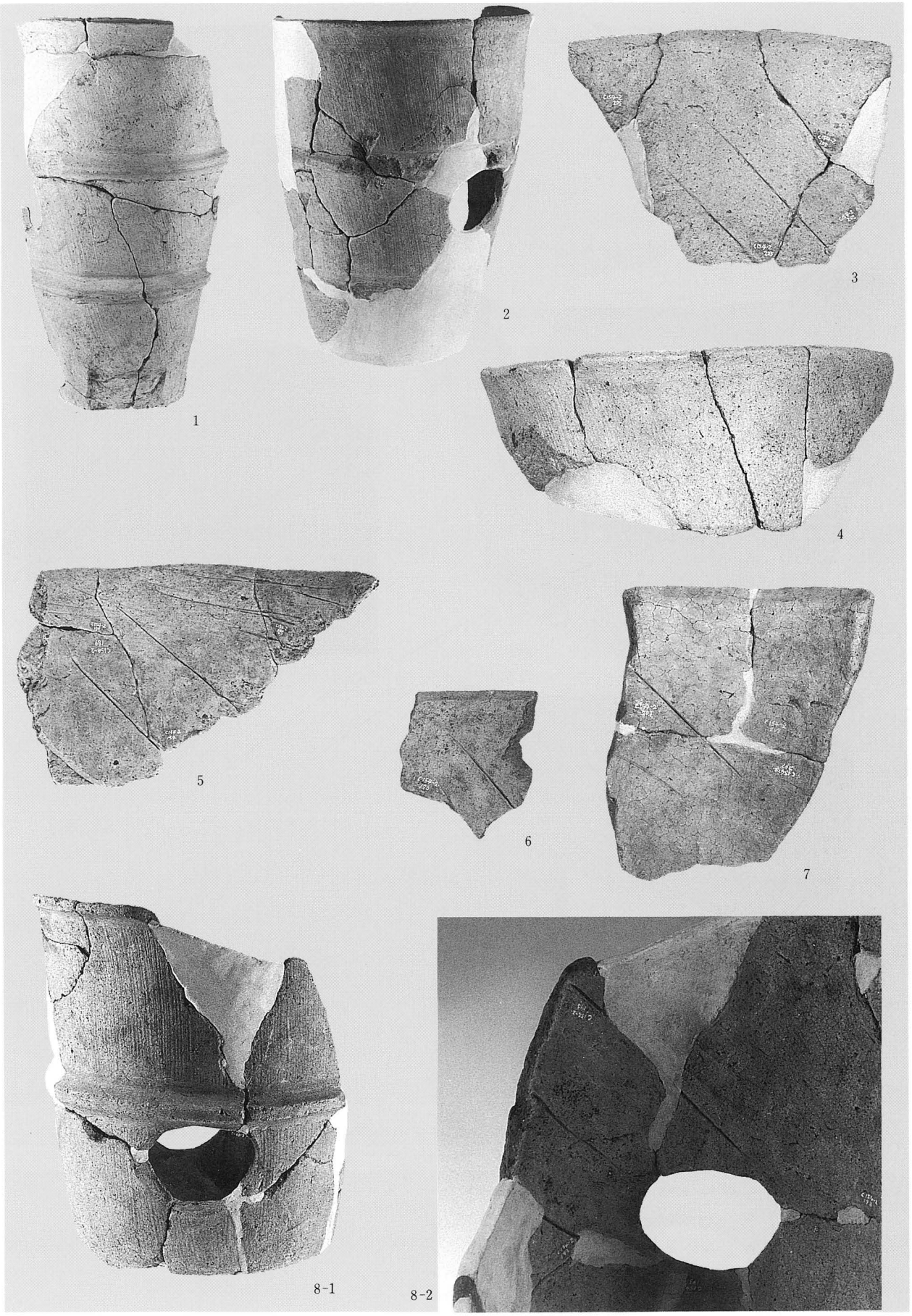
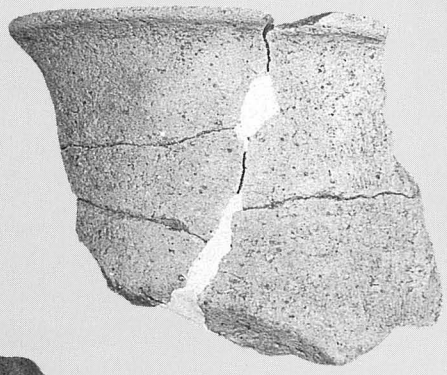
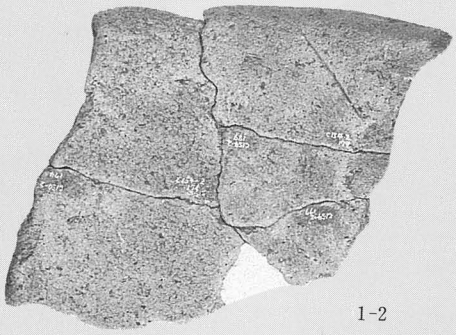


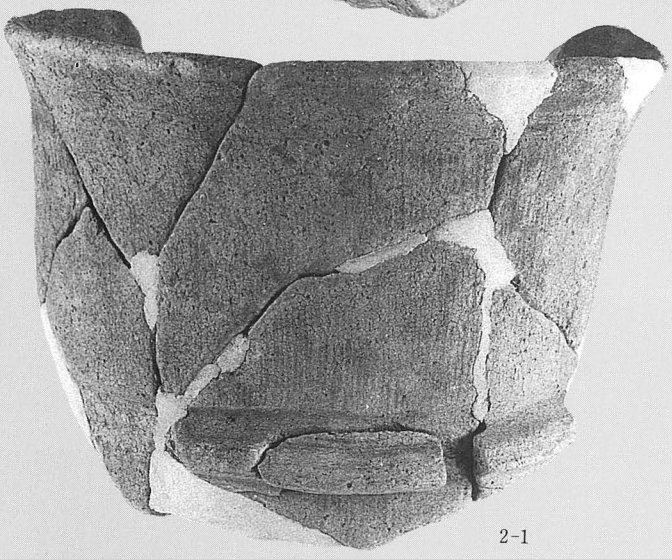
写真124　11号墳出土遺物 (4)　　内面のヘラ描き線



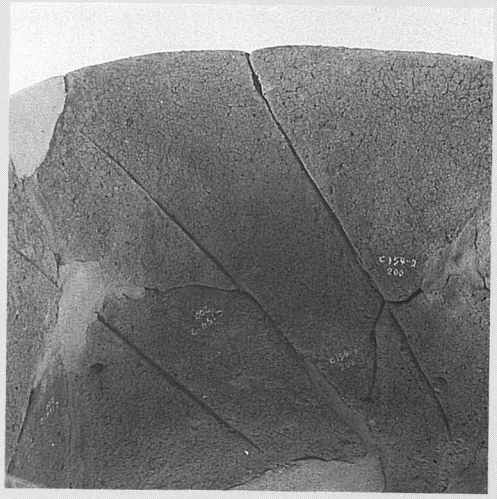
1-1



1-2

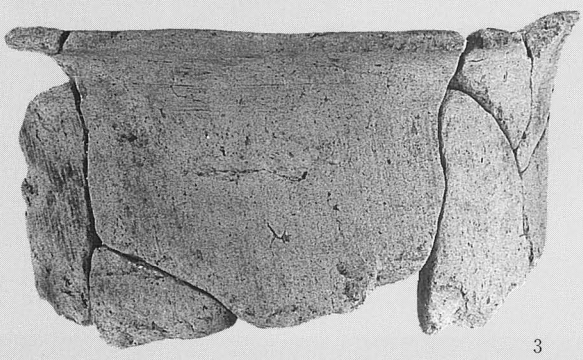


2-1



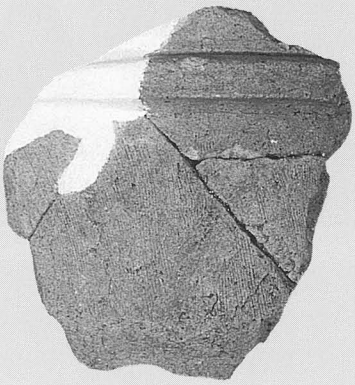
内面のヘラ描き線

2-2



3

4



5

写真125　11号墳出土遺物 (5)

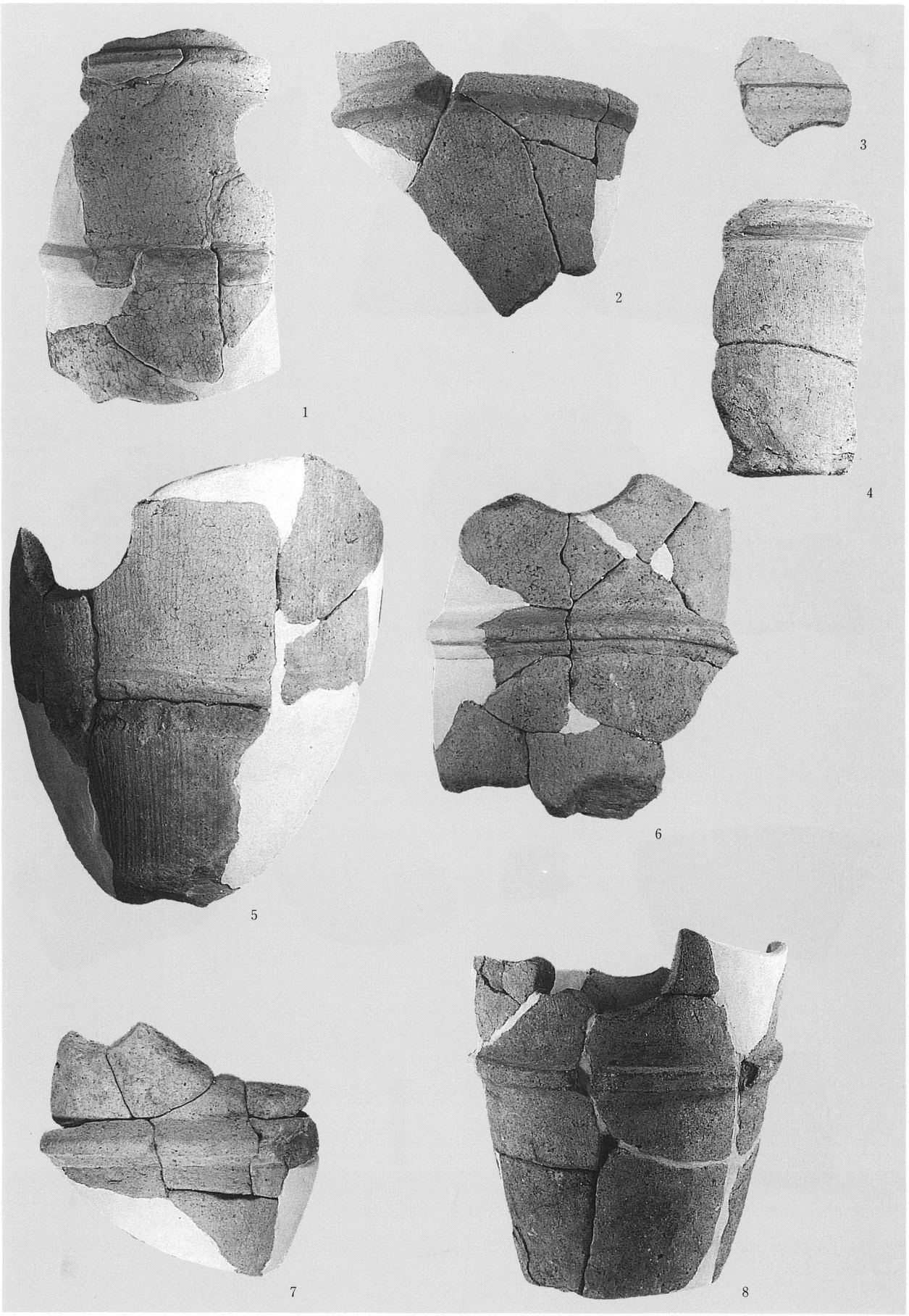


写真126　11号墳出土遺物 (6)

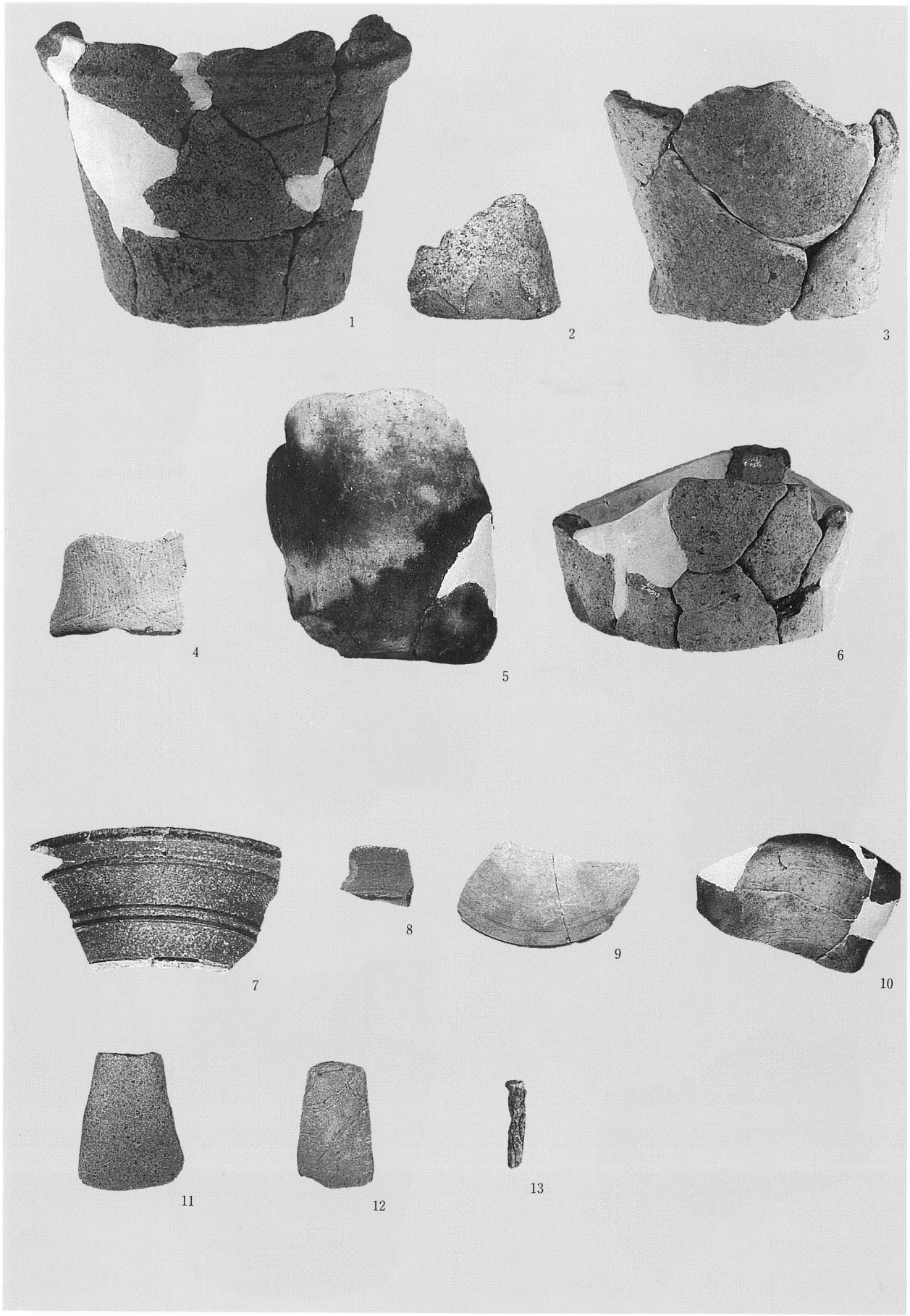


写真127　11号墳出土遺物（7）

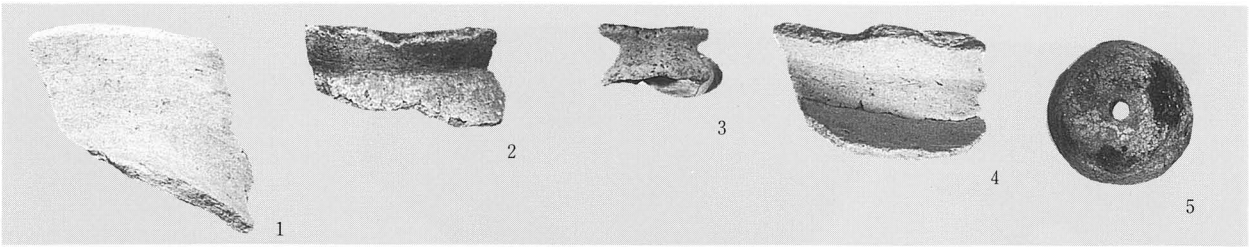


写真128　SI1 出土遺物

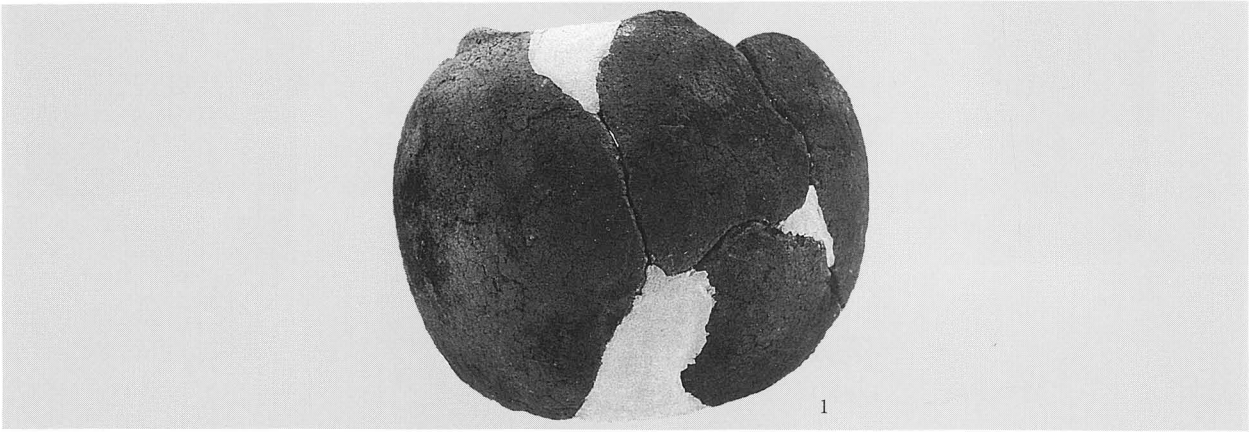


写真129　SI2 出土遺物

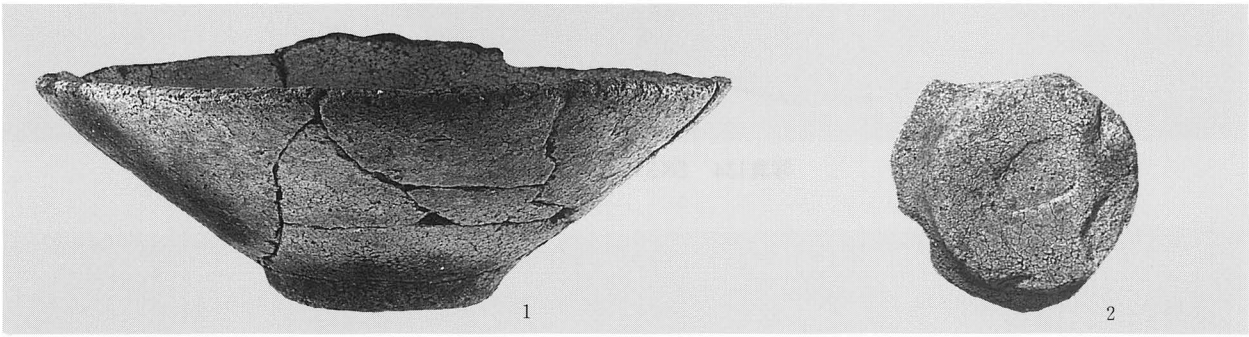


写真130　SI3 出土遺物

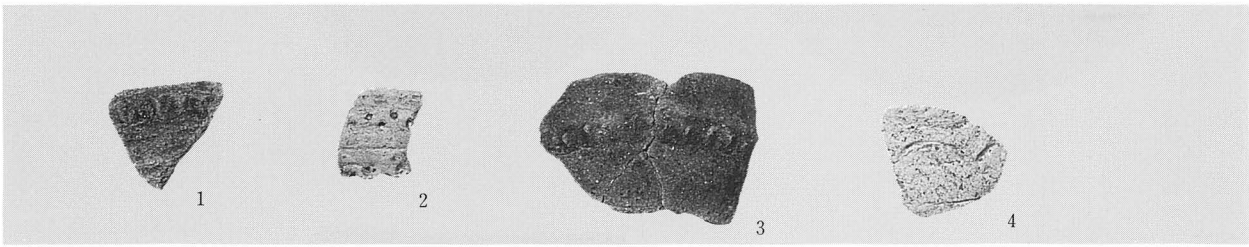


写真131　SI4 出土遺物

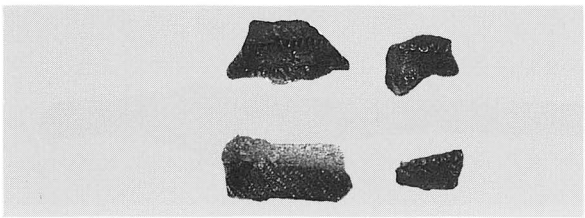


写真132　SI5 出土遺物

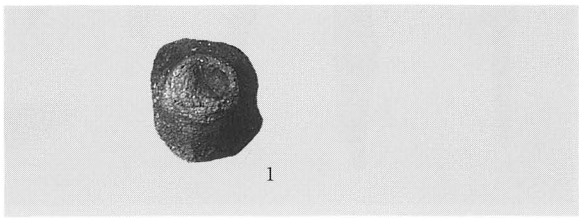


写真133　SI6 出土遺物

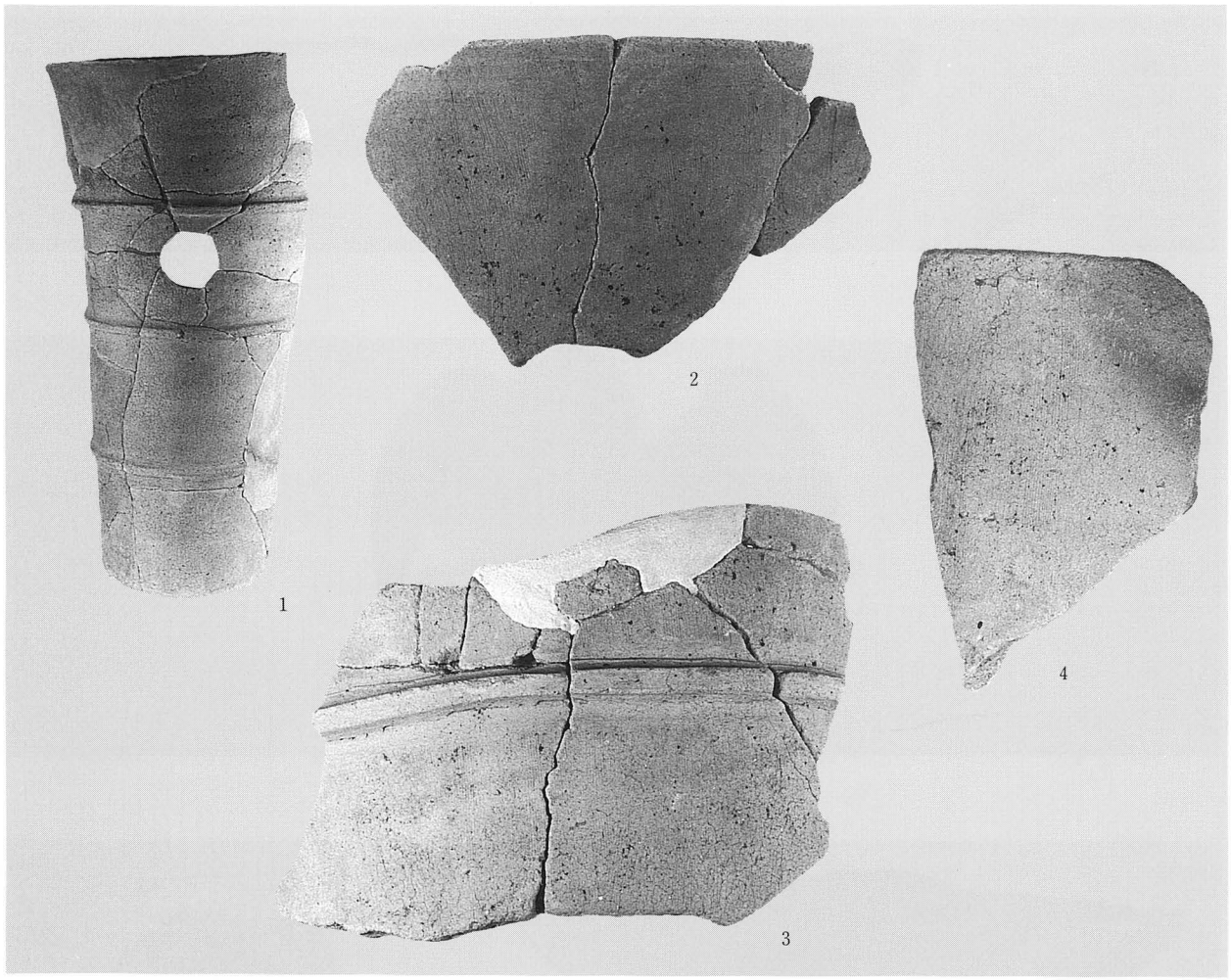


写真134　SK3 埴輪棺墓出土遺物

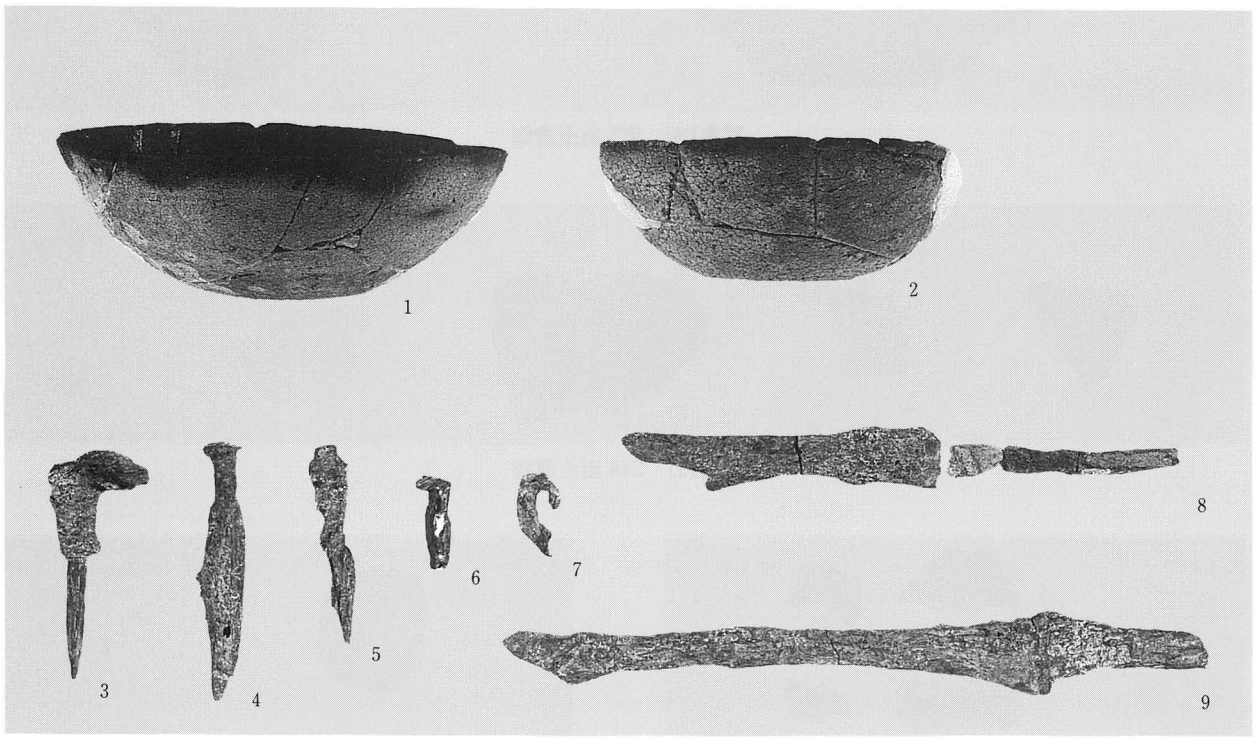


写真135　SK2・7・11 土壙墓出土遺物

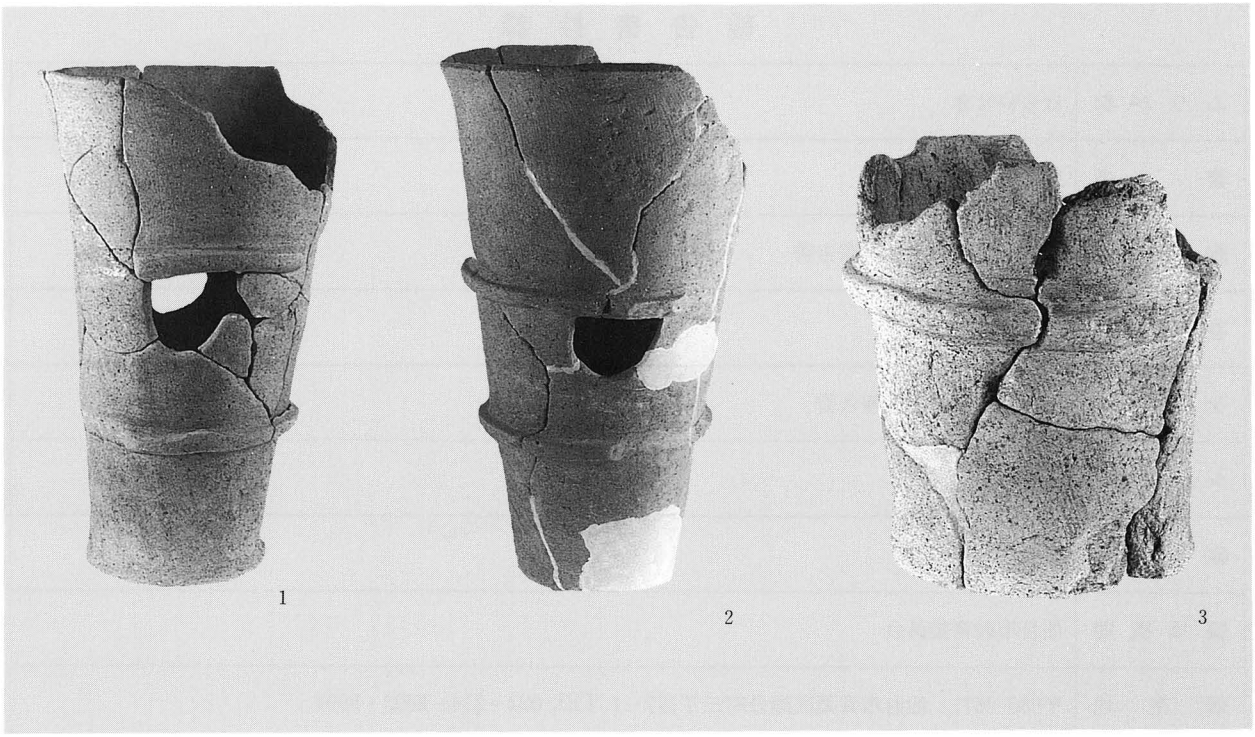


写真136　SK14 出土遺物

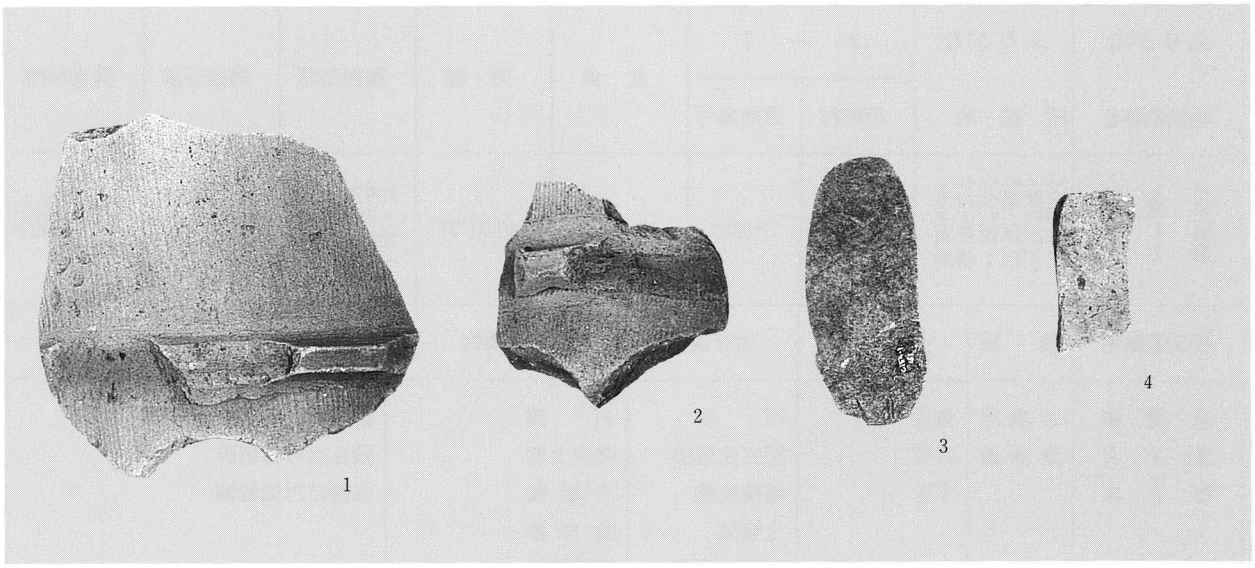


写真137　その他の出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はらいせき
書名	原遺跡
副書名	第1・2次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第229集
編著者名	平間亮輔
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　仙台市青葉区国分町三丁目7－1 TEL 022－214－8893・8894
発行年月日	1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
はらいせき 原遺跡 第1次 第2次	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 たいはくくにしたが 太白区西多賀 三丁目1番地	04100	01083	38°13′10″	140°51′38″	19970221 ～19970328 19970414 ～19970625	2,380m² 3,030m²	共同住宅および店舗用地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原遺跡 第1次 第2次	古墳群 集落跡	弥生 古墳 平安	円墳 竪穴住居跡 埴輪棺墓 土壙墓 土坑・溝跡	石器 弥生土器 土師器 須恵器 円筒埴輪	弥生時代の竪穴住居跡 段丘上の古墳群 各種の円筒埴輪

仙台市文化財調査報告書第229集

原（はら）　遺　跡

－第１・２次発掘調査報告書－

1998年３月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目７－１
文化財課 022(214)8893・8894

印刷　株式会社　東北プリント
仙台市青葉区立町24－24
TEL 263-1166